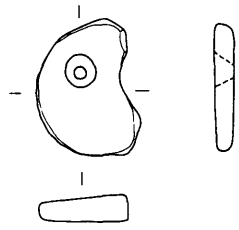
三重県埋蔵文化財調査報告　115－9

一般国道23号中勢道路（9工区）建設事業に伴う

長遺跡発掘調査報告



2000. 3

三重県埋蔵文化財センター

長遺跡遠景（北西から）

長遺跡丘陵地区全景（西から）

序

鈴鹿や布引・紀伊の山々から発する大小の河川は、肥沃な伊勢平野を潤し伊勢湾に注いでいます。その平野では古来より人々の生活が連綿と営まれ、数多くの遺跡が今日に残されています。中でも津市を流れる安濃川流域には弥生時代の中心集落である納所遺跡や、弥生時代の水田が見つかった森山東遺跡などがあり、当時の文化の一端を見ることができます。

さて、今回報告する長遺跡は一般国道23号中勢道路建設に先立って調査されたものです。遺跡は、安濃川左岸の丘陵上に立地する弥生時代中期の集落跡です。総数200棟もの竪穴住居が階段状に造成した丘陵斜面に整然と並んでいる様には、一種の感動すら覚えました。

調査を終えたところにはすでに新しい道路が開通し、地域活動の新しい動脈となっています。そのいわば代償として発掘された遺跡の膨大な記録を整理し報告書として世に公開していくことが、私どもに課せられた重大な責務であると考えております。本報告書が地域の歴史を解明する一助となることを念願するところであります。

最後になりましたが、調査にあたって御協力いただきました関係諸機関および地元の皆様に心からお礼申し上げるとともに、今後とも県民の皆様の文化財保護への一層の御理解と御協力をお願い申し上げる次第です。

平成12年３月

三重県埋蔵文化財センター
所　長　　大　井　與　生

例　　言

1．本書は、三重県津市河辺町字池尻・石立に所在する長遺跡の発掘調査報告書である。なお、遺跡の名称については、調査当時には「長（おさ）遺跡」と呼称していたが、平成８年度に「長（なが）遺跡」と改訂されているため、本書ではこれに従い「長（なが）遺跡」の名称を用いる。

2．調査は、三重県教育委員会が建設省中部地方建設局の委託を受け、平成７年４月から10月に本調査を実施した。また、整理・報告書作成業務を平成９年度から11年度に実施した。調査にかかる費用は、建設省中部地方建設局の全額負担による。

3．発掘調査は下記の体制で行った。

・調査主体　　三重県教育委員会
・調査担当　　三重県埋蔵文化財センター　調査第二課第三係
・調査協力　　津市教育委員会
　　鈴鹿市教育委員会
・現場作業　　社団法人中部建設協会

4．現地調査は、池端清行　筒井昭仁が担当した。

5．本書の執筆・編集は、池端清行が担当した。

6．遺構写真は、池端清行・筒井昭仁・米山浩之が撮影を行った。また、遺物写真については中村光司（津市埋蔵文化財センター）の協力を得た。

7．室内での報告書作成業務については、市川嘉子・太田浩子・脇葉輝美・森川絹代・鈴木妙・黒川敬子・蒔田やよい・新田智子の協力を得た。また、調査補助員として、川崎志乃・杉﨑淳子・田中美穂・中村友子が現地調査及び整理作業に携わった。

8．発掘調査ならびに整理・報告書作成の過程においては、以下の方々のご指導・ご教示を得た。記して感謝の意を表したい。（順不同・敬称略）
青木哲哉（立命館大学）・磯部克（三重県立松阪高等学校）・石野博信（徳島文理大学）・深澤芳樹（奈良国立文化財研究所）・松本洋明（天理市教育委員会）・宮本長二郎（東京国立文化財研究所）

9．本遺跡については、すでに『一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報Ⅷ』（三重県埋蔵文化財センター1996）、『中勢道路調査ニュースNo.24』にその調査途中の概要を報告しているが、本書をもって正式報告とする。

10．本書に用いた地図および遺構実測図は、国土調査法の第Ⅵ座標系を基準とし、方位の表示は座標北を示す。なお、真北は座標北のＮ０°17′Ｗ、磁北は座標北のＮ６°20′Ｗである。

11．本書で使用した遺構の名称・番号は、調査時点の呼称を踏襲せず、新たに改称したものである。

12．本書で使用した遺構表示略記号は下記の通りである。
ＳＡ：柱列　ＳＢ：掘立柱建物　ＳＤ：溝　ＳＨ：竪穴住居　ＳＫ：土坑　Ｐ：柱穴・小穴

13．本書で報告した記録および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターにおいて管理・保管している。

14．本書で使用した土層および遺物の色調は、小山・竹原編『新版標準土色帖』（9版1989）を用いた。

15．スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。
各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

本　文　目　次

Ⅰ．前　言 …… 2
1．調査に至る経過 …… 2
2．調査の体制 …… 2
3．調査経過 …… 6
調査日誌（抄） …… 7
4．調査の方法 …… 8
Ⅱ．位置と環境 …… 10
1．位置と地理的環境 …… 10
2．歴史的環境 …… 10
Ⅲ．調査の成果 …… 14
1．基本層序 …… 14
2．検出された遺構と遺物 …… 14
(1)調査結果の概要 …… 14
(2)凡　例 …… 14
(3)土器の形態分類 …… 18
(4)各説1（丘陵地区） …… 23
Ａ地区 …… 23
Ｂ地区 …… 35
Ｃ地区 …… 43
Ｄ地区 …… 47
Ｅ地区 …… 52
Ｆ地区 …… 55
Ｇ地区 …… 59
Ｈ地区 …… 62
Ｉ地区 …… 66
Ｊ地区 …… 70
Ｋ地区 …… 72
包含層出土土器 …… 77
石　器 …… 84
玉　類・石製品 …… 96
(5)各説2（北斜面地区） …… 97
包含層出土土器 …… 98
Ⅳ．結　語 …… 99
1．集落の立地状況 …… 99
2．集落構造について …… 99
3．遺構について …… 100
(1)竪穴住居 …… 100
a．竪穴住居の設計について …… 101
b．平面プランと主柱穴位置の関係について …… 102
(2)柱　列 …… 105
(3)段状遺構 …… 105
4．遺物について …… 105
(1)土器および遺跡の年代 …… 105
(2)石器について …… 106
a．石器器種と使用石材 …… 107
b．石器器種による製作地の想定 …… 107
c．当地域における石器の様相 …… 107
d．石鏃について …… 108
(3)玉類・石製品 …… 108
5．まとめ …… 109
（付）範囲確認調査 …… 191

挿　図　目　次

第 1 図　中勢道路（8・9・10工区）内遺跡位置図 … 4
第 2 図　試掘坑位置図 …… 6
第 3 図　調査区大地区割り図 …… 8
第 4 図　調査区小地区割り図 …… 9
第 5 図　遺跡位置図 …… 10
第 6 図　周辺遺跡位置図 …… 11
第 7 図　遺跡周辺地形図及び調査区位置図 …… 13
第 8 図　丘陵地区土層断面図 …… 15
第 9 図　調査区分割図 …… 16
第10図　調査区断面図 …… 17
第11図　長遺跡出土土器形態分類図1 …… 19
第12図　長遺跡出土土器形態分類図2 …… 20
第13図　長遺跡遺構図 …… 21
第14図　A地区遺構図 …… 23
第15図　SH1～SH4実測図 …… 25
第16図　SH1・SH3・SH4出土遺物実測図 …… 26
第17図　SH5～SH7実測図 …… 27
第18図　SH7遺物出土状況図 …… 27
第19図　SH7出土遺物実測図 …… 28
第20図　SH8～SH10・SB58・SA67実測図 …… 29
第21図　SH10出土遺物実測図 …… 29
第22図　SH11～SH13実測図 …… 30
第23図　SH11・SH13出土遺物実測図 …… 30
第24図　SH14実測図 …… 31
第25図　SH15・SH16実測図 …… 32
第26図　SH16出土遺物実測図 …… 32
第27図　SA68～SA71・SK139実測図 …… 33
第28図　SA72・SA73・A－4テラス実測図 …… 34
第29図　B地区遺構図 …… 35
第30図　SH17実測図 …… 36
第31図　SH17出土遺物実測図1 …… 37
第32図　SH17出土遺物実測図2 …… 38
第33図　SH18実測図 …… 38
第34図　SH18出土遺物実測図 …… 38
第35図　SH19実測図 …… 39
第36図　SH22実測図 …… 40
第37図　SH21出土遺物実測図 …… 40
第38図　SH20・SH21実測図 …… 40
第39図　SH23実測図 …… 41
第40図　SB59～61・SA74～76・SD141実測図 …… 42
第41図　C地区遺構図 …… 43
第42図　SA77・SA78実測図 …… 44
第43図　SH24・SH25実測図 …… 45
第44図　SH24・SH25出土遺物実測図 …… 45
第45図　SA79～SA83実測図 …… 46
第46図　D地区遺構図 …… 47
第47図　SH26実測図 …… 48
第48図　SH26出土遺物実測図 …… 48
第49図　SH27～SH29・SB62実測図 …… 49
第50図　SH28・SH29出土遺物実測図 …… 49
第51図　SA86実測図 …… 50
第52図　SA84～SA86・SB63実測図 …… 50
第53図　SH30実測図 …… 51
第54図　SH30出土遺物実測図 …… 51
第55図　E地区遺構図 …… 52
第56図　SH31～33・SA87～91実測図 …… 53
第57図　SH34・SH35実測図 …… 54
第58図　SH35出土遺物実測図 …… 54
第59図　F地区遺構図 …… 55
第60図　SH36・SA92実測図 …… 56
第61図　SH36出土遺物実測図 …… 56
第62図　SH39実測図 …… 57
第63図　SH39出土遺物実測図 …… 57
第64図　SH37・SH38実測図 …… 57
第65図　SH38出土遺物実測図 …… 57
第66図　SH41・SH42・SA93～96実測図 …… 58
第67図　SH40実測図 …… 59
第68図　G地区遺構図 …… 59
第69図　SH43・SH44実測図 …… 60
第70図　SH43出土遺物実測図 …… 60
第71図　SA97～SA105・Gテラス実測図 …… 61
第72図　H地区遺構図 …… 62
第73図　H－1テラス・SA106～110実測図 …… 63
第74図　H－2テラス・SA111～121実測図 …… 64
第75図　SH45・SB64・SB65・SA119～121
実測図 …… 65
第76図　I地区遺構図 …… 66
第77図　SH46・SH47・SA122・123実測図 …… 67
第78図　SH47遺物出土状況図 …… 67
第79図　SH46・SH47出土遺物実測図 …… 67
第80図　SA124・SA125実測図 …… 68
第81図　SH49出土遺物実測図 …… 68
第82図　SH48～SH50・SB66・SA126
・SA127実測図 …… 69
第83図　I－3テラス実測図 …… 70
第84図　J地区遺構図 …… 70
第85図　Jテラス・SA128～SA132実測図 …… 71
第86図　K地区遺構図 …… 72
第87図　SH51・SH52・SA133～135実測図 …… 73
第88図　SH54・SH55出土遺物実測図 …… 74
第89図　SH53～SH55・SA136実測図 …… 74
第90図　SH56実測図 …… 75

第91図　ＳＨ56出土遺物実測図 …… 75
第92図　ＳＨ57実測図 …… 76
第93図　ＳＨ57出土遺物実測図 …… 76
第94図　ＳＡ137・ＳＡ138・ＳＤ145実測図 …… 77
第95図　包含層出土遺物実測図１ …… 79
第96図　包含層出土遺物実測図２ …… 80
第97図　包含層出土遺物実測図３ …… 81
第98図　包含層出土遺物実測図４ …… 82
第99図　包含層出土遺物実測図５ …… 83
第100図　包含層出土須恵器実測図 …… 84
第101図　ＳＨ３・ＳＨ７出土石器実測図 …… 86
第102図　ＳＨ７・12・14出土石器実測図 …… 87
第103図　ＳＨ17・ＳＨ26出土石器実測図 …… 88
第104図　ＳＨ26・ＳＨ29・ＳＨ31・ＳＨ32・ＳＨ34出土石器実測図 …… 89
第105図　ＳＨ38・ＳＨ46・ＳＨ49・ＳＨ57出土石器実測図 …… 90
第106図　包含層出土石器実測図１ …… 91
第107図　包含層出土石器実測図２ …… 92
第108図　包含層出土石器実測図３ …… 93
第109図　包含層一括出土サヌカイト剥片実測図１ …… 94
第110図　包含層一括出土サヌカイト剥片実測図２ …… 95
第111図　ＳＨ３・ＳＨ４・ＳＨ13・ＳＨ56出土玉類，石製品実測図 …… 96
第112図　北斜面地区遺構図 …… 97
第113図　ＳＢ142実測図 …… 98
第114図　ＳＤ144断面実測図 …… 98
第115図　ＳＡ143実測図 …… 98
第116図　包含層出土土器実測図 …… 98
第117図　長遺跡における竪穴住居設計法 …… 102
第118図　竪穴住居平面プランと主柱穴間面積の割合（弥生時代中期後半～後期） …… 103
第119図　竪穴住居平面プランと主柱穴間面積の割合（古墳時代） …… 103
第120図　竪穴住居平面プランと主柱穴間面積の割合（弥生時代中期後半～古墳時代） …… 104
第121図　遺跡位置図（１：50,000） …… 191
第122図　調査区位置図（１：5,000） …… 192

表　目　次

第１表　中勢道路内遺跡調査経過・予定表 …… 5
第２表　竪穴住居一覧表１ …… 111
第３表　竪穴住居一覧表２ …… 112
第４表　掘立柱建物一覧表 …… 113
第５表　柱列一覧表１ …… 113
第６表　柱列一覧表２ …… 114
第７表　柱列一覧表３ …… 115
第８表　土器観察表１ …… 116
第９表　土器観察表２ …… 117
第10表　土器観察表３ …… 118
第11表　土器観察表４ …… 119
第12表　土器観察表５ …… 120
第13表　土器観察表６ …… 121
第14表　石器・玉類・石製品観察表 …… 122

写真図版目次

ＰＬ１　調査前遠景（南から）
丘陵地区調査後全景（西から）
ＰＬ２　丘陵頂部Ａ地区全景（北西から）
Ａ地区より西側の谷を望む
ＰＬ３　Ａ地区北部ＳＨ１～ＳＨ４（南西から）
ＳＨ１～ＳＨ４（南東から）
ＰＬ４　ＳＨ１・ＳＨ２（東から）
ＳＨ１・ＳＨ２排水溝（西から）
ＰＬ５　ＳＨ４（西から）
ＳＨ４遺物出土状況（南から）
ＰＬ６　Ａ地区南部ＳＨ５～ＳＨ７（北東から）
ＳＨ５～ＳＨ７（北西から）
ＰＬ７　ＳＨ７土器（甕）出土状況（西から）
ＳＨ７石斧出土状況　周溝内（南から）
ＰＬ８　ＳＨ７壁柱穴（西から）
Ａ地区中央部ＳＨ８～ＳＨ10（北から）
ＰＬ９　ＳＨ８（東から）
ＳＨ10・ＳＢ58・ＳＡ67（東から）
ＰＬ10　ＳＨ10土器出土状況（北西から）
Ａ地区南部ＳＨ11～ＳＨ13（南西から）
ＰＬ11　ＳＨ11～ＳＨ16（北東から）
ＳＨ11～ＳＨ16（南東から）
ＰＬ12　ＳＨ15・ＳＨ16（北西から）
ＳＨ15・ＳＨ16（北東から）
ＰＬ13　Ａ地区北部Ａ－１テラス　ＳＡ68～ＳＡ71
Ａ－１テラス　ＳＡ68～ＳＡ71・ＳＤ140
ＰＬ14　ＳＨ17（東から）
ＳＨ17（北から）
ＰＬ15　ＳＨ17石斧出土状況（南から）
ＳＨ18（北から）
ＰＬ16　ＳＨ19（東から）
ＳＨ19（北から）
ＰＬ17　ＳＨ20・ＳＨ21（南東から）
ＳＨ20・ＳＨ21（北東から）

ＰＬ18　ＳＨ22（西から）
ＳＨ23（北東から）
ＰＬ19　Ｂテラス（東から）
Ｂテラス（北東から）
ＰＬ20　調査区南側Ｃ・Ｅ・Ｇ・Ｈ・Ｊ地区
調査区北側Ｄ・Ｆ・Ｉ地区（西から）
ＰＬ21　ＳＨ24（東から）
ＳＨ24（北西から）
ＰＬ22　ＳＨ25（東から）
ＳＨ25・ＳＡ77・ＳＡ78（北西から）
ＰＬ23　Ｃ－２テラス・Ｃ－３テラス（南西から）
Ｃ－２テラス・Ｃ－３テラス（北西から）
ＰＬ24　ＳＨ26（東から）
ＳＨ26（北から）
ＰＬ25　ＳＨ26　石を据えた炉（南から）
ＳＨ27～ＳＨ29（西から）
ＰＬ26　ＳＨ27・ＳＨ28（北から）
ＳＨ29（北から）
ＰＬ27　ＳＨ29暗渠排水溝入口（東から）
ＳＨ29暗渠排水溝出口（西から）
ＰＬ28　ＳＨ30（東から）
ＳＨ30（北から）
ＰＬ29　ＤテラスＳＢ63・ＳＡ84～ＳＡ86（北東から）
Ｄテラス（北西から）
ＰＬ30　ＳＨ31～ＳＨ33（南西から）
ＳＨ31～ＳＨ33（南東から）
ＰＬ31　ＳＨ31・ＳＨ32・ＳＡ87～ＳＡ91（南西から）
ＳＨ33（北東から）
ＰＬ32　ＳＨ34・ＳＨ35（南西から）
ＳＨ34・ＳＨ35（南東から）
ＰＬ33　ＳＨ36（西から）
ＳＨ36（北から）
ＰＬ34　ＳＨ37・ＳＨ38（東から）
ＳＨ37・ＳＨ38（北から）
ＰＬ35　ＳＨ37暗渠排水溝入口（南西から）
ＳＨ37暗渠排水溝出口（北東から）
ＰＬ36　ＳＨ38（東から）
ＳＨ39（西から）
ＰＬ37　ＳＨ39土器（壺）出土状況（北から）
ＳＨ40（南西から）
ＰＬ38　ＳＨ41・ＳＨ42・ＳＡ93～ＳＡ96（東から）
ＳＨ41・ＳＨ42・ＳＡ93（北西から）
ＰＬ39　ＳＨ43・ＳＨ44（東から）
ＳＨ43・ＳＨ44（北から）
ＰＬ40　Ｇテラス全景　ＳＡ97～ＳＡ105（南東から）
Ｇテラス全景　ＳＡ97～ＳＡ105（北西から）
ＰＬ41　Ｇテラス南側（北から）
Ｇテラス北側（北から）
ＰＬ42　Ｈ地区・Ｊ地区（南西から）
Ｈ－２テラス（西から）
ＰＬ43　Ｈ－２テラス（南西から）
Ｈ－２テラス南側　ＳＨ45（北東から）
ＰＬ44　Ｈ－２テラス北側（北から）
Ｈ－１テラス　ＳＡ106～ＳＡ110（北西から）
ＰＬ45　ＳＨ46・ＳＨ47（西から）
ＳＨ46・ＳＨ47・Ｉ－１テラス（南から）
ＰＬ46　ＳＨ47土器（壺）出土状況（南西から）
Ｉ－１テラス　ＳＡ122・ＳＡ123（北から）
ＰＬ47　ＳＢ66　近接棟持柱建物（南東から）
ＳＢ66　（北から）
ＰＬ48　ＳＨ48・ＳＨ49（東から）
ＳＨ48・ＳＨ49（北から）
ＰＬ49　Ｉ－２テラス　ＳＡ126・ＳＡ127（東から）
ＳＨ50（北西から）
ＰＬ50　Ｉ－３テラス（南から）
Ｊテラス（南西から）
ＰＬ51　Ｊテラス　ＳＡ128～ＳＡ132（北西から）
Ｋ地区全景　ＳＨ51～ＳＨ57（南西から）
ＰＬ52　ＳＨ51・ＳＨ52（東から）
ＳＨ51・ＳＨ52（北から）
ＰＬ53　ＳＨ53～ＳＨ55（西から）
ＳＨ53～ＳＨ55（北から）
ＰＬ54　ＳＨ56作業風景（東から）
ＳＨ56　9.2m×7.3m（東から）
ＰＬ55　ＳＨ56（南から）
ＳＨ56南西隅暗渠排水溝入口（東から）
ＰＬ56　ＳＨ57（北西から）
ＳＨ57（南西から）
ＰＬ57　ＳＨ57Ｐ１土器埋設状況（南西から）
Ｋテラス・ＳＨ56暗渠排水溝出口（南から）
ＰＬ58　北斜面地区全景（北から）
ＳＢ142（北東から）
ＰＬ59　ＳＡ143（東から）
ＳＤ144（東から）
ＰＬ60　出土遺物１　（土器）
ＰＬ61　出土遺物２　（土器）
ＰＬ62　出土遺物３　（土器）
ＰＬ63　出土遺物４　（土器・土製品）
ＰＬ64　出土遺物５　（石器）
ＰＬ65　出土遺物６　（石器）
ＰＬ66　出土遺物７　（石器）
ＰＬ67　出土遺物８　（石器・玉類・石製品）

長遺跡調査後全景（上方が北）

Ⅰ．前　　言

1．調査に至る経過

中勢バイパスは、現国道23号の慢性的な渋滞の緩和と総合的な地方都市交通体系の確立を図ることを目的として、昭和58年４月15日に都市計画決定された道路である。三重県鈴鹿市玉垣町を起点とし、終点の同一志郡三雲町小津に至る６市町を通過する延長33.8kmのバイパスで、交通渋滞の緩和のみならず、バイパス周辺の適切な土地利用を図り、地域経済の発展に寄与しようとするものである。

中勢バイパス建設計画にかかる埋蔵文化財保護については、昭和57年１月に建設省から事業地内の埋蔵文化財の有無についての照会（昭和57年１月18日付け建部三第70号）を受け、三重県教育委員会が主体となり、関係市町村教育委員会の協力を得て、昭和58年度に分布調査を実施した。昭和59年には建設省に分布調査の結果を回答（昭和59年５月23日付け教文第67号）するとともに、建設省中部地方建設局三重工事事務所、県道路建設課と今後の埋蔵文化財の取り扱いについて協議を重ねた。

この中勢バイパスのうち、津市大里窪田町（主要地方道津関線）から同市大字神戸（都市計画道路雲出野田線）にいたる7.2kmの区間が中勢道路として昭和59年４月1日に事業採択された。この区間は伊勢平野とその丘陵部を南北に縦断するため、多くの埋蔵文化財がその路線上に点在することとなった。この区間で確認された埋蔵文化財は、遺跡数18件、遺跡面積（調査対象面積）約115,000㎡（いずれも平成3年現地確認調査時）である。これらの埋蔵文化財の取り扱いについては、建設省中部地方建設局三重工事事務所と三重県教育委員会文化課との間で協議を行い、現状保存が困難な遺跡については事前に発掘調査を実施し、記録保存を図ることとした。

調査の実施にあたっては、作業員の安定確保と発掘調査の適正かつ円滑な推進を図るため、現地作業を建設省中部地方建設局が社団法人中部建設協会に委託する方式を採用した。これを受けて、発掘調査業務の分担に関する事項についても建設省中部地方建設局と三重県及び社団法人中部建設協会の三者で、昭和63年４月８日付けで「埋蔵文化財発掘調査協定書」を締結し、発掘調査を実施することになった。

その後、事業計画の進展に合わせて、平成３年10月31日付けで、建設省中部地方建設局・三重県・中部建設協会の三者で「協定変更書（第１回）」を、平成５年９月７日付けで「協定変更書（第２回）」を、平成10年３月31日付けで「協定変更書（第３回）」を締結し、道路建設事業との調整を図りながら発掘調査を推進している。

2．調査の体制

調査主体は三重県教育委員会で、昭和63年度は三重県教育委員会文化課が、平成元年度以降は県教育委員会規則により設置された三重県埋蔵文化財センターが調査を担当している。

調査にあたっては、「県教育委員会・市町村教育委員会職員人事交流実施要綱」に基づく協定を締結して、津市教育委員会（昭和63年度～）と鈴鹿市教育委員会（平成７年度～平成９年度）から派遣職員を得て、調査体制の充実を図っている。

本書に所収した長遺跡については、平成７年度に現地調査を、平成９～11年度に整理・報告書作成業務を実施したが、その体制は以下のとおりである。

調査主体　三重県教育委員会
調査担当　三重県埋蔵文化財センター

〔平成７年度〕

主幹兼	
調査第二課長	伊藤克幸
主査兼第三係長	河北秀実
主　　事	宮田勝功・山本義浩
技　　師	穂積裕昌
主　　事	池端清行・米山浩之 （津市教育委員会から派遣）
主　　事	筒井昭仁 （鈴鹿市教育委員会から派遣）

調査補助員　田中美穂・川崎志乃
（皇學館大學学生）
杉﨑淳子・中村友子
（奈良大学学生）
室内整理員　市川嘉子・脇葉輝美
太田浩子・黒川敬子
蒔田やよい・森川絹代
鈴木　妙
研修生　Eric　Chen
（カナダ、McGill大学）
調査指導　青木哲哉（立命館大学）
赤塚次郎（愛知県埋蔵文化財センター）
石黒立人（愛知県埋蔵文化財センター）
石野博信（徳島文理大）
磯部　克（三重県立図書館）
金原正明（天理大学付属天理参考館）
椙山林継（国学院大学）
八賀　晋（三重大学）
深澤芳樹（奈良国立文化財研究所）
松本洋明（天理市教育委員会）
宮本長二郎（東京国立文化財研究所）
森　浩一（同志社大学）
（順不同・敬称略）

〔平成９年度〕
主幹兼
調査第二課長　山田　猛
主査兼第三係長　本堂弘之
主　事　宮田勝功
技　師　西村美幸・水橋公恵
主　事　池端清行・米山浩之
（津市教育委員会から派遣）
主　事　筒井昭仁
（鈴鹿市教育委員会から派遣）
調査補助員　田中美穂・池野香代
（皇學館大學学生）
酒井巳紀子（花園大学学生）
坂下真弓　（奈良大学学生）
下畑典正　（龍谷大学学生）
室内整理員　市川嘉子・太田浩子
黒川敬子・鈴木　妙
森川絹代・蒔田やよい
新田智子
研修生　Neky　Cheung
（カナダMcGill大学）
調査指導　青木哲哉（立命館大学）
磯部　克（三重県立松阪高等学校）
八賀　晋（三重大学）
加藤元信（三重県農業技術センター）
山田陽稔（三重県農業技術センター）
藤原弘一（三重県消防防災課）
（順不同・敬称略）

〔平成10年度〕
主幹兼
調査第二課長　吉水康夫
主査兼第三係長　本堂弘之
主　事　宮田勝功
技　師　西村美幸
主　事　村木一弥・山口　格
（津市教育委員会から派遣）
調査補助員　池野香代
（皇學館大學大学院生）
酒井巳紀子（花園大学学生）
西脇智広（皇學館大學学生）
室内整理員　市川嘉子・太田浩子
黒川敬子・鈴木　妙
森川絹代・蒔田やよい
新田智子
調査指導　青木哲哉（立命館大学）
山中　章（三重大学）
磯部　克（県立松阪高等学校）
岡田　登（皇學館大學）
宮本長二郎（東京国立文化財研究所）
（順不同・敬称略）

〔平成11年度〕
主幹兼
調査第二課長　吉水康夫
主査兼第二係長　本堂弘之
技　師　川畑由紀子
主　事　山口　格
（津市教育委員会から派遣）

第１図　中勢道路（８・９・10工区）内遺跡位置図（１：50,000、国土地理院「津東部・白子・椋本　１：25,000」から）

工区		遺跡名	調査対象面積（㎡）		調査年度												
			範囲確認調査	本調査	昭和63	平成1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12以降
8工区	18	丸市遺跡	128	—						範							
	19	山王遺跡	128	—						範							
	20	内垣内遺跡	128	—						範							
	21	天堤古墳	55	—						範							
	22	河崎遺跡	256	—						範							
	23	六大A遺跡	448	13,220						範	範8,830	4,130	260				
9工区	24	六大B遺跡	456	26,235	範		17,525	3,420	範3,350	1,270	670						
	25	橋垣内遺跡	176	12,000	範	7,000	4,925	75									
	26	大古曽遺跡	680	12,435	範		範	5,160	範240	7,035							
	27	新池2号墳	198	—									範				
	28	新池1号墳	20	—	範												
	29	西岡古墳	70	2,000				範	2,000								
	30	西岡2号墳	30	—				範									
	31	山籠遺跡	208	1,100	範	1,100											
	32	門脇北古墳		1,100		1,100											
	33	コウゼンジ遺跡	80	—	範												
	34	宮ノ前遺跡	144	2,800	範	2,700				100							
	35	森山東遺跡	240	5,230	範 4.230	1,000											
	36	太田遺跡	469	3,320	範 3,320												
	37	松ノ木遺跡	144	7,800	範	7,800											
	65	長遺跡	0	3,700								3,700					
10工区	38	蔵田遺跡	1,356	16,340		範					5,600	範6,810	3,300			630	
	39	位田遺跡	416	4,600		範							4,600				
	40	替田遺跡	432	[10,060]		範							範6,620	3,140			300
	41	弐ノ坪遺跡	320	5,100		範								5,100			
	42	里前遺跡	256	1,280		範							範		1,280		
	66	梁瀬遺跡	1,152	3,620									範	範	3,620		
	43	鎌切3号墳	—	—													
範囲確認調査			7,990		2,249	1,680	300	100	68	1,047	96	748	1,024	678			
本調査合計				131,940	7,550	20,700	22,450	8,655	5,590	8,405	15,100	14,640	14,780	8,240	4,900	630	300

第1表　一般国道23号中勢道路（8～10工区）内遺跡　調査経過・予定表

範：範囲確認調査　〔　〕一部調査済　本調査面積に下層含まず　(2000. 3)

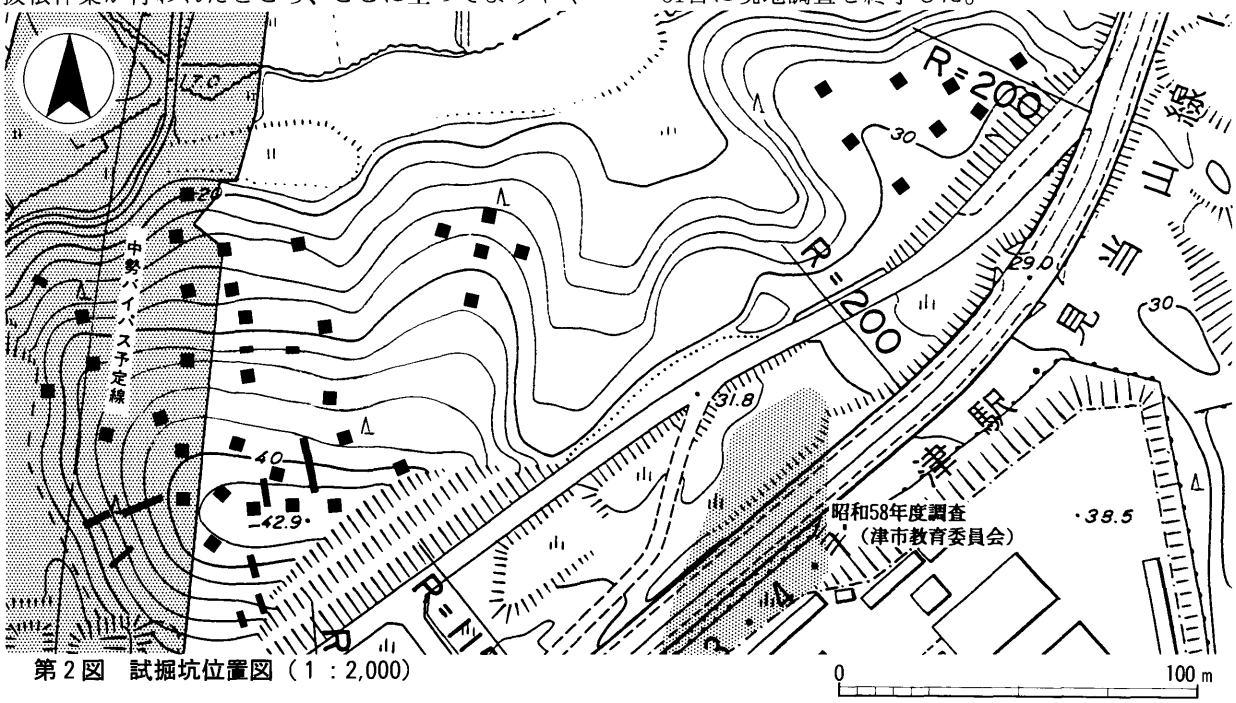
3．調査経過

はじめに、長遺跡の調査に至るまでの経緯について触れておく。長遺跡については、すでに昭和58年宅地造成に伴い津市教育委員会により行われた発掘調査によって、馬の背状のやせた尾根に造られた弥生時代中期後半に属する集落跡であることが判明していた。しかし、昭和58年度の分布調査の時点では、この調査区が計画路線から東に約200ｍも離れていたことから、あまり意識はされず、当時は長遺跡がそれほど大きな広がりをもつとは考えられていなかった。また、長遺跡の所在する丘陵は、周辺の自然丘陵と変わりがなく、樹木による腐植土が厚く堆積し土器の散布等の表面観察を困難なものにしていた。

このような状況の中、事前の分布調査及び範囲確認調査等によって、中勢道路９工区には六大Ｂ遺跡をはじめとして14か所の遺跡の存在が知られるに至ったが、路線内における長遺跡の存在については平成５年度当時まだ認識されていなかった。このことは後に、丘陵上における分布調査の難しさを痛感させられることとなった。遺跡発見の発端となったのは宅地造成に伴う工事であった。長遺跡の所在する丘陵は、西側が中勢道路建設に伴い、また、東側は宅地造成に伴い削平される予定であった。そのため平成６年、造成に先だって丘陵全体の樹木の伐採及び抜根作業が行われたところ、ここに至ってようやく土器等の遺物の散布が認められたのである。

これを受けて平成６年５月、津市教育委員会によって宅地造成部分の試掘調査が行われた。調査面積は600㎡であったが、中勢道路部分と宅地造成部分の境界が明らかでなかったため、中勢道路部分にも多くの試掘坑が入れられる結果となった。調査方法は、丘陵全体に試掘坑を52か所（うち16か所224㎡が中勢道路部分）設定して行い、試掘坑は４ｍ×４ｍを基本とし、地形等を考慮し適宜大きさを変更して行われた。（津市教育委員会　長遺跡試掘調査報告による）この結果、ほとんどの試掘坑から竪穴住居やピット、弥生土器等の遺構や遺物が認められ、丘陵全体に弥生時代の遺跡が存在することが確認された。

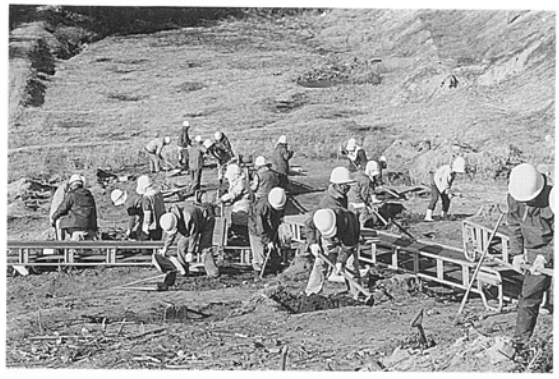
この資料をもとに平成６年６月、建設省と協議を行った結果、長遺跡については2,000㎡が本調査対象となった。本調査は、平成７年４月17日に丘陵頂部より開始したが、非常に高い遺構密度と斜面ゆえの厚い堆積土に作業は難航した。調査の進展に従い遺跡範囲が広がることが判明したため、調査区の拡張を行った。最終的に調査面積は3,700㎡となり、９月29日に空中写真測量を実施した。10月７日には現地説明会を開催したところ、約300名の参加を得た。その後、柱穴の断ち割りなどの補足調査を行い、10月31日に現地調査を終了した。



第２図　試掘坑位置図（１：2,000）

調査日誌（抄）

2月20日　丘陵頂部より表土除去作業開始。



北斜面地区表土除去作業

2月27日　西斜面の表土層直下より須恵器甕出土。

4月11日　国土座標による地区杭設定。

4月12日　建設省・三重県・中部建設協会の三者協議を行い、今後のスケジュールについて話し合う。地区杭設定完了。

4月17日　丘陵頂部より包含層掘削作業および遺構検出開始。

4月20日　ＳＨ１～４検出、埋土袋詰め作業。包含層より石斧出土。

4月28日　ＳＨ13埋土上層よりヒスイ製の勾玉出土。

5月９日　切り合い確認のためＳＨ14～16トレンチ調査。断面実測図作成。この頃、雨天が多く作業ほとんど進まず。

5月25日　三者協議を行い、調査区を拡張することを決定。

5月26日　天理市教育委員会　松本洋明氏による調査指導（弥生土器について）

5月30日　国学院大学　椙山林継氏による調査指導。（竪穴住居について）

6月２日　徳島文理大　石野博信氏調査指導。

6月７日　ＳＨ17埋土除去作業。床面より土錘８個がまとまった状態で出土。

6月12日　研修生エリックチェン調査区東西土層断面実測実習。～16日

6月14日　突然の雨により作業中止。現場プレハブにて安全講習会とこれまでの調査結果についての説明会開催。

6月16日　細長いテラス状の遺構（Ｇテラス）を検出。ピットが多く見られるが建物としてはまとまらない。柱列か。

6月27日　幅の広いテラス状遺構（Ｈテラス）と布掘り状の柱穴を検出。立壁を持つ住居か。

7月12日　ＳＨ26検出。床面より石斧出土。

7月26日　大型のＳＨ56検出。埋土除去作業の結果、深さ１ｍを測り、残存状態良好。

7月31日　北西部事業地内、遺構の有無確認のため試掘調査実施。遺構なし。

8月３日　高田高校地歴部体験発掘。～４日

8月４日　丘陵地区遺構検出ほぼ終了。スカイマスターによる全景写真撮影実施。本日より北斜面地区調査開始。

8月８日　柱列ＳＡ143検出。ピット多数検出されるも規格性見られず。

8月10日　北斜面裾部において掘立柱建物ＳＢ142検出。

8月22日　北斜面地区遺構検出終了。遺物僅少。

8月28日　遺構写真撮影。～９月５日

9月８日　環濠の有無を確認するため、谷部・水田部のトレンチ調査。

9月27日　遺構清掃作業。～29日

9月29日　空中写真測量実施。（朝日航洋）

10月４日　県庁にて記者発表。

10月７日　現地説明会を開催。約300名の参加あり。

現地説明会

10月19日　東京国立文化財研究所　宮本長二郎氏調査指導　航測図面校正作業。～27日

10月23日　奈良国立文化財研究所深澤芳樹氏調査指導

10月24日　愛知県埋蔵文化財センター石黒立人氏調査指導。

10月30日　柱穴・炉などの断ち割り調査。

10月31日　現地調査終了

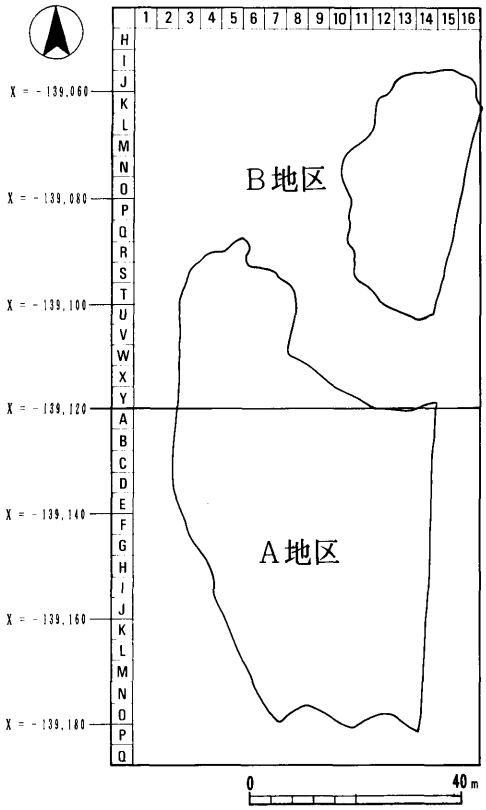
4．調査の方法

(1)地区設定

中勢道路の発掘調査にあたっては、調査区全体に国土座標による縦・横各４ｍ単位のメッシュをかけ、南北にアルファベット、東西に算用数字を用いて個別のグリッドを表す「地区設定法」が多く用いられている。今回の調査でもこの方法を用いたが、調査区が南北に長く、アルファベットに限界があるため、調査区を２地区に分割する大地区割りを行うことにより、この欠点を回避した。すなわち調査区全体をＸ＝－139,120から南側をＡ地区、北側をＢ地区に分割して大地区名とした。さらに調査区全体を縦横各４ｍ単位で東西に16等分、南北に35等分して小地区割りとし、アルファベットと算用数字を組み合わせて小地区名とした。地区名は、大地区名－小地区名の順（例：Ａ－Ｆ10）に表記し、出土遺物の取り上げや遺構略測はこれを基準に行った。

(2)作業方法

試掘結果から、流出土がかなり厚く堆積していることは判明していたが、遺構密度の高いことが予想されたため、万全を期して発掘作業はすべて人力をもって行った。また、竪穴住居の埋土は、層別に分けて水洗選別作業を行った。



第３図　調査区大地区割り図（１：1,400）

(3)遺構名称

ピットのみ小地区毎の通し番号を与えたが、他の遺構は調査区全体の中で通し番号を付した。（ただし、調査中の遺構番号は検出した順に付したものであり、そのままでは全体としてのまとまりに欠けるため、本報告では整理をして新たに番号の付け直しを行った。したがって、調査中の遺構番号と本報告の遺構番号は必ずしも一致していない。）

(4)図面・写真

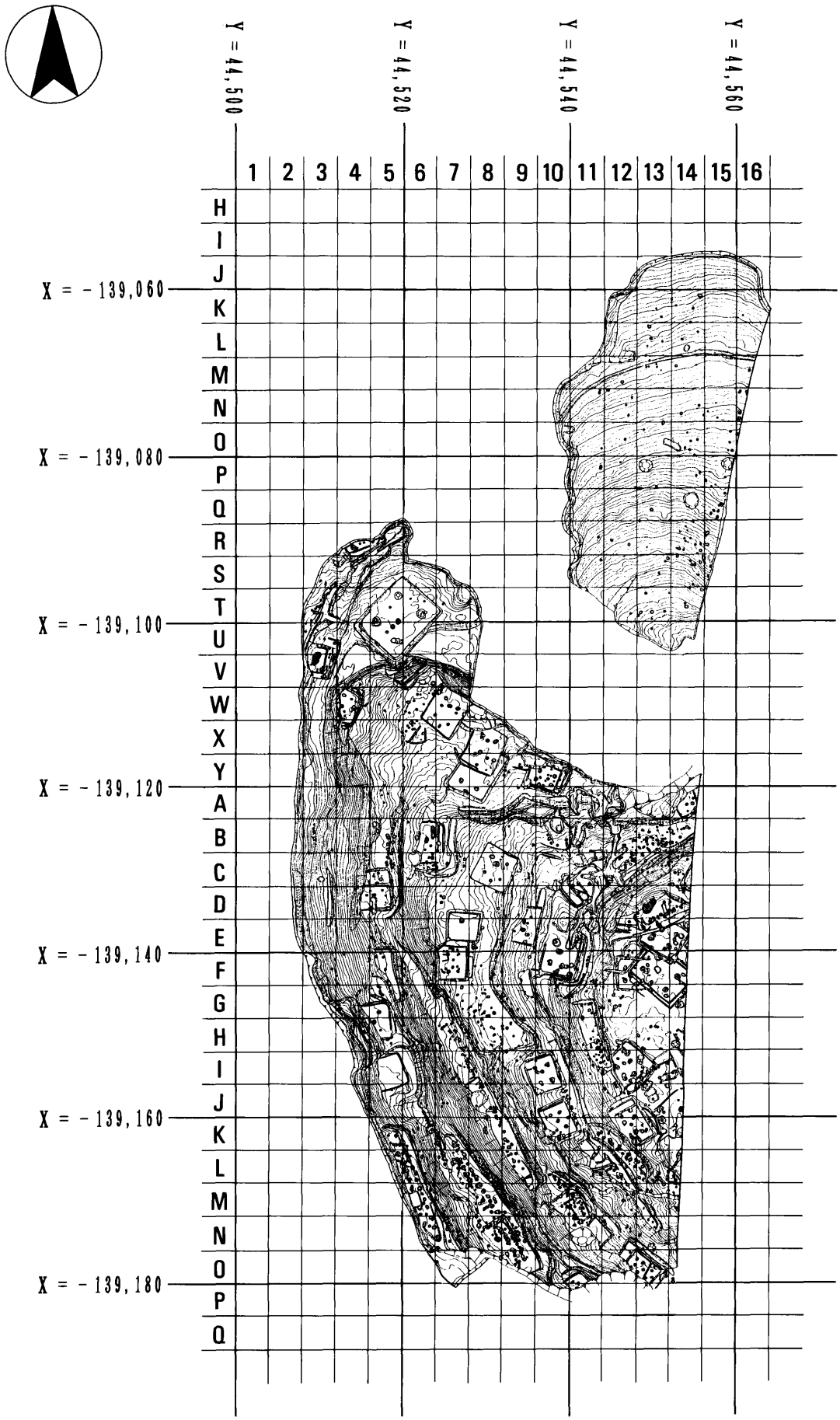
実測図は、土層断面図や遺物出土状況図等必要に応じて1／10または1／20の縮尺で作成した。調査区全体の実測及び測量は空中写真測量により行い、1／50縮尺（５枚分割）と1／100縮尺（調査区全体）の遺構図・等高線図・平面図を作成した。

写真は主として６×９㎝判（ウィスタ　ＳＰ）で撮影を行ったが、重要遺構や調査区全景等には必要に応じて４×５インチ判（ウイスタ　ＳＰ）を使用した。また、すべての対象に対して補助的に35㎜判（ニコンＦ401・Ｆ３）による撮影を行った。フィルムはモノクロネガとカラーリバーサルフィルムの両方で撮影を行い、適宜35mmカラーネガも併用した。

(5)遺物整理

土器等の出土遺物は、洗浄・接合・注記などの作業を行った後、実測すべき遺物とそうでない遺物に選別される。実測されない遺物は、遺構ごとに分類し袋詰めされてコンテナに収められる。コンテナには番号が付けられ一覧表を作成した上で収蔵される。

実測された遺物は、実測図との照合を容易にするため、遺物と図面の両方に「Ｒ」を頭に３桁＋２桁から成る登録番号（Ｒナンバー）が与えられる。例えば、実測図１枚目に書かれた２番目の遺物は「Ｒ００１－０２」となる。これらの図面はファイルに収納し、報告書番号、出土地区、遺構、層位等を記録したノートと共に保管される。



第４図　調査区小地区割り図（１：700）

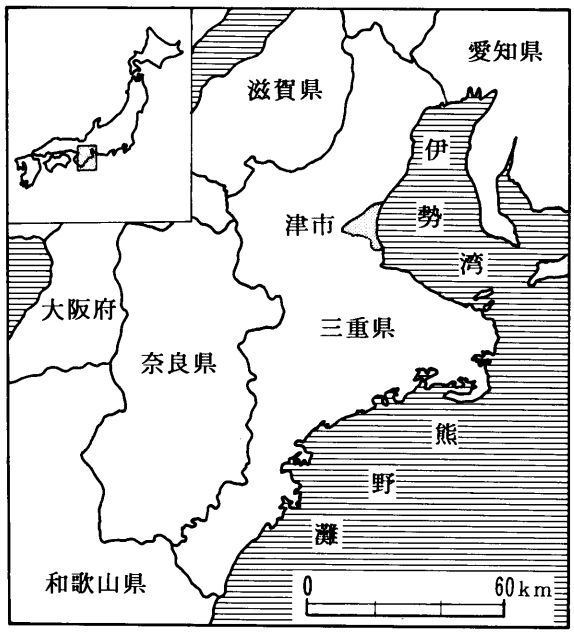
0　40m

Ⅱ．位置と環境

1．位置と地理的環境

近畿地方東部に位置する三重県は南北に長く、その長さは180kmに及ぶ。西は鈴鹿山脈・布引山地が南北に連なり伊賀地方・近江地方との境界をなし、東は伊勢湾や太平洋に面する。伊勢湾に面した北中部には多くの河川によって形成された南北90kmに及ぶ広大な伊勢平野が広がり、長遺跡(1)の所在する津市は、この平野のほぼ中央部に位置する。

津市は主に北部の志登茂川、中央部の安濃川、南部の雲出川のそれぞれの流域からなる。津市の中央部を流れる安濃川は、鈴鹿山系の一つ錫杖ケ岳（標高627m）にその源を発し、東西方向に発達した台地や丘陵に沿って東流して伊勢湾に注ぐ。流域には沖積作用により形成された肥沃な平野が広がり、これを基盤にして古くから文化が栄えてきた。この沖積平野の北側で、東西に延びる標高50mほどの低丘陵が長遺跡の所在する長岡丘陵[1]であり、地質的には第三紀層にあたる奄芸層群により形成される。長遺跡は長岡丘陵中央部の奥まった所にあり、西側から入り込んだ標高15～18mの谷水田と谷地形により画された標高42.3mの丘陵上に位置する。行政的には三重県津市河辺町字長・石立・池尻に属し、今回の調査区は字池尻に該当する。



第5図　遺跡位置図

2．歴史的環境

安濃川流域を中心に、長遺跡周辺の弥生時代とその前後における遺跡の動向を概観してみたい。

旧石器時代　この時期の遺跡についてはほとんど知られていない。志登茂川右岸の大古曽遺跡(2)では旧石器時代後期のナイフ型石器が確認されているが、安濃川流域ではわずかに安濃町平田遺跡で旧石器時代に遡る可能性のある石器片が採集されているにすぎない。

縄文時代　早期から中期にかけては上・中流域の河岸段丘上に多くの遺跡が見られる。主な遺跡として、早期では押型文土器を伴う竪穴住居が検出された美里村の西出遺跡、陥し穴が35基検出された安濃町西相野遺跡[2](3)などがある。中期では芸濃町大石遺跡[3]や大里西沖遺跡[4](4)などがあり、いずれも竪穴住居が検出されている。この時期の竪穴住居は県内では多くの遺跡で検出され、住居の中央には石囲みや土器敷きの炉が見られる。後期になると後期末の宮滝式に比定される深鉢が出土した蔵田遺跡[5](5)・安濃町多倉田遺跡[6](6)・同町辻の内遺跡[7](7)などが安濃川が形成した沖積地に出現し、これらの遺跡はさらに晩期へと継続する。晩期には、河道と竪穴住居が検出された松ノ木遺跡[8](8)・納所遺跡[9](9)・橋垣内遺跡[10](10)などのように沖積地に進出する遺跡が多く見られる様になるが、殿村遺跡[11](11)・平田遺跡(12)のように依然として丘陵上に立地する遺跡も見られるなど二極的な様相を呈している。

弥生時代　伊勢湾西岸に到達した弥生文化は、伊勢平野を形成する河川の流域において、その肥沃な沖積平野を基盤として初期弥生集落を成立させた。安濃川中下流域左岸の自然堤防上に立地する納所遺跡(9)は、前期から後期に至る弥生全期間の遺物を出土する遺跡として知られ、雲出川流域の三雲町中ノ庄遺跡、鈴鹿川下流域の上箕田遺跡と並んで三重県を代表する拠点的集落のひとつに数えられている。納所遺跡の成立から、やや遅れて安濃川右岸の半田丘陵上に上村遺跡[12](13)が出現する。弥生前期から後期に至る遺物を出土し、半田丘陵における中心的な集落と考えられている。他に安濃川流域で前期の土

第６図　周辺遺跡位置図（１：50,000 国土地理院「津東部・津西部・白子・椋本　１：25,000」から）

器が出土する遺跡として、殿村遺跡や森山東遺跡[13](14)などが知られるが、まだまだこの時期の遺跡数は少ない。雲出川流域を含めても、左岸の段丘上に位置する四ツ野B遺跡[14]や向山遺跡[15]から亜式遠賀川式土器を伴う土坑が検出されたに過ぎず、遺構についてはほとんど知られていない。

中期になると検出例は増加し、竪穴住居などの遺構も多くの遺跡で確認されるようになる。中期前半の遺跡として主なものに替田遺跡[16](15)・弐ノ坪遺跡[17](16)・蔵田遺跡・平田遺跡[18]などがあげられ、その多くは沖積平野の微高地上に立地する。替田遺跡・弐ノ坪遺跡・平田遺跡からは竪穴住居が検出されている。平田遺跡の竪穴住居がすべて円形プランであるのに対して、替田遺跡・弐ノ坪遺跡では円形プランと方形プランが混在して見られる。また、南東部に出入り口と考えられる張り出し部をもつのも当地域におけるこの時期の竪穴住居の特徴である。遺物では、貝殻腹縁による条痕文を施した尾張地方の特徴をもつ壺などが多く見られる。

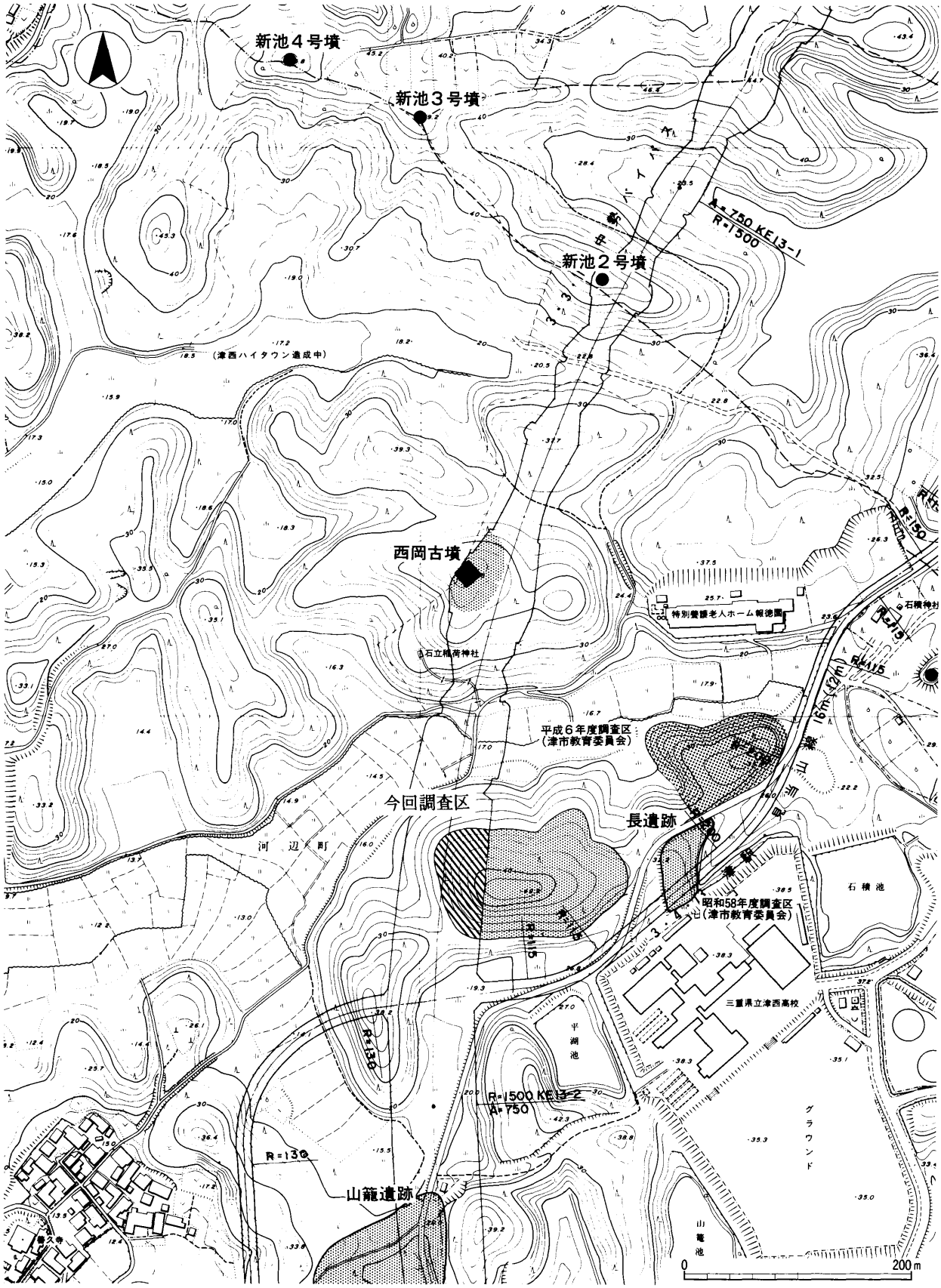
中期後半になると、それまで沖積平野の微高地上に営まれていた集落はそのほとんどが姿を消し、代わって安濃川左岸の長岡丘陵上に長遺跡(1)や山籠遺跡[19](17)などが出現する。長遺跡は三次にわたる発掘調査により200棟もの竪穴住居が検出された大集落遺跡である。また、山籠遺跡は長遺跡の南約200mの丘陵北斜面に営まれた集落遺跡で竪穴住居が10棟検出されている。この時期の竪穴住居は、長遺跡でわずかに円形プランの残存が認められるが、そのほとんどが長方形プランで占められ、この時期を境に竪穴住居の平面プランはその大勢が円形から長方形に移り変わったことを示している。遺物でも貝殻腹縁による条痕文を施した壺などは見られなくなり、代わって櫛状工具による横線文・波状文・簾状文で飾られた土器が盛行する。また、算盤玉状の体部に、太い凹線文をもつ受け口状口縁の壺もこの時期の特徴的な器形である。しかし、この時期に出現した集落のほとんどは後期までは存続することなく、比較的短期間の内にその役目を終えていく。

後期になると遺跡数は急増し、安濃川左岸では長岡丘陵の裾部で、また、右岸では半田丘陵上で多くの遺跡が確認されている。主な遺跡として、長岡丘陵の裾部では竪穴住居や掘立柱建物が検出された大城遺跡[20](18)をはじめ、桐山遺跡[21](19)・森山遺跡[22](20)・森山東遺跡・宮ノ前遺跡[23](21)・竹川遺跡[24](22)などが知られている。また、右岸の半田丘陵上では29棟の竪穴住居が検出された高松C遺跡[25](23)をはじめ大ケ瀬遺跡[26](24)・柳谷遺跡[27](25)・平栄遺跡[28](26)・尺目遺跡[29](27)などが知られている。この時期の竪穴住居は、そのほとんどが正方形に近い方形プランで占められ、中期後半に見られた顕著な長方形プランはほとんど見られなくなる。また、土器では後期前半の山中式と後期後半の欠山式の広範な分布が確認されている。

この地域は、弥生時代の特徴的な祭祀具である銅鐸の出土地としても知られる。安濃川右岸の半田丘陵では神戸銅鐸出土地(28)と野田から、また、雲出川左岸では高茶屋の四ツ野B遺跡から銅鐸が出土している[30]。神戸銅鐸は外縁付鈕式の流水文銅鐸であり、兵庫県倭文・大阪府恩智出土銅鐸と同笵である。野田銅鐸と高茶屋銅鐸はいずれも突線鈕式で、野田銅鐸は三遠式に、高茶屋銅鐸は鈕に飾耳をもつ近畿式に属する。いずれも安濃川右岸からの出土で、左岸からの出土例は知られていないが、太田遺跡[31]で銅鐸形土製品が出土しており、両地域での銅鐸祭祀のあり方が注目される。

弥生時代の墓制は、前期の段階についてはほとんど知られていないが、松ノ木遺跡から前期に遡る可能性がある方形周溝墓が検出されている。また、土坑墓の可能性があるものとして、四ツ野B遺跡や向山遺跡で検出された亜式遠賀川式土器を伴う土坑があげられる程度である。中期になると、納所遺跡・松ノ木遺跡・橋垣内遺跡など平野部に方形周溝墓が出現し、倉谷遺跡[32](29)では丘陵上に方形台状墓が造られる。また、納所遺跡・亀井遺跡[33](30)・橋垣内遺跡・替田遺跡・弐ノ坪遺跡など多くの平野部の遺跡で、土坑墓の可能性が指摘される土坑が検出されている。土坑墓は、61基が検出された替田遺跡に見られるように集団墓的な様相を示し、規模的にも大きな格差は見られない。後期になると、安濃町大城遺跡・同前田遺跡[34]・大ケ瀬弥生墳丘墓[35](31)・高松弥生墳丘墓[36](32)・鎌切遺跡[37](33)など、丘陵上の遺跡に方形台状墓が出現する。これらは集団墓

から隔絶した個人墓として造られたものである。こうした墳丘墓は次の古墳時代へと引き継がれ、安濃川流域では最古の位置を占める坂本山古墳群[38](34)などの出現を見るのである。



第７図　遺跡周辺地形図及び調査区位置図（１：5,000）

Ⅲ．調査の成果

1．基本層序

遺跡は標高42.3m、周囲との比高約30mの丘陵に位置する。今回の調査区は頂部付近に平坦な地形がわずかに存在するものの、大半が丘陵の西側と北側の斜面に含まれることから、調査区全体で一定した層序というものは見られない。また、遺構検出は基本的に地山面で行ったが、遺構面までの深さは場所によって大きく異なる。頂部平坦地や北斜面地区など傾斜の緩やかな場所では30～40cmであるが、傾斜の急な丘陵地区では斜面全体が階段状に造成されているため、テラス部分に流出土が厚く堆積し、平均で50～60cm、厚いところでは1m以上にも達している。このような状況であるが、調査区の層序全体を概観した場合、以下のようにまとめることができる。

ほぼ平坦な丘陵頂部においては、第Ⅰ層：褐色土（表土）・第Ⅱ層：褐灰色土（遺物包含層）・第Ⅲ層：地山の順でほぼ水平に堆積し、通常の堆積状況を示すが、東西断面のように傾斜のきつい部分では、テラスごとに堆積状況が異なるため、連続した層序は認められない。しかし、調査区内でも南北断面のように最も傾斜の緩やかな部分から北斜面地区にかけては、第Ⅰ層：褐色土（表土）、第Ⅱ層：黄褐色土、第Ⅲ層：褐色土（包含層）、第Ⅳ層：地山となり、比較的安定した層序が認められる。また、遺構については全体的に第Ⅱ層以下の遺物包含層によって良好に被覆されている状況である。以上のことから、この集落は廃棄された後、斜面ゆえの度重なる流出土により自然埋没し、以後は客土が持ち込まれることもなく、また、開墾等による大きな削平を受けることもなく、良好な状態で今日まで保たれてきたことが、遺構の残存状況からも推察される。

2．検出された遺構と遺物

(1)調査結果の概要

調査区は標高42.3m、谷水田との比高約30mの丘陵に位置し、谷地形によって竪穴住居の密集する丘陵地区と北斜面地区に分かれる。丘陵地区は斜面を数段のテラス状に造成することによって平坦な面を確保し、そこに竪穴住居や掘立柱建物、柱列などを配している。丘陵地区で検出された主な遺構として、竪穴住居57棟、掘立柱建物9棟、柱列76条、土坑1基、溝3条などがある。また、丘陵地区の北に位置する北斜面地区では掘立柱建物1棟、屈曲する柱列1条、溝1条などを検出している。今回検出された竪穴住居で最大のものは長辺12m×短辺8.4m（SH11）で、最小は一辺2.7m（SH23）の規模である。また、掘立柱建物はいずれも桁行きが2～3間、梁行きが1間の小規模なものである。

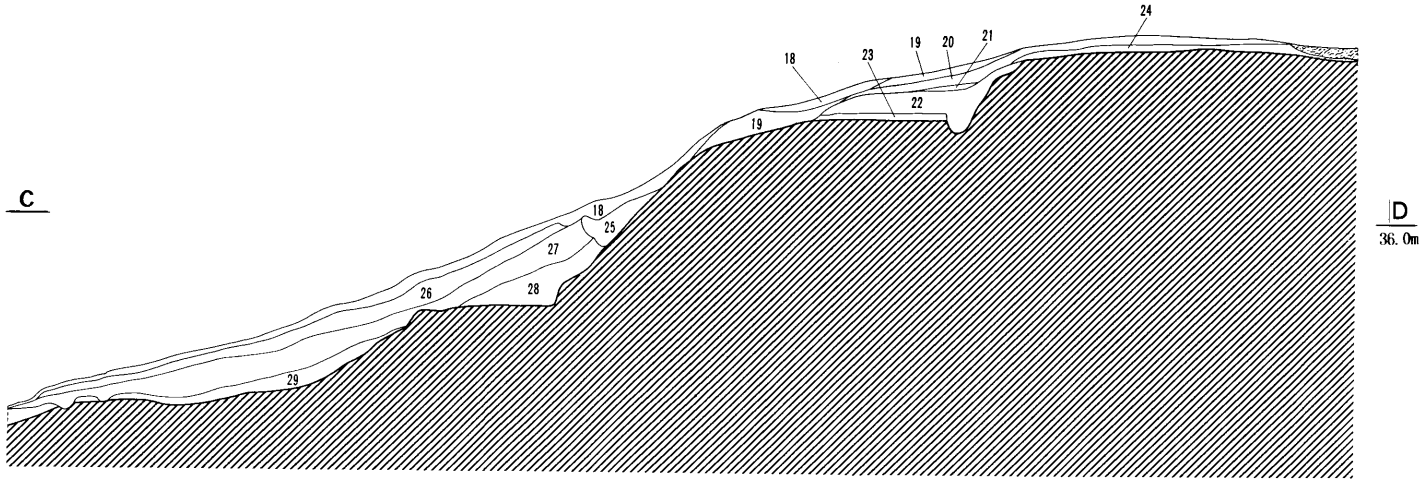
遺物はコンテナ箱120箱分の量が出土したが、大半が包含層からの出土である。そのため、ほとんどは断片的な破砕片であり、調整技法や文様など不明なものが多い。遺物には土器・石器・玉類・石製品などがあり、大半が土器類で占められる。器種的には壺・甕・高杯・鉢などが見られる。土器の中には須恵器が2点ほど含まれるが、それ以外の遺物はすべて弥生時代中期後葉に属するものである。なお、特筆すべき遺物としてヒスイ製の勾玉(236)とガラス製品(235)がある。

(2)凡　例

1．本遺跡では、調査区が谷地形によって二つに分断されるため、丘陵地区と北斜面地区に分けて記述を行った。また、竪穴住居が全体に分布する丘陵地区では、便宜上、各テラス又は同一平面上のまとまりをひとつの単位として、丘陵の頂部から下に向かってA～K地区の順に機械的に分割して記述をすすめた。なお、A地区では平成6年度に津市教育委員会が行った調査区の残存部もあわせて図化を行った。

2．竪穴番号は地区の順に従って機械的に付与したものである。ただし、切り合いをもつ竪穴については古い順に番号を付し、床面が同レベルで2辺

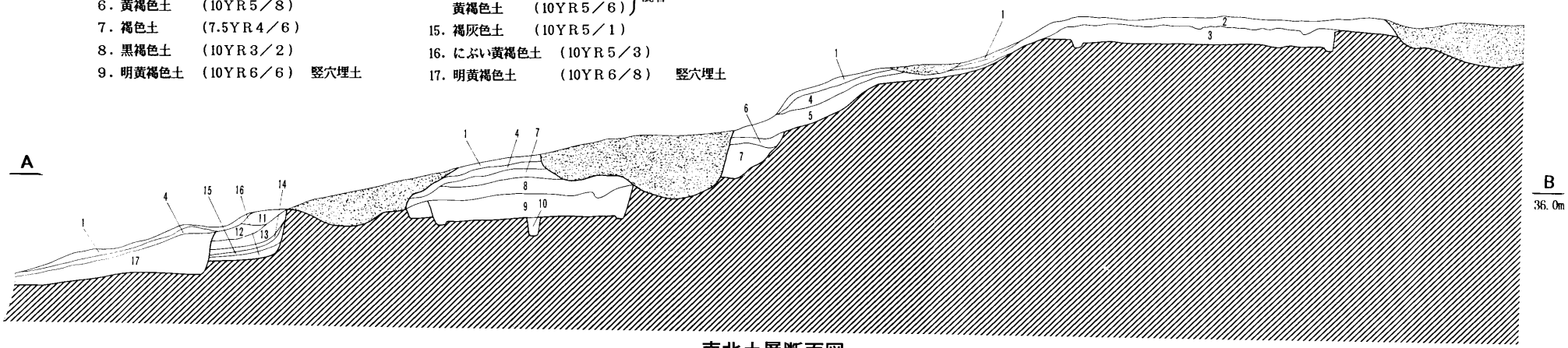
18. 褐灰色土　（10YR5／1）　表土
19. 明赤橙色土　（2.5YR5／6）
20. 灰白色土　（10YR7／1）
21. 褐灰色土　（5YR6／1）
22. 褐色土　（7.5YR4／3）竪穴理土
23. 赤褐色土　（2.5YR4／6）
24. 赤橙色土　（10R6／8）
25. 褐灰色土　（10YR4／1）
　　明赤橙色土　（2.5YR5／6）混合
26. にぶい黄橙色土　（10YR5／4）
27. 黒褐色土　（10YR3／1）
28. 褐灰色土　（7.5YR5／1）
29. 褐灰色土　（7.5YR4／1）



東西土層断面図

1. 褐色土　（10YR4／6）　表土
2. 褐灰色土　（10YR4／1）
3. 灰褐色土　（7.5YR4／2）　竪穴埋土
4. 黄褐色土　（10YR5／6）
5. 褐色土　（7.5YR4／4）
6. 黄褐色土　（10YR5／8）
7. 褐色土　（7.5YR4／6）
8. 黒褐色土　（10YR3／2）
9. 明黄褐色土　（10YR6／6）　竪穴埋土
10. 黒褐色土　（10YR3／1）
11. 灰黄褐色土　（10YR6／2）
12. にぶい黄橙色土　（10YR6／4）
13. にぶい黄橙色土　（10YR6／3）
14. 褐色土　（10YR4／6）
　　黄褐色土　（10YR5／6）混合
15. 褐灰色土　（10YR5／1）
16. にぶい黄褐色土　（10YR5／3）
17. 明黄褐色土　（10YR6／8）　竪穴埋土

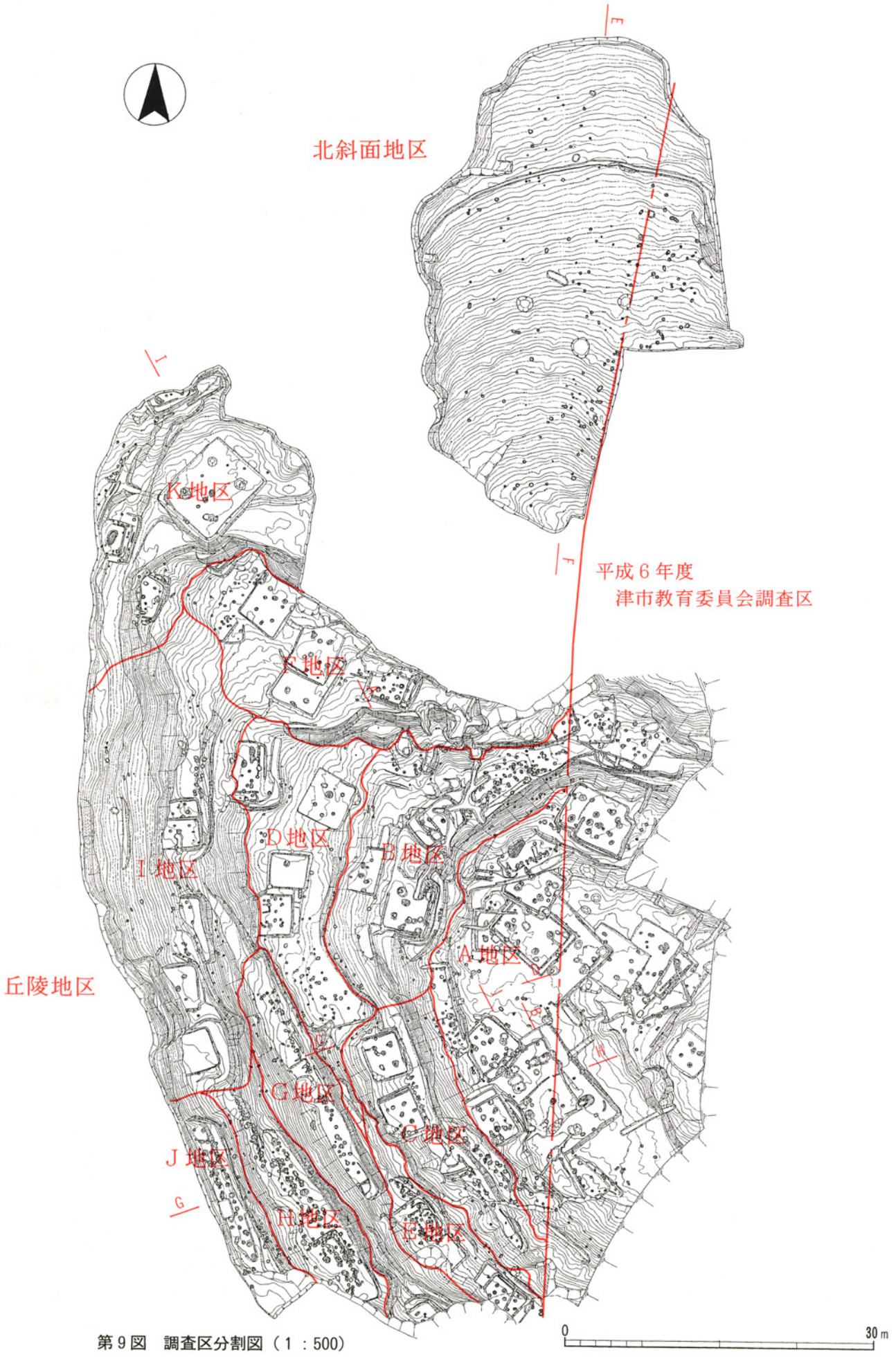
撹乱土



南北土層断面図

0　5m

第8図　丘陵地区土層断面図（1：100）



第９図　調査区分割図（１：500）

以上の共有する壁面をもつか、ＳＨ２のように明らかに拡張と見られるものについては、基本的に前建物の拡張と記述し、竪穴番号は付していない。

3．各竪穴住居の実測図には原則として平面図、断面図を、また一部遺物出土状況図も記載した。平面図には地床炉の焼土範囲を格子模様のスクリーントーンで示した。なお、切り合いをもつ竪穴住居の平面図についてはできるだけそのまま、まとめて記載した。

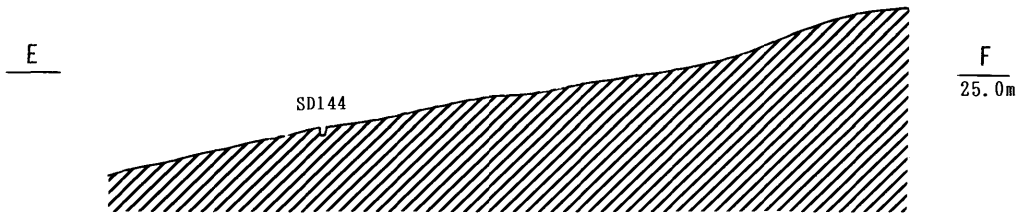
4．断面図は、原則として主柱穴の中心を通るラインで作成したが、柱穴のないものは各辺の中央を結ぶラインで作成した。

5．実測図の縮尺は1／100、遺物出土状況図の縮尺は1／20で統一した。また、平面図は原則として住居の各辺が版面の縦、横線に平行するよう配置したが、方位はレイアウトの都合上統一していない。

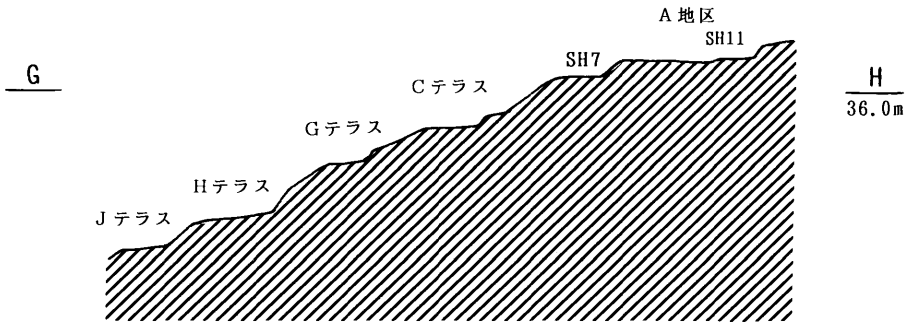
6．住居の平面規模は、隅が直角に近いものは壁長を、隅に丸みを帯びているものについては竪穴中央で交錯する十字線を想定し、各軸長を測定して記載した。測定は遺構検出面で行った。

7．竪穴住居の壁の高さは「壁高」で統一した。壁高は本来掘り込み開始面から計測すべきものであるが、本報告では検出面から床面までの高さを壁高としている。したがって、それぞれの残存状態には差があり、本来の壁高は記述された数値以上ということである。

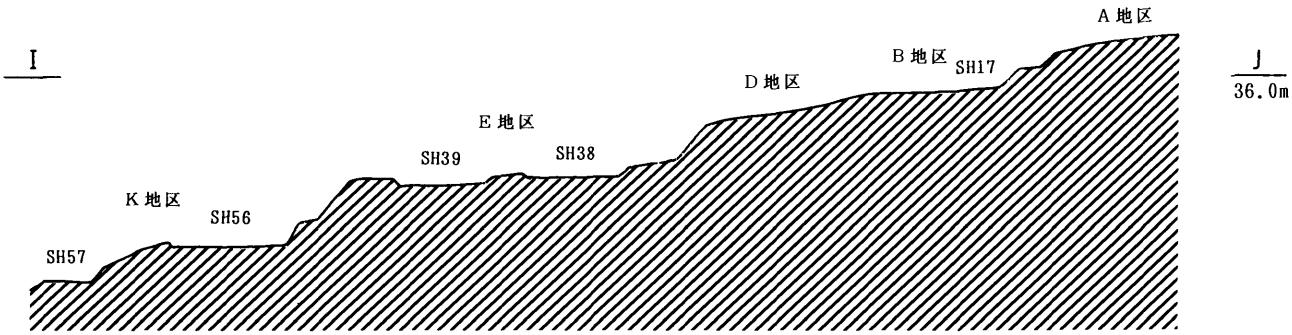
8．各遺構から出土した遺物量はコンテナ箱及びビニール袋に換算して表示をしたが、コンテナ箱は59cm×38cm×16cm、ビニール袋は40cm×25cmの大きさを基準としている。



北斜面地区　南北断面図



丘陵地区　東西断面図



丘陵地区　南北断面図

第10図　調査区断面図（1：450）

0　20m

(3)土器の形態分類

本遺跡出土の土器に関する分類上の基準をまず明らかにしておく。資料は若干量の古墳時代後期の土器（須恵器）を含むが、そのほとんどが弥生時代中期後葉のものである。土器の器種は壺・甕・蓋・高杯・鉢などである。遺存状態は良くなかったが、ここでは器種ごとに形態差による大まかな分類を行い、さらに施文や法量による細分を行った。以下、その分類基準を列記する。

壺　大きく３つに分類した。Ａ類は広口壺で口縁部が大きく開き、端部外面に明瞭な面をもち、体部は算盤玉状になるものを一括した。さらに口縁端部の形態差によりＡ１～Ａ５に分類、体部Ａ７は法量により細分した。Ｂ類は口縁部が受口状を呈するものを一括した。形態差からＢ１～Ｂ３に大別し、さらに口縁部の形態差及び凹線文の有無により細分した。Ｃ類は内湾状口縁をもつものである。

壺Ａ１　口縁端部がほぼ垂直で、外面に櫛描波状文、内面に矢羽根状の櫛刺突文が巡る。

壺Ａ２　口縁端部はやや外傾し、外面に櫛描波状文、内面に１～２条あるいは矢羽根状の櫛刺突文が巡る。外面の波状文が不明なものも含む。

壺Ａ３　口縁端部は大きく折り返し、やや外傾する端部外面に櫛描波状文、内面に櫛刺突文が巡る。

壺Ａ４　口縁端部は小さく折り返し、やや外傾する端部外面に波状の押圧文が巡る。

壺Ａ５　頸部の径に対して口縁部の開きが小さい形態のもので、口縁内面に櫛刺突文が巡る。

壺Ａ６　今回出土した土器の中では大型の部類に入るもので、頸部に数段の櫛描横線文が巡る。

壺Ａ７－１　算盤玉状の小型の壺体部である。櫛状工具による簾状文や波状文が数段巡る。

壺Ａ７－２　算盤玉状の体部で、櫛状工具による横線文や波状文が数段巡る。

壺Ｂ１－１　受口状の口縁部をもつ細頸壺で、口縁部外面は無文である。ａ類が大半をしめる。

壺Ｂ１－２　形態的にはＢ１－1と同様で、口縁部外面に１～３条の凹線文が巡る。ａ類が大半をしめる。

壺Ｂ２　受口状の口縁部をもつ 太頸壺で、口径が22cmをこえる大型のものである。口縁部外面に３～４条の凹線文が巡る。ａ類が大半をしめる。

壺Ｂ３　口径に対して頸部が太く短い形態のもので、頸部に数条の細い沈線が巡る。

壺Ｃ　内湾する口縁部をもつ細頸壺で、口縁外面に数段の櫛描横線文が巡る。

甕　大きく３つに分類した。Ａ類は口縁部がくの字形に短く屈曲する甕を一括し、口縁の形態差によりＡ１～Ａ７に分類した。さらにＡ１は凹線の有無により細分した。Ｂ類は口縁部が緩やかに外反する甕を一括し、口縁端部の刻みの有無によってＢ１とＢ２に大別した。さらにＢ１を口縁部の形態差から、Ｂ２を法量からそれぞれ細分を行った。甕Ｃは口縁部が受口状の甕を一括した。口縁部の形態差によりＣ１～Ｃ４に分類し、Ｃ２は法量により細分した。

甕Ａ１－１　口縁部はくの字形に短く屈曲し、端部に明瞭な面をもつ。

甕Ａ１－２　形態的にはＡ１－1と同様であるが、端部に１条の浅い凹線が巡る。

甕Ａ２　口径が35cmをこえる大型のもので、口縁部は立ち気味に短く屈曲し、端部に明瞭な面をもつ。

甕Ａ３　口縁部が短く水平に近い形で屈曲する小型の甕である。

甕Ａ４　薄手の器壁で、端部の面は明瞭でない。

甕Ａ５　口縁部は短く水平に近い形で屈曲し、口縁端部をつまみ上げる。

甕Ａ６　口縁部はやや外反気味に短く屈曲し、口縁内面は粗いヨコハケ調整がなされる。

甕Ａ７　肥厚した口縁端部は明瞭な面をもち、刻み目が巡る。

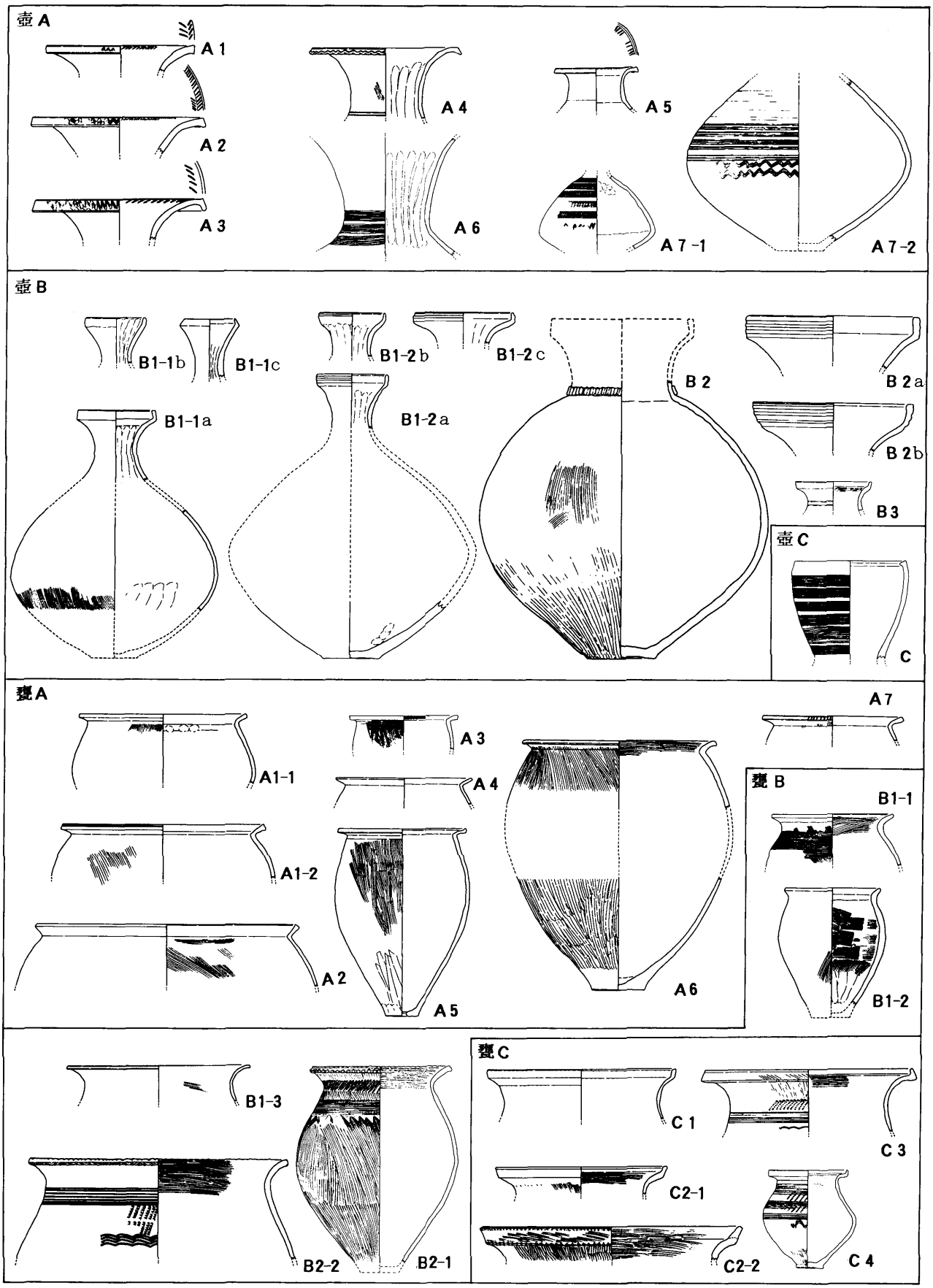
甕Ｂ１－１　口縁部は頸部からゆるやかに外反し、端部の面は明瞭でない。

甕Ｂ１－２　口縁部はやや短く立ち気味に外反し、端部の面は明瞭でない。

甕Ｂ１－３　薄手の器壁で、口縁部は頸部から緩やかに外反する。端部の面は明瞭でない。

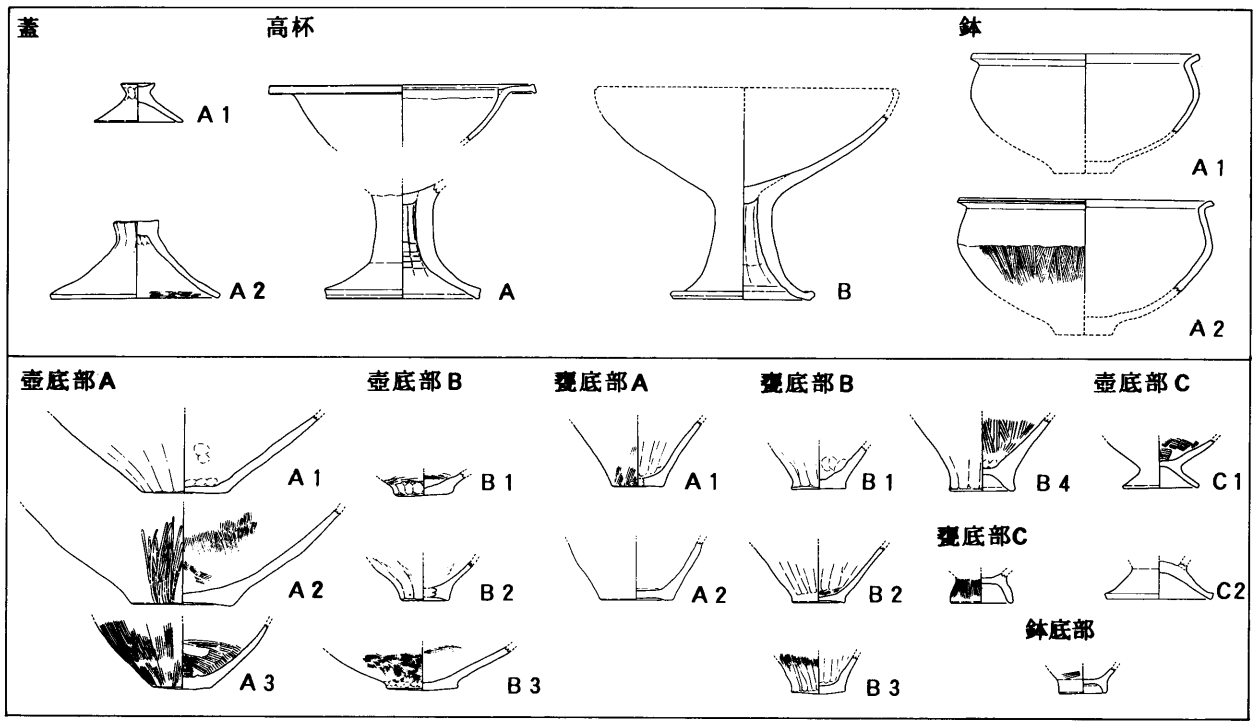
甕Ｂ２－１　口縁部は頸部からやや長めにゆるやかに外反し、口縁端部に上下２段の刻み目が巡る。口縁内面には粗いヨコハケ調整がなされる。体部には粗いタテハケ調整がなされた後、櫛状工具による横線文・列点文・波状文を巡らす。

甕Ｂ２－２　形態や施文は甕Ｂ２－1とほぼ同様で、口径が30cmをこえる大型の甕である。



第11図　長遺跡出土土器形態分類図１（１：８）

0　40cm



第12図　長遺跡出土土器形態分類図２（１：８）

甕Ｃ１　口縁部は、ゆるやかな頸部からほぼ垂直に立ち上がる。

甕Ｃ２－１　口縁部の立ち上がりはやや外傾し、内面に粗いヨコハケ調整がなされる。

甕Ｃ２－２　形態的にはＣ２－1と同様であるが、大型で口縁外面には上下２段の刻み目を巡らす。

甕Ｃ３　口縁部の立ち上がりはやや内傾し、体部外面には櫛状工具による刺突文や横線文、波状文を巡らす。

甕Ｃ４　水平部からほぼ垂直に立ち上がる形態の口縁部をもつ小型の甕である。体部外面には櫛状工具による刺突文や横線文、波状文を巡らす。

蓋Ａ１　直径12cm以内の小型の蓋である。

蓋Ａ２　直径18cm前後の蓋である。

高杯Ａ　口縁部が水平な杯部をもち、脚部は円筒状の部分から裾が緩やかに開く。

高杯Ｂ　内湾気味に開く杯部をもち、脚部は杯底部から裾が緩やかに開く。

鉢Ａ１　口縁部はくの字形に短く屈曲し、端部に明瞭な面をもつ。

鉢Ａ２　形態的にはＡ１と同様であるが、端部に浅い１条の凹線を巡らす。

壺底部Ａ　底部から体部へ向かって緩やかに拡がるものを一括する。

壺底部Ｂ　底部からほぼ垂直な立ち上がり部をもって緩やかに拡がるものを一括する。

甕底部Ａ　壺底部に比較して立ち上がり角度の大きいものを一括する。

甕底部Ｂ　底部からほぼ垂直な立ち上がり部をもち、壺底部より立ち上がり角度の大きいものを一括する。

壺・甕底部Ａ１　底部が平坦なものを一括する。

壺・甕底部Ａ２　底部が平坦でなく、やや凹状のものを一括する。

壺底部Ａ３　底部が平坦でなく、やや凸状のものを一括する。

壺・甕底部Ｂ１　底部が平坦なものを一括する。

壺・甕底部Ｂ２　やや凹状の底部を一括する。

壺・甕底部Ｂ３　やや凸状の底部を一括する。

甕底部Ｂ４　底部が極端な凹状のものを一括する。

甕底部Ｃ　台付き甕の脚台部である。

壺底部Ｃ　台付き壺の脚台部である。端部に明瞭な面をもつＣ２ともたないＣ１がある。

鉢底部　高台状の鉢の底部である。

第13図　長遺跡遺構図（１：300）

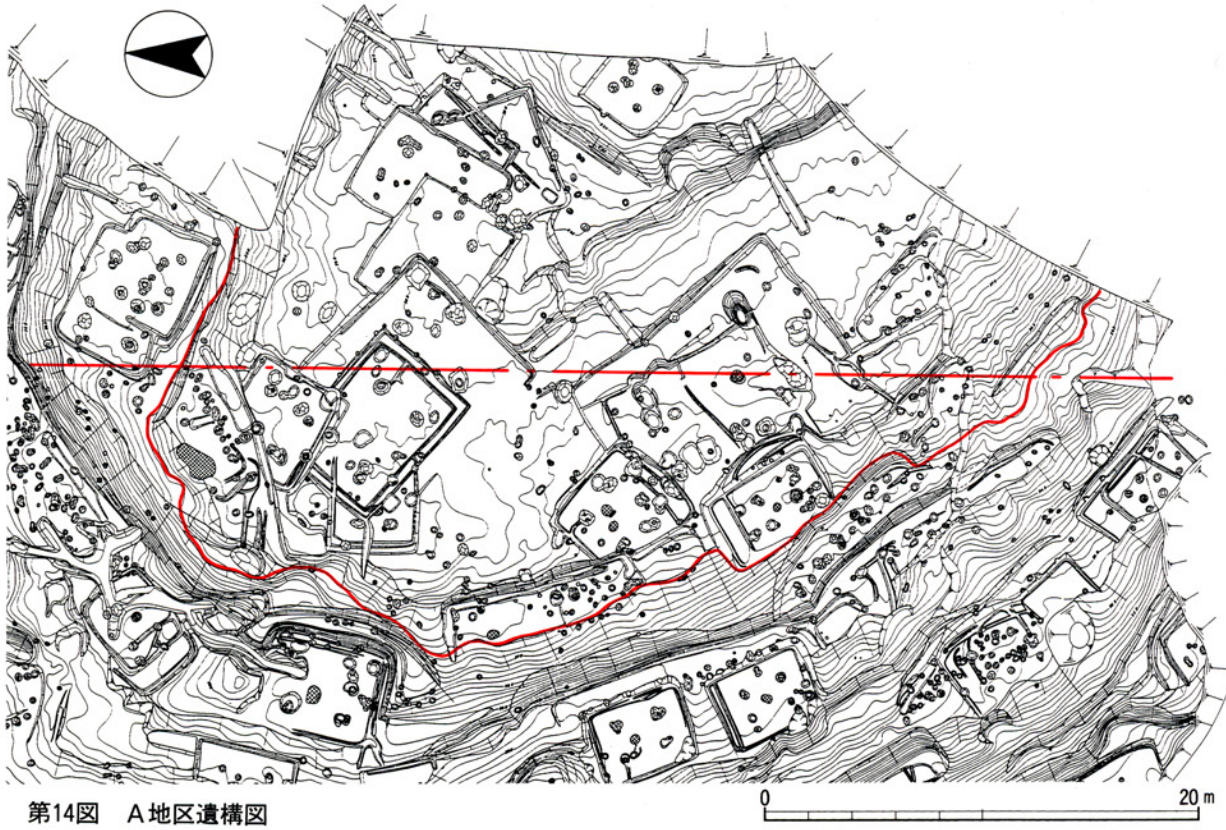
（4）各説１（丘陵地区）

ここではＡ～Ｋの各地区ごとに、遺構の概要と個々の遺構を出土遺物と共に記述したが、石器および玉類、石製品についてはそれぞれ別に記述を行った。また、出土遺物についての記述は出土量と形態分類表による分類のみとし、法量、調整技法等については別紙観察表にまとめた。

Ａ地区

Ａ地区の概要　Ａ地区は調査区内で最も高く、標高38.5ｍに位置する。ほぼ平坦な面を成し、建物等を構築するには最適の場所である。今回の調査で竪穴住居16棟・掘立柱建物１棟・柱列７条・土坑１基などを検出した。竪穴住居はその規模から、長辺が５ｍ前後の小型のものと８ｍ前後の中型のもの、さらに９ｍを越える大型のものの３つに大別できる。また、その分布状況から、比較的近接した場所で切り合う北側のＳＨ１～ＳＨ４のグループと、ほぼ同一地点で切り合いを重ねる一群（ＳＨ５～ＳＨ７・ＳＨ11～ＳＨ13・ＳＨ14～ＳＨ16）が切り合う南側のグループと、東辺を揃え直線的に切り合う西側縁辺部のＳＨ８～ＳＨ10のグループの３つに分けることができる。北端部と南端部には斜面を切り込んでテラスが造られ、テラス上では柱列や溝が検出された。

ＳＨ１　Ａ地区の北側に位置し、互いに切り合う４棟（ＳＨ１～ＳＨ４）の中で最も古い竪穴住居である。このグループは小型→中型→大型→小型という規模の変遷が窺える。ＳＨ１は他の３棟とは方向が異なるが、床面の標高はＳＨ２・ＳＨ３とほぼ同じである。規模は東西辺4.6ｍ×南北辺4.1ｍの長方形プランをもつ。周壁は東半分がＳＨ２・ＳＨ３に切られ消滅しているが、北壁の最も残存状態のよい部分で検出面から床面まで壁高25㎝を測る。現状では、東辺を除く三方に幅20～25㎝、深さ７～10㎝の周溝が巡るが、レベルの高かった東辺の周溝はＳＨ２・ＳＨ３の削平をうけた可能性があり、当初は全周していたと推測される。また、西辺では周溝と壁面との間に20㎝ほど幅があることから、壁面のみの拡張がうかがわれる。主柱穴は４個検出した。いずれも径50㎝、深さ80㎝を測る。床面中央やや西寄り



第14図　Ａ地区遺構図

で70cm×50cmの範囲で赤色に焼けた部分が認められ、炉の痕跡と考えられる。

出土遺物　コンテナ箱半分ほどの量が出土した。壺Ａ４(1)、壺Ａ２(2)、甕底部Ｂ１(3)、甕底部Ｃ(4)などがあり、その他は大半が壺と甕の体部細片である。いずれも床面付近から出土している。

ＳＨ２　ＳＨ１を切り、ＳＨ３・ＳＨ４に切られる形で検出した。二重に巡る周溝の状況から拡張が認められる。規模は、拡張前が南北辺6.4ｍ×東西辺4.7ｍ、拡張後は南北辺7.5ｍ×東西辺5.5ｍを測る中型の竪穴住居である。いずれも長方形プランを示し、拡張後の床面積は拡張前の約1.3倍に増加している。周壁は、大型のＳＨ３に切られ北壁の一部が僅かに残存するのみで、壁高は20cmを測る。周溝は、ＳＨ４に切られ消滅している北東隅以外は二重に全周し、幅15～20cm、深さ６～10cmを測る。拡張前の周溝には南辺から南東部の主柱穴に直角に取り付く溝が見られ、拡張後の周溝には排水溝と壁柱穴が見られる。排水溝は長さ2.5ｍを測り、北西隅から西の斜面側に延びる。壁柱穴は径12～20cm、深さ20cmを測り、東辺と南辺の壁際にほぼ等間隔に並ぶ７個が検出された。主柱穴は４個検出した。いずれも径60～80cm、深さ80cmを測り、柱痕跡が明瞭に認められた。柱痕跡は径17～22cmを測り、柱穴の底部に達していた。床面中央やや北寄りでは灰混じりの土が充満した長径85cm、深さ12cmを測る浅い楕円形土坑を検出した。壁面に焼け締まった様子は認められないが、その位置から炉の痕跡と考えられる。

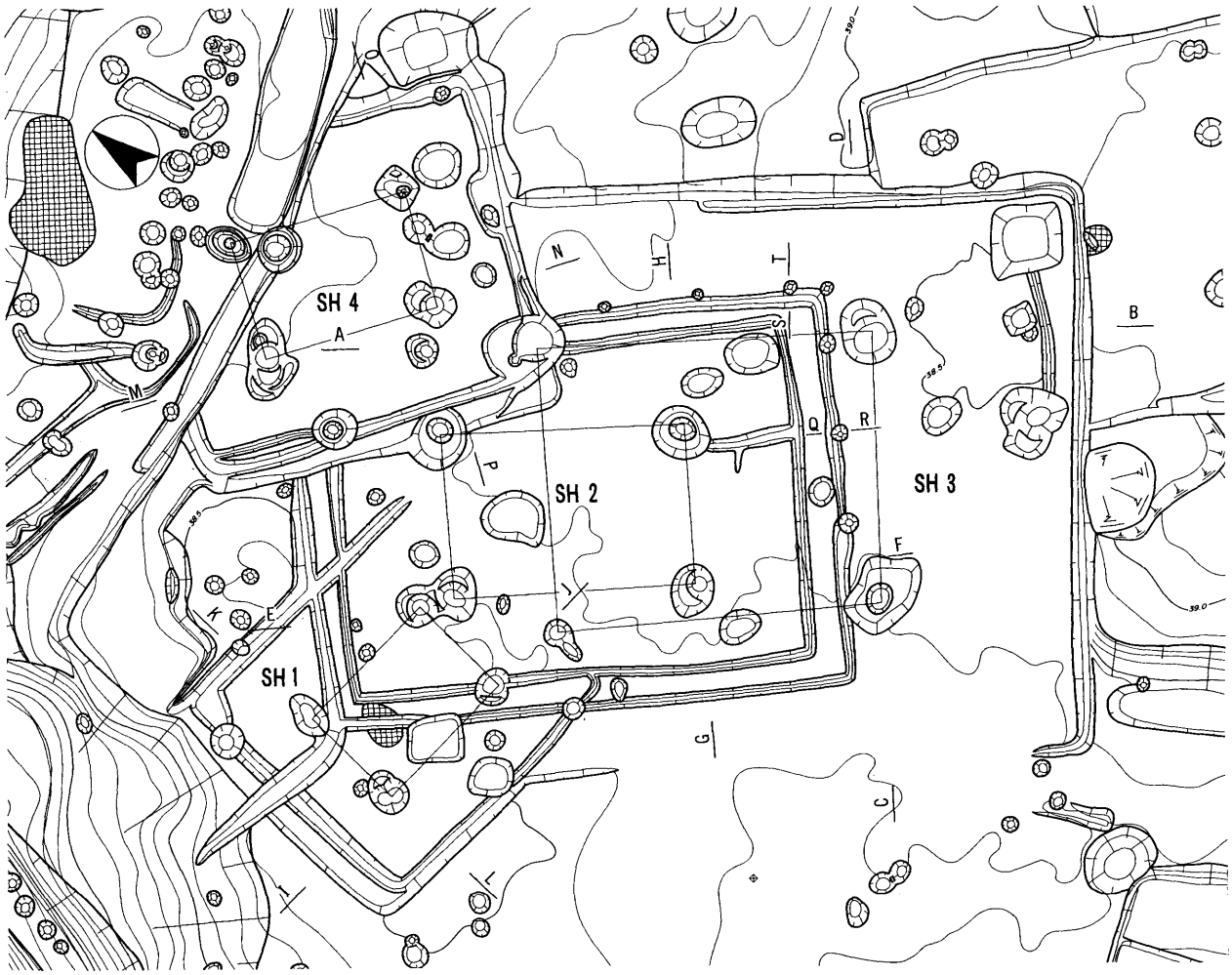
出土遺物　ビニール袋１袋分の量が出土した。壺や甕の体部破片が大半で、実測に耐えるものはなかった。床面付近から多く出土している。

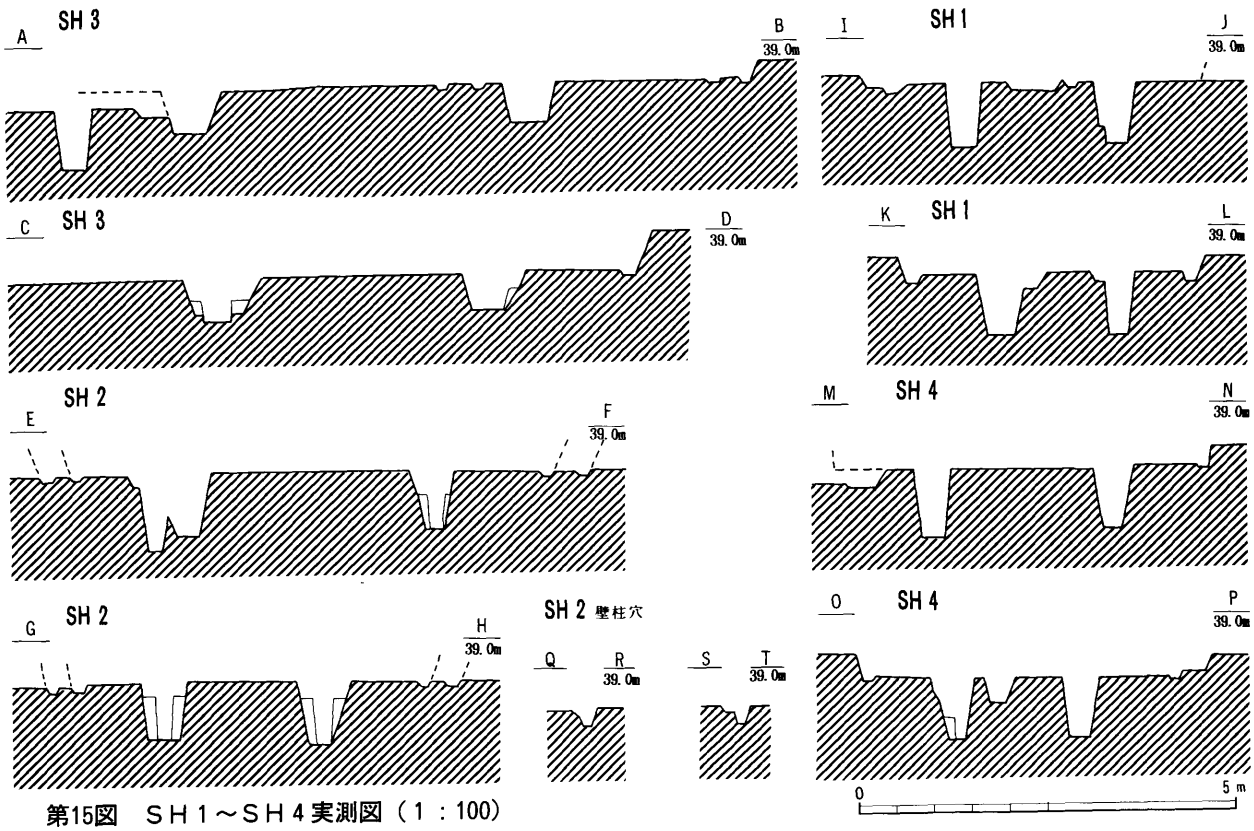
ＳＨ３　ＳＨ１・ＳＨ２を切り、ＳＨ４に切られる形で検出した。南北辺9.6ｍ×東西辺8.0ｍを測る大型の竪穴住居で長方形プランをもつ。４棟の中では最大のもので、今回検出した中でも第２位の規模をもつ。周壁は東壁の一部が残存するのみで、壁高50cmを測る。現状では南辺と東辺の南側半分に幅15～20cm、深さ８～10cmの周溝が巡っている。西側は削平を受けているため、周溝が消滅した可能性があり、当初はコの字型に巡っていたと推定される。主柱穴は４個検出した。一辺60cmの方形に近い掘り形で深さ55cmを測るが、北西隅の柱穴だけがひじょうに小型で浅く、いずれの柱穴にも切り合い関係が認められた。床面には焼土など炉の痕跡らしきものは認められなかったが、南東隅で一辺１ｍ、深さ40cmと一辺70cm、深さ45cmの大小２個の方形土坑を長さ1.5ｍ、深さ8～10cmの浅い溝で結んだ連結土坑を南辺に平行する形で検出した。

出土遺物　コンテナ箱１箱分の土器が出土した。壺Ａ２(6)、壺体部Ａ７－１(7)、甕Ａ５(5)、甕Ａ７(8)、壺底部Ａ１(10)、甕底部Ｂ２(9)、蓋Ａ２(11･12)、高杯脚Ａ(14)、ミニチュア甕の底部(13)などがある。壺(6)は器表が荒れ、文様等の有無は不明である。甕(5)はほぼ完形に復元され、底部は焼成前に穿孔される。(9)は甕底部として分類したが焼成前に穿孔される。この他の遺物は大半が壺と甕の体部破片である。これらの遺物の中で明らかに遺構に伴うと考えられるのは床面から出土した甕(5)･(8)と壺(6)・(7)、ミニチュア甕の底部(13)で、他の遺物は埋没途中に混入した可能性がある。また、土器以外の遺物として石斧(194)･石鏃(195)・管玉(233･234)が出土している。

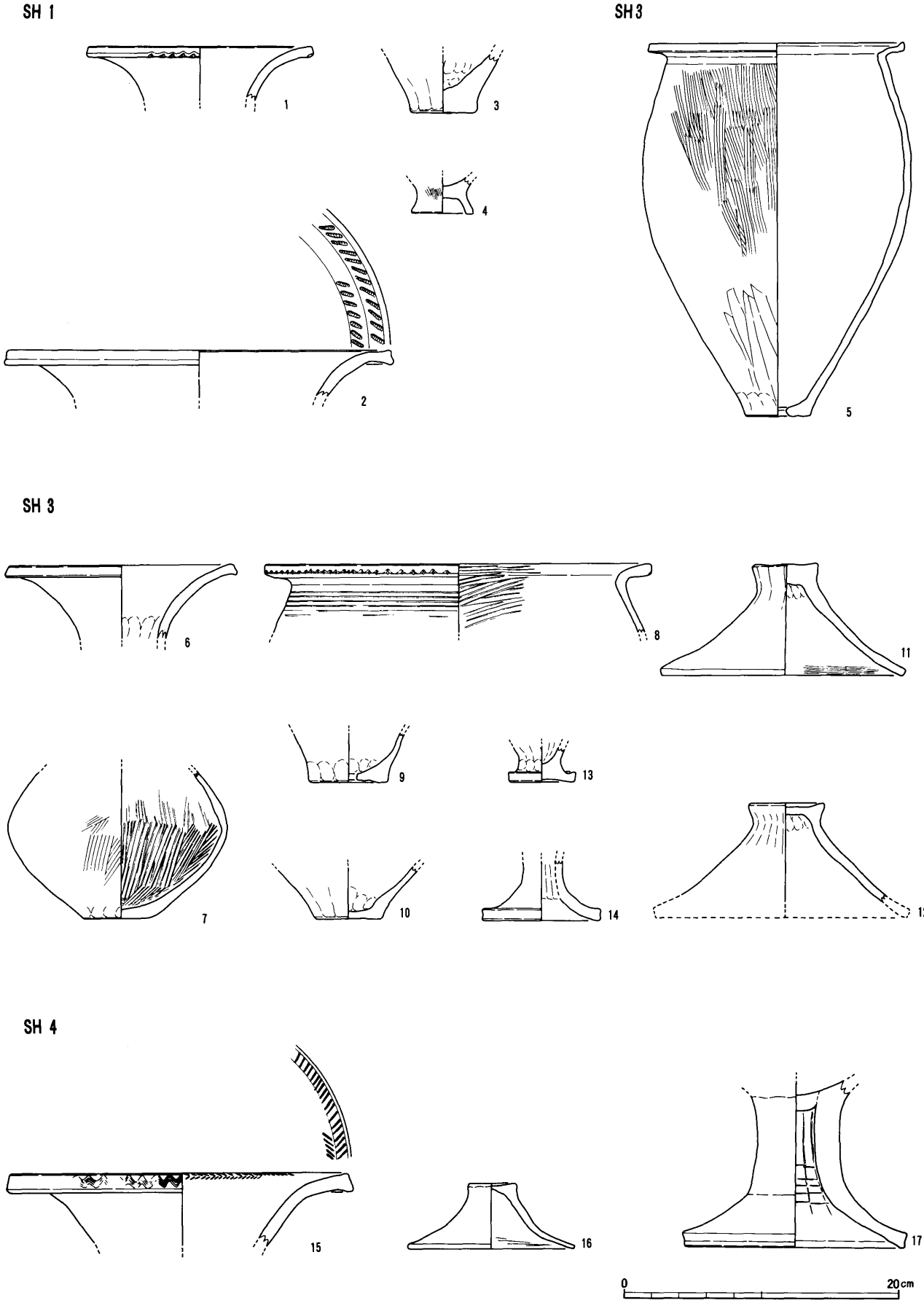
ＳＨ４　ＳＨ２・ＳＨ３を切る形で検出した。４棟の中では最も新しく、北側のＡ－１テラスが機能を失い、廃棄埋没後に造られた竪穴住居である。南北辺5.2ｍ×東西辺4.5ｍの長方形プランをもつ。周壁はよく残存し、南辺部で壁高52cmを測る。周溝は全周し、幅15cm、深さ５～８cmを測る。西辺では周壁と周溝の間にわずかに幅があり、拡張が行われたことを示している。主柱穴は４個検出した。いずれも径50cm、深さ80～90cmを測り、北側の２個は切り合い関係をもつ。床面中央やや北よりに炭・灰が充満した径60cm、深さ31cmの土坑が検出された。壁面に焼け締まった様子は認められないが、炉の施設と考えられる。

出土遺物　コンテナ箱半分の量の土器が出土した。壺Ａ２(15)、蓋Ａ１(16)、高杯脚Ａ(17)などがある。この他にも壺・甕の体部破片が出土しているが、いずれも埋没途中に混入した可能性があり、明らかに遺構に伴う遺物は見られなかった。また、土器以外の特筆すべき遺物としてガラス製品(235)が出土している。





第15図　ＳＨ１～ＳＨ４実測図（１：100）



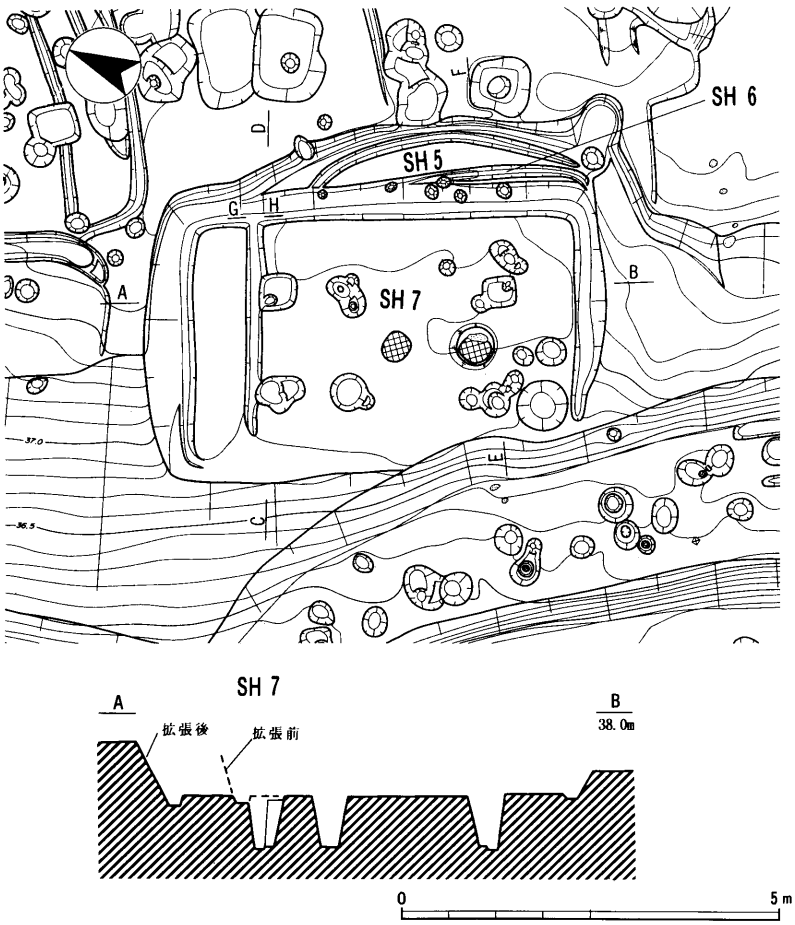
第16図　ＳＨ１・ＳＨ３・ＳＨ４出土遺物実測図（１：４）

ＳＨ５　Ａ地区の南側縁辺部で検出した。ほぼ同一地点で切り合いを重ねる一群（ＳＨ５～ＳＨ７）の中で最も古い竪穴住居である。このグループは円形→方形→長方形というプランの変遷が窺える。ＳＨ５はＳＨ６・ＳＨ７に切られて東側の周壁と床面が僅かに残存するのみである。検出した周溝の形状から円形プランと考えられ、直径5.5ｍ前後に復元できる。壁高はよく残存し、30cmを測る。現存部分には幅15cm、深さ６cmの周溝が弧状に巡り、主柱穴や炉などは不明である。

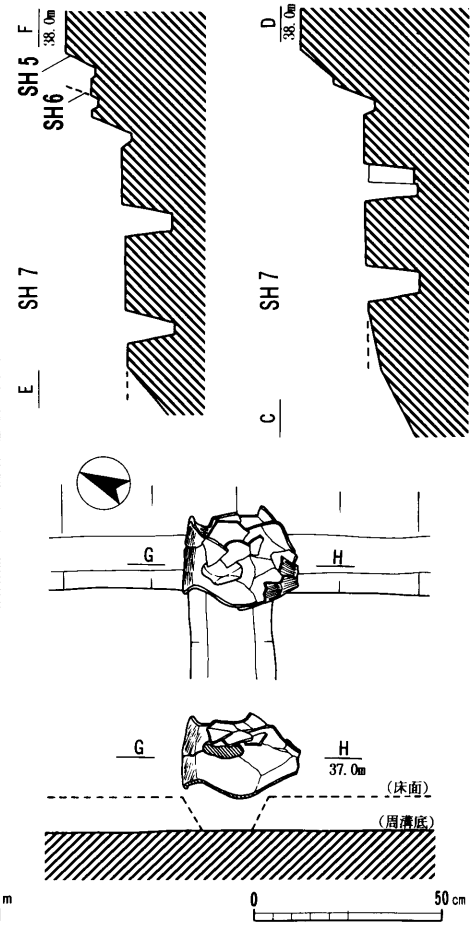
出土遺物　ビニール袋１袋分の量が出土した。壺の体部破片が多く、実測に耐えるものはなかった。

ＳＨ６　ＳＨ５を切り、ＳＨ７に大半を切られる形で検出した方形プランの住居と推定される。現状では、東辺に幅16cm、深さ６cmの周溝が僅かに残存する程度である。周溝底の標高と壁高はＳＨ５とほぼ同じであり、柱穴や炉などは不明である。遺物は出土しなかった。

ＳＨ７　ＳＨ５・ＳＨ６を切る形で検出した。ＳＨ６の床面を45cm掘り下げて造られている。ＳＨ７は周溝の形状から、長辺を北側に拡張した痕跡が認められる。拡張前の規模は南北辺4.8cm×東西辺3.8cm、拡張後は南北辺6.1cmを測り、いずれも長方形プランを示す。周壁は流失した西側以外はよく残存し、東辺で壁高85cmを測り、壁に半分食い込む形で径15cmの壁柱穴を６個検出した。周溝は西辺以外は拡張前後とも全周し幅20～25cm、深さ10～15cmを測る。主柱穴は全部で６個検出した。北側の柱穴は拡張に伴って心々距離で北へ１ｍ移動している。拡張前の柱穴は径40～50cm、深さ60cmの平面円形を呈するが、拡張後は一辺40～50cm、深さ60cmの平面方形を呈する。床面には40cm×40cmの範囲で赤色に焼けた部分が認められた。炉の痕跡と考えられ、拡張前は床面中央やや北寄りにあった炉が、拡張後には床面中央南寄りに位置を変えている。また拡張後の炉の東端には、長さ30cmほどの細長い石が竪穴住居の長辺と平行して据えられている。拡張後の炉は拡張前の床面より10cm高い面で検出されたことから、拡張に伴



第17図　ＳＨ５～ＳＨ７実測図（１：100）



第18図　ＳＨ７遺物出土状況図（１：20）

い貼り床を行っていることが判明した。

出土遺物　コンテナ箱半分ほどの量が出土した。壺Ａ５(18)、Ｂ２－ａ(19)、甕Ｂ２－１(20•21)、壺底部Ｂ３(22)、甕底部Ｂ２(23)などがある。(21)は底部を欠くがほぼ完形の甕である。この他にも壺体部・受口状甕の口縁破片などが多く出土している。これらの遺物の中で(21)は周溝上、(20)•(22)は床面からの出土である。また、他の遺物もほとんどが床面付近からの出土であり、これらのほとんどは遺構に伴う遺物と考えられる。また、土器以外の遺物として石斧類(197～199)・石鏃(196)が出土している。

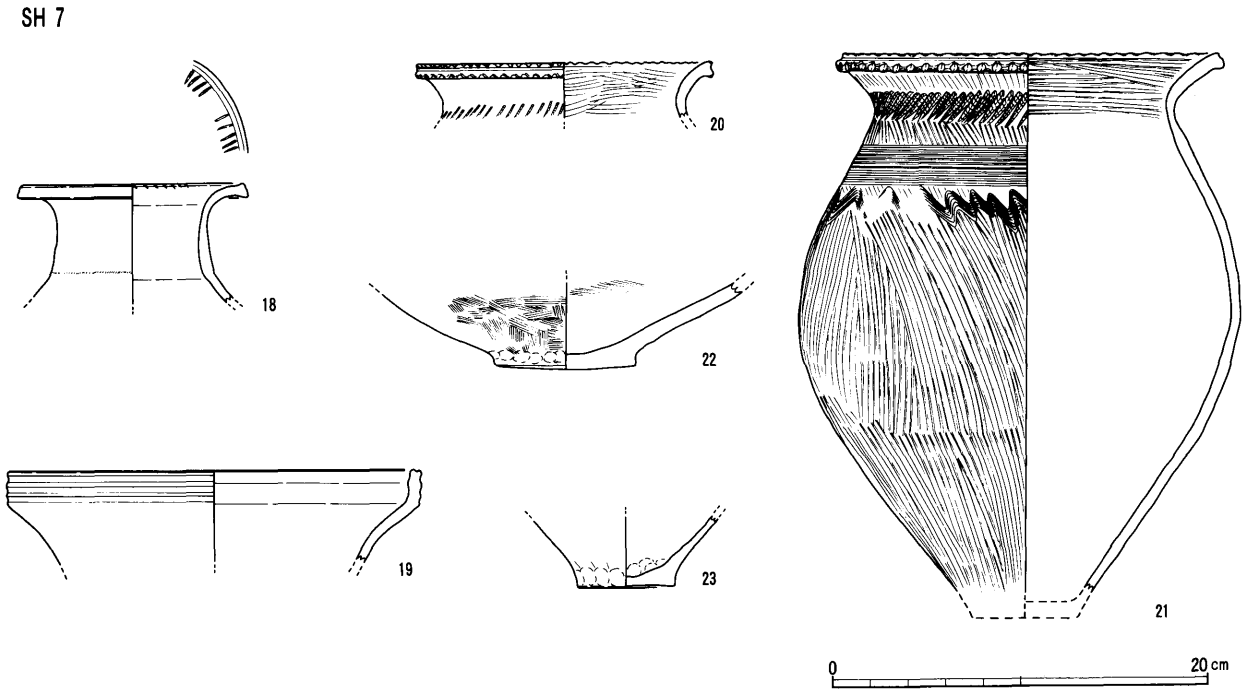
ＳＨ８　Ａ地区の西側縁辺部で東辺を揃え、直線的に切り合う一群（ＳＨ８～ＳＨ10）の中で最も北側に位置する。ＳＨ10に切られる形で検出した。南側が切られ、西側は流失しているため全体の規模は不明であるが、東西辺８ｍ以上×南北辺2.8ｍ以上の長方形プランと推定される。周壁は東辺がよく残存し、壁高70cmを測る。現状では北辺と東辺に、幅20～30cm、深さ10～20cmの周溝がＬ字状に巡る。床面にはいくつかのピットが検出されたが、いずれも浅く規則的な配置は認められない。床面の北寄りには60cm×40cmの範囲で赤く焼けた部分が認められ、炉の痕跡と考えられる。断面観察により厚さ約10cmの貼り床が認められた。ＳＨ８は縁辺部に位置しながら長辺が８ｍ以上と非常に長く、南側にはＳＢ58（掘立柱建物）が存在することから、当初は掘立柱建物を建てるためのテラスとして造られた可能性もある。

出土遺物　壺と甕の体部細片がビニール袋１袋分程度出土したが、実測に耐えるものはなかった。

ＳＨ９　ＳＨ10・ＳＨ15と溝に切られる形で検出した。全体の規模は不明である。周壁は南辺に僅かに残存するのみで、壁高は５cm程度である。柱穴の配置から、やや平行四辺形のプランが窺われる。主柱穴は４個検出し、いずれも径30cm、深さ30cmを測る。周溝は認められず、炉なども不明である。

出土遺物　ビニール袋に半分程度の土器片が出土した。実測に耐えうるものはなかったが、壺頸部や太い凹線が５条以上巡る受口状口縁の破片などが見られる。

ＳＨ10　ＳＨ８・ＳＨ９を切る状態で検出した。西側が流失しており、全体の規模は不明だが、南北辺4.2ｍ×東西辺2.8ｍ以上の長方形プランと推定される。周壁は東辺がよく残り、壁高50cmを測る。周溝は幅15～30cm、深さ10～30cmを測り、東辺と南辺に逆Ｌ字状に巡る。主柱穴は３個検出した。いずれも径30cm、深さ20～40cmを測る。当初は４本柱と推定されるが北西の柱穴は確認できなかった。床面中



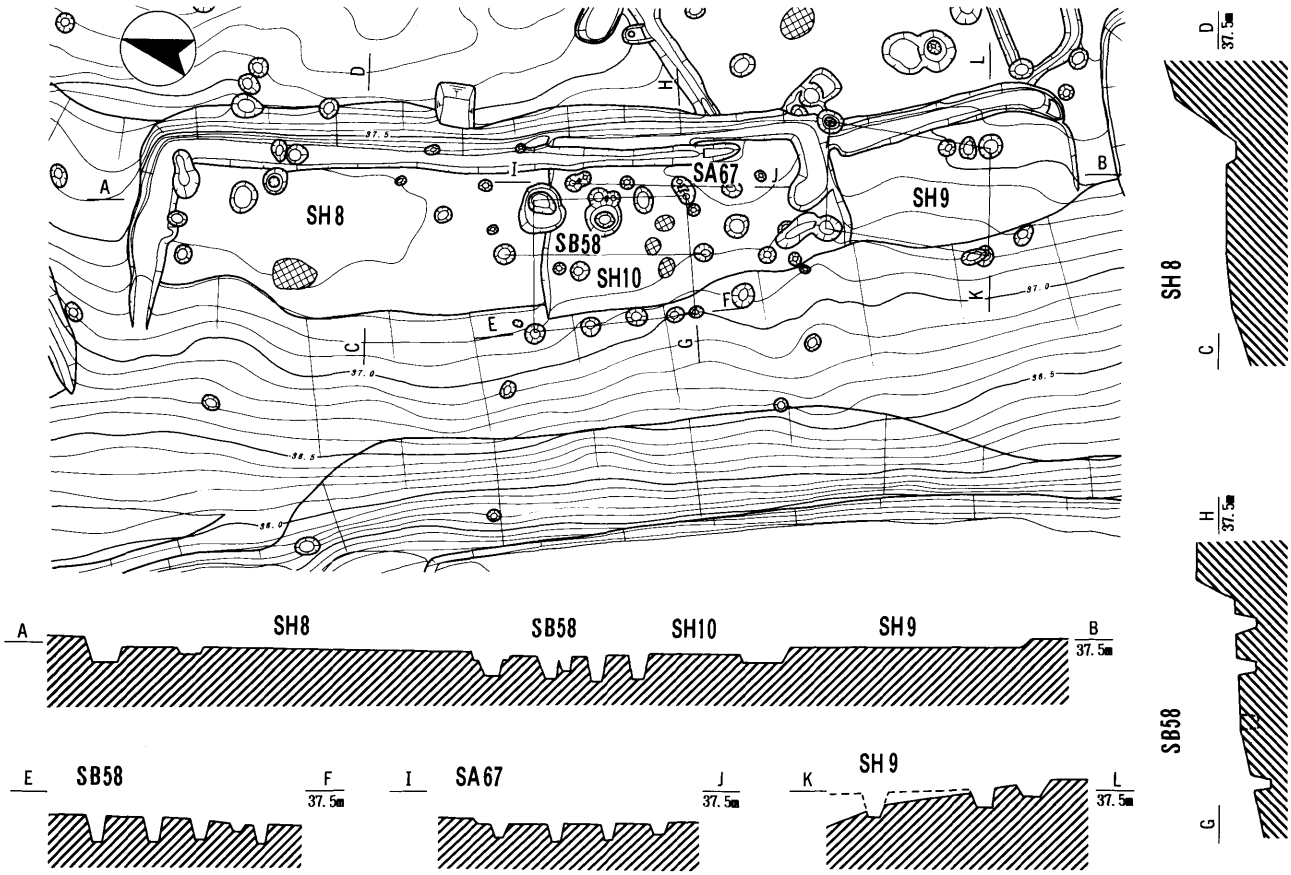
第19図　ＳＨ７出土遺物実測図（１：４）

央付近には径30cmの範囲で赤く焼けた部分が３カ所認められ、炉の場所が移動したことを示している。

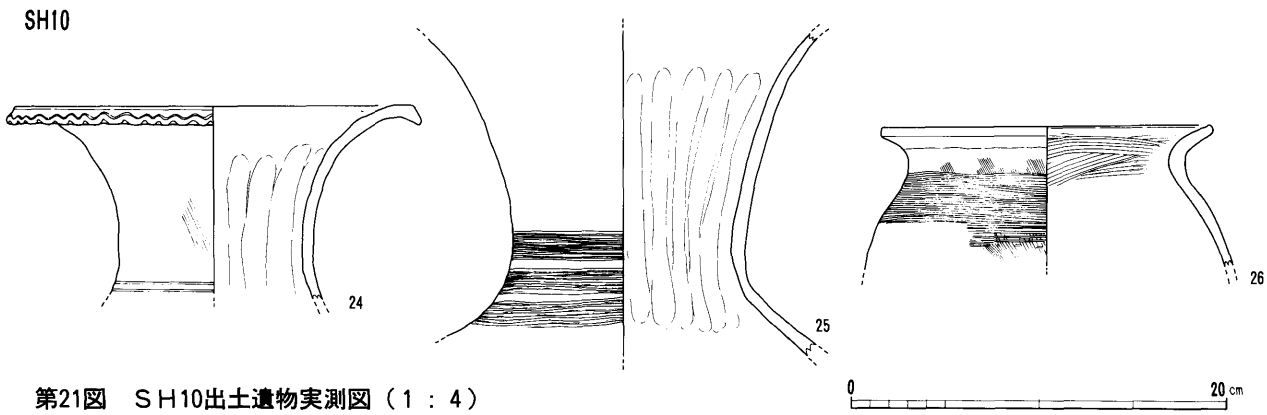
出土遺物　コンテナ箱半分の量が出土した。壺Ａ４(24)、壺Ａ６(25)、甕Ｂ１－１(26)があり、いずれも床面から出土した遺物である。(25)は口縁部を欠くが大型の広口壺である。この他にも実測はできなかったが、受口状の口縁部や、波状文をもつ壺体部の破片などが見られる。

ＳＢ58　Ａ地区の西側縁辺部に位置する。桁行き３間(0.7ｍ等間)×梁行き１間（2.1ｍ×1.8ｍ）の南北棟の建物である。妻側中央には、外側にわずかにずれる柱穴が見られ、近接棟持柱建物に近い形態をもつ。柱穴は棟持ち柱も含めて径25cm、深さ35cmを測る。ＳＨ８・ＳＨ10に切られる形で検出したが、当初この場所にはＳＢ58を建てるためのテラスが存在した可能性が高い。

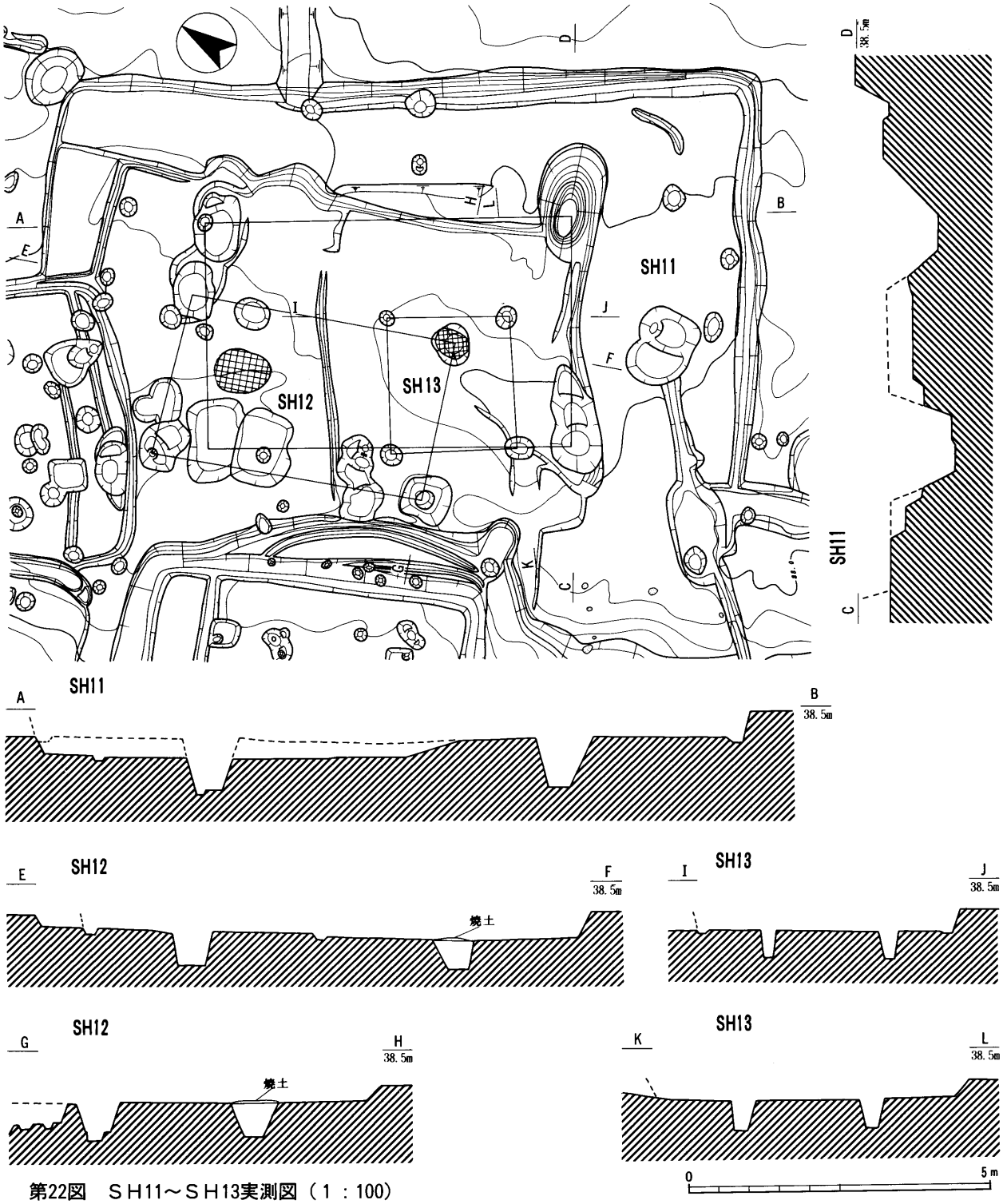
ＳＡ67　ＳＨ10の東壁にほぼ平行し、ＳＢ58に切られる形で検出した。南北３間（2.1ｍ）の柱列で、柱間は0.7ｍの等間である。柱穴は径20cm、深さ25cmを測る。



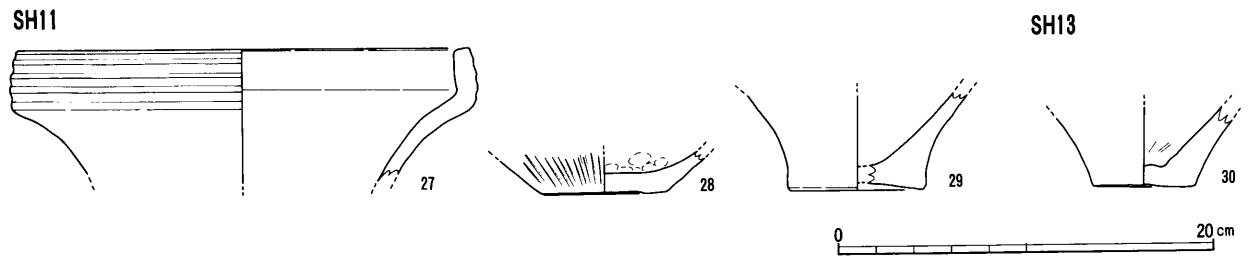
第20図　ＳＨ８～ＳＨ10・ＳＢ58・ＳＡ67実測図（１：100）



第21図　ＳＨ10出土遺物実測図（１：４）



第22図　ＳＨ11～ＳＨ13実測図（１：100）



第23図　ＳＨ11・ＳＨ13出土遺物実測図（１：４）

ＳＨ11　Ａ地区の南側に位置する。ほぼ同一地点で切り合いを重ねる一群（ＳＨ11～ＳＨ13）の中で、最初に造られた大型の竪穴住居である。南北辺12ｍ×東西辺8.4ｍを測り、長方形プランをもつ。今回検出した中では最大規模のものである。周壁は西側以外はよく残り、東辺で壁高45cmを測る。現状では幅20～30cm、深さ10～12cmの周溝が、南辺と東辺にＬ字状に巡っている。主柱穴は４個検出した。柱掘り形は楕円形を呈し、長径2.2ｍ×短径1.1ｍ、深さ0.9ｍを測る大型のものである。北西隅の柱穴は切り合い関係より、わずかに北側へ柱位置の修正を行った痕跡が認められる。床面中央がＳＨ12・ＳＨ13によって深く削られ、炉などは不明である。

出土遺物　ビニール袋１袋分の量が出土した。壺Ｂ２－ａ(27)、壺底部Ａ１(28)、甕底部Ｂ２(29)などがあり、いずれも北西主柱穴からの出土である。この他に、壺と甕の体部破片が床面から出土している。

ＳＨ12　ＳＨ11を切りＳＨ13に切られる形で検出した。南北辺8.1ｍ×東西辺6.7ｍを測り長方形プランをもつ中型の竪穴住居である。周壁は、東辺で検出面から壁高80cmを測る。現状では、幅20cm、深さ10cmの周溝が北東隅と南辺の一部に認められるだけである。主柱穴は４個検出した。いずれも径60～80cm、深さ60cmを測る。床面中央やや北寄りには、80cm×60cmの範囲で赤く焼けた部分が認められ、炉の痕跡と考えられる。

出土遺物　壺か甕の体部破片が数片出土したのみで、実測に耐えうるものはなかった。この他に、土器以外の遺物として石鏃(200)が出土している。

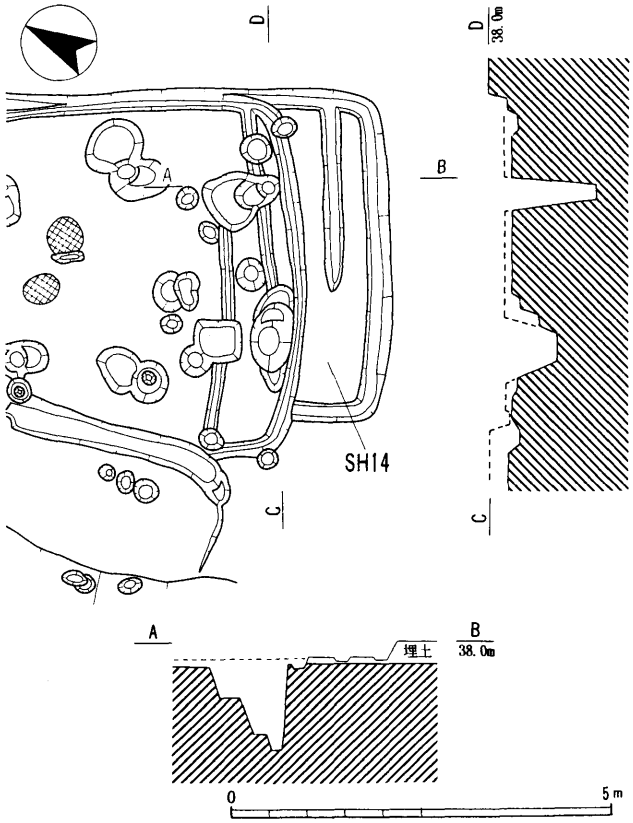
ＳＨ13　ＳＨ11・ＳＨ12を切る状態で検出した。東西辺5.2ｍ×南北辺4.3ｍの長方形プランをもつ。周壁は検出面から壁高80cmを測り、床面の標高はＳＨ12とほぼ同じである。周溝は幅20cm、深さ６cmを測り、北辺と南西隅に僅かに残存する。主柱穴は４個検出し、径20～45cm、深さ50cmを測る。床面中央東寄りには径60cmの範囲で赤く焼けた部分が認められ、炉の痕跡と考えられる。

出土遺物　ビニール袋１袋分の量が出土した。床面に伴う遺物に甕底部Ａ１(30)がある。他には、壺の体部破片が多い。土器以外の遺物では、特筆すべき遺物としてヒスイの勾玉(236)が出土している。

ＳＨ14　Ａ地区中央部で検出した。ほぼ同一地点で切り合いを重ねる一群（ＳＨ14～ＳＨ16）の中で最も古い竪穴住居である。ＳＨ12の埋土上面から切り込んだ部分だけが残存し、床面は地山まで達していない。壁高は20cmを測る。規模は、東西辺4.4ｍ×南北辺1.5ｍ以上の方形プランと推定される。現状では幅20cm、深さ５cmの周溝が現存部を全周し、南辺では拡張の痕跡が認められる。主柱穴は南側の２個を検出したが、北側はＳＨ15•16の柱穴と重複の可能性があり、２本柱か４本柱かは断定し難い。南側の柱穴はいずれも径50～80cm、深さ0.7～1.1ｍを測る。床面が削られ、炉等は不明である。

出土遺物　土器は出土しなかったが、磨石が２点(201•202)床面から出土した。

ＳＨ15　ＳＨ14を切る形で検出した。ＳＨ14の東辺を踏襲している。規模は東西辺5.1ｍ×南北辺4.3ｍの長方形プランをもつ。周壁は北辺と東辺でよく残存し、検出面より壁高35cmを測る。周溝は幅15～20cm、深さ８～10cmを測り、南東隅に検出できなかった部分もあるがほぼ全周する。主柱穴は４個検出した。いずれも径50cm、深さ50～80cmを測る。床面中央やや東寄りには径50cmの範囲で赤く焼けた部分が



第24図　ＳＨ14実測図（１：100）

認められ、炉の痕跡と考えられる。焼けた部分の西端には、長さ40cmの細長い石を据えた痕跡が認められた。遺物は出土しなかった。

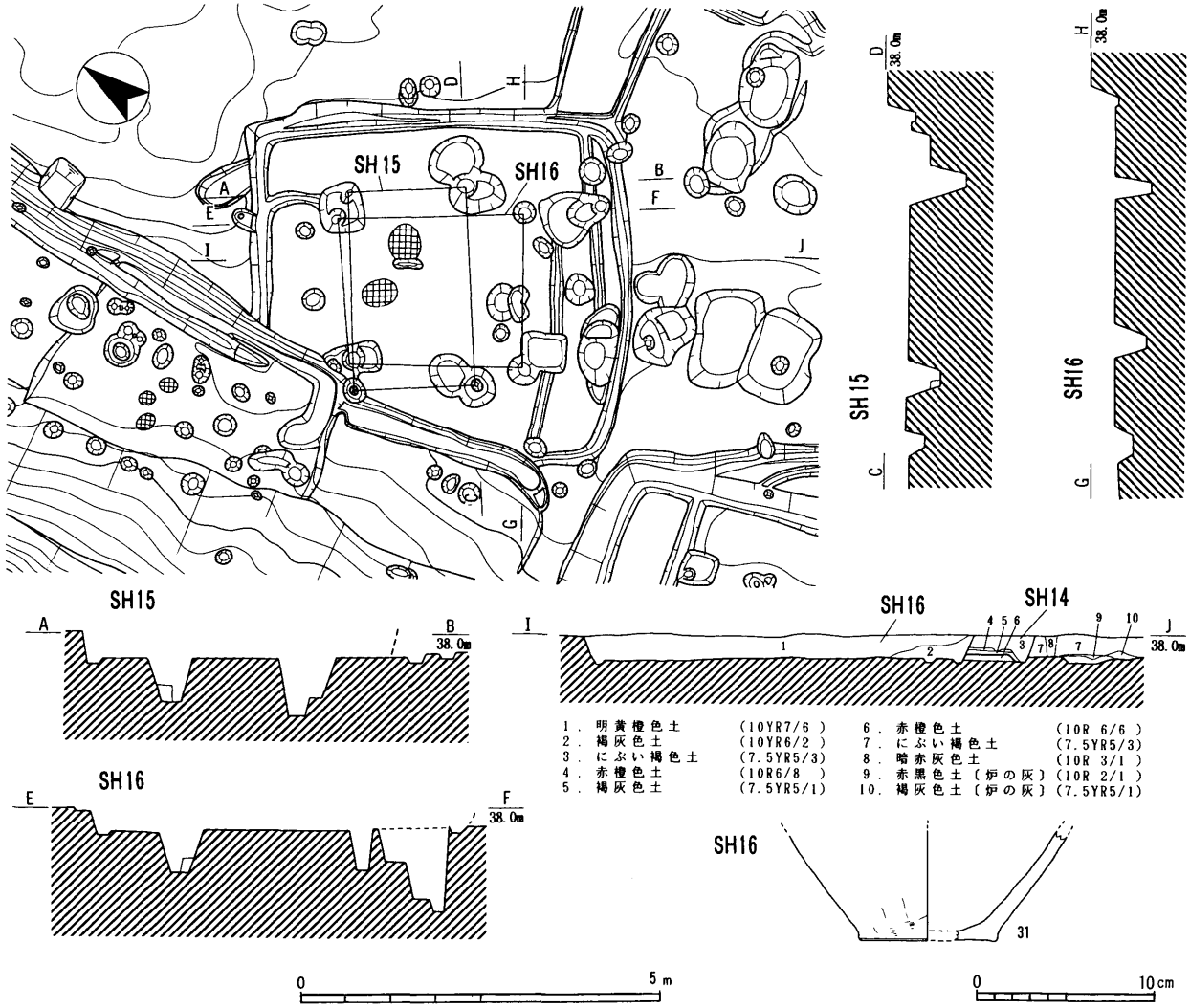
ＳＨ16　ＳＨ15の南北辺（短辺）を南に１ｍ拡張したもので、規模は南北辺5.3ｍ×東西辺5.1ｍの隅丸正方形に近いプランとなっている。床面の標高はＳＨ15とほぼ同じである。この拡張は、すべての主柱穴の移動を伴い、長辺が東西辺から南北辺に変化している。周溝の規模はＳＨ15と同じで全周するが、南辺部に拡張が認められる。主柱穴は４個検出した。いずれも径40cm、深さ50cmを測る。床面中央北寄りには50cm×40cmの範囲で赤く焼けた部分が認められた。炉の痕跡と考えられるが、石を据えた痕跡は検出されなかった。

出土遺物　ビニール袋２袋分の量が出土した。甕底部Ｂ１(31)の他、壺の体部破片がある。遺物の大半は埋土掘削途中に出土したもので、明らかに遺構に伴うものはない。

Ａ－１テラス　Ａ地区の北端部に位置する。縁辺部を直線的に長さ７ｍ、深さ約40cm切り込んで造られたテラスである。北側が流失するが、最大幅3.2ｍを測る。テラス上では、近接する場所で切り合う柱列４条（ＳＡ68～ＳＡ71）・溝・土坑などが検出された。ＳＡ68は直角方向にも柱穴が存在することから掘立柱建物の可能性もある。また、２ｍ×1.1ｍの範囲で赤く焼けた部分が認められた。焼土の西側には、周溝や排水溝状の遺構が認められることから竪穴住居が存在したことも推測される。

ＳＡ68　テラス壁面に対して、やや斜め方向をとる東西４間（4.4ｍ）の柱列で、柱間は1.1ｍの等間である。柱穴は径30cm、深さ60cmを測る。

ＳＡ69　東西３間（4.6ｍ）の柱列で、柱間は両



第25図　ＳＨ15・ＳＨ16実測図（１：100）

第26図　ＳＨ16出土遺物実測図（１：４）

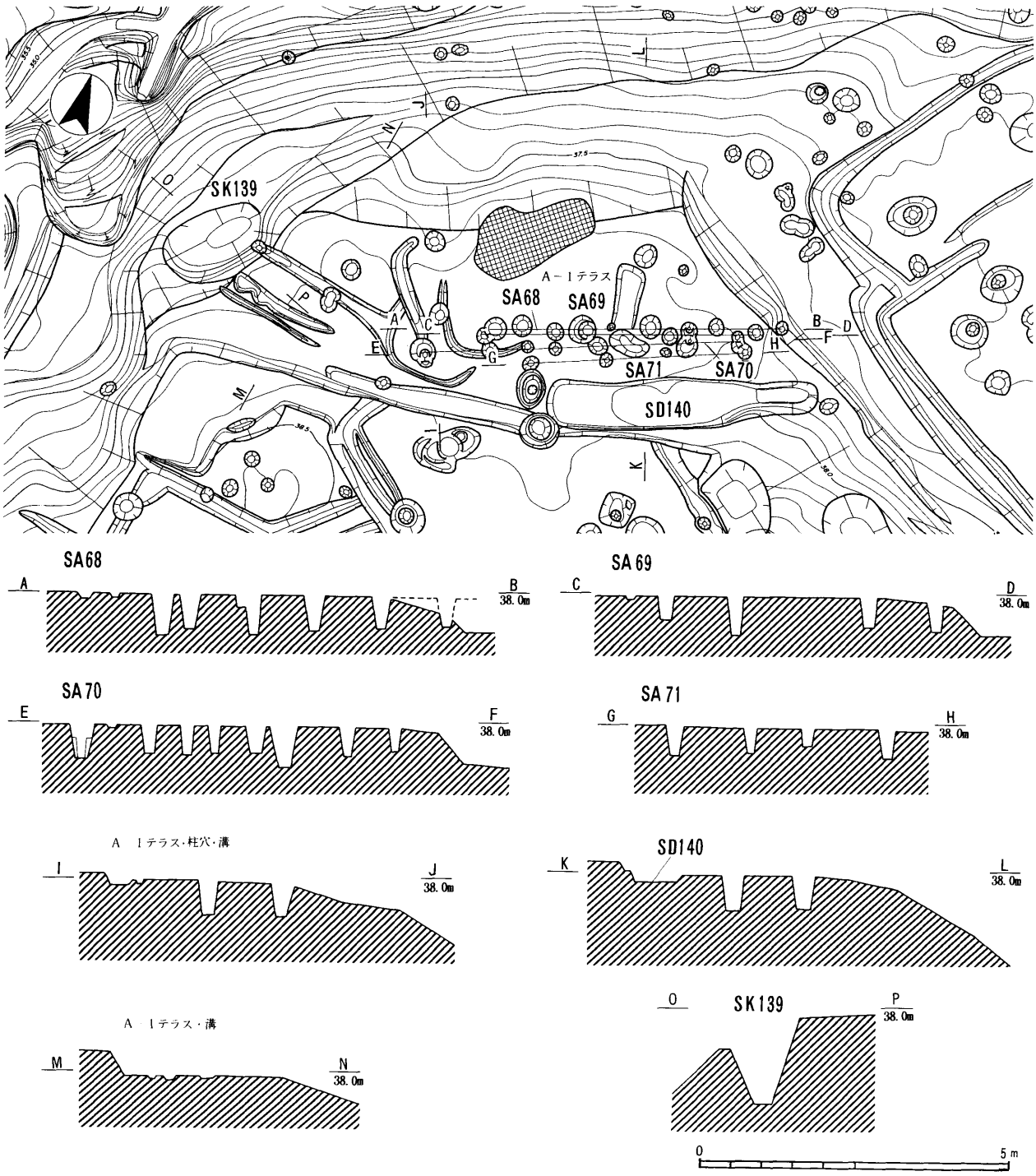
端が1.2m、中央部は広く2.2mである。柱穴は径30cm、深さ40～60cmを測る。

ＳＡ70　ＳＡ68に対して僅かに斜め方向をとる東西５間（5.5m）の柱列で、柱間はほぼ1.1mの等間である。柱穴は径25cm、深さ50cmを測る。

ＳＡ71　ＳＡ70とほぼ平行する東西３間（3.7m）の柱列で、柱間は両端が1.3m、中央部は狭く１mである。柱穴は径20cm、深さ50cmを測る。

ＳＫ139　Ａ－１テラスの西側縁辺部で検出した楕円形の土坑で、長径1.7m×短径1.1m、深さ1.3mを測る。遺物は弥生土器片が数片出土したのみで、土坑の性格を究明するには至らなかった。また、東側から排水溝状の溝が取り付き、関連性が窺える。

ＳＤ140　Ａ－１テラスの壁際で検出した。現存部で長さ4.5m、幅0.8m、深さ0.2mを測り、柱列にほぼ平行することから関連が考えられる。



第27図　ＳＡ68～ＳＡ71・ＳＫ139・ＳＤ140実測図（１：100）

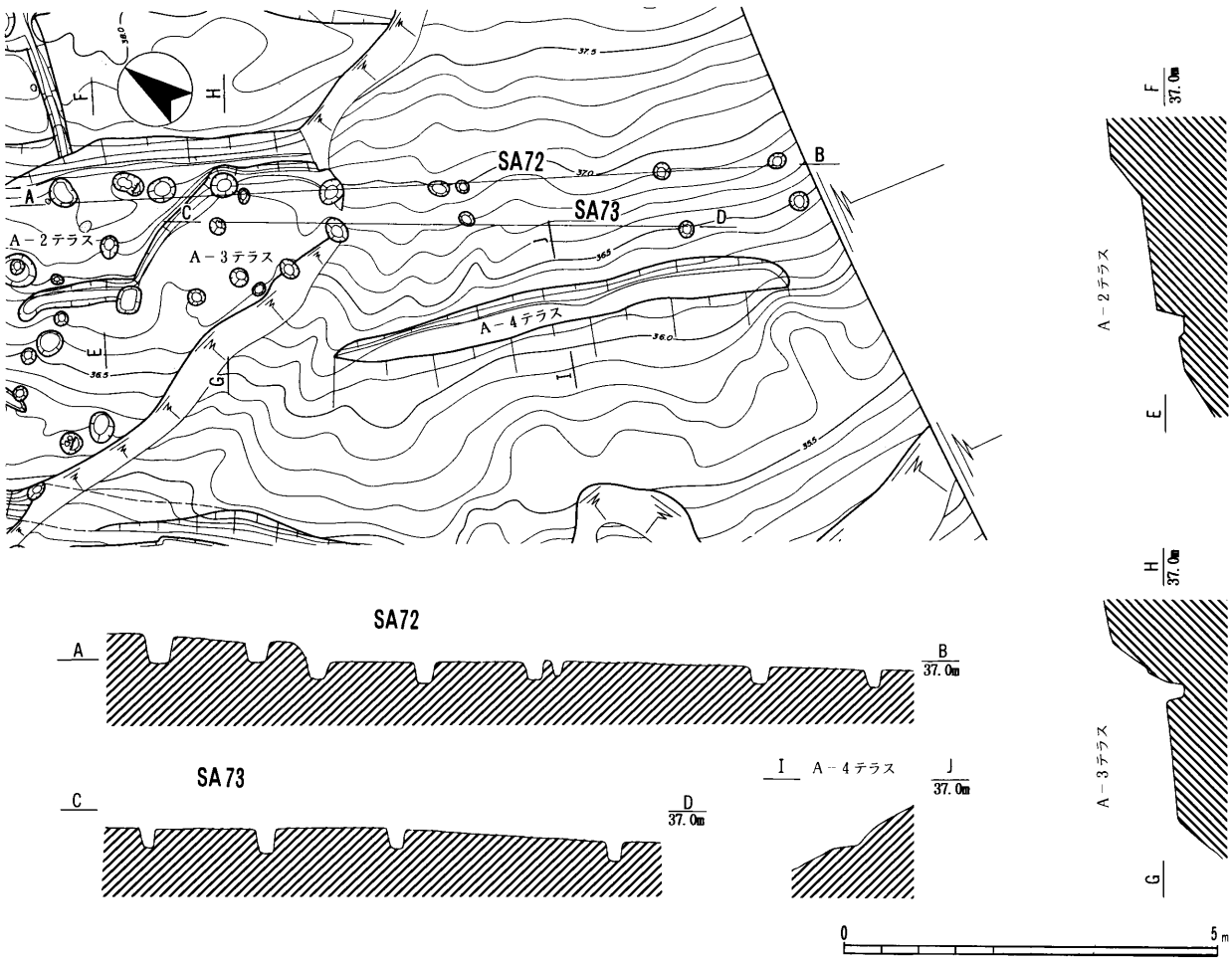
Ａ－２テラス　Ａ地区の南端部に位置する。斜面を直線的に長さ４ｍ以上、深さ約50cm切り込んで造られたテラスで、南側をＡ－３テラスに切られ、長さ３ｍ程度しか残存していない。テラスの壁際には1.3ｍ間隔で並ぶ、深さ40cmの柱穴が２個と他にもいくつかのピットが存在し、当初は１条以上の柱列が存在したことが推測される。また、テラスの西側縁辺部では幅30cm、テラス面からの深さ30cmを測る溝が検出された。

Ａ－３テラス　Ａ－２テラスを切る形で検出し、Ａ－２テラスを約30cm切り込んで造られているが、東側が撹乱のため長さ2.5ｍ程度しか残存していない。テラスの壁際で２条の柱列（ＳＡ72・ＳＡ73）を検出した。

ＳＡ72　等高線に平行する柱列で、南北４間（7.5ｍ）分を検出した。南側が調査区外のため全体の規模は不明である。柱間は北から３間目だけが広く３ｍを測り、その他は1.5ｍの等間である。

ＳＡ73　ＳＡ72にほぼ平行する柱列で、南北３間（6.2ｍ）分を検出した。南側が調査区外のため全体の規模は不明である。柱間は３間目が広く３ｍを測るが、その他は1.6ｍの等間である。

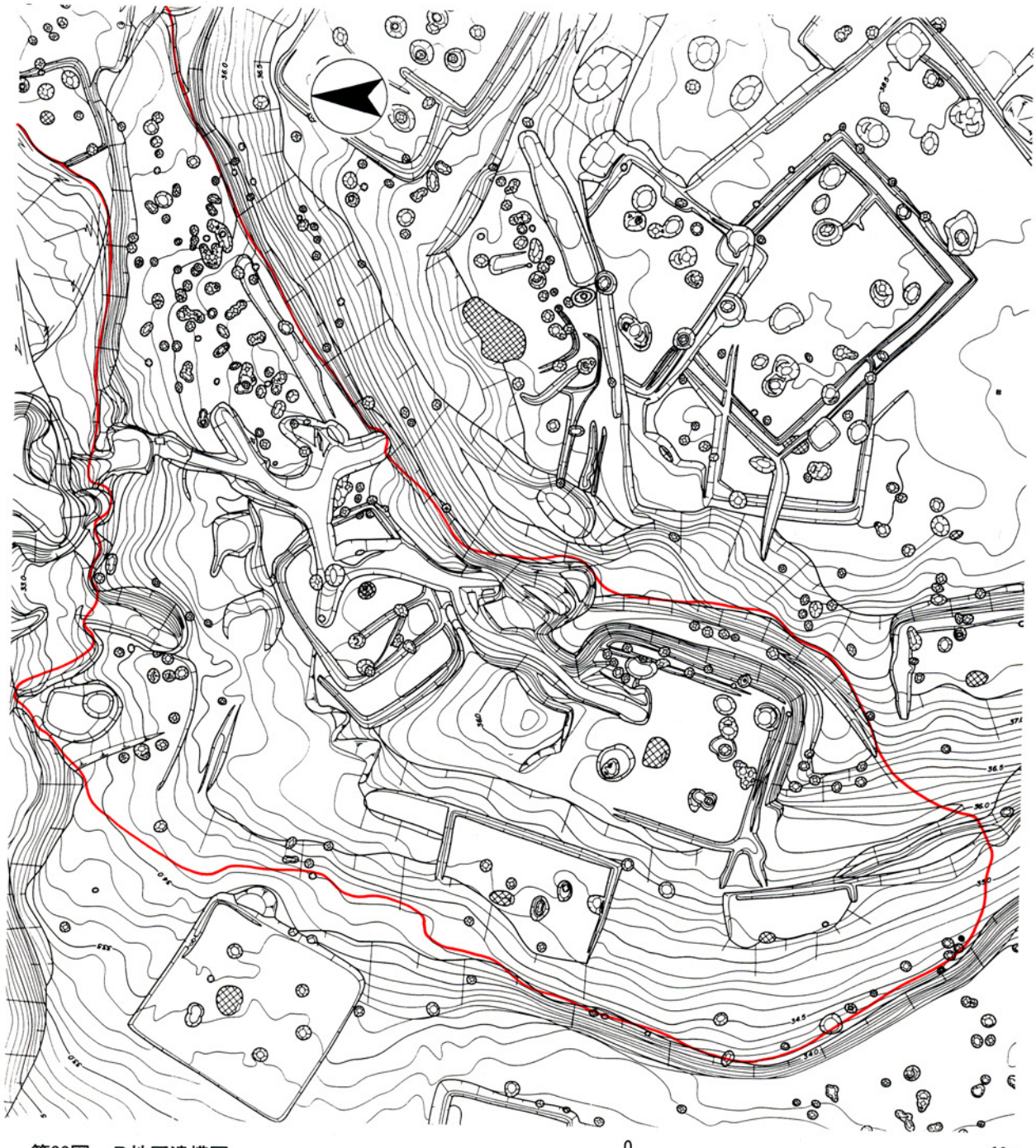
Ａ－４テラス　ＳＡ73の下に位置する。急な斜面を等高線に平行して長さ6.1ｍ、深さ約20cm切り込んで造られたテラスで、幅0.4ｍを測る。柱穴や溝などは検出されなかった。



第28図　ＳＡ72・ＳＡ73・Ａ－２～Ａ－４テラス実測図（１：100）

B地区

B地区の概要　A地区から北西部へ一段下がった標高34～35mに位置する。壁際には急斜面を切り込んで造られた竪穴住居やテラスが並び、その前面には比較的緩斜面が広がる。今回の調査で竪穴住居7棟・掘立柱建物3棟・柱列3条・溝などを検出した。竪穴住居は基本的に上下2段に3棟ずつ配列され、小型の住居だけで構成される。また、SH21・SH22以外は切り合い関係を持たず、単独で存在する。北東部にはテラスがあり、壁面に平行して掘立柱建物3棟・柱列3条・溝などを検出した。

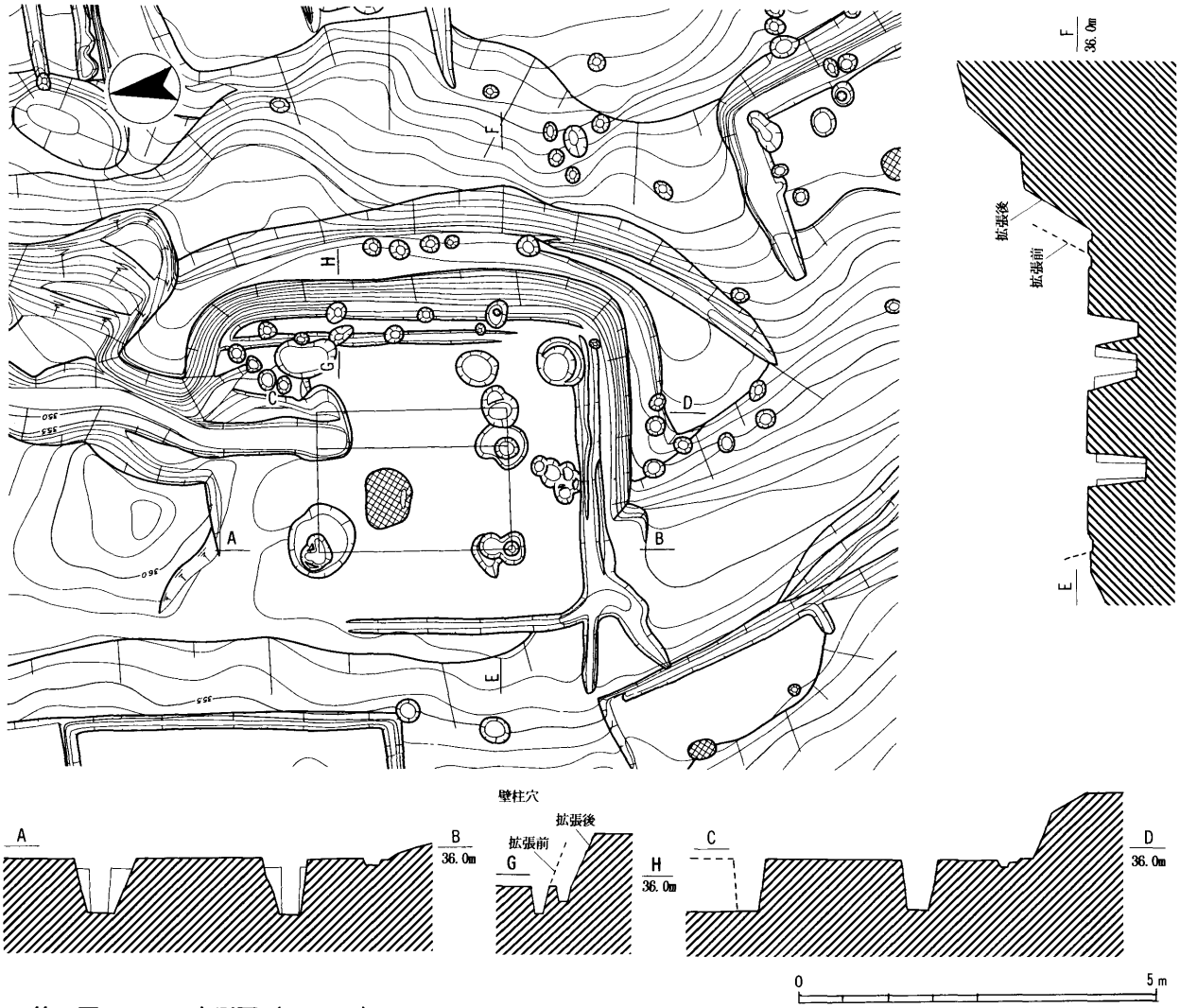


第29図　B地区遺構図

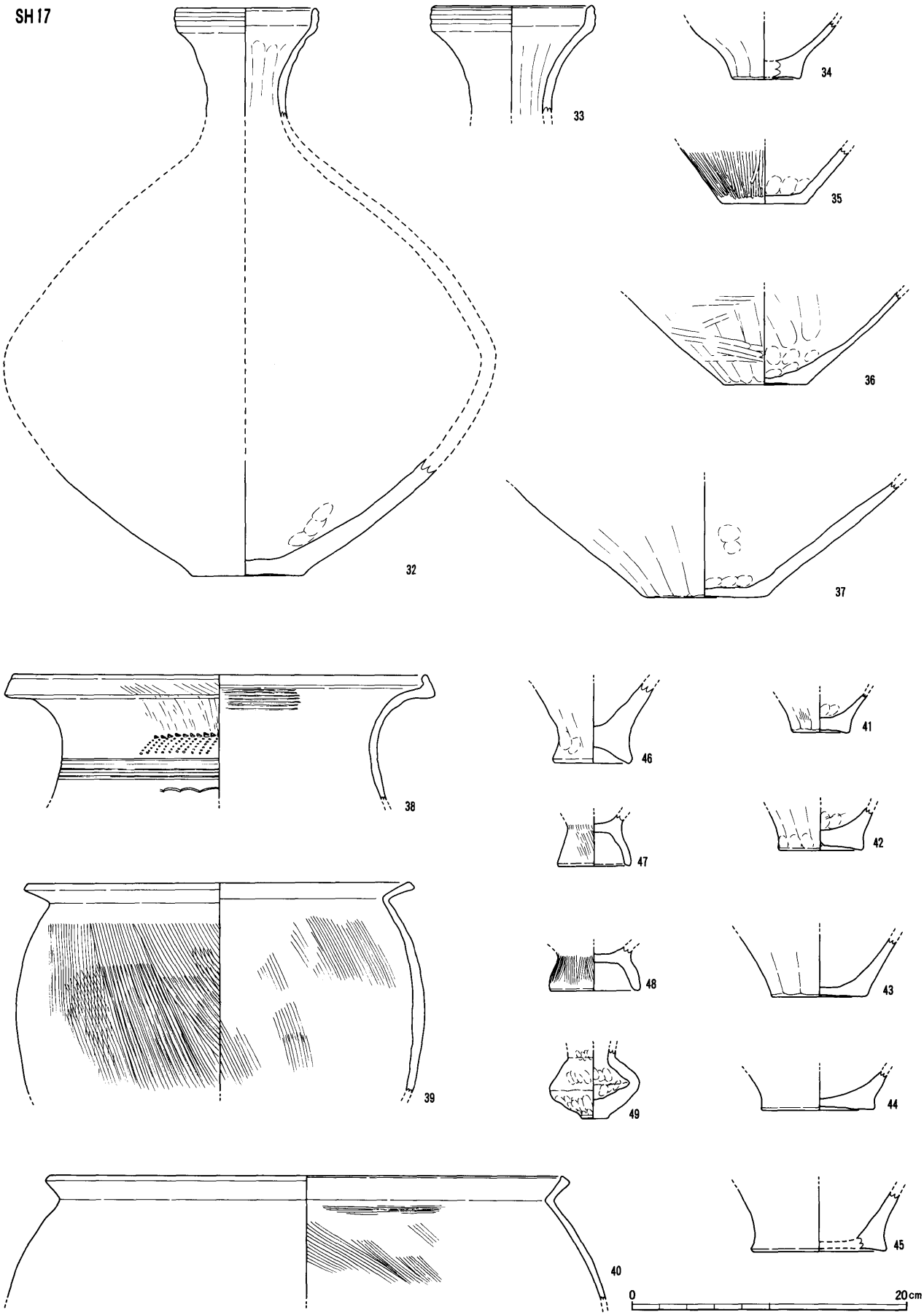
0　10m

ＳＨ17　Ｂ地区の南東部に位置し、単独で存在する。丘陵の急斜面を深く切り込んで造られ、南北辺6.3ｍ×東西辺5.5ｍの長方形プランをもつ。周壁は流失した西側と自然流路により削られた北側の一部以外よく残存する。特に東側の壁高は、床面から切り込み面までの比高差が1.7ｍにも及び、床面より高さ１ｍの所に幅50cmのテラス状の部分を設けている。テラスには南側半分に幅20cm、深さ10cmの周溝が弧状に巡り、テラスの中央には５個のピット列が、南側には７個のピット群が見られる。竪穴の周溝は幅20cm、深さ５～10cmを測り、北辺と西辺の一部で検出できなかったが、それ以外は全周する。東辺と南辺の周溝には拡張が認められ、東辺では拡張前後、いずれの周溝にも径15～25cmを測る３～４個の壁柱穴が見られる。南西隅には排水溝をもち、拡張前は南辺の周溝から直線的に、拡張後は斜め方向にそれぞれ西斜面側へ延びる。主柱穴は拡張分も含め６個検出した。いずれも径50～80cm、深さ70cmを測り、東側の柱穴２個は拡張に伴って柱の心々距離で50cm外側に掘り直した痕跡が認められる。床面中央北寄りには80cm×70cmの範囲で赤く焼けた部分が認められ、炉の痕跡と考えられる。焼土の南端には竪穴の長辺と直交する形で長さ30cmの細長い石が据えられていた。

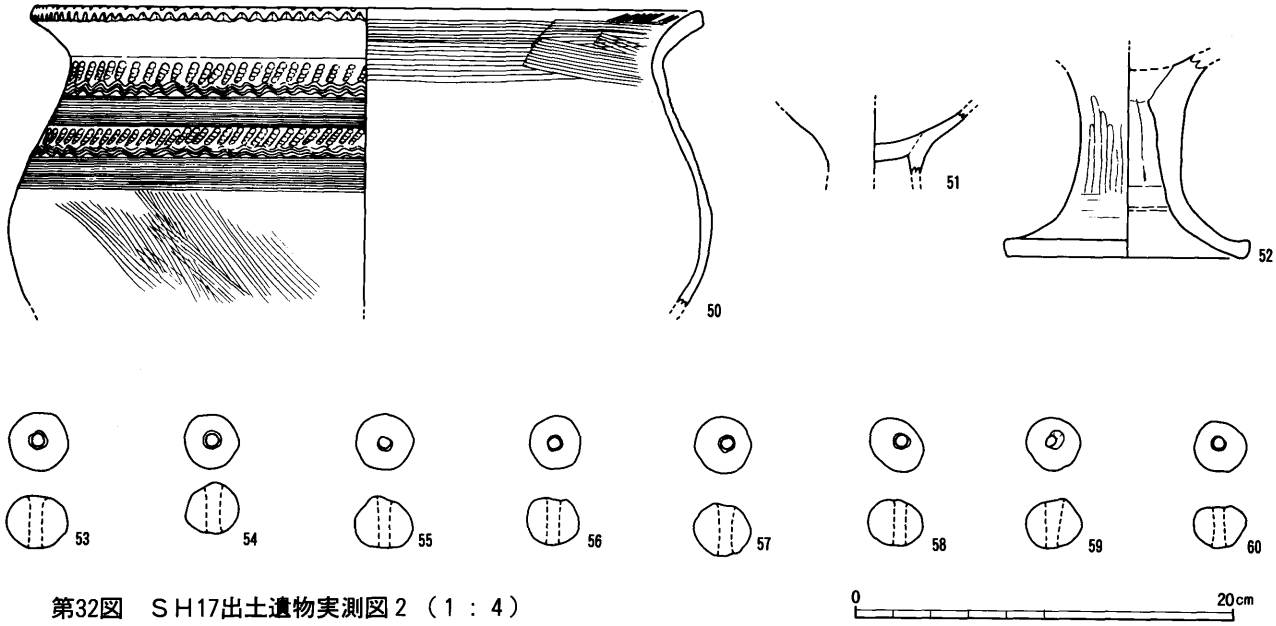
出土遺物　検出された竪穴住居のなかで最も多く、コンテナ箱で４箱分の量が出土した。壺Ｂ１－2a(32•33)、壺底部Ａ１(35•37)、壺底部Ａ２(36)、壺底部Ｂ２(34)、甕Ａ1－1(39)、甕Ａ２(40)、甕Ｂ2－2(50)、甕Ｃ３(38)、甕底部Ａ２(43)、甕Ｂ２(41•42•44•45)、甕底部Ｂ４(46)、甕底部Ｃ(47•48)、高杯脚Ａ(52)、高杯(51)、ミニチュア壺(49)、土錘(53～60)などがある。土錘は８個がまとまって床面から出土



第30図　ＳＨ17実測図（１：100）

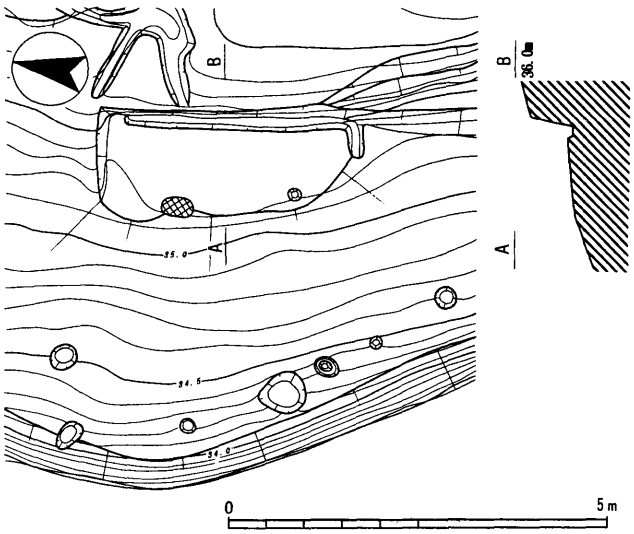


第31図　ＳＨ17出土遺物実測図１（１：４）

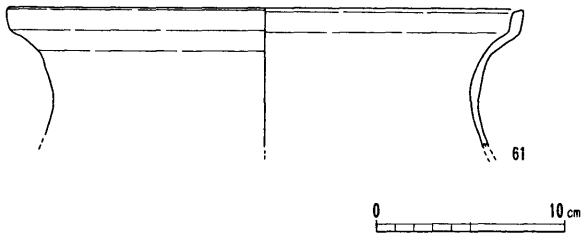


第32図　ＳＨ17出土遺物実測図２（１：４）

した。それ以外の遺物は、すべて埋土掘削途中に出土したものである。また、土器以外の遺物として石斧(203)が床面から出土している。



第33図　ＳＨ18実測図（１：100）



第34図　ＳＨ18出土遺物実測図（１：４）

ＳＨ18　ＳＨ17の排水溝下部に位置し、単独で存在する。西側が流失のため、全体の規模は不明であるが南北辺3.5ｍ×東西辺1.4ｍ以上の長方形プランと推定される。周壁は、東壁がよく残存し壁高50cmを測る。周溝は幅20cm、深さ８～10cmを測り、東辺から南辺に逆Ｌ字状に巡っている。西側縁辺部北寄りの床面には40cm×25cmの範囲で赤色に焼けた部分が認められ、炉の痕跡と考えられる。主柱穴は検出されなかった。この竪穴住居の西側斜面には、６個のピット列が認められ、盛り土の流出を防ぐための施設に伴う杭列の可能性がある。

出土遺物　甕Ｃ１(61)が出土した。他には壺・甕の破片が数片出土したのみである。甕Ｃ１(61)は接合はできなかったが、櫛描横線文や波状文・列点文をもつ体部破片がある。炉近くの床面から出土した。

ＳＨ19　ＳＨ18の北側緩斜面に位置し、単独で存在する。西側が流失のため全体の規模は不明であるが、南北辺4.8ｍ×東西辺3.9ｍ以上の長方形プランと推定される。北側には、南北辺を2.2ｍ延長して設けられたテラス状の張り出し部をもつ。周壁は、東壁がよく残存し壁高70cmを測る。周溝は幅15～20cm、深さ５～10cmを測り、現存部を全周する。主柱穴は４個検出した。いずれも径30～40cm、深さ30cmを測る。床面中央北寄りには60cm×40cmの範囲で赤く焼けた部分が認められ、炉の痕跡と考えられる。

焼けた部分の南端部には長さ25cmの細長い石が長辺と直交する形で据えられていた。

出土遺物　ビニール袋1袋分の量が出土した。壺や甕の体部破片に混じって、口縁端部外面に櫛描波状文、内面に小さい瘤状突起を密にもつ広口壺の口縁部破片が見られる。

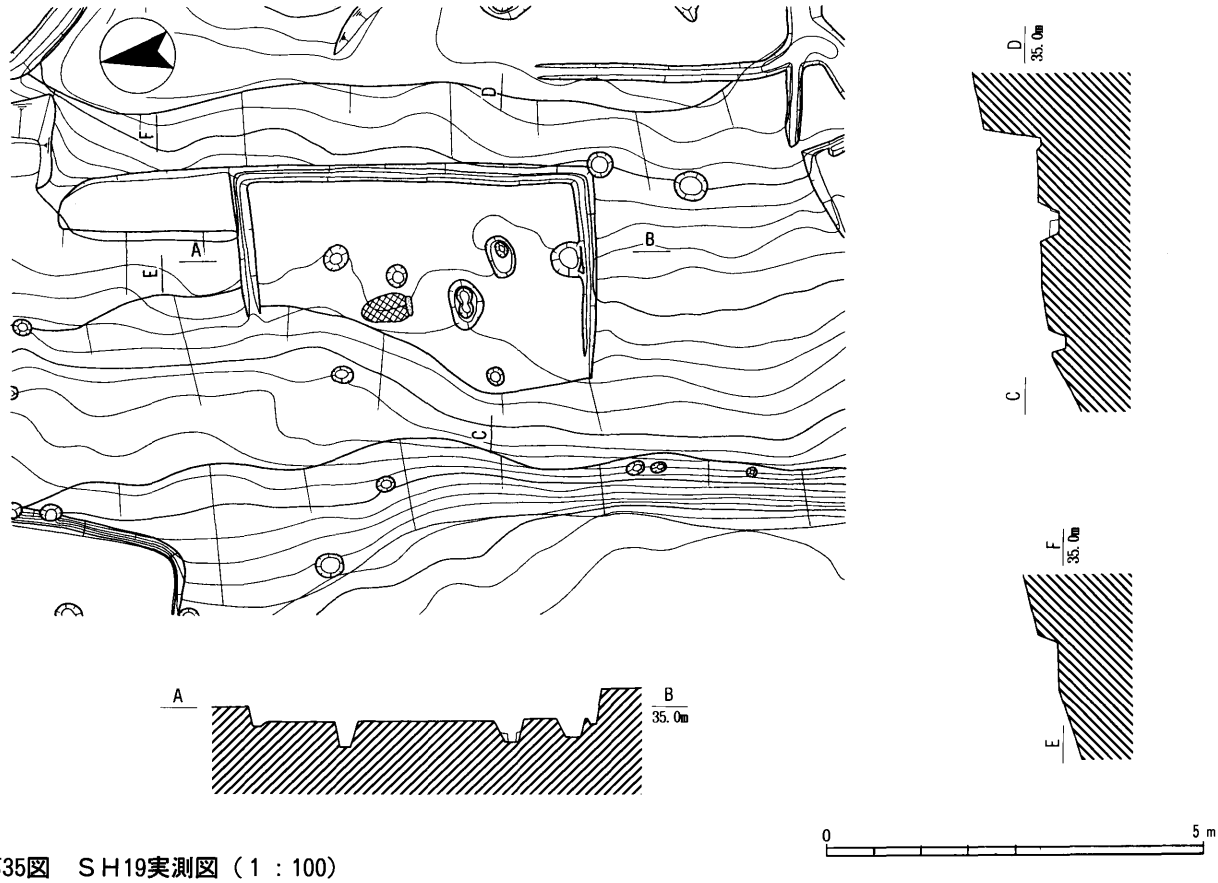
ＳＨ20　ＳＨ17の北側に位置し、ＳＨ21に切られる形で検出した。東側半分がＳＨ21や自然流路によって削平をうけ、全体の規模は不明だが、主柱穴間の距離や南北辺の長さがＳＨ21とほぼ同じであることから、東西辺4.3m（現状2.0m）×南北辺3.8mの隅丸長方形プランと推定される。周壁は、残存状態のよい西辺で壁高35cmを測る。周溝は幅15～25cm、深さ8cmを測り、現存部を全周する。主柱穴は4個検出した。西側の2個は径25～30cm、深さ25cmを測り、切り合いが認められる。東側の2個は深さ50cmと深く、切り合いは認められない。床には焼けた部分は認められず、炉などは不明である。

出土遺物　壺か甕の体部破片が2片出土したのみである。

ＳＨ21　ＳＨ20を切る形で検出したが、自然流路により南側と東側の一部が大きく削られる。東西辺4.3m×南北辺3.7mの隅丸長方形プランをもち、ＳＨ20とほとんど同じ場所で同規模の建て替えを行っていることが判る。周壁は残存状態のよい東壁で壁高20cmを測る。周溝は全周し、幅20～25cm、深さ7cmを測る。主柱穴は4個検出した。いずれも径40cmに対して深さ70cmを測り非常に深い。床面中央には径40cmの範囲で赤く焼けた部分が認められ、炉の痕跡と考えられる。

出土遺物　コンテナ箱1箱分の量が出土した。大半が壺と甕の体部破片である。壺Ａ2(62)は器壁が荒れ、文様等の有無は不明である。周溝から出土した。他に、実測はできなかったが甕Ａ1－1の口縁部破片がある。

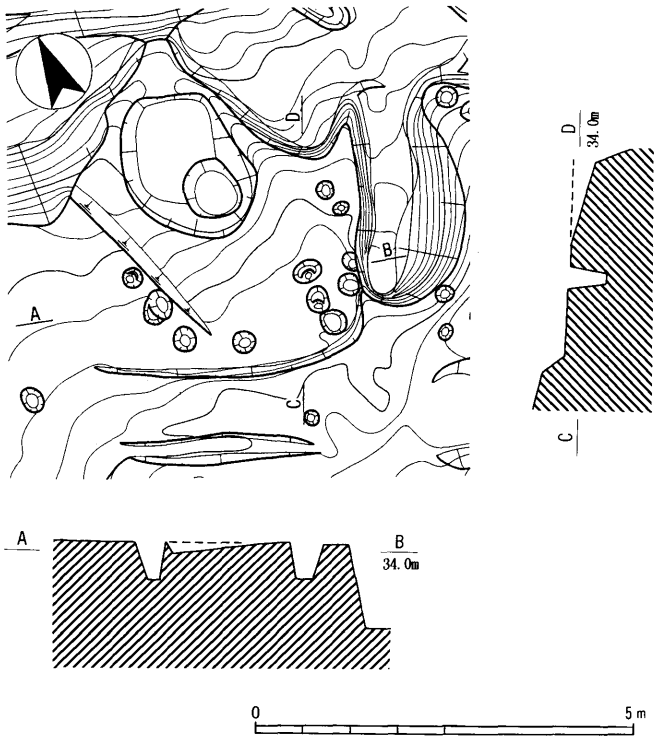
ＳＨ22　ＳＨ21の北西部緩斜面で検出した竪穴住居で、単独で存在する。北側と西側が流失のため全体の規模は不明であるが、東西3.5m以上×南北3.3m以上の方形プランと推定される。南辺の70cm外側には平行する長さ2.5m、幅40cmの溝が検出され関連性が窺える。周壁は、南辺がわずかに残存するのみで壁高30cmを測る。周溝は検出されなかった。主柱



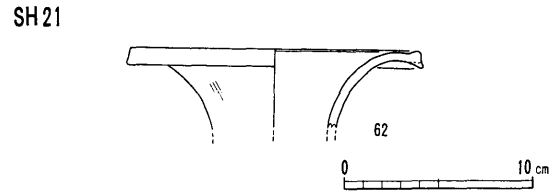
第35図　ＳＨ19実測図（1：100）

穴は2個検出した。他にも多くのピットが存在するが規格性は乏しい。柱穴はいずれも径40cm、深さ50cmを測り、当初は4個の主柱穴であったと推定される。床面は流失や土坑による撹乱のため、炉と推定されるものは検出できなかった。遺物も出土しなかった。

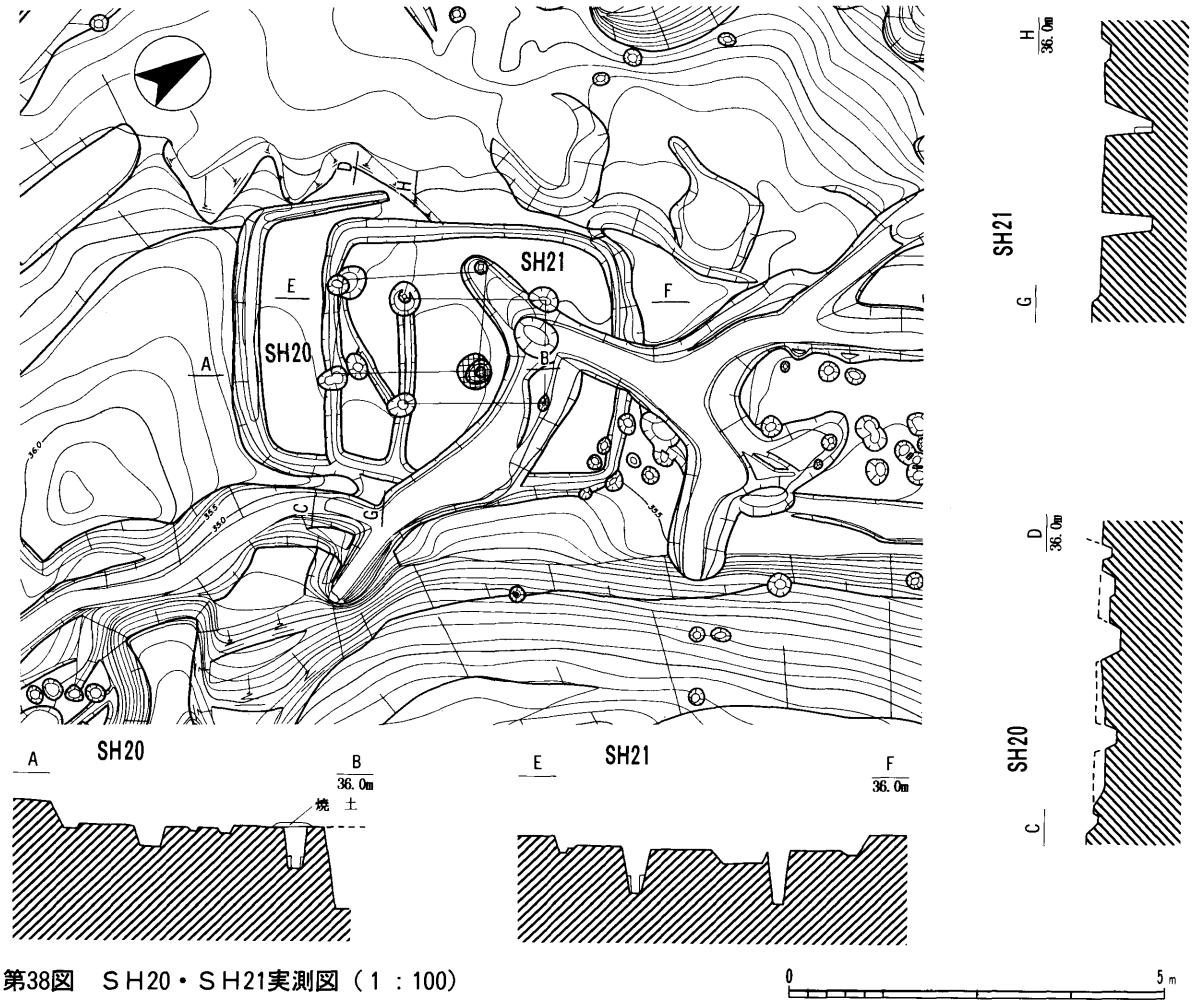
ＳＨ23　Ｂ地区の北東隅で検出した小型の竪穴住居である。北側が流失のため、全体の規模は不明であるが東西辺2.7m×南北辺2.5m以上の方形プランと推定され、一辺の規模が判明している竪穴住居の中では最小である。周壁は、南辺がわずかに残存するのみで壁高30cmを測る。周溝は幅20cm、深さ7cmを測り、現存部を全周する。床面にはいくつかのピッ



第36図　ＳＨ22実測図（1：100）



第37図　ＳＨ21出土遺物実測図（1：4）



第38図　ＳＨ20・ＳＨ21実測図（1：100）

トが存在するが規則的な配置は見られず、主柱穴は不明である。床面中央には径35cmの範囲で赤く焼けた部分が認められ、炉の痕跡と考えられる。遺物は出土しなかった。

Bテラス　B地区の北東部に位置する。急な斜面を深く切り込んで造られたテラスで北側が流失するが、長さ約14m×最大幅約4m、切り込み面からテラス床面まで比高差2.5mを測る。テラスでは壁面に平行して建てられた掘立柱建物3棟（SB59・SB60・SB61）・柱列3条（SA74・SA75・SA76）・溝1条（SD141）などを検出した。また、壁面には多くの柱穴が存在し、盛り土の流出防止などの施設に伴うものと推定されるが、明確な規則性は認められない。

SB59　テラス西側に位置する。壁面から約1.2m離れ、桁行きを壁面に平行して建てられた掘立柱建物である。北西隅を自然流路で削られているが、桁行き3間×梁行き1間（3.4m×1.8m）の東西棟の建物である。妻側の中央には外側にわずかにずれる柱穴が見られ、近接棟持柱建物と呼ばれる形態をもつ。柱穴は棟持柱を含めて径約25cm、深さ40cmを測る。また、建物の壁側には、桁行きに平行して長さ5m×幅0.4m、深さ15cmを測る溝（SD141）が存在し、掘立柱建物との関連が窺える。

SB60　SB59を同一場所で建て替えた掘立柱建物で、梁行きにわずかに拡張が認められる。桁行き3間×梁行き1間（3.6m×2.4m）の東西棟の建物で、妻側中央から、0.6と1m外側には柱穴が見られ、棟持柱をもつ掘立柱建物と考えられる。柱穴は径25cm、深さ30cmを測る。

SB61　SB59と桁行きの柱筋を揃えて建てられた掘立柱建物である。北東隅が流失するが、桁行き2間×梁行き1間（2.6m×1.8m）の東西棟の建物である。西側梁行きの中央には、外側に0.7mずれ

第39図　SH23実測図（1：100）

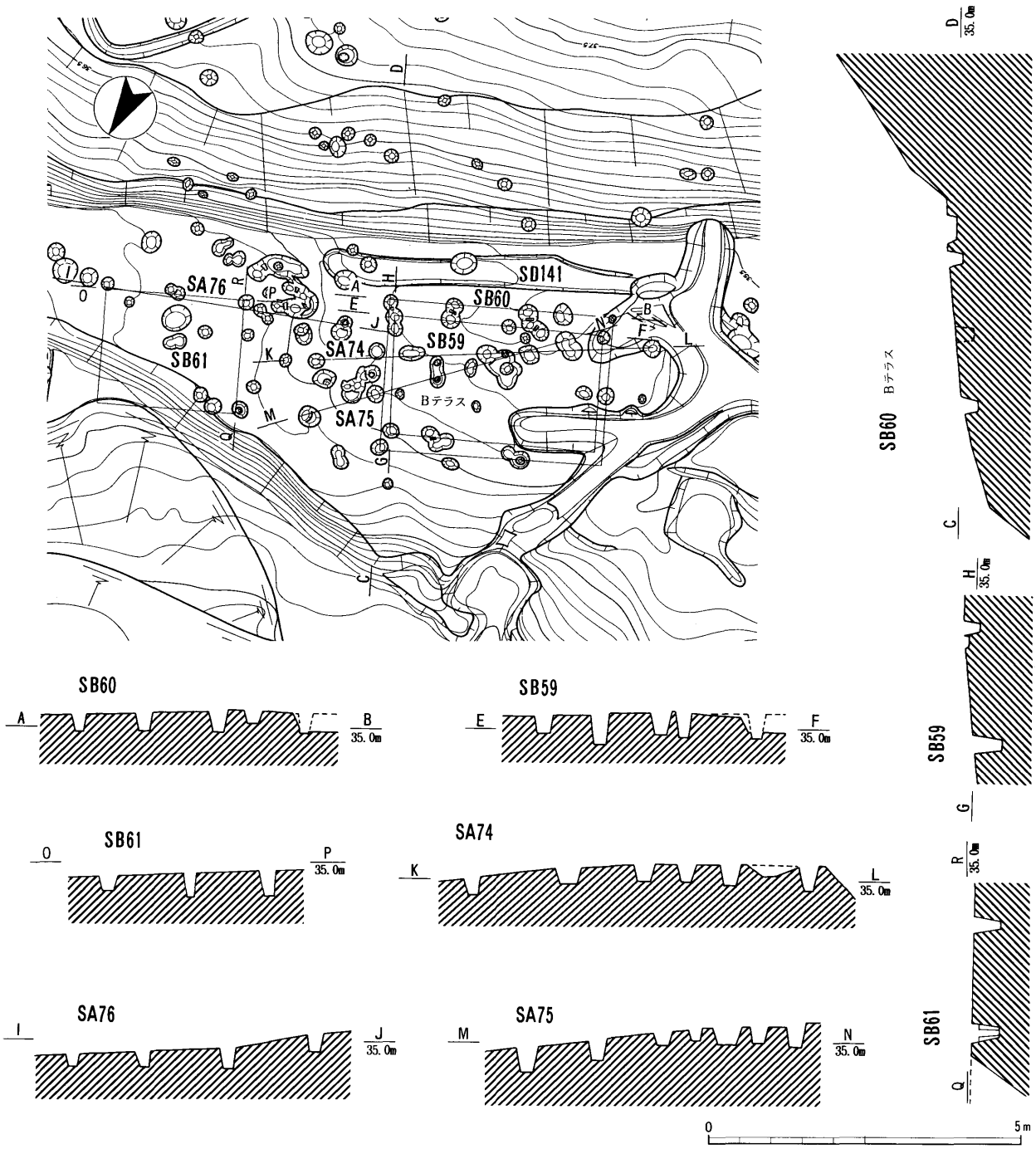
て柱穴が存在することから、棟持柱建物の可能性もある。柱穴は径25cm、深さ40cmを測る。

ＳＡ74　テラスの西側に位置し、ほぼ壁面に平行する。ＳＢ59・ＳＢ60と重複するが前後関係は不明である。南北４間（5.6m）の柱列で、柱間は1.4mの等間である。柱穴は径30cm、深さ30cmを測る。

ＳＡ75　ＳＢ74を切る形で検出した。壁面に対して斜めに配置される。南北４間（4.4m）の柱列で、柱間は1.1mの等間である。柱穴は径30cm、深さ30cmを測る。

ＳＡ76　テラスの東側に位置し、壁面にほぼ平行する。ＳＢ61と重複するが前後関係は不明である。南北３間（3.9m）の柱列で、柱間は1.3mの等間である。柱穴は径20cm、深さ30cmを測る。

ＳＤ141　壁面に平行する溝で壁際で検出した。長さ5.0m、幅30～50cm、深さ15cmを測る。ＳＢ59・60の桁行きに平行し、屋根からの雨水処理などの用途が推測される。



第40図　ＳＢ59～61・ＳＡ74～76・ＳＤ141実測図（１：100）

C地区

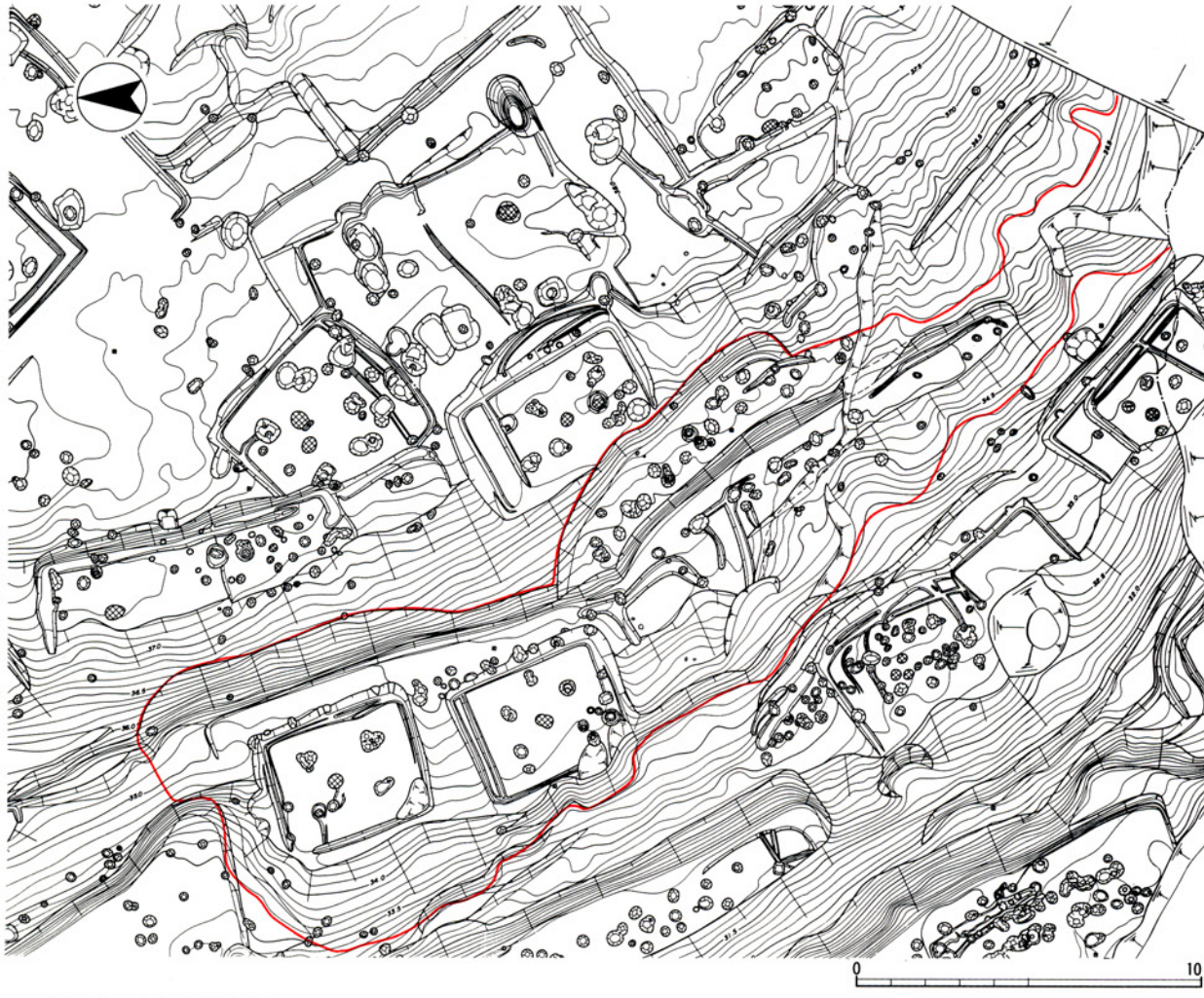
C地区の概要　A地区から南西側へ一段下がった標高35～36mに位置し、急斜面を切り込んで造られた3カ所のテラス（C－1・C－2・C－3）で構成される。C－1テラスでは柱列数条とそれを切って造られた竪穴住居2棟、C－2テラスでは柱列2条、C－3テラスでは柱列3条を検出した。

C－1テラス　C地区の北部に位置する。急斜面を深く切り込んで造られたテラスで、長さ13m×幅5m、切り込み面から平坦面までの比高差2.6mを測る。壁際の柱列2条（SA77・SA78）を切る形で竪穴住居2棟（SH24・SH25）が検出された。

SA77　テラス壁面に平行し、SA78に切られる形で検出した。SH25と重複するため全体の規模は不明であるが、南北5間分（5.5m）を検出した。柱間は1.1mの等間である。柱穴は径40cm、深さ50cmを測る。

SA78　テラス壁面に平行し、SH24・SH25に切られる。全体の規模は不明であるが、南北2間分（3m）を検出した。柱間は1.5mの等間である。柱穴は径25cm、深さ30cmを測る。

SH24　C－1テラス北側で、東辺が柱列を切る形で検出した。単独で存在し、南北辺5.0m×東西辺4.0mのやや平行四辺形に近い長方形プランをもつ。周壁は、流失している西側以外はよく残存し、東辺で壁高60cmを測る。周溝は幅20cm、深さ10cmを測り、四辺をほぼ全周する。周溝には、西辺を除く三辺に

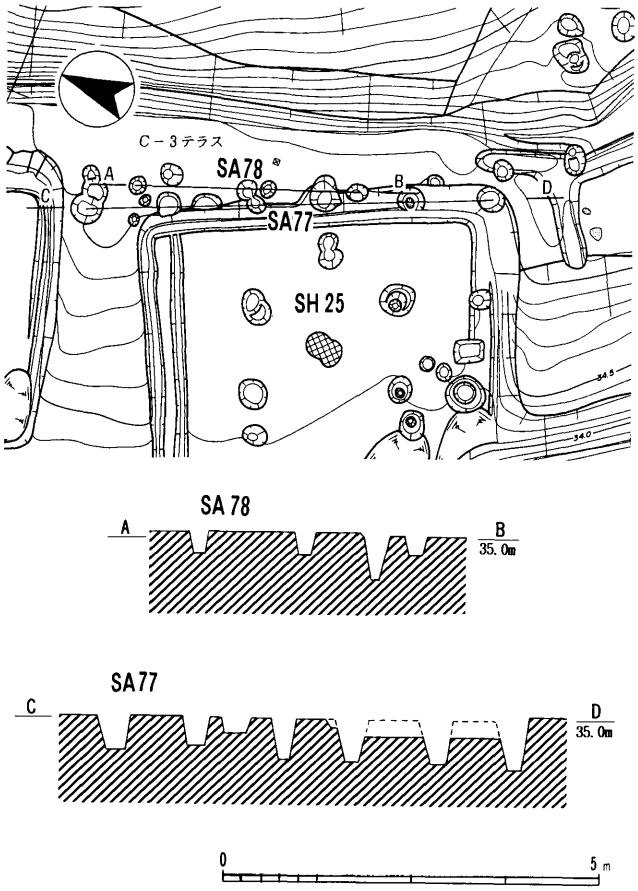


第41図　C地区遺構図

切り合い関係が認められ、僅かに壁の拡張を行っている。主柱穴は4個検出し、径30cm、深さ50cmを測る。いずれの柱穴も3回の切り合い関係が認められ、柱の建て替えが行われたことを示している。床面中央北寄りには径45cmの範囲で赤く焼けた部分が認められ、炉の痕跡と考えられる。

出土遺物　コンテナ箱1箱分の量が出土した。壺B2－b(63)、壺底部A1(64)、甕A4(65)などがある。(63)は太い4条の凹線を施す太頸受口壺の口縁部で、図示できなかったが2条の凹線を施す細頸受口壺の口縁部も見られる。(65)は器壁の薄いA4類で炉近くの床面から出土した。その他の遺物はいずれも埋土の掘削途中で出土したものである。

SH25　C－1テラス南側、SH24の1m南で柱列（SA77・SA78）を切る形で検出した。単独で存在し、南北辺5.0m×東西辺3.9mの長方形プランをもつ。周壁は、流失している西側以外はよく残存し、東辺で壁高70cmを測る。周溝は幅15～20cm、深さ5～10cmを測り、四辺をほぼ全周する。北辺では周溝が二重に巡り、拡張の痕跡が認められる。主柱穴は4個検出した。いずれも径30～40cm、深さ60cmを測る。床面には他にもいくつかのピットが存在するが浅く、竪穴住居が造られる以前のものである。床面中央には50cm×35cmの範囲で赤く焼けた部分が認められ、炉の痕跡と考えられる。



第42図　SA77・SA78実測図（1：100）

出土遺物　コンテナ箱半分の量が出土した。壺B2－a(66)、壺底部A2(68)、壺底部B2(67)、甕底部B3(69)などがある。(66)は太い3条の凹線を施す太頸受口壺で、図示できなかったが凹線を施さない受口壺の破片（B1－1a）も見られる。他に壺の底部や体部破片がある。遺物は、いずれも埋土掘削途中に出土したものである。

C－2テラス　A地区南端部より一段下がった標高36mに位置する。急斜面を約70cm切り込んで造られたテラスで壁面は湾曲し、長さ9.5m×幅1.7mを測る。柱列2条（SA79・SA80）と南端部では溝を検出した。

SA79　テラスの壁側でSA80に切られる形で検出した。南北5間（6.5m）の柱列で、柱間は1.3mの等間である。柱穴は径40cm、深さ40～70cmを測る。

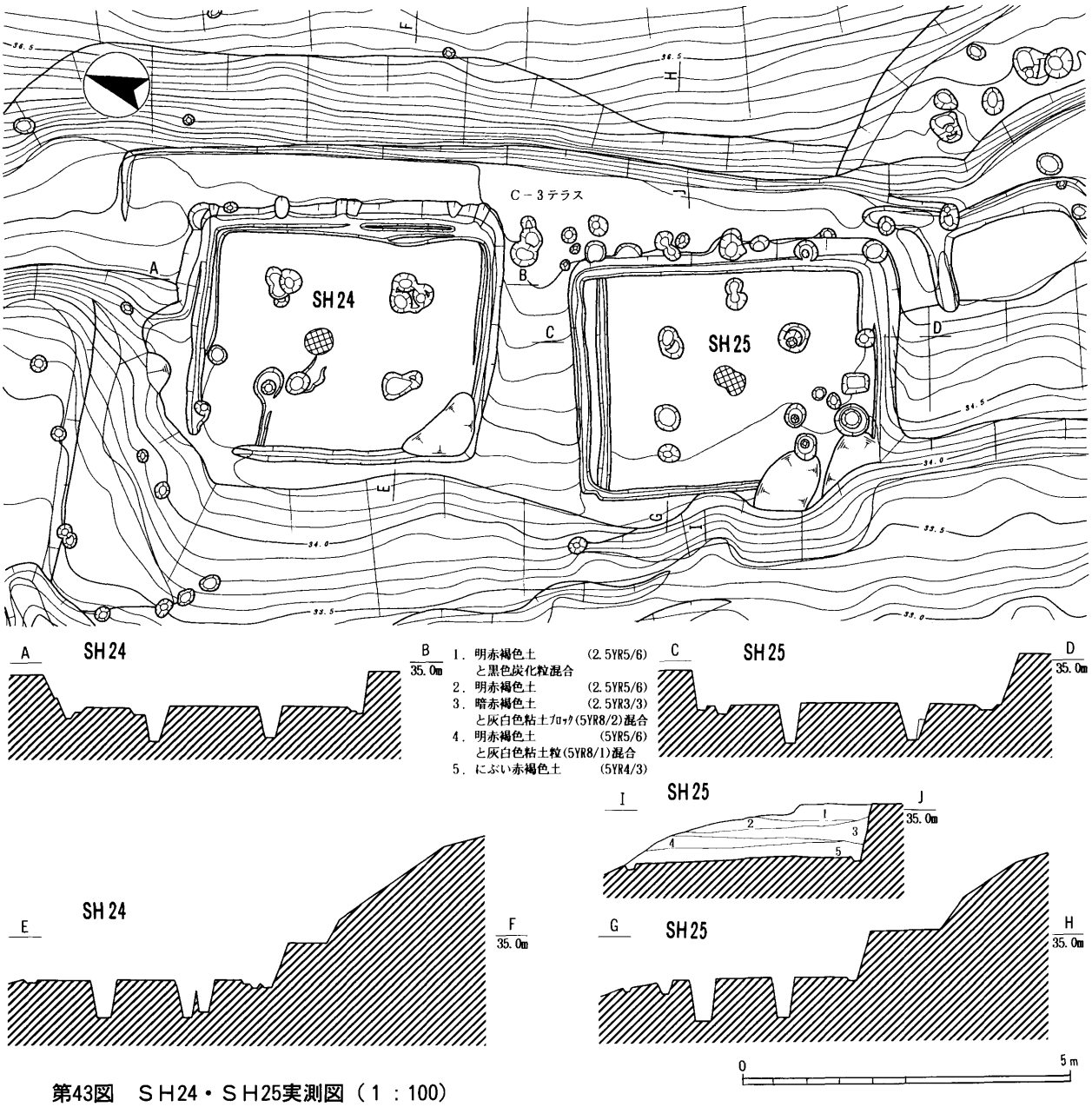
SA80　SA79にほぼ平行するが、壁面に沿ってやや湾曲する。南北6間（7.0m）の柱列で、柱間は北から4間目と5間目が1.5mでそれ以外は1mの等間である。柱穴は径30～40cm、深さ40～50cmを測る。

C－3テラス　C－2テラスの一段下に位置するが切り合い関係は不明である。長さ約14m×最大幅約2mで壁面は湾曲し、C－2テラスとの比高差は1mを測る。柱列3条（SA81・SA82・SA83）と南側で周溝を、また北側では排水溝状の遺構を検出した。

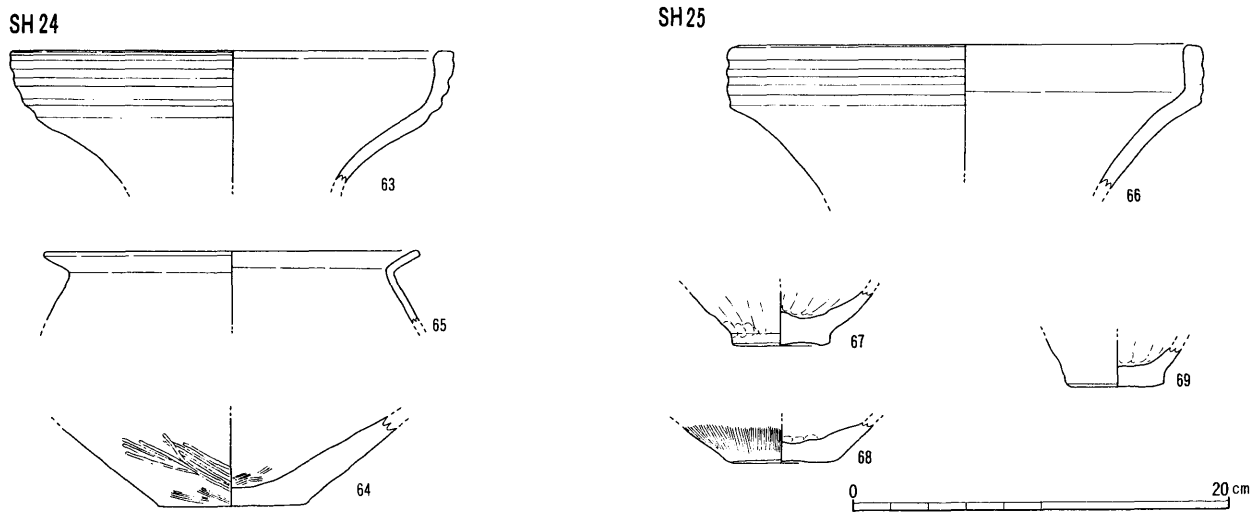
SA81　テラスの壁側で検出した。壁に沿ってやや湾曲する南北5間（7.5m）の柱列で、柱間は1.5mの等間である。柱穴は径40cm、深さ70cmを測る。

SA82　テラスの中央部で検出した。壁面に対してやや斜めに配置された南北4間（3.6m）の小規模な柱列で、柱間はほぼ0.9mの等間である。柱穴は径30cm、深さ50cmを測る。

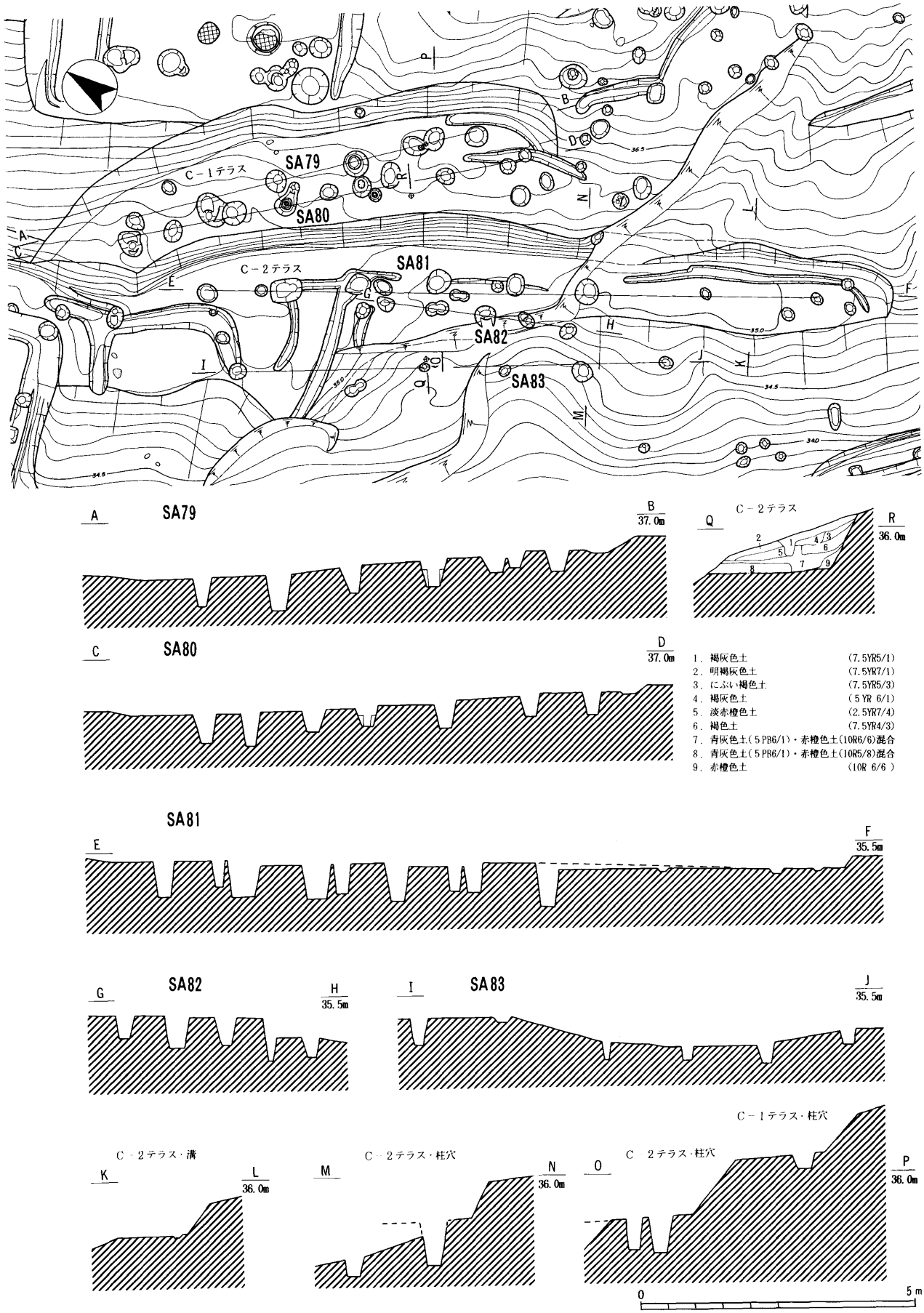
SA83　テラスの西側縁辺部で検出した。南北5間（8.0m）の柱列で、柱間は1.6mの等間である。柱穴は径30cm、深さ30～50cmを測る。



第43図　ＳＨ24・ＳＨ25実測図（１：100）



第44図　ＳＨ24・ＳＨ25出土遺物実測図（１：４）



第45図　ＳＡ79～ＳＡ83実測図（１：100）

Ｄ地区

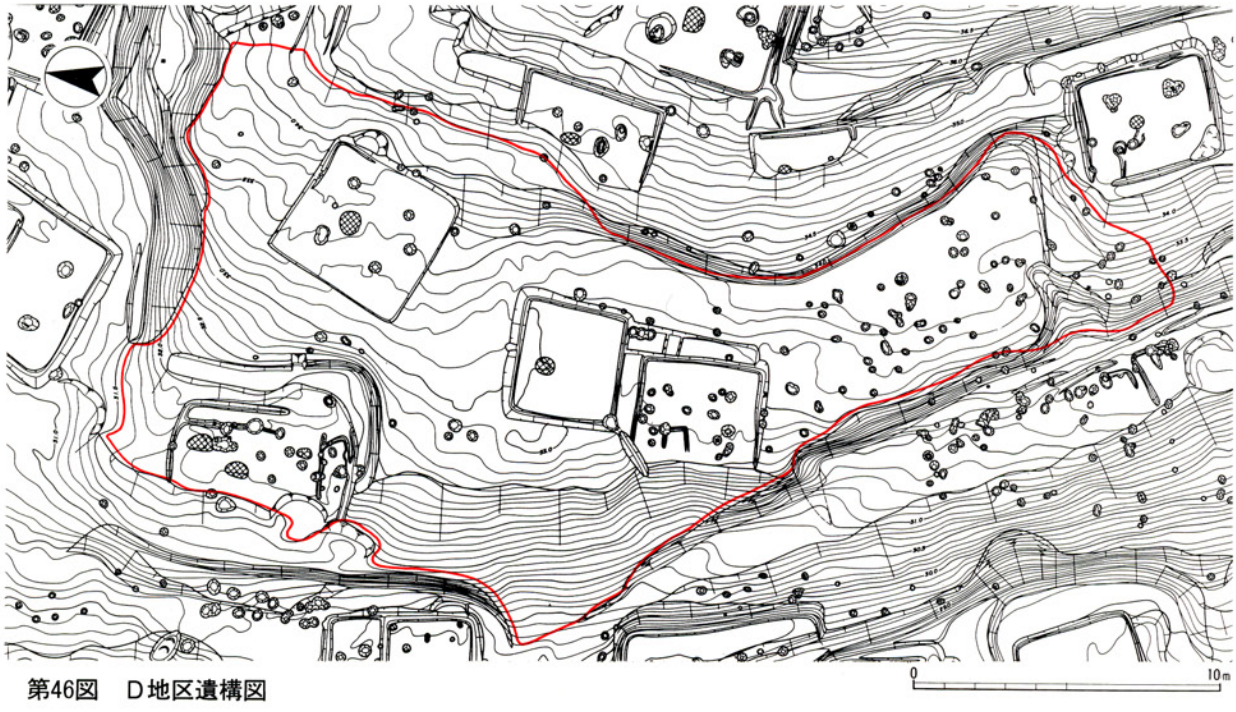
Ｄ地区の概要　Ｂ地区から西へ一段下がった標高33～34ｍに位置する。Ｄ地区北部は、今回の長査区においてＡ地区を除き、最も傾斜の緩やかな地区である。中央部から南部にかけては傾斜がきついため、斜面を深く切り込んでテラス（Ｄテラス）が造られている。今回の調査で、北部の緩やかな傾斜面で竪穴住居２棟（ＳＨ26・ＳＨ30）、Ｄテラスでは竪穴住居３棟（ＳＨ27・ＳＨ28・ＳＨ29）と掘立柱建物２棟（ＳＢ62・ＳＢ63）、柱列３条（ＳＡ84・ＳＡ85・ＳＡ86）などを検出した。

ＳＨ26　Ｄ地区北東部の緩斜面で検出した。単独で存在する竪穴住居で、南北辺4.8ｍ×東西辺4.6ｍのほぼ正方形プランをもつ。周壁は、西辺が流失するが、東辺がよく残存し壁高65㎝を測る。周溝は北東隅に僅かに残存するが、床面が非常に軟弱な砂質土であり、とばしてしまった可能性もある。主柱穴は４個検出した。いずれも径35～40㎝、深さ40～70㎝を測る。床面中央やや北寄りには80㎝×70㎝の範囲で赤く焼けた部分が認められ、炉の痕跡と考えられる。焼けた部分の南端には、長さ21㎝の細長い石が南北辺に直交して据えられていた。

出土遺物　ビニール袋１袋分の量が出土した。甕底部Ｂ１(70)(71)、甕底部Ｂ２(72)などがある。いずれもＢ類の底部で、底の厚いもの(72)と薄いもの(70)があり、他に壺と甕の体部の破片がある。遺物は大半が埋土掘削途中に出土したものであるが(72)のみ床面に伴う遺物である。土器以外の遺物として石斧(204)と不明石製品（敲石？）(205)がある。

Ｄテラス　Ｄ地区中央部から南端にかけて位置する。比較的急な斜面を約80㎝切り込んで造ったテラスで、壁面は丘陵に沿ってくの字形に湾曲し、長さ15ｍ×幅５ｍを測る。テラス中央部で竪穴住居３棟（ＳＨ27・ＳＨ28・ＳＨ29）・掘立柱建物１棟（ＳＢ62)、南側で掘立柱建物１棟（ＳＢ63）・柱列３条（ＳＡ84・ＳＡ85・ＳＡ86）を検出した。とくに南側で検出した遺構群は柱列３条が掘立柱建物（ＳＢ62）を囲むように配置され密接な関連が窺える。

ＳＨ27　Ｄテラスの南側に位置し、近接した場所で切り合いを重ねる３棟（ＳＨ27～ＳＨ29）の中で最も古い竪穴住居である。ＳＨ28・ＳＨ29に切られる形で検出し、東辺部が僅かに残存するのみである。現存する規模は南北辺4.3ｍ以上×東西辺0.9ｍ以上で長方形プランと推定される。壁高は東辺部で30㎝を測る。周溝は検出されなかった。床面には、いくつかピットは存在するものの規格性に乏しく、主柱穴としてはまとまらない。遺物は出土しなかった。



第46図　Ｄ地区遺構図

ＳＨ28　ＳＨ27・ＳＢ62（掘立柱建物）を切る形で検出し、南北辺4.3ｍ×東西辺3.7ｍの長方形プランをもつ。周壁は西側が流失するが、最も残存状態のよい南辺で壁高30cmを測る。周溝は幅20cm、深さ８cmを測り、流失した西辺を除き全周する。また、北西部の主柱穴から西斜面側に２条の溝が延びる。主柱穴は４個検出した。いずれも径30～40cm、深さ50cmを測るが、他にも規則性をもったピットが存在することから、ほぼ同じ場所で何度か建て替えを行っていることが推定される。床面中央やや北寄りには径30cm程の浅い窪みが存在するが、焼けた様子は認められない。

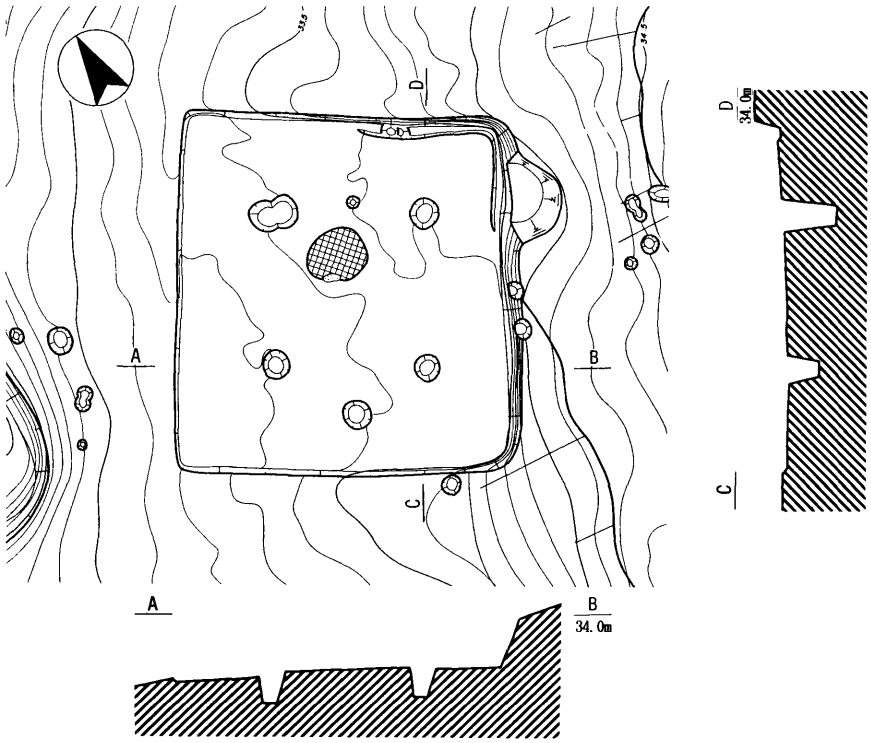
出土遺物　ビニール袋１袋分の量が出土した。壺Ｂ１－1c(73)、甕Ａ７(74)、蓋Ａ１(75)などの他、壺と甕の体部破片がある。甕(74)はＡ７類で口縁端部に刻み目を巡らす。いずれも埋土掘削中に出土したものである。

ＳＨ29　ＳＨ27・ＳＨ28を切る形で検出し、東西辺4.2ｍ×南北辺3.9ｍのほぼ正方形プランをもつ。周壁は南辺以外よく残存し、壁高60cmを測る。四辺には幅15cm、深さ10cmを測る周溝が全周し、南西隅から長さ１ｍの排水溝が一部暗渠となって南西側斜面に延びる。主柱穴は検出されなかった。床面中央やや北寄りには径60cmの範囲で赤く焼けた部分が認められ、炉の痕跡と考えられる。

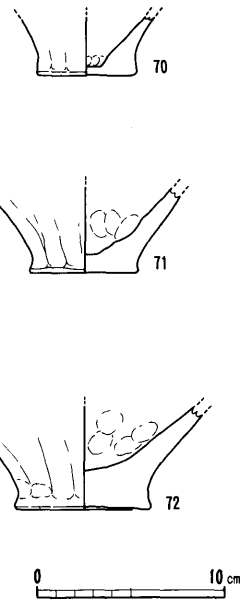
出土遺物　コンテナ箱半分の量が出土した。壺体部Ａ７－1(76)、台付壺Ｃ１(79)、甕Ａ1－1(77)、甕底部Ａ２(78)、土錘(80)などがあり、(77)と(78)は同一個体の可能性がある。他には接合はできなかったが、(77)・(78)・(79)に伴う体部破片があり、(80)を除きいずれも床面に伴う遺物である。他に土器以外の遺物として石鏃(206)・不明石製品（磨製石鏃の未製品？）(207)が出土している。

ＳＢ62　テラス中央部でＳＨ28に切られる形で検出した。テラス東壁面に対して桁行きを平行して建てられた掘立柱建物である。桁行き２間×梁行き１間（4.5ｍ×2.5ｍ）の南北棟の建物で、平面はやや平行四辺形に近い。南側梁行き中央には、外側に50cmずれて柱穴が存在することから棟持柱建物の可能性もある。柱穴は径30cm、深さ30cmを測る。

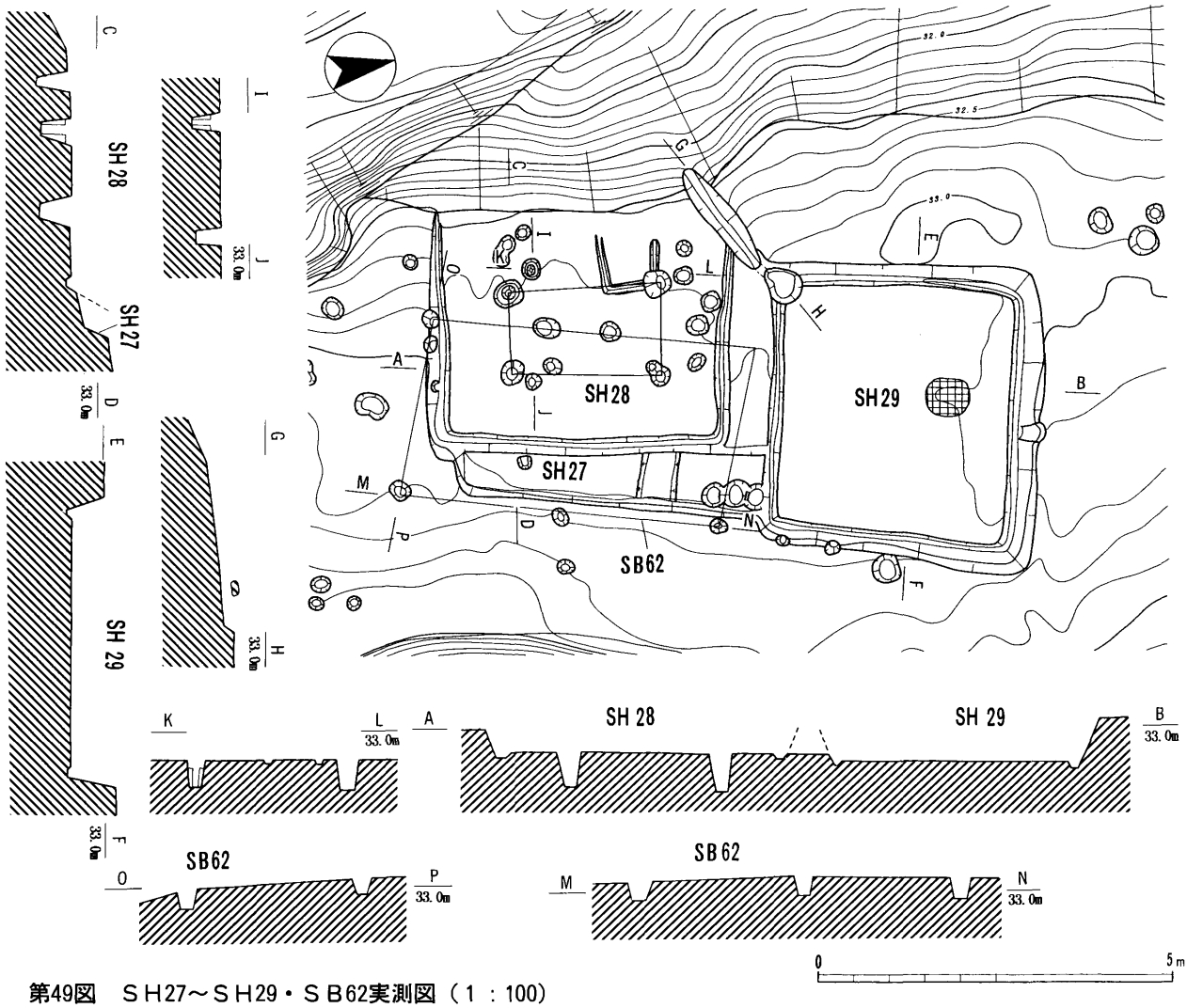
ＳＢ63　テラス南端部で検出した、東壁面に対して桁行きをほぼ平行して建てられた掘立柱建物である。桁行き２間×梁行き１間（2.5ｍ×1.7ｍ）の南北棟の小規模な建物で、平面はやや平行四辺形に近く、ＳＢ62のプランと共通する。柱穴は径30cm、深さ30cmを測る。



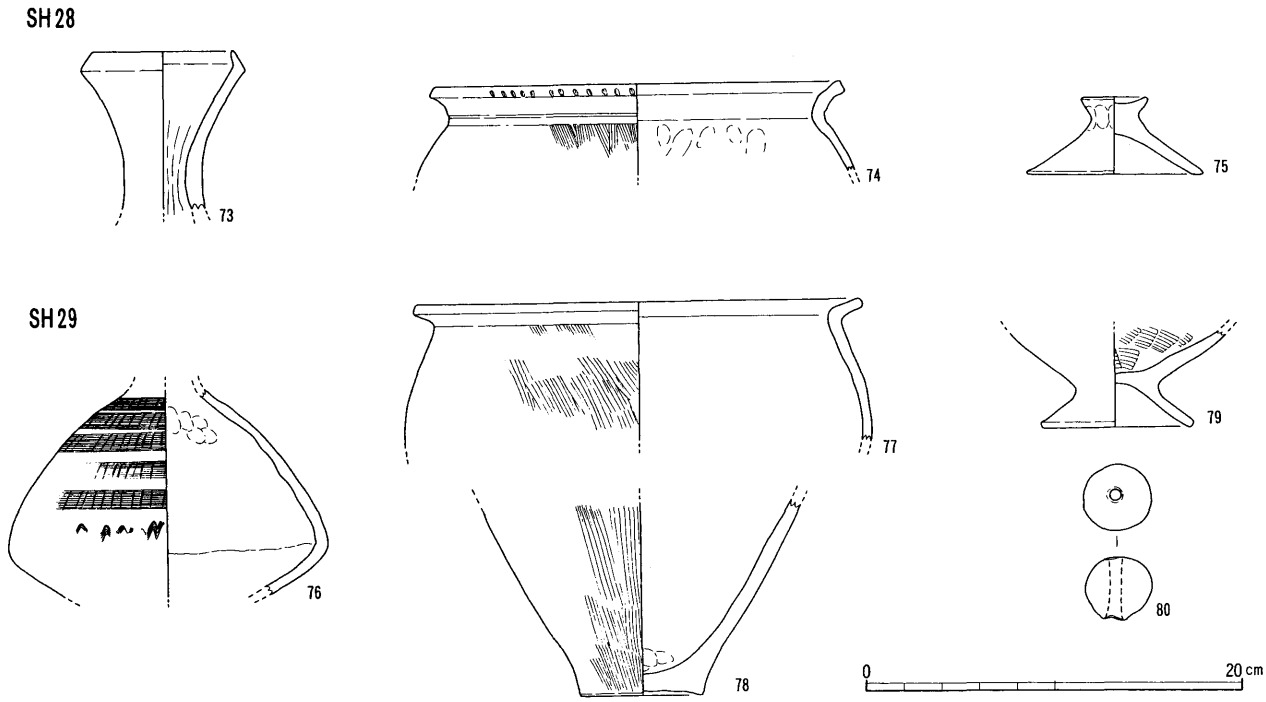
第47図　ＳＨ26実測図（１：100）



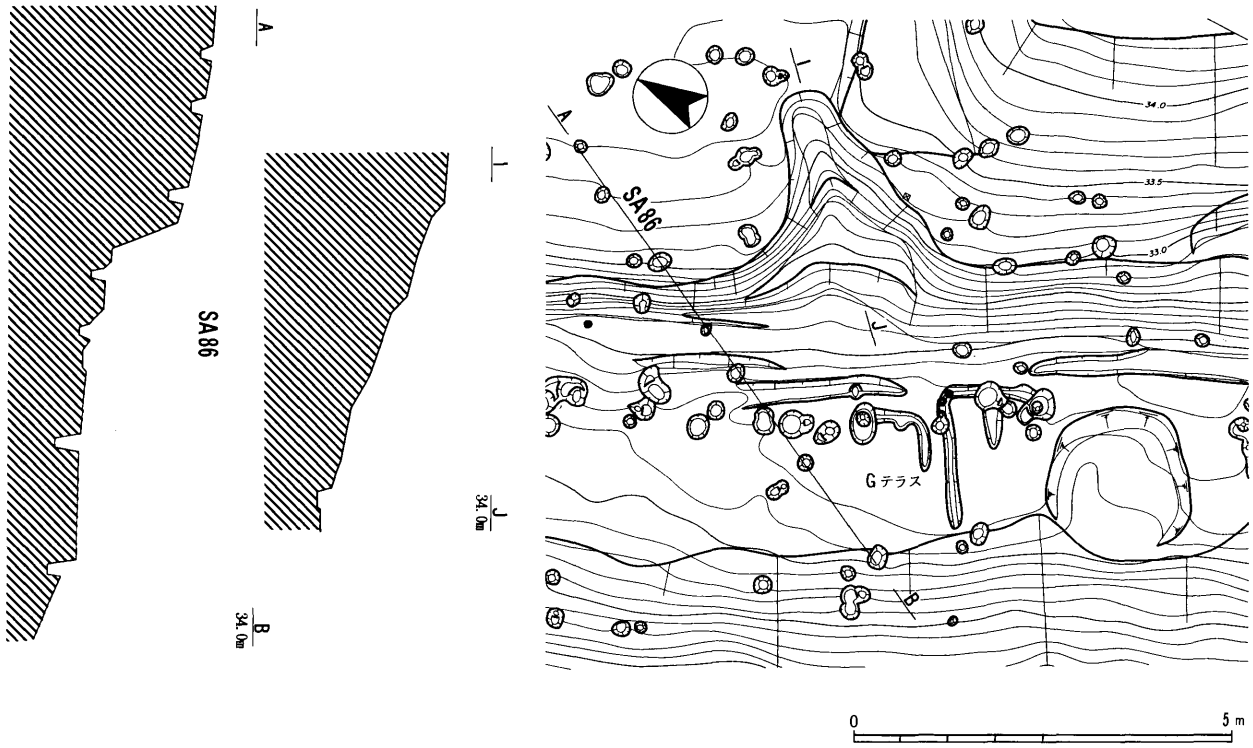
第48図　ＳＨ26出土遺物実測図（１：４）



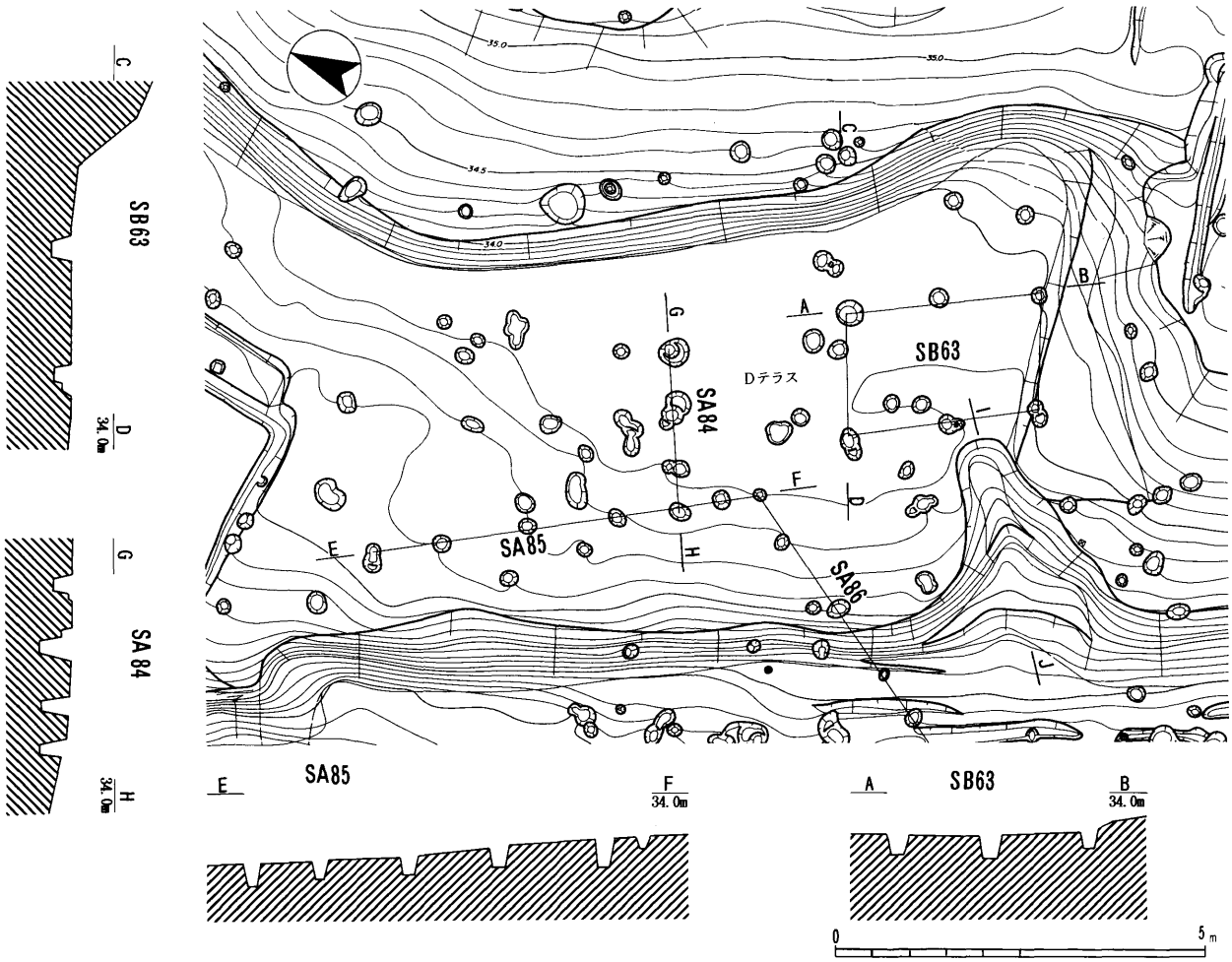
第49図　ＳＨ27～ＳＨ29・ＳＢ62実測図（１：100）



第50図　ＳＨ28・ＳＨ29出土遺物実測図（１：４）



第51図　ＳＡ86実測図（１：100）



第52図　ＳＢ63・ＳＡ84～ＳＡ86実測図（１：100）

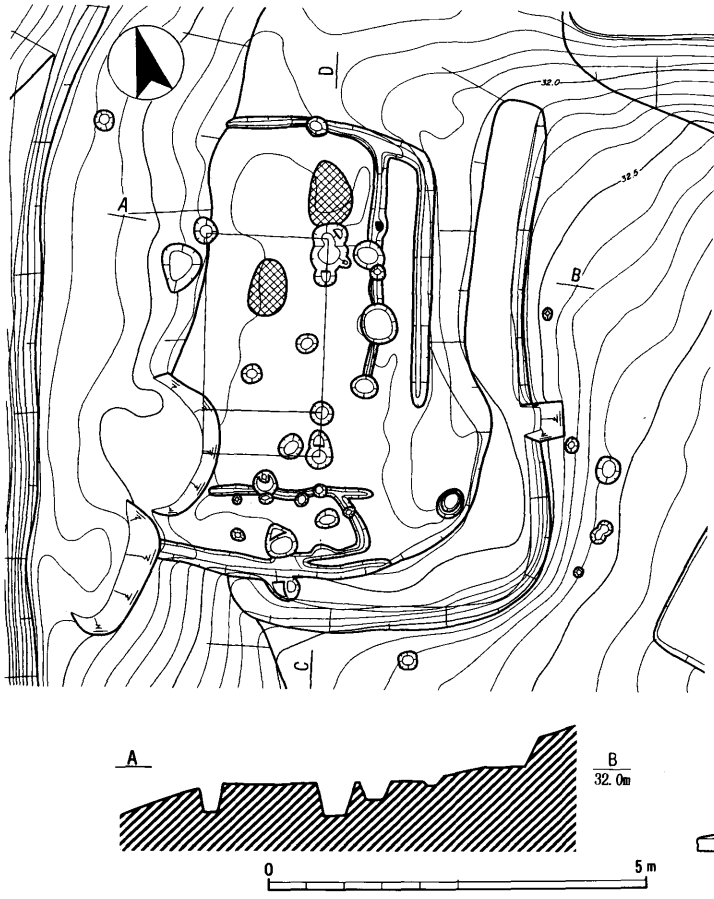
ＳＡ84　テラス南側で検出した、ＳＢ63の梁行きに対して平行する柱列である。東西３間（2.4ｍ）で、柱間は0.8ｍの等間である。柱穴は径20㎝、深さ40㎝を測る。

ＳＡ85　テラス南側縁辺部で検出した、ＳＡ84に途中で直交する柱列である。南北６間（5.4ｍ）で、柱間は0.6ｍ～1.2ｍとかなり差がある。柱穴は径25㎝、深さ30㎝を測る。

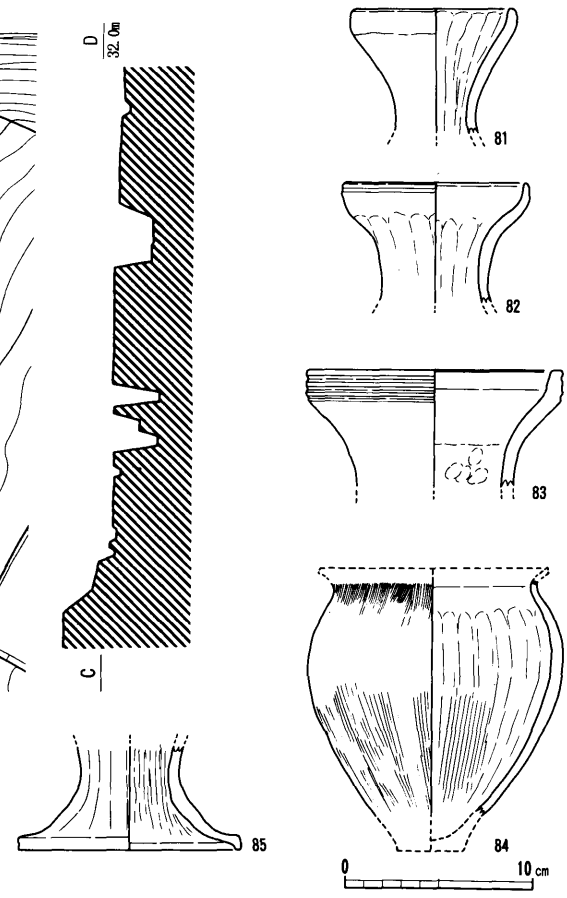
ＳＡ86　ＳＢ63の西側で検出した、一段下のＧテラスからＳＡ85の南端に取り付く柱列である。南北４間(6.8ｍ）で、柱間はほぼ1.7ｍの等間である。柱穴は径20cm、深さ25cmを測る。

ＳＨ30　ＳＨ26の西側縁辺部で検出した竪穴住居である。西側が流失のため、全体の規模は不明であるが南北辺6.1ｍ×東西辺3.4ｍ以上で短辺が外側へややふくらむ隅丸長方形プランをもつ。周壁は南西部にわずかに残存し、壁高40㎝を測る。周溝は東辺の南側が途切れるがそれ以外は全周し、東辺と南辺で二重に巡ることから拡張が考えられる。また、南辺については内側と外側の周溝がつながっており、拡張後も同時に機能していたことが窺われる。周溝は幅20㎝、深さ５～10㎝を測る。拡張前の南辺と東辺の周溝には小さなピットが存在し、壁柱穴の痕跡と考えられる。主柱穴は、南西部の柱穴２個が撹乱のため検出できなかったが、拡張分も含めて４個検出した。南側の柱穴は拡張に伴い、柱の心々距離で60㎝南側に移動している。柱穴はいずれも径30～40㎝、深さ50㎝を測る。床面中央部北寄りと北東隅主柱穴の北側の２か所で50㎝×80㎝の範囲で赤く焼けた部分が認められ、炉の痕跡と考えられるが、北東隅のものは炉としては不自然な位置である。また、ＳＨ30は東側で竪穴状土坑と切り合うが、切り合い関係は不明である。土坑は形態的には竪穴住居の可能性もあるが、周溝や主柱穴等は検出できなかった。

出土遺物　コンテナ箱半分の量が出土した。壺Ｂ１－1b(81)・Ｂ１－2a(83)・Ｂ１－2b(82)、甕Ａ１－1(84)、高杯脚Ａ(85)などがある。図示できなかったが、４条の凹線が巡る太頸受口壺の口縁破片も見られ、出土した壺はいずれも受口状のＢ類である。遺物の大半は埋土掘削の途中で出土したものである。



第53図　ＳＨ30実測図（１：100）



第54図　ＳＨ30出土遺物実測図（１：４）

E地区

E地区の概要　C地区の南側に一段下がった標高33mに位置する。斜面を切り込んで造られた東西2カ所のテラスで構成される。西側のテラス（Eテラス）では先行する5条の柱列を切る形で竪穴住居3棟が検出され、東側のテラスでは竪穴住居2棟が検出された。

Eテラス　E地区の北側に位置する。比較的緩斜面を80cm切り込んで造られたテラスで、長さ11m×最大幅2.5mを測る。テラス南側で、壁面にほぼ平行する形で5条の柱列（SA87～SA91）と溝を検出したが、竪穴住居3棟（SH31・SH32・SH33）によって切られるため、全体の規模は断定し難い状況である。

SA87　最も壁側に位置する。南北3間（2.4m）分を検出した。小規模な柱列で、柱間は0.8mの等間である。柱穴は径30cm、深さ60cmを測る。

SA88　南北3間（3.6m）分を検出した。柱間は1.2mの等間である。柱穴は径30cm、深さは両端の2個が1m、中央の2個は40cmを測る。

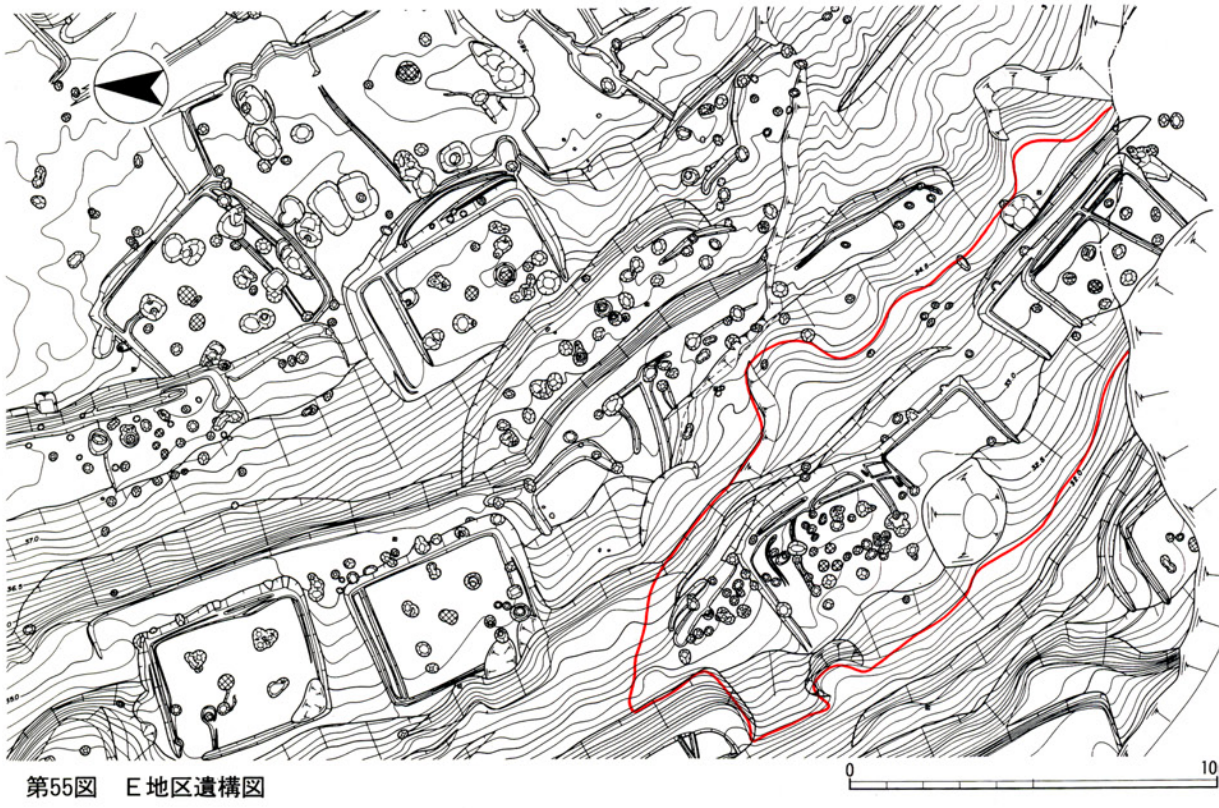
SA89　南北4間(4.8m)分を検出した。柱間は、1.2mの等間である。柱穴は径25cm、深さ35cmを測る。

SA90　南北4間（4.8m）分を検出した。柱間は、北2間が1.1mの等間、残り2間は1.3mを測る。柱穴は径30cm、深さ50cmを測る。

SA91　Eテラス中央縁辺部に位置する。5個の柱穴がほとんど隣接して並ぶ。南北1.2m、柱穴は径20cm、深さ40cmを測る。

SH31　Eテラス中央部に位置し、テラス壁面に対してやや斜め方向に配置される。すべての柱列を切りSH32に切られる形で検出した。西側が流失し、全体の規模は不明であるが南北辺4.5m×東西辺3.5m以上の長方形プランと推定される。周壁は最も残存状態のよい東辺で壁高60cmを測る。周溝は幅15～20cm、深さ5～10cmで現存部分をほぼ全周する。他にも弧状の周溝などが存在するが、どの竪穴に伴うかは明らかではない。主柱穴は4個検出した。いずれも径20～25cm、深さ30cmを測る。床面中央部やや北寄りには径30cmの範囲で赤く焼けた部分が3カ所認められた。炉の痕跡と考えられるがSH32の炉が混在している可能性が大きい。

出土遺物　土器は出土しなかったが、床面から石斧(208)が出土した。



第55図　E地区遺構図

ＳＨ32　ＳＨ31を切る形で検出した。ほぼ同一場所で、テラス壁面に対してほぼ平行に建て替えが行われ、床面も同じレベルである。西側が流失し、全体の規模は不明であるが南北辺4.4ｍ×東西辺3.5ｍ以上の長方形プランと推定される。周壁は最も残存状態のよい東辺で壁高60cmを測る。周溝は幅10～15cm、深さ5cmを測り、現存部分をほぼ全周する。主柱穴は４個検出した。いずれも径30cm、深さ30cmを測る。床面中央部やや北寄りには径30cmの範囲で赤く焼けた部分が３カ所認められる。炉の痕跡と考えられるがＳＨ31のものと混在し、最も西側のものがＳＨ32に伴う可能性が高いと考えられる。

出土遺物　周溝内から壺と甕の体部細片がビニール袋１袋分出土したが、実測に耐えるものはなかっ

第56図　ＳＨ31～ＳＨ33、ＳＡ87～ＳＡ91実測図（１：100）

た。この他に、土器以外の遺物として石鏃(209)が床面から出土している。

ＳＨ33　Ｅテラス南端部に位置する。ＳＨ31を切る形で検出した。西側が流失し、全体の規模は不明であるが、南北辺3.1ｍ×東西辺2.5ｍ以上の方形プランと推定される。周壁は残存状態の最もよい東辺で壁高50cmを測る。周溝は幅20cm、深さ10cmを測り、現存部分を全周する。主柱穴や炉と考えられる遺構は検出されなかったが、東辺の南寄り周溝壁に僅かに焼土が認められた。

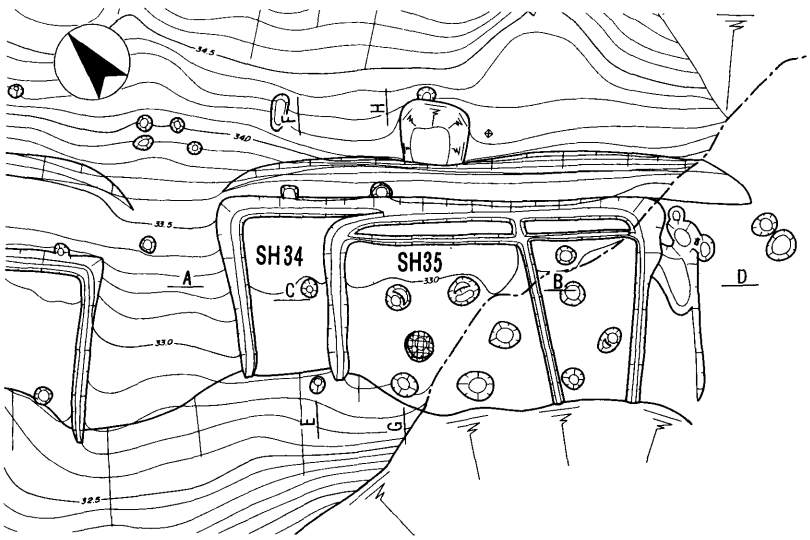
出土遺物　壺頸部を含む土器片がビニール袋１袋分出土したが、実測に耐えるものはなかった。

ＳＨ34　Ｅ地区の南東部に位置する。急な斜面を切り込んで造られた長さ７ｍのテラス上で、ＳＨ35に切られる形で検出した。テラスの長辺と平行する。西側が流失し、全体の規模は不明であるが、南北辺4.2ｍ×東西辺3.5ｍ以上で平行四辺形プランをもつ。周壁は最も残存状態のよい東辺で壁高50cmを測る。周溝は幅15cm、深さ６cmを測り現存部分を全周する。主柱穴は４個検出した。配置は外形を反映して平行四辺形プランをとり、いずれも径20～40cm、深さ25～40cmを測る。床面中央部やや南寄りには、焼土壁をもった深さ30cmの土坑を検出した。その位置から炉の痕跡と考えられる。

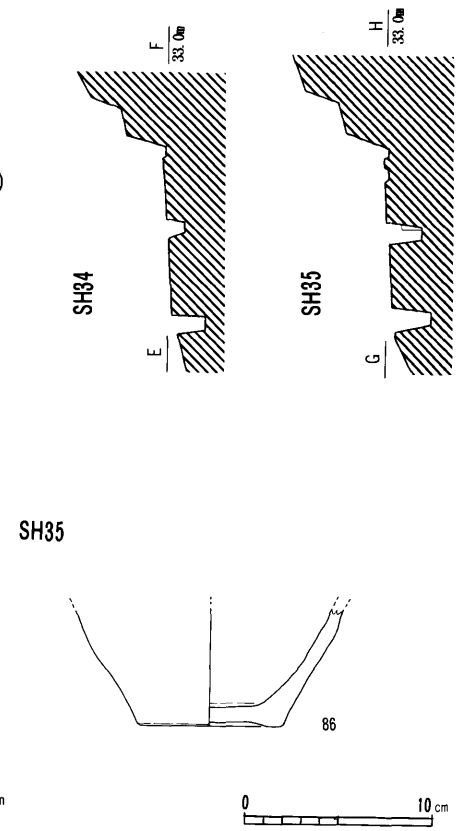
出土遺物　土器は出土しなかったが、床面から砥石(210)が出土した。

ＳＨ35　ＳＨ34を切る形で検出した。ほぼ同じ場所で東辺を揃えて建て替えを行っている。西側が流失し、全体の規模は不明であるが南北辺4.5ｍ×東西辺2.8ｍ以上の長方形プランと考えられる。周壁は最も残存状態のよい東辺で壁高50cmを測る。周溝は幅20cm、深さ8cmを測り、現存部分を全周する。東辺には内側にも周溝が巡り、拡張が行われたことが窺える。主柱穴は４個検出し、いずれも径30～40cm、深さ50cmを測る。床面のほぼ中央部では、埋土に灰を含むピットを検出した。炉に伴う施設と推定される。

出土遺物　コンテナ箱半分の量が出土した。大半が壺と甕の体部破片で、甕底部Ａ２(86)の他に実測に耐えるものはなかった。遺物の大半は埋土掘削途中の出土で、明らかに遺構に伴う遺物は見られない。



第57図　ＳＨ34・ＳＨ35実測図（１：100）



第58図　ＳＨ35出土遺物実測図（１：４）

Ｆ地区

Ｆ地区の概要　Ｄ地区の北側に位置する。東側半分を最大で比高差約４ｍ切り込んで平坦な地形を確保している。東西に細長い地区で、標高は30ｍ前後である。竪穴住居を７棟・柱列５条を検出した。竪穴住居は、一部重複するものの、基本的には東西方向に一列に配置されている。

ＳＨ36　Ｆ地区の東端部に位置し、単独で存在する。北西隅が撹乱を受けているが東西辺5.0ｍ×南北辺3.4ｍで長方形プランをもつ。周壁は、流失する北辺以外はよく残存し、南辺で壁高50㎝を測る。周溝は幅20㎝、深さ10㎝を測り、北西の撹乱部を除いてほぼ全周する。南辺には二重に、東辺には三重に周溝が巡り、拡張が行われたことを窺わせる。拡張前の周溝には北東隅から排水溝が東側に延びる。現存する主柱穴は拡張後の竪穴に伴うものであり、当初は主柱穴をもたなかった可能性がある。また、東辺では拡張前の周溝の途中に拡張後の周溝が取り付いていることから、拡張後も拡張前の周溝が機能していたことが窺われる。主柱穴は４個検出した。いずれも径40～50㎝、深さ70㎝を測る。床面中央やや東寄りには径40㎝と径20㎝の範囲で赤く焼けた部分が２か所認められた。炉の痕跡と考えられるが、北辺周溝の外側にも焼土が認められ、この部分は拡張後の床面であった可能性が高い。

出土遺物　コンテナ箱半分の量が出土した。大半が壺と甕の体部破片で、実測し得たのは壺体部Ａ７－1(87)のみである。(87)は器表が荒れ、僅かに櫛描横線文の痕跡を留める。他にＡ類の甕口縁や無頸壺の口縁の破片も見られ、遺物の大半は埋土掘削途中に出土したものである。

ＳＡ92　ＳＨ36の床面で検出したが、ＳＨ36との前後関係は不明である。ＳＨ36の南北辺にほぼ平行

第59図　Ｆ地区遺構図

する南北３間（2.1ｍ）の柱列で、柱間は0.7ｍの等間である。柱穴は径25㎝、深さ15～30㎝を測る。

ＳＨ37　ＳＨ36の西側に位置し、ＳＨ38に切られる形で検出した。長辺を等高線に直交させる形で配置されている。南北辺6.8ｍ×東西辺5.3ｍのやや平行四辺形に近い長方形プランをもつ。周壁は、ＳＨ36によって消滅した北西部を除きひじょうによく残存し、南壁で壁高80㎝を測る。周溝は幅20㎝、深さ７～10㎝を測り、現存部分を全周する。北東隅から長さ３ｍの排水溝が暗渠となって東側に延び、暗渠の部分は径40㎝を測る。主柱穴は４個検出した。いずれも径50㎝、深さ60㎝を測る。床面からは炉と考えられる遺構は確認できなかった。

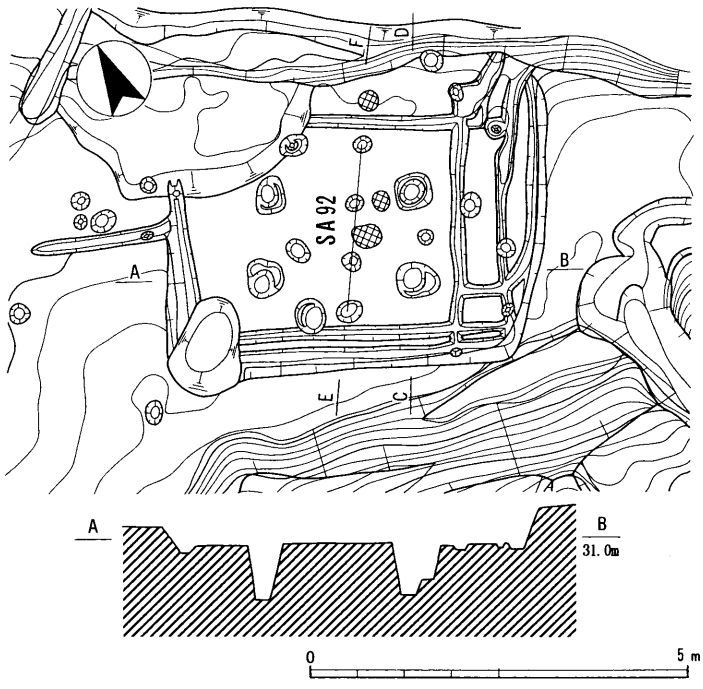
出土遺物　ビニール袋半分の量が出土したが、大半が土器の細片で実測に耐えるものはなかった。

ＳＨ38　ＳＨ37を切り、長辺を等高線に直交する形で検出した。北西隅が流失するが、南北辺5.6ｍ×東西辺4.4ｍの長方形プランをもつ。周壁は残存状態のよい東辺で壁高55㎝を測る。周溝は西辺と南辺の二辺にのみ巡り、南辺には拡張が認められる。周溝は幅10～15㎝、深さ8㎝を測る。主柱穴は４個検出した。いずれも径40㎝、深さ50～60㎝を測り、北側の柱穴２個は切り合い関係をもつ。床面中央北寄りには径40㎝の範囲で赤く焼けた部分が認められ、炉の痕跡と考えられる。焼けた部分の東端には長さ20㎝の細長い石が長辺と平行して据えられていた。

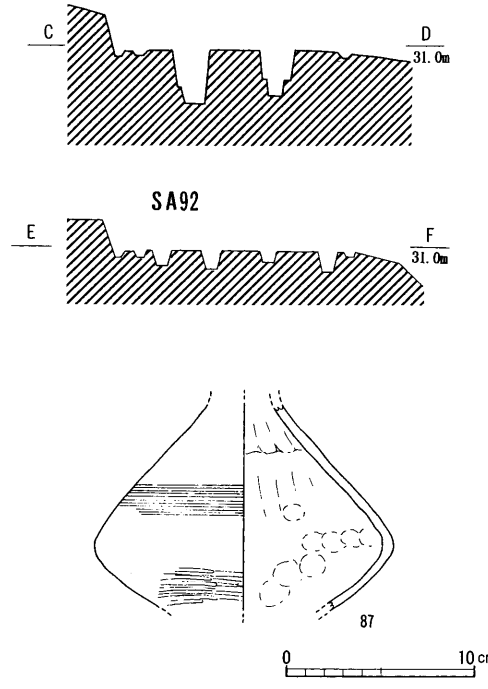
出土遺物　コンテナ箱半分の量が出土した。大半が壺と甕の底部や体部の破片である。壺Ｂ１－1a(88)、甕底部Ｂ４(89)がある。他に実測はできなかったがＡ４類の甕口縁部破片がある。(89)は甕底部として分類したが、焼成後に穿孔が成される。いずれも埋土掘削途中に出土したものである。土器以外の遺物として砥石(211)が床面から出土している。

ＳＨ39　ＳＨ38の北西に位置し、長辺を等高線に直交する形で配置されている。単独で存在し、北側が流失するが、南北辺5.2ｍ×東西辺4.5ｍで平行四辺形に近い長方形プランをもつ。周壁は残存状態のよい東辺で壁高45㎝を測る。周溝は幅15㎝、深さ5㎝を測り、流失した北辺を除いて全周する。主柱穴は４個検出した。いずれも径30～40㎝、深さ65㎝を測る。他にも２個のピットが存在するが、ひじょうに浅くその位置関係から掘削途中で放棄された主柱穴の可能性もある。床面中央北寄りには60㎝×40㎝の範囲で赤く焼けた部分が認められ、炉の痕跡と考えられる。

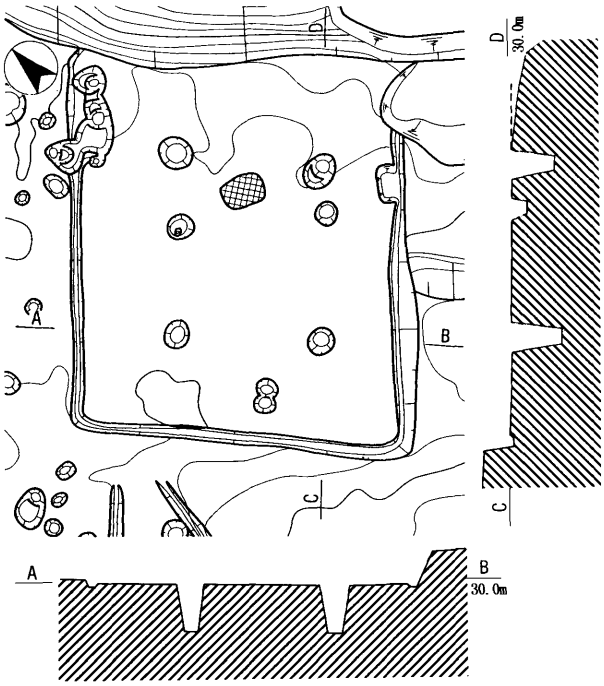
出土遺物　壺Ａ２(90)が東辺の周溝上から出土したのみである。器表が荒れ、調整・文様等は不明である。



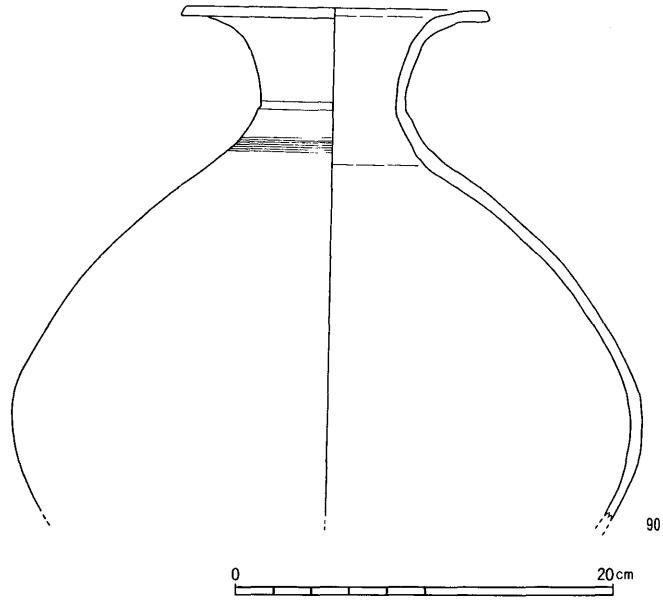
第60図　ＳＨ36・ＳＡ92実測図（１：100）



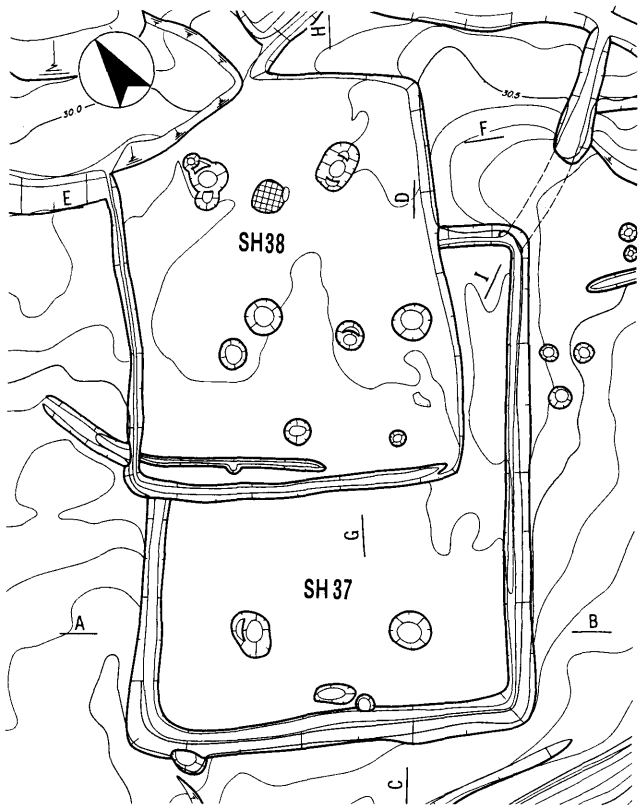
第61図　ＳＨ36出土遺物実測図（１：４）

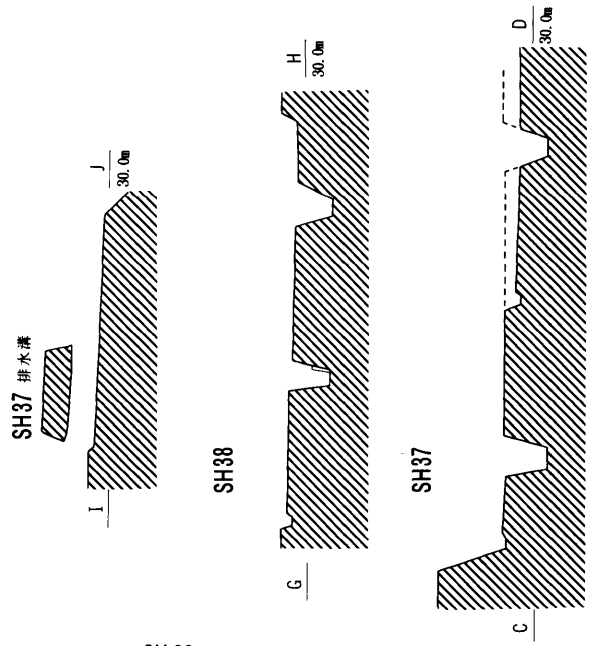


第62図　ＳＨ39実測図（１：100）

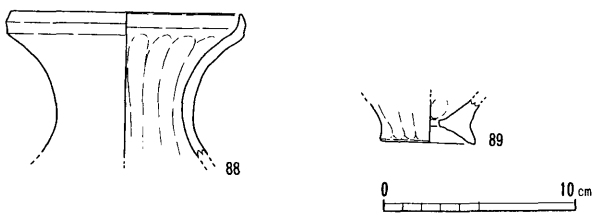


第63図　ＳＨ39出土遺物実測図（１：４）





第64図　ＳＨ37・ＳＨ38実測図（１：100）



第65図　ＳＨ38出土遺物実測図（１：４）

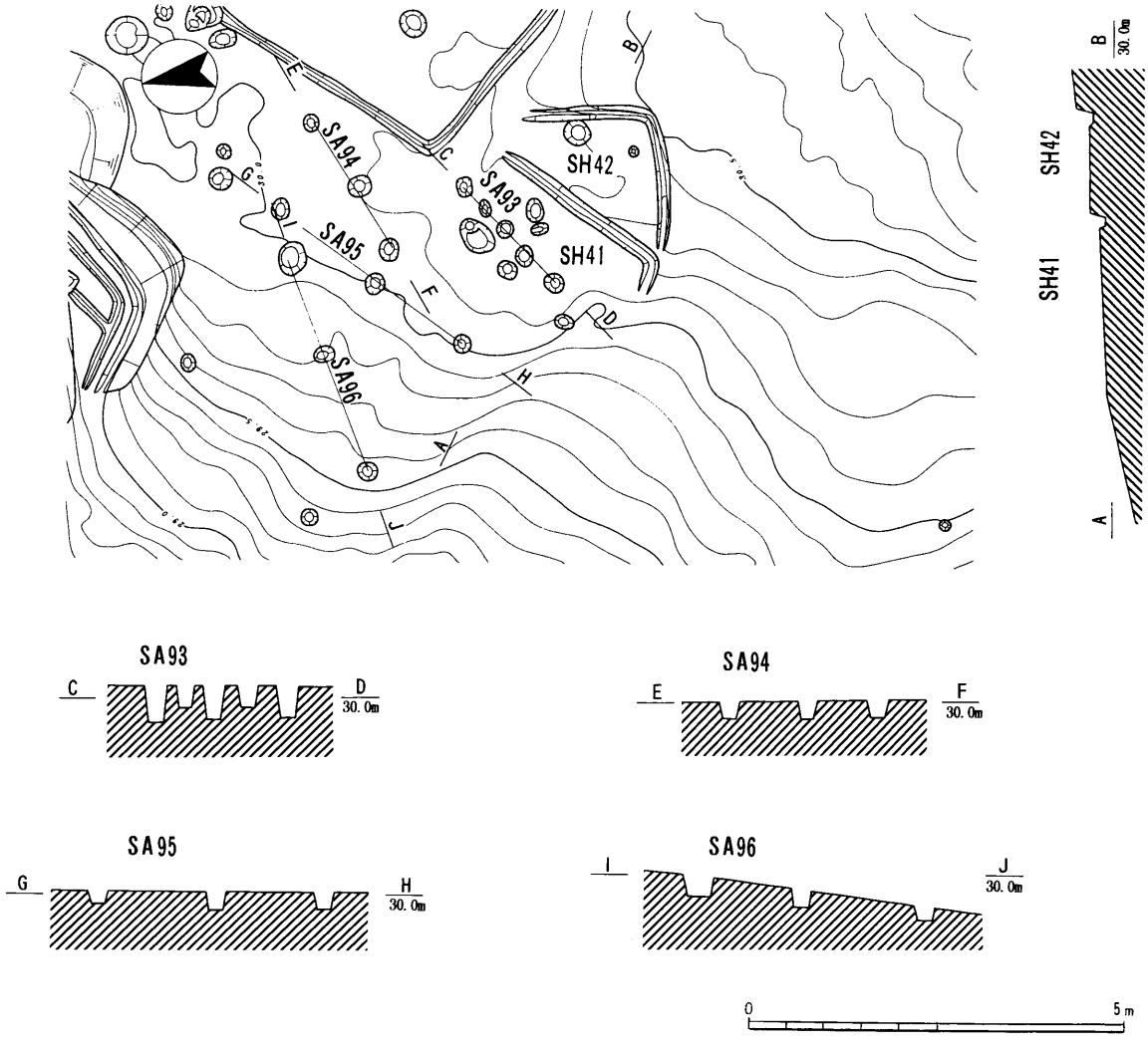
ＳＨ40　ＳＨ39の北西に位置し、ＳＨ56に切られる形で検出した。竪穴の南西隅が僅かに残存するのみである。東西辺４ｍ以上×南北辺2.5ｍ以上で、隅の角度がかなり開くことから平行四辺形に近い方形プランと推定される。周壁はよく残存し、南辺で壁高70cmを測る。周溝は、西辺で二重に、南辺では三重に巡り、数度の拡張が行われたことが推則される。南辺の当初の周溝には柱穴が認められ、壁柱穴の存在が考えられる。柱穴や炉は不明である。

出土遺物　ビニール袋１袋分の量が出土した。Ａ類・Ｂ類の壺の口縁部や甕の底部などが見られるが実測に耐えるものはなかった。

ＳＨ41　ＳＨ39の南側に位置し、辺の方向はＳＨ39の南北辺と同じである。ＳＨ42に切られる形で検出した。南西隅部が僅かに残存するのみである。東西辺2.7ｍ以上×南北辺（不明）で、方形プランと推定される。周壁は、南辺に壁高14cmほどが残存するに過ぎない。周溝は幅15cm、深さ8cmを測る。柱穴や炉などは不明である。遺物は出土しなかった。

ＳＨ42　ＳＨ39の南側に位置し、ＳＨ41を切る形で検出した。辺の方向は、ＳＨ41より約45度東に振っている。南東隅部が僅かに残存し、南北辺2ｍ以上×東西辺2ｍ以上で方形プランと推定される。周壁は東辺で壁高20cmを測る。周溝は幅14cm、深さ６cmを測る。柱穴や炉などは不明である。遺物は出土しなかった。

ＳＡ93　ＳＨ41の南北辺に対してわずかに斜めの方位をとる柱列である。南北４間（1.6ｍ）の小規



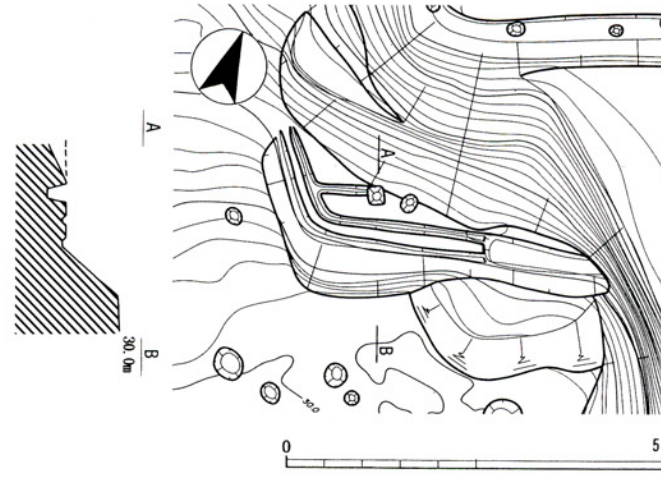
第66図　ＳＨ41・ＳＨ42・ＳＡ93～ＳＡ96実測図（１：100）

模な柱列で、柱間は0.4ｍの等間である。柱穴は、径20cm、深さ30cm～50cmを測る。

ＳＡ94　ＳＨ39の西側で検出した東西２間（2ｍ）の小規模な柱列で、柱間は１ｍの等間である。柱穴は、径20cm、深さ25cmを測る。

ＳＡ95　ＳＨ39の西側で検出した南北２間（3ｍ）の小規模な柱列で、ＳＨ39の南北辺にほぼ平行する。柱間は1.5ｍの等間である。柱穴は、径25cm、深さ25cmを測る。

ＳＡ96　ＳＨ39の西側斜面で検出した東西２間（3ｍ）の小規模な柱列で、柱間は1.5ｍの等間である。柱穴は、径30cm、深さ20cm～30cmを測る。

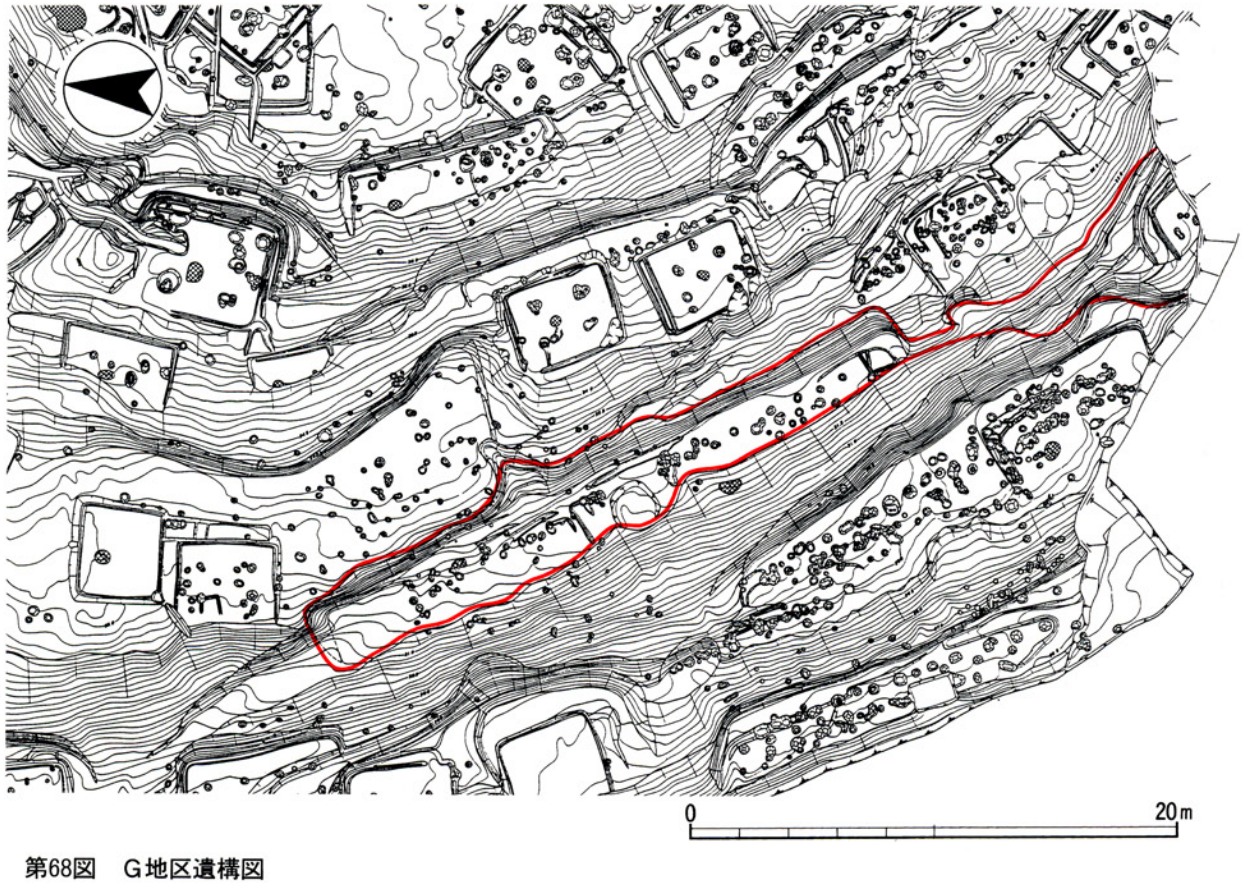


第67図　ＳＨ40実測図（１：100）

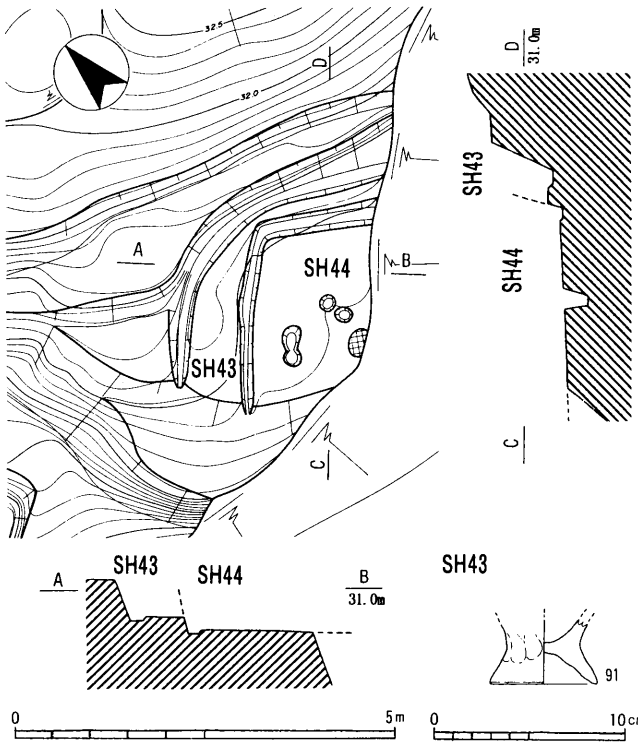
Ｇ地区

Ｇ地区の概要　調査区南側にあたり、Ｄ・Ｃ・Ｅ地区から一段下がった所に位置する。標高は30～32ｍである。急斜面を切り込んで造られた細長いＧテラスと、その南側に位置する竪穴住居２棟（ＳＨ43・ＳＨ44）より構成される。Ｇテラスで柱列８条を、西側の斜面では柱列１条を検出した。

ＳＨ43　Ｇ地区の南端部に位置し、南側及び西側が削り取られている。ＳＨ44に切られる形で検出した竪穴住居で、円形プランをもつ。全体の規模は不明であるが、直径5.5ｍ前後に復元できる。周壁はよく残存し、東側で壁高75cmを測る。周溝は現存部分を弧状に巡り、幅20cm、深さ８cmを測る。床面が



第68図　Ｇ地区遺構図



第69図　ＳＨ43･44実測図（1：100）　第70図　ＳＨ43出土遺物実測図（1：4）

ＳＨ44によって削られ、主柱穴や炉などは不明である。

出土遺物　ビニール袋１袋分の量が出土した。甕底部Ｃ(91)の他に、壺や甕の体部破片がある。(91)は台付甕の脚台部であるが、やや甕底部Ｂ４の面影を留めている。

ＳＨ44　ＳＨ43を切る形で検出した。南側と西側が削り取られ、全体の規模は不明である。東西辺2.5m以上×南北辺1.7m以上で、隅の角度がやや開く平行四辺形に近い方形プランと推定される。周壁はよく残存し、東辺の検出時で壁高90cmを測る。周溝は現存部分を全周し、幅15～20cm、深さ5cmを測る。床面にはいくつかのピットが存在するが規格性は見られない。床面の南縁辺部には40cm×20cmの範囲で赤く焼けた部分が認められ、炉の痕跡と考えられる。遺物は出土しなかった。

Ｇテラス　急斜面を等高線に沿って約80cm切り込んで造られたテラスで、長さ26m、最大幅3.1mを測る。中央部やや北寄りの所でＧテラスからＤテラスへ通じる通路状の部分をもつ。テラス北側で柱列２条（ＳＡ100・ＳＡ103)、中央で柱列１条（ＳＡ99)、南側で柱列５条(ＳＡ97･ＳＡ98･ＳＡ101・ＳＡ102・ＳＡ104）を検出した。また、南側の斜面でも柱列１条（ＳＡ105）を検出した。

ＳＡ97・ＳＡ98　テラス南側の壁寄りに位置する。この両柱列は柱筋を揃え、壁面にほぼ平行するが、柱穴の柱間と深さが異なるため、あえて別々に報告する。ＳＡ97は、南北２間（2.6m）の柱列で、柱間は1.3mの等間である。柱穴は径30cm、深さ55cmを測る。ＳＡ98は南北３間（3.3m）の柱列で、柱間は1.1mの等間である。柱穴は、径30cm、深さ40cmを測る。ＳＡ97の3.1m北側にも、柱筋を揃える２個の柱穴が存在することから、これらすべて一連の柱列として機能していた可能性がある。

ＳＡ99　テラス中央部の壁際に位置する。壁面に平行する南北３間（2.7m）の小規模な柱列で、柱間は0.9mの等間である。柱穴は径15cm、深さ20cmを測る。

ＳＡ100　テラス北側に位置する。壁面に平行する南北６間（6.6m）の柱列で、柱間は1.1mの等間である。柱穴は径30cm、深さ40～50cmを測る。

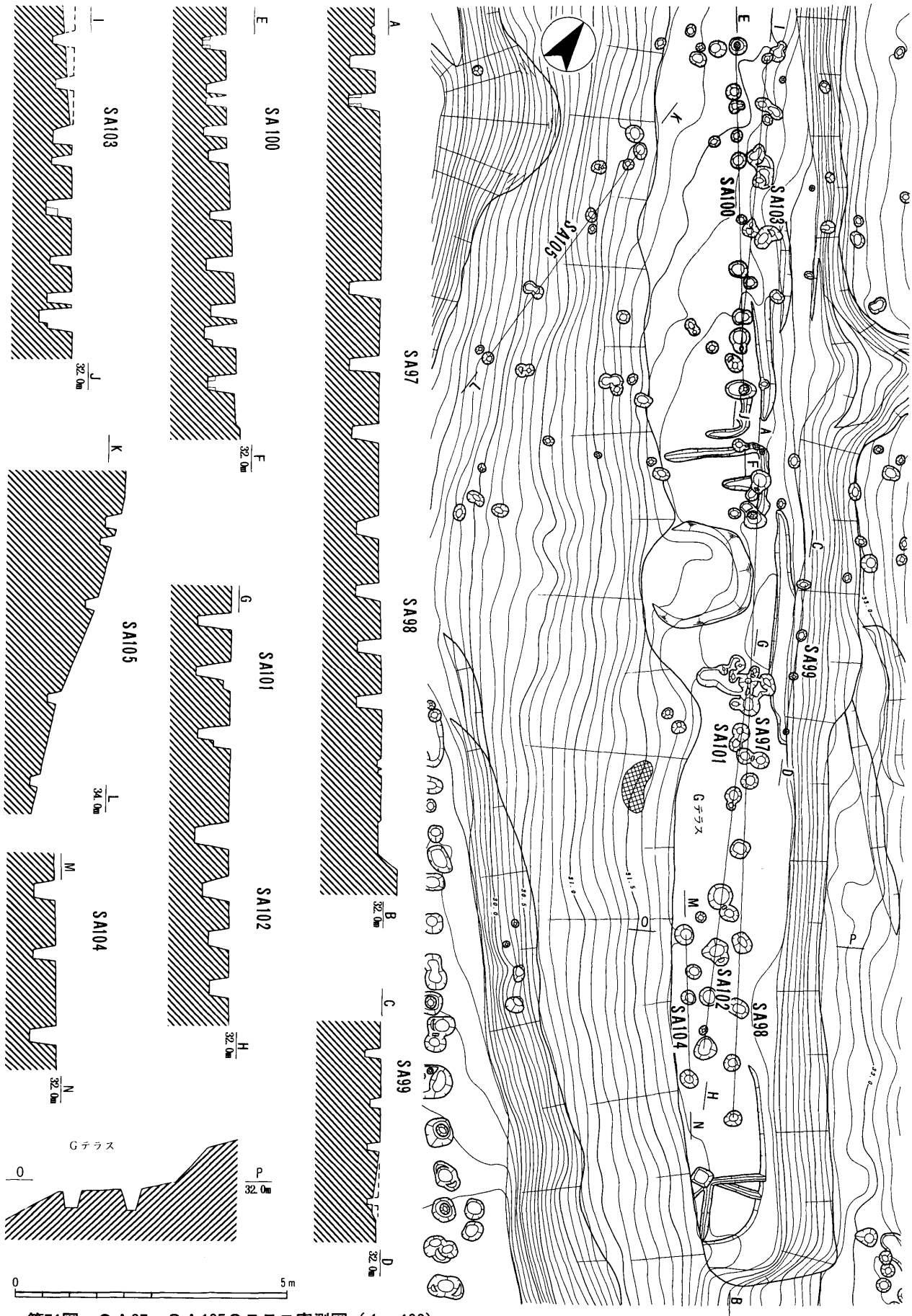
ＳＡ101　テラス南側に位置する。壁面に対してやや斜め方向をとる南北２間（2.2m）の柱列で、柱間は1.1mの等間である。柱穴は径30cm、深さ60cmを測り、ＳＡ102と柱筋を揃える。

ＳＡ102　テラス南側に位置し、ＳＡ101と柱筋を揃える南北３間（3m）の柱列で、柱間は１mの等間である。柱穴は径50cm、深さ30～60cmを測る。ＳＡ101と一連の柱列として機能した可能性がある。

ＳＡ103　テラス北側に位置し、壁面に対してやや斜め方向をとる。ＳＡ101・ＳＡ102とほぼ同じ方位をもつ南北６間（6m）の柱列で、柱間は１mの等間である。柱穴は径30cm、深さ40cmを測る。ＳＡ100と切り合うが前後関係は不明である。

ＳＡ104　テラス南側の縁辺部に位置する。壁に対してほぼ平行する南北２間（2.6m）の柱列で、柱間は1.1mと1.5mで不揃いである。柱穴は径39cm、深さ50cmを測る。

ＳＡ105　テラス北側の斜面で検出した。等高線に沿って斜め方向をとる南北３間（4.5m）の柱列で、柱間は1.5mの等間である。柱穴は径20cm、深さ20cmを測るが、それぞれ近くに別の柱穴が存在することから、ほぼ同一場所で造り替えを行っていることが認められる。斜面には、まだいくつかの柱穴が見られ、他にも柱列の存在が推測される。



第71図　ＳＡ97～ＳＡ105Ｇテラス実測図（１：100）

H地区

H地区の概要　調査区の南西部に位置する。G地区の一段下にあたり、標高は29mである。急斜面を深く切り込んで造られた大規模なテラス（H－2テラス）が、先行する北部の小規模なテラス（H－1テラス）を切る形で検出された。H－1テラスで柱列5条、H－2テラスでは竪穴住居1棟・掘立柱建物2棟・柱列11条を検出した。

H－1テラス　H地区の北端部に位置する。斜面を等高線に沿って直線的に長さ6m、深さ40cm切り込んで造られた小規模なテラスで、最大幅1.1mを測る。壁面に平行する柱列5条（SA106～SA110）と小規模な溝を検出した。

SA106　テラス北側に位置する。南北4間（2.8m）の小規模な柱列で、柱間は0.7mの等間である。柱穴は径40cm、深さ40cmを測る。

SA107　テラス南側に位置する。南北4間（2.8m）の小規模な柱列で、柱間は0.7mの等間である。柱穴は径40cm、深さ50cmを測る。SA106と柱筋を揃えることから、中央間を広く取った一連の柱列と考えられる。

SA108　テラス南側に位置する。SA107を切る形で検出した。南北2間（3m）の柱列で、柱間は1.5mの等間である。柱穴は径35cm、深さ35cmを測る。

SA109　テラス南側の縁辺部に位置する。南北2間（4m）の柱列で、柱間は2mの等間である。柱穴は径20cm、深さ20cmを測る。

SA110　テラス西側斜面に位置する。南北3間（6m）の柱列で、柱間は2mの等間である。柱穴は径20cm、深さ20cmを測る。

H－2テラス　急斜面を等高線に沿って深さ約2m切り込んで造られたテラスで、長さ20.5m、最大幅5.2mを測る。比較的規模の大きなテラスである。竪穴住居1棟（SH45）・掘立柱建物2棟（SB64・SB65）・柱列11条（SA111～SA121）を検出した。また、テラスの西斜面には多くの柱穴が存在することから、盛り土の流出を防ぐための杭列の存在も考えられる。

SA111　テラス北側で壁寄りに位置する。壁面に対してほぼ平行する南北11間(10.5m)の柱列で、柱間はほぼ1mの等間である。柱穴は径30～40cm、深さ50cmを測る。

SA112　SA111の約80cm西側に位置し、テラス壁面に対してほぼ平行する南北7間（8.1m）の柱列で、柱間は0.7～1.7mとかなり差がある。柱穴は径35cm、深さ20～60cmを測る。

SA113　テラス北部に位置する。壁面に対し、やや斜め方向をとる南北5間（5.5m）の柱列で、柱間は1.1mの等間である。柱穴は径40cm、深さ45cmを測る。

SA114　テラス北部に位置する。壁面に対して、ほぼ平行する南北5間（5m）の柱列で、柱間はほぼ1mの等間である。柱穴は径30cm、深さ45cmを測る。

SA115　テラス北側の最も西側の縁辺部に位置

第72図　H地区遺構図

する。壁面に対して、やや斜め方向をとり、ＳＡ113に平行する。南北３間（3.2ｍ）の小規模な柱列で、柱間は南側１間目が0.6ｍと狭く、その他は1.3ｍの等間である。柱穴は径25㎝、深さ40㎝を測る。

ＳＡ116　テラス中央部に位置する。壁面に対して斜め方向をとる南北３間（3.3ｍ）の柱列で、柱間は1.1ｍの等間である。柱穴は径25㎝、深さ20～35㎝を測る。

ＳＡ117　テラス南側に位置し、壁面に対してほぼ平行する。南北４間（3.6ｍ）の柱列で、柱間は北側１間目が1.2ｍと広く、他は0.8ｍの等間である。柱穴は径30㎝、深さ40㎝を測る。ＳＡ111と柱筋を揃えて配置されることから、柱穴の規模は異なるが一連の柱列として機能していた可能性がある。

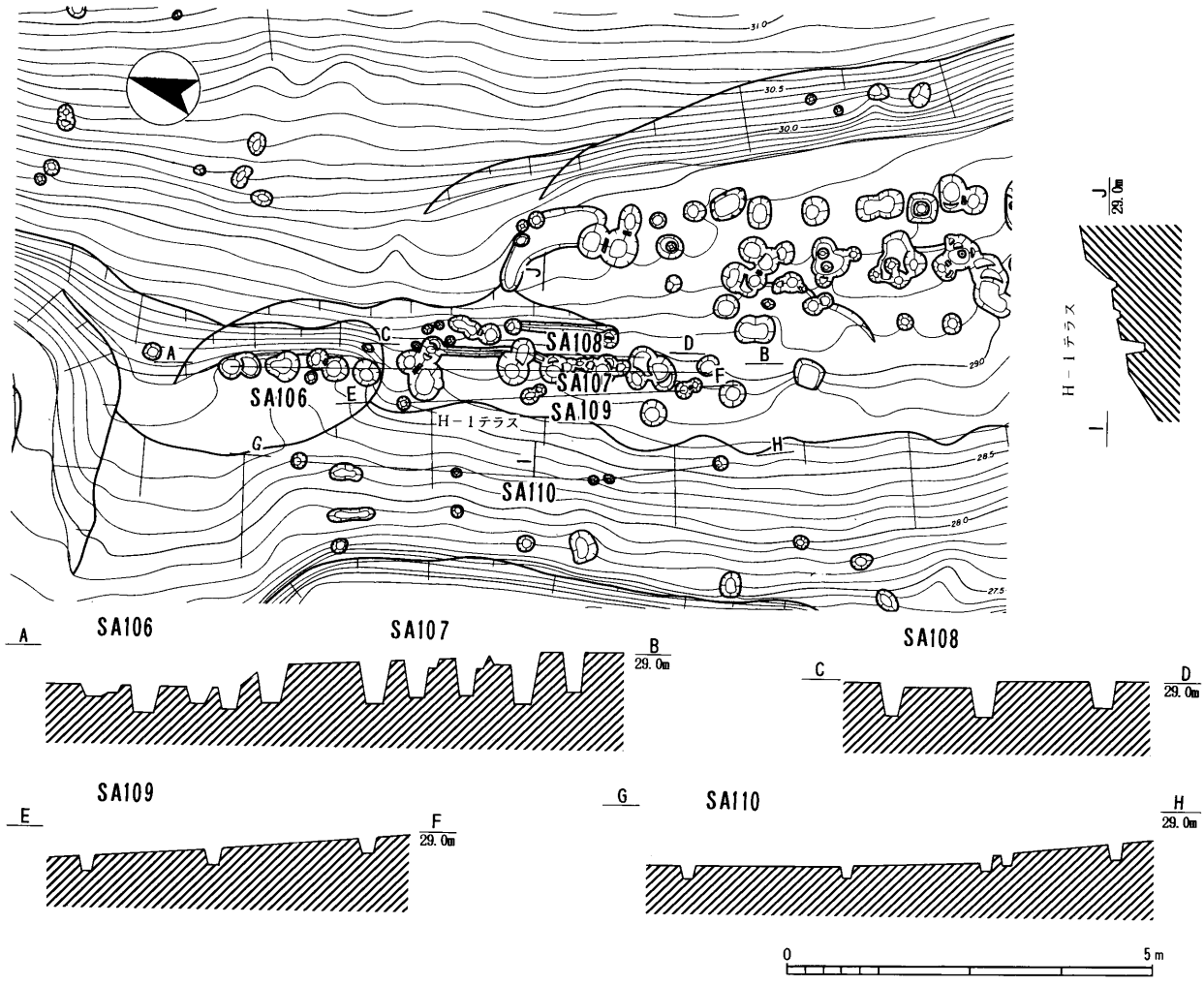
ＳＡ118　テラス南寄りの最も壁際に位置する。壁面に対してほぼ平行する南北３間（6.3ｍ）の柱列で、柱間は2.1ｍの等間である。柱穴は径35㎝、深さ35㎝を測る。

ＳＡ119　テラス南部でＳＡ118と同じ方向をとり重なるように位置する。南北２間（3.5ｍ）の小規模な柱列で、柱間は北側の１間目が２ｍと広く、２間目は1.5ｍで狭い。柱穴は径25㎝、深さ30㎝を測る。

ＳＡ120　テラス南寄りに位置する。壁面に対してほぼ垂直方向をとる東西２間(2.2ｍ）の小規模な柱列で、柱間は1.1ｍの等間である。柱穴は径25㎝、深さ30㎝を測る。ＳＡ119と直交し、柱穴の規模も等しいことから、Ｌ字形の柱列として機能していたと考えられる。

ＳＡ121　テラス南寄りの西側縁辺部に位置する。壁面に対してやや斜め方向をとる南北２間(2.8ｍ）の柱列で、柱間は1.4ｍの等間である。柱穴は径30㎝、深さ25㎝を測る。

ＳＨ45　テラス南端部に位置する。テラス壁面に対して長辺をほぼ平行し、掘立柱建物（ＳＢ64・Ｓ



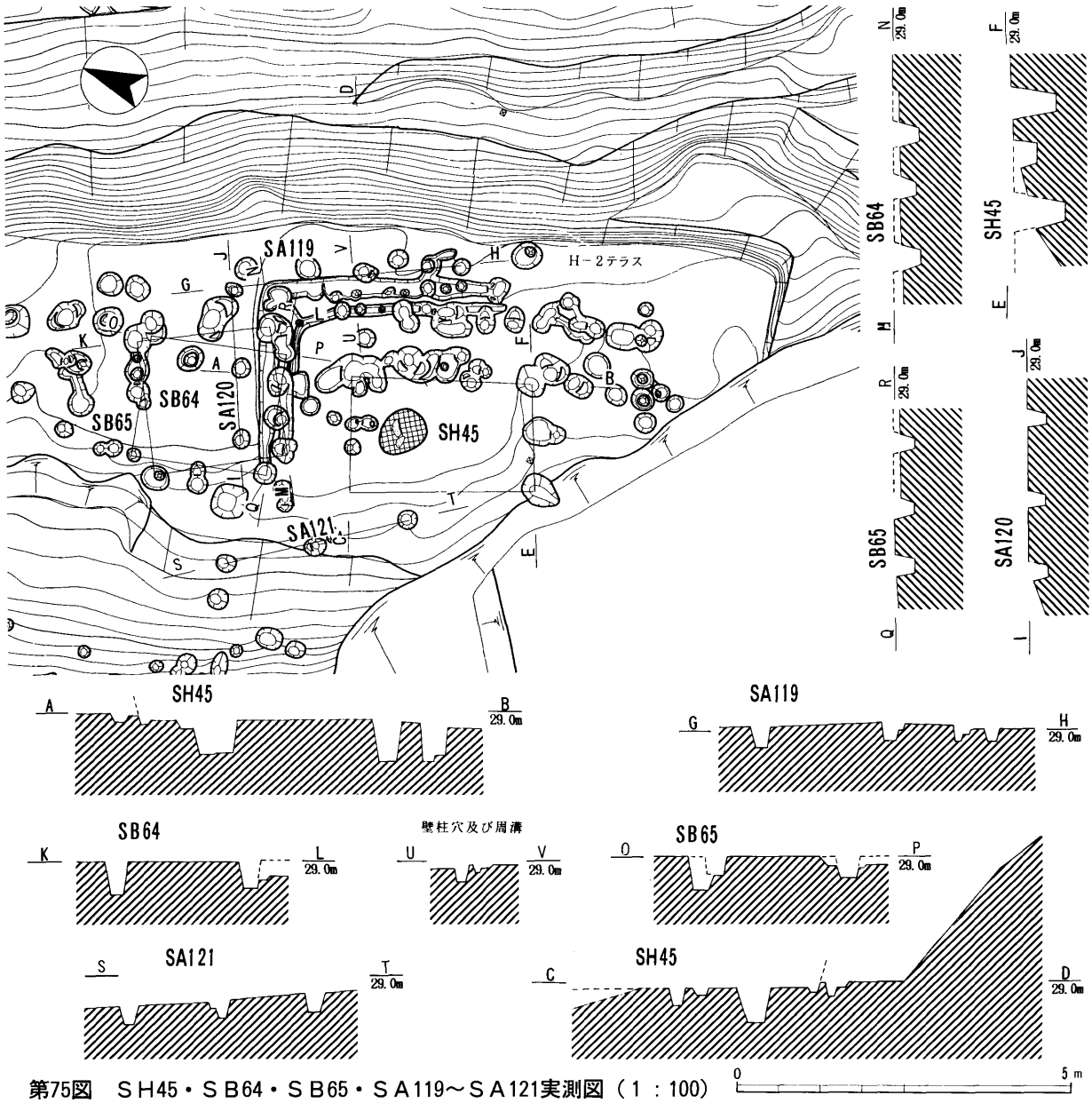
第73図　Ｈ－１テラス・ＳＡ106～ＳＡ110実測図（１：100）

第74図　Ｈ－２テラス・ＳＨ45・ＳＢ64・ＳＢ65・ＳＡ111～ＳＡ121実測図（１：100）

Ｂ65）と柱列（ＳＡ117・ＳＡ119）に切られる形で検出した。規模は、残存している周溝から南北辺3.1m以上×東西辺2.1m以上のやや隅丸長方形プランと推定される。周壁はほとんど残存していない。周溝は、現状では東辺と北辺に二重に巡る。内側の周溝は幅15cm、深さ8cmを測り、東辺には壁柱穴と考えられる小さな柱穴が並ぶ。外側の周溝は幅30cm、深さ10cmを測る幅の広いもので、東辺には８個の壁柱穴が並ぶ。主柱穴は３個検出した。いずれも径45cm、深さ60cmを測る。主柱穴は、当初は４個存在したと考えられるが、北西隅の柱穴は検出できなかった。床面中央やや北寄りには80cm×60cmの範囲で赤く焼けた部分が認められ、炉の痕跡と考えられる。焼けた部分のほぼ中央には、長さ40cmの細長い石が長辺に直交して据えられていた。遺物は出土しなかった。

ＳＢ64　テラスのほぼ中央部に位置する。桁行き２間×梁行き１間（1.9m×1.9m）の東西棟の小規模な建物である。梁行き側中央部には、やや外側にずれて柱穴が存在することから棟持柱建物の可能性もある。柱穴は径40cm、深さ40cmを測る。

ＳＢ65　ＳＢ64のほぼ同一場所での建て替えと考えられる。桁行き２間×梁行き１間（1.9m×2m）の東西棟の建物で、ＳＢ64と同じ規模である。梁行き側中央部には、外側に僅かにずれて柱穴が存在することからＳＢ64と同様に棟持柱建物の可能性もある。柱穴は径30cm、深さ30cmを測る。



第75図　ＳＨ45・ＳＢ64・ＳＢ65・ＳＡ119～ＳＡ121実測図（１：100）

Ⅰ地区

Ⅰ地区の概要　調査区の西側中央部に位置する。D・G地区の一段下のテラスにあたり、標高は29～30mである。調査の結果、北側で急斜面を大きく切り込んで造られたテラス（Ⅰ－1テラス）と柱列4条（SA122～SA125）・竪穴住居2棟（SH46・SH47）を、中央部では斜面を切り込んで造られたテラス（Ⅰ－2テラス）と柱列2条（SA126・SA127）・掘立柱建物1棟（SB66）を、SH46・47の西側斜面で小規模なテラス（Ⅰ－3テラス）を、南部では竪穴住居3棟（SH48～SH50）をそれぞれ検出した。

Ⅰ－1テラス　Ⅰ地区北端部に位置する。急斜面を等高線に沿って長さ約15m、深さ約1.2m切り込んで造られたテラスで、西側が流失するが最大幅4.4mを測る。中央部で柱列2条（SA122・SA123）、北側で小規模な柱列2条（SA124・SA125）、南側で竪穴住居2棟（SH46・SH47）を検出した。

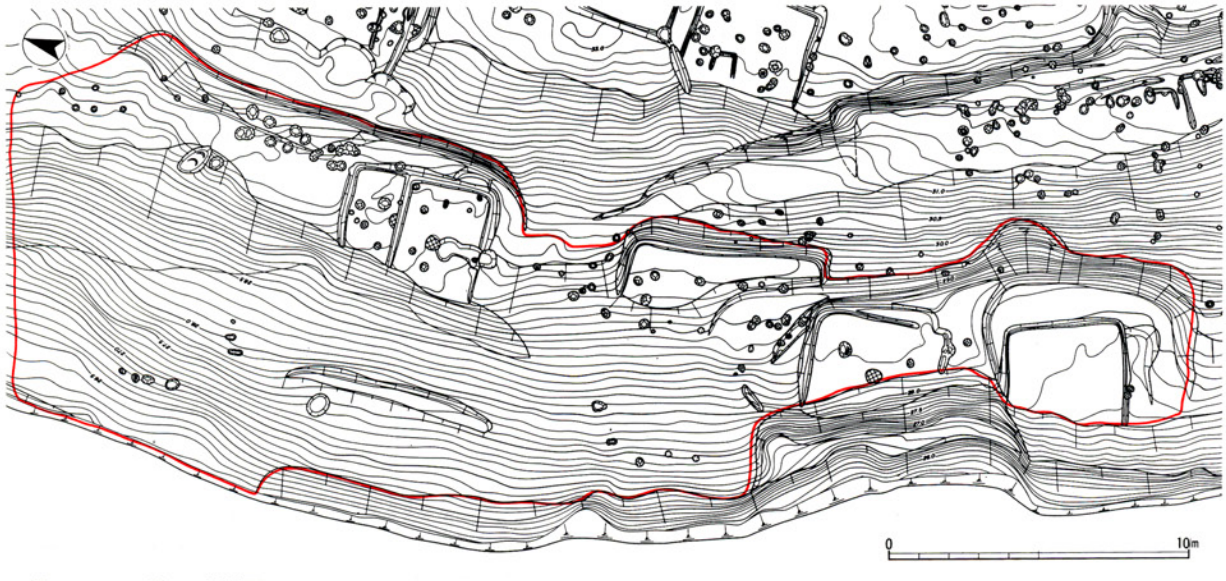
SH46　Ⅰ－1テラス南端部に位置し、SH47に切られる形で検出した。西側が流失するため、全体の規模は不明であるが、東西辺4.0m以上×南北辺3.3mの長方形プランと推定され、長辺が等高線に対して直交する方位をとる。周壁は、東辺と南辺がよく残存し、壁高40cmを測る。周溝は、西辺部と南辺の一部で検出できなかったがそれ以外は全周し、幅20cm、深さ6～10cmを測る。床面にはいくつかのピットが存在するが、規格性は見られず、主柱穴は不明である。床面中央部やや北西寄りに径50cmの範囲で赤く焼けた部分が認められ、炉の痕跡と考えられる。

出土遺物　コンテナ箱1／3程度の量が出土した。甕底部A1(93)の他、壺と甕の体部破片があり、いずれも埋土掘削中に出土したものである。土器以外の遺物として石斧(212)が出土している。

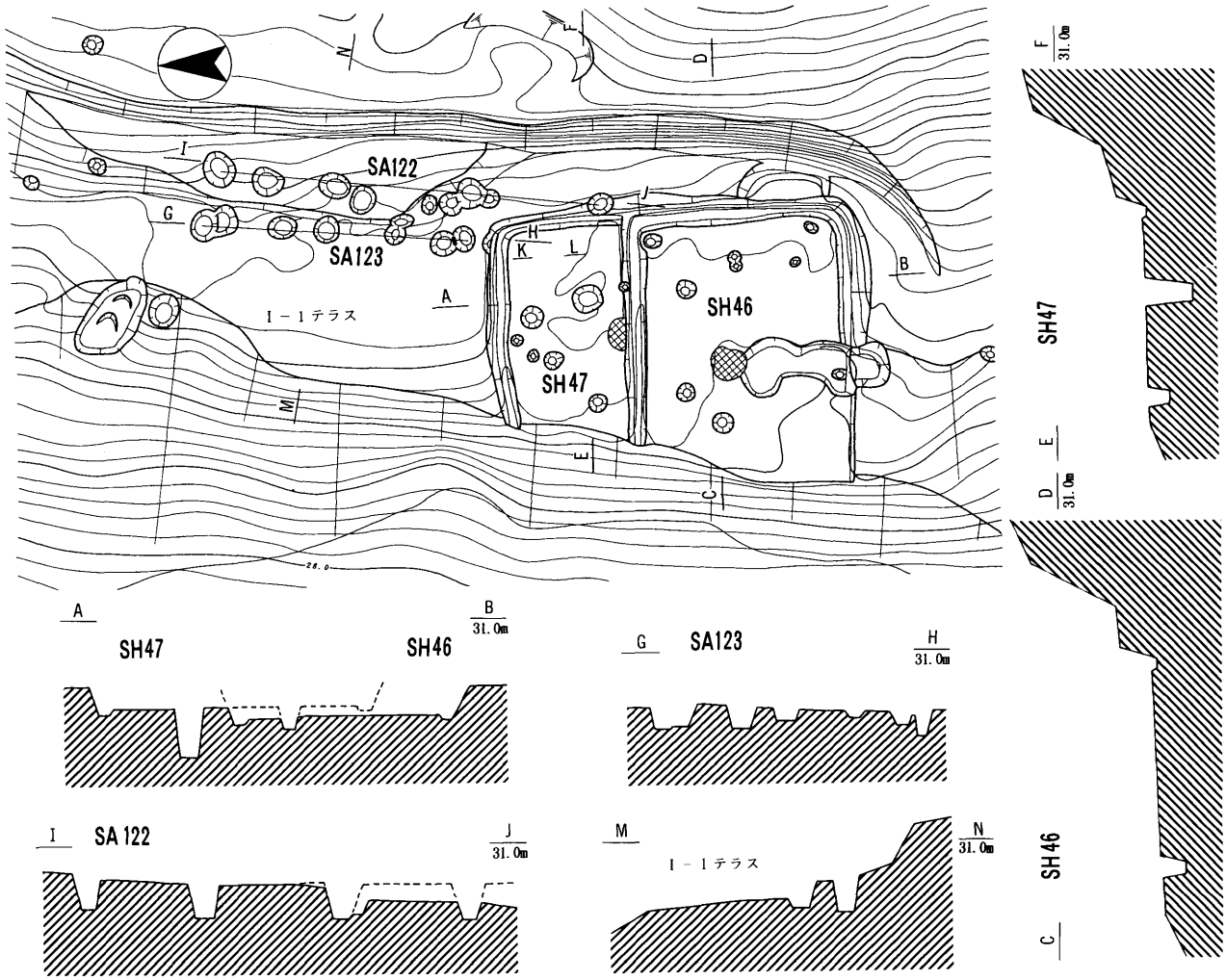
SH47　SH46と重複し、東辺を揃えほぼ同じ場所で建て替えが行われている。SH46を切る形で検出した。西側が流失のため、全体の規模は不明であるが、東西辺4.0m以上×南北辺4.1mの正方形に近いプランと推定される。周壁は、西側以外よく残存し、壁高40cmを測る。周溝は、現存部を全周し、幅25cm、深さ10cmを測る。主柱穴は4個検出し、径25cm、深さ30cmを測るが、北東部の柱穴のみ他より規模が大きく、径40cm、深さ65cmを測る。床面中央やや北寄りには、径50cmの範囲で赤く焼けた部分が認められ、炉の痕跡と考えられる。

出土遺物　コンテナ箱1箱分の量が出土した。壺B2(92)は大型の太頸壺で口縁部を欠く。頸部接合部には刻みを入れた貼り付け突帯が巡る。他に若干の小型の壺や甕A4類の破片が出土している。(92)は床面から押しつぶされた状態で出土したものである。

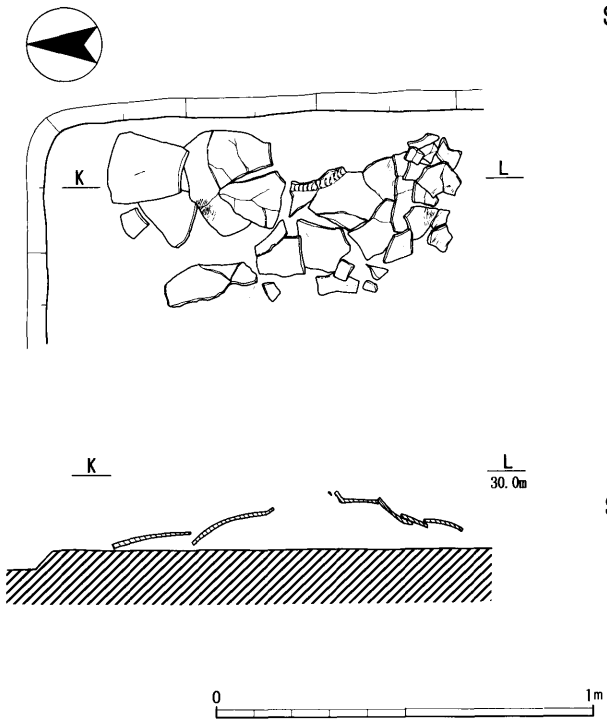
SA122　テラス中央部に位置し、テラスの東壁面



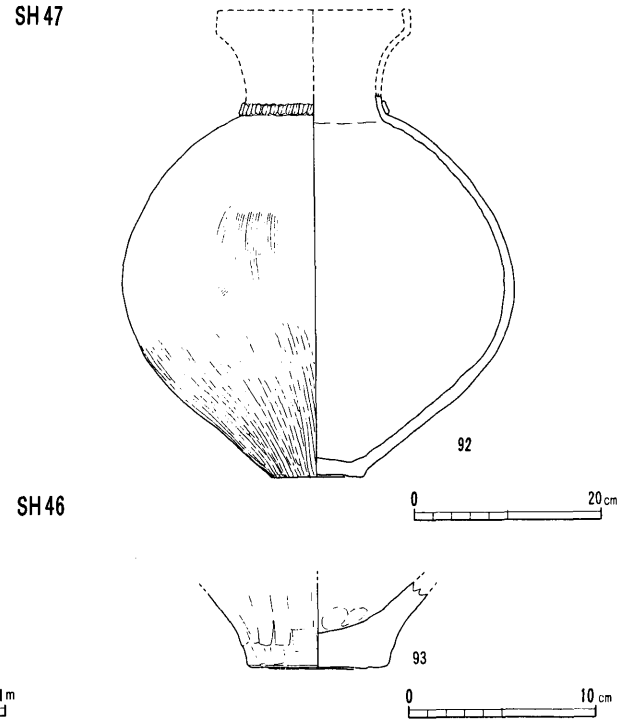
第76図　Ⅰ地区遺構図



第77図　ＳＨ46・ＳＨ47・ＳＡ122・ＳＡ123実測図（１：100）



第78図　ＳＨ47遺物出土状況図（１：20）



第79図　ＳＨ46・ＳＨ47出土遺物実測図（１：４）（１：８）

に平行する。ＳＨ46に切られ全体の規模は不明であるが、南北３間（5.4ｍ）分を検出した。柱間は1.8ｍの等間である。柱穴は径40cm、深さ40cmを測る。

ＳＡ123　テラス中央部でＳＡ122に平行する。ＳＨ47に切られ全体の規模は不明であるが、南北４間（3.6ｍ）分を検出した。柱間はほぼ0.9ｍの等間である。柱穴は径35cm、深さ20～30cmを測る。

ＳＡ124　テラス北端部の斜面に位置する。南北３間（4.9ｍ）の柱列で、柱間は1.1ｍ～2.3ｍと差が大きい。柱穴は小さく径20cm、深さ15cmを測る。

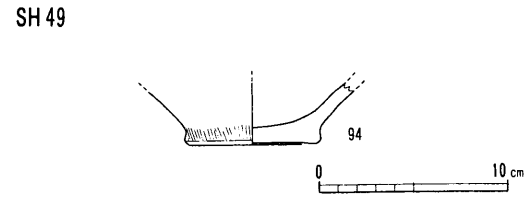
ＳＡ125　テラス北端部でＳＡ124と平行する。南北４間（4.3ｍ）の柱列であるが、並びも柱間も不揃いである。柱穴の規模はＳＡ124と同じである。

ＳＨ48　Ｉ地区の南側に位置する。ほとんど同じ場所で建て替えが行われ、ＳＨ49に切られる形で検出した。南東部がわずかに残存するのみで南北辺3.2ｍ以上×東西辺0.7ｍ以上の方形プランと推定される。周壁は東辺部で25cmを測る。周溝や主柱穴などは検出されなかったが、南東隅の床面からは60cm×30cmの範囲で灰が検出された。

出土遺物　甕の破片が若干出土したのみである。

ＳＨ49　Ｉ－２テラスとＳＨ48を切る形で検出した。西側が流失するため全体の規模は不明であるが、南北辺4.8ｍ×東西辺3.7ｍ以上の方形プランと推定される。周壁は最も残存状態のよい北辺で壁高50cmを測る。周溝は幅15～25cm、深さ10cmを測り、東辺の南端で僅かに途切れるが、それ以外は現存部を全周する。主柱穴は２個検出し、径30～40cm、深さ60cmを測る。床面の西縁辺部中央には60cm×45cmの範囲で赤く焼けた部分が認められ、炉の痕跡と考えられる。

出土遺物　壺や台付甕の細片がビニール袋に半分程度出土した。底部Ｂ２(94)は、立ち上がりの角度が緩やかなことから壺の底部と判断した。土器以外の遺物として、不明石製品（敲石？）(213)があり、遺物はいずれも埋土掘削途中に出土したものである。

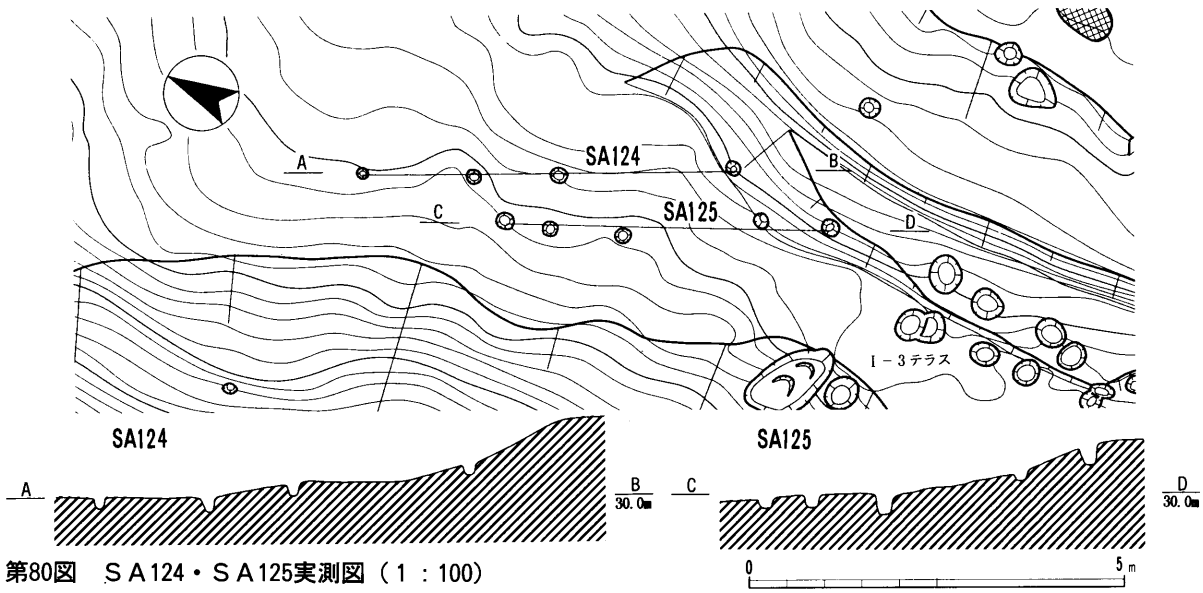


第81図　ＳＨ49出土遺物実測図（１：４）

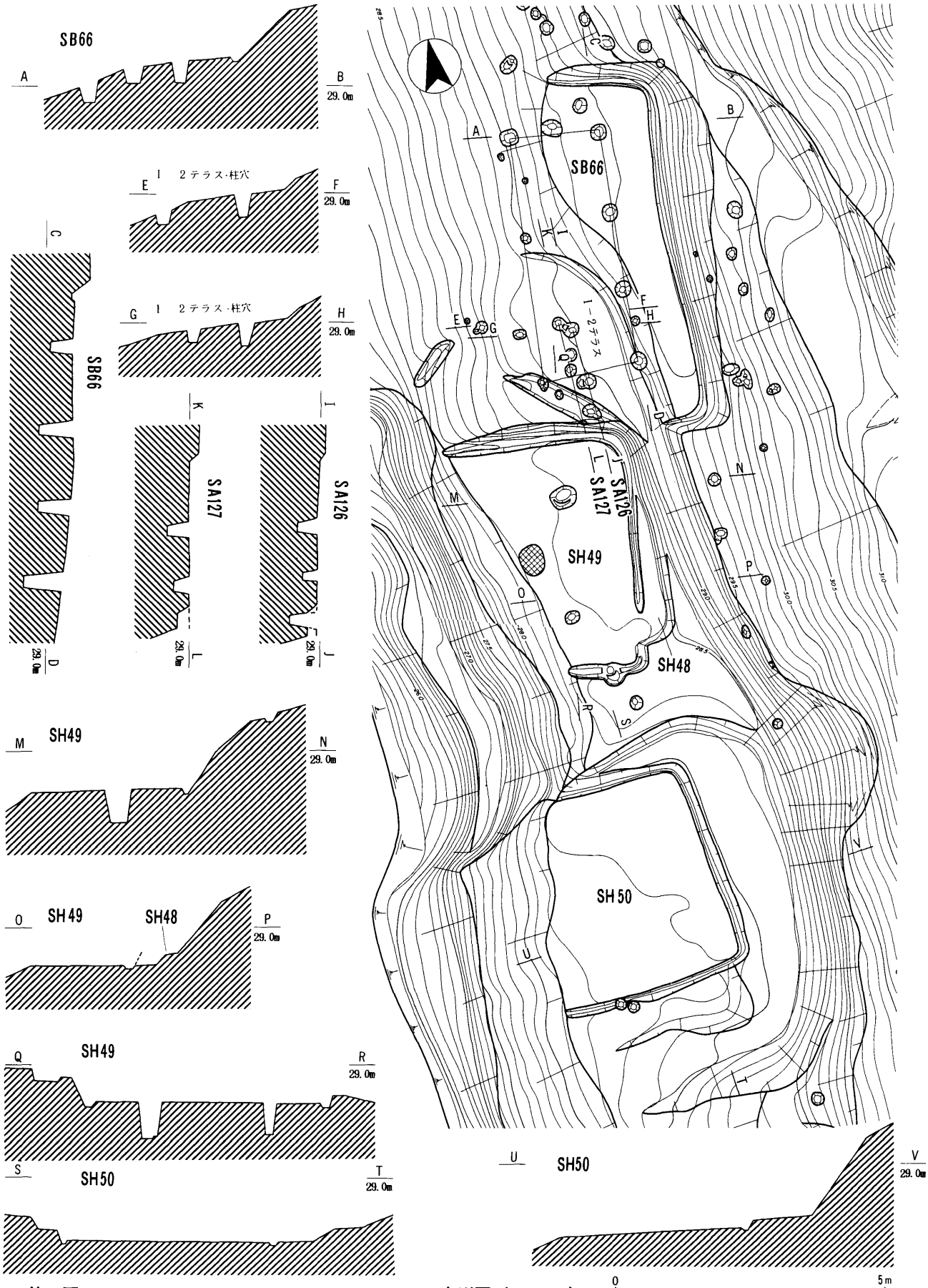
ＳＨ50　Ｉ地区の南端に位置し、ＳＨ49の南側に単独で存在する。辺の方向はＳＨ48とほぼ同じである。西側が流失するため、全体の規模は不明であるが南北辺4.3ｍ×東西辺3.5ｍ以上で方形プランと推定される。周壁は、最も残存状態よい北辺と東辺で壁高20cmを測る。周溝は幅10～15cm、深さ５～10cmを測り、現存部を全周する。主柱穴や炉などは検出されなかった。

出土遺物　ビニール袋半分の量が出土した。大半が壺の底部か体部の破片である。

ＳＢ66　Ｉ地区中央部に位置する。急斜面を等高線に沿って長さ6.9ｍ、深さ0.9ｍ切り込んで造られたテラスに建つ掘立柱建物である。西側が流失する



第80図　ＳＡ124・ＳＡ125実測図（１：100）



第82図　ＳＨ48～ＳＨ50・ＳＢ66・ＳＡ126・ＳＡ127実測図（１：100）

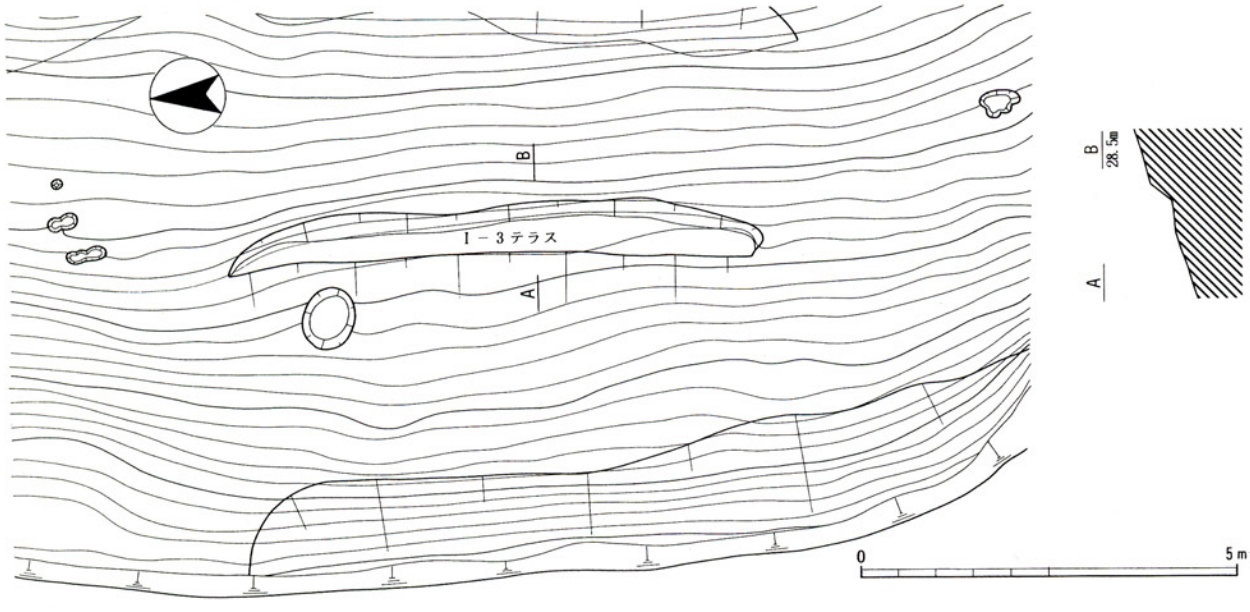
が桁行き３間×梁行き１間（4.5ｍ×1.7ｍ）の南北棟の建物で、桁行きは1.5ｍの等間である。梁行き中央に、外側に僅かにずれる棟持柱をもつ建物である。柱穴は径30㎝、深さ40～70㎝を測る。なお、テラス部分は規模・構造とも竪穴住居と同じ様相を呈し、幅15㎝、深さ8㎝を測る周溝が現存部を全周する。

Ｉ－２テラス　Ｉ地区中央部に位置する。ＳＢ66を切る形で検出した。ＳＨ49に切られるため全体の規模は不明であるが、等高線に沿って長さ3.7ｍ以上、深さ約30㎝切り込んで造られたテラスで、最大幅は現状で1.5ｍを測る。柱列２条（ＳＡ126・ＳＡ127）と溝を検出した。

ＳＡ126　ＳＨ49に切られるため全体の規模は不明であるが、西側壁面にほぼ平行する柱列で、南北１間（１ｍ）分を検出した。柱穴は径30cm、深さ40㎝を測る。

ＳＡ127　ＳＨ49に切られるため全体の規模は不明であるが、ＳＡ126とほぼ平行する。南北２間（1.8m）分を検出した。柱間は0.9ｍの等間である。柱穴は径25㎝、深さ30～50㎝を測る。

Ｉ－３テラス　ＳＨ46•47の斜面下に位置する。急な斜面を等高線に平行して長さ７ｍ、深さ約30㎝切り込んで造られた小規模なテラスで、幅30～50㎝を測る。柱穴や溝等は検出されなかった。



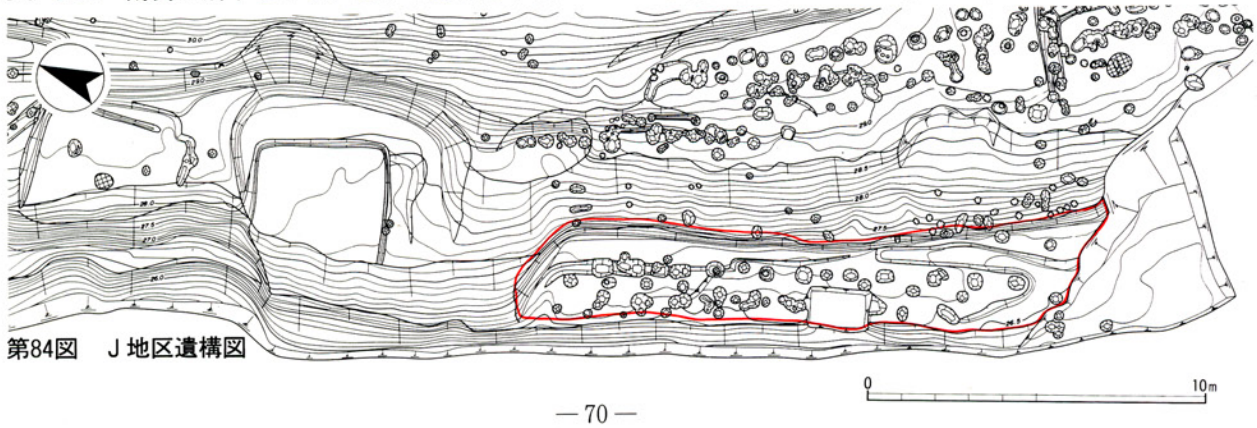
第83図　Ｉ－３テラス実測図（１：100）

Ｊ地区

Ｊ地区の概要　調査区の南西隅に位置する。Ｈ地区の一段下のテラス（Ｊテラス）で、標高は27ｍである。柱列を５条（ＳＡ128～ＳＡ132）検出した。

Ｊテラス　南側が削平をうけ、全体の規模は不明であるが、斜面を等高線に沿って直線的に17m以上、深さ50㎝切り込んで造られたテラスで、最大幅2.5ｍを測る。

ＳＡ128　Ｊテラスの最も壁寄りに位置し、壁面に



第84図　Ｊ地区遺構図

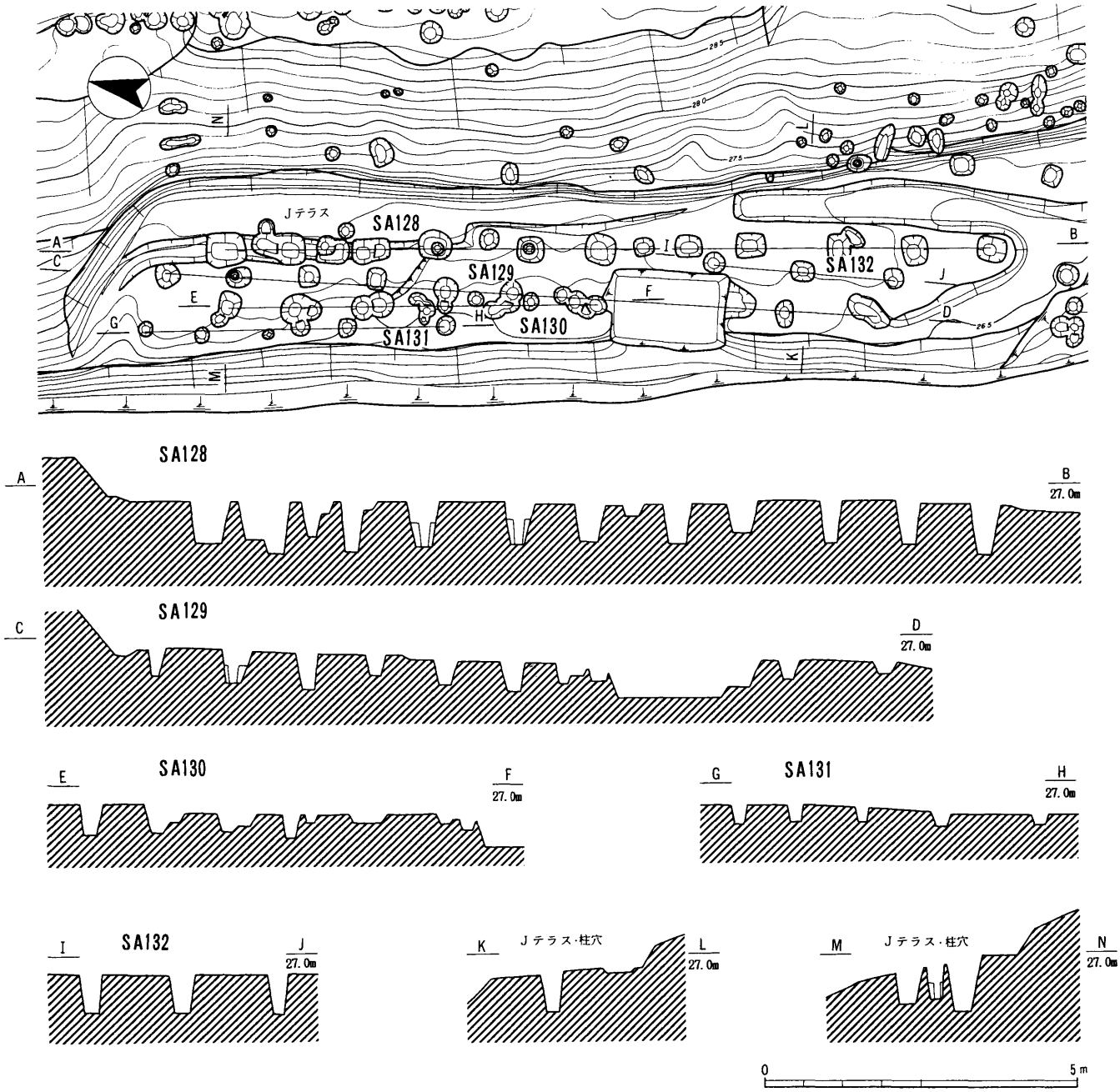
対してほぼ平行する。南北10間（12.5ｍ）の大規模な柱列で、柱間は北から７間目が１ｍと狭く、その他は、ほぼ1.2ｍの等間である。柱穴は一辺40～50㎝の方形で、北端部では布堀状を呈する。

ＳＡ129　壁面に対してやや斜め方向をとる。南北10間（11.8ｍ）の柱列である。柱間は1.2ｍの等間である。柱穴は径35㎝、深さ30～60㎝を測る。

ＳＡ130　壁面に対してほぼ平行する。撹乱のため全体の規模は不明であるが、南北５間（6ｍ）分を検出した。柱間は、1.2ｍの等間である。柱穴は径30㎝、深さ30～50㎝を測る。

ＳＡ131　テラス北側縁辺部に位置し、壁面に対してほぼ平行する。南北４間（4.8ｍ）の小規模な柱列で、柱間は0.9～1.6ｍと差が大きい。柱穴は径30㎝、深さ30㎝を測る。

ＳＡ132　テラス南側に位置し、壁面に対して僅かに斜め方向をとる。南北２間（3ｍ）の小規模な柱列で、柱間は1.5ｍの等間である。柱穴は径35㎝、深さ60㎝を測る。



第85図　Ｊテラス・ＳＡ128～ＳＡ132実測図（１：100）

K地区

K地区の概要　調査区北西隅に位置する。F地区の一段下にあたり、標高は26mである。今回の調査で竪穴住居7棟（SH51～SH57）・柱列6条（SA133～SA138）・溝などを検出した。大型の竪穴住居（SH56）のまわりに小型の竪穴住居が配置され、小型の竪穴住居は、ほぼ同一場所で2～3回の建て替えを行っている。

SA133　竪穴住居に先行する南北2間（4m）の柱列で、柱間は2mの等間である。南端で直角に曲がり逆L字形を呈する。西側が流失するため、掘立柱建物の可能性もある。柱穴は径30cm、深さ25～50cmを測る。等高線に沿って平行に配置されている。

SA134　竪穴住居に先行し、SA135を切る形で検出した。SA133と平行に配置された南北3間（3.9m）の柱列で、柱間は1.3mの等間である。柱穴は径40cm、深さ60cmを測る。

SA135　南北3間(4.8m）の柱列で、柱間は1.6mの等間である。柱穴は径30cmを測る。SA133・SA134とは方向がやや異なる。

SH51　K地区南端の緩斜面に位置する。SH52に切られ、柱列（SA133・SA134・SA135）を切る形で検出した。西側が流失し、全体の規模は不明であるが南北辺4.8m×東西辺1.7m以上の方形プランと推定される。周壁は最も残存状態のよい東辺と北辺で壁高20cmを測る。周溝は北辺と南辺にわずかに痕跡を留める程度である。床面には柱穴がいくつか見られるものの、主柱穴としてはまとまらない。また、床面がSH52によって削平をうけているため炉などは検出されなかった。

出土遺物　壺の体部破片がビニール袋1袋分程度出土したのみである。

SH52　SH51を切る形で検出した。ほぼ同一場所で建て替えを行っている。西側が流失し、全体の規模は不明であるが南北辺4.1m×東西辺3.1m以上

第86図　K地区遺構図

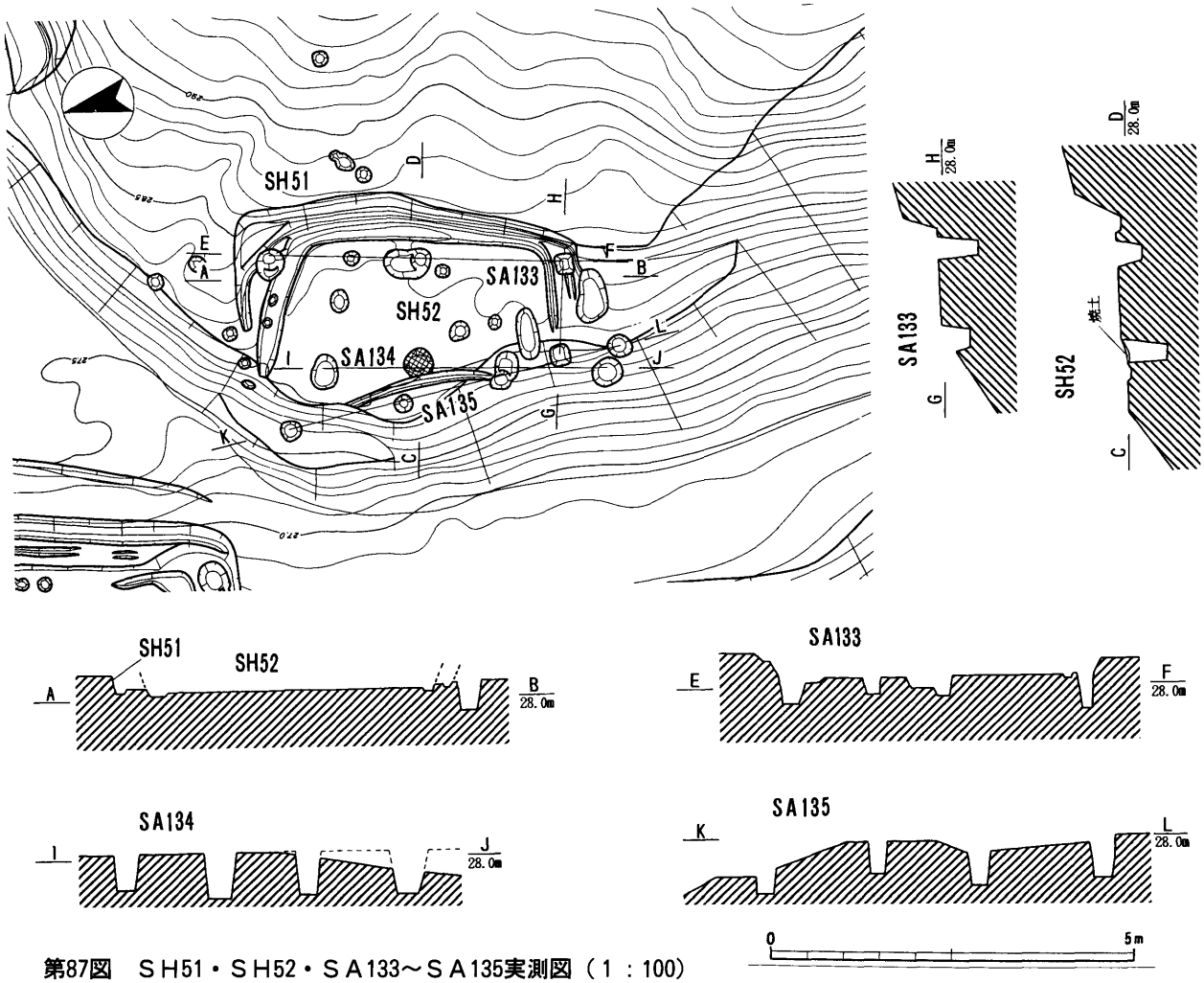
の方形プランと推定される。周壁は最も残りのよい東辺で50cmを測る。周溝は残存部を全周し、幅15～30cm、深さ5cmを測る。ピットはいくつか存在するが規格性は見られず、主柱穴は不明である。床面の中央西寄りには、径40cmの範囲で赤く焼けた部分が認められ炉の痕跡と考えられる。床面の西縁辺部には弧状の周溝が見られるが、円形プランをもつ別の竪穴住居に伴う可能性もある。

出土遺物　壺体部破片がビニール袋1袋程度出土したのみである。

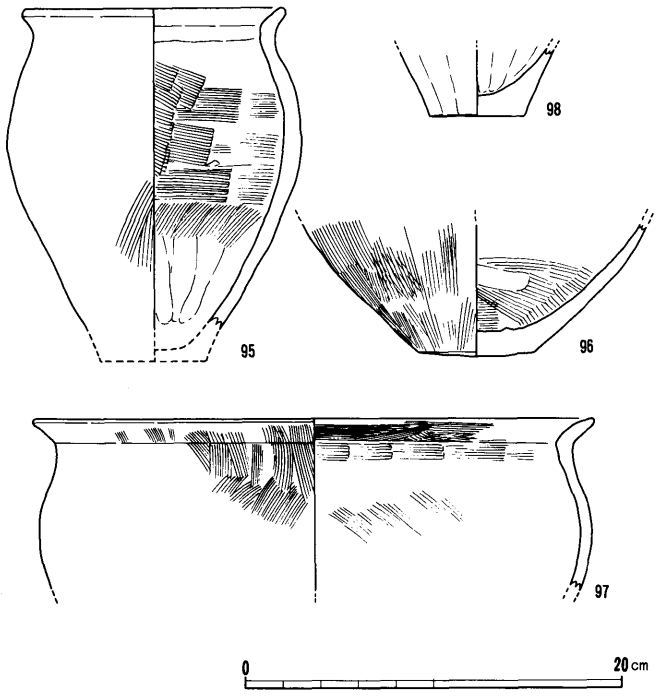
ＳＨ53　ＳＨ52から北西の一段下がった場所に位置する。同じ場所で拡張を繰り返す3棟（ＳＨ53・ＳＨ54・ＳＨ55）の中で最も規模が小さい。ＳＨ54に切られる形で検出した。西側が流失し、全体の規模は不明であるが南北辺3.2m×東西辺2.2m以上の方形プランと推定される。周壁は、ＳＨ54による削平のため存在しない。周溝は、現状では幅15cm、深さ6cmを測り、現存部を全周する。ピットはいくつか存在するが主柱穴としてはまとまらない。床面から炉の痕跡は検出できなかった。

出土遺物　ビニール袋1袋分の土器が出土したが、大半が壺・甕の体部破片である。

ＳＨ54　ＳＨ53を拡張した竪穴住居で、ＳＨ53を切りＳＨ55に切られる形で検出した。南北辺4.1m×東西辺2.9m以上の方形プランと推定される。周壁はＳＨ55によって削平をうけているが、西辺以外は比較的よく残存し、壁高20cmを測る。周溝は南東隅にわずかに痕跡を残す程度しか検出できなかった。主柱穴は3個検出した。いずれも径20cm、深さ30cmを測る。北西隅の柱穴が検出できなかったが、その配置から4本の主柱をもつ構造であったと考えられる。現存の床面やや西寄りには灰や焼土が充満した、長辺1.5m、短辺0.8mの楕円形状に赤く焼けた浅い窪みを検出した。その位置から炉の痕跡と考えられる。



第87図　ＳＨ51・ＳＨ52・ＳＡ133～ＳＡ135実測図（1：100）

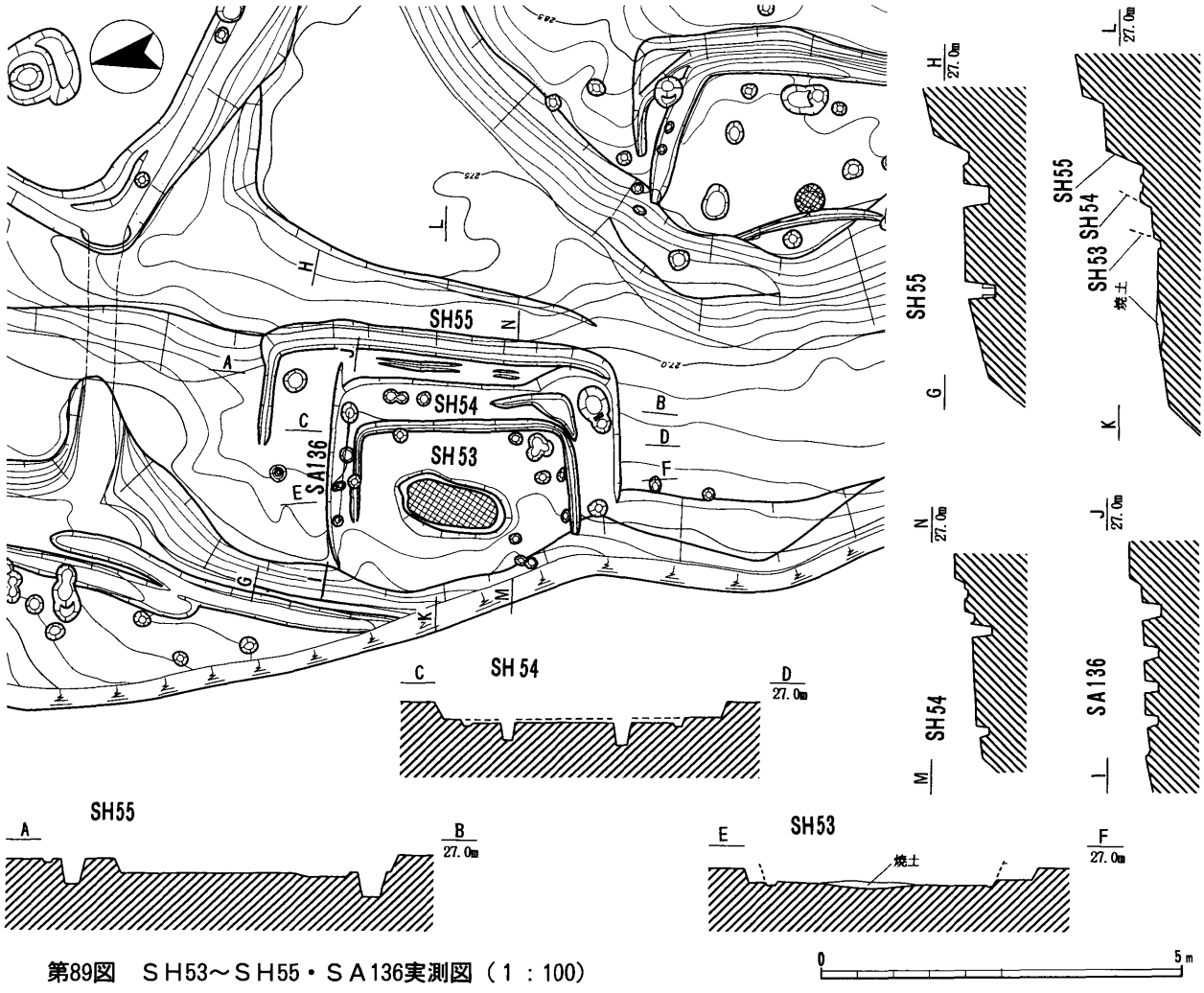


第88図　ＳＨ54・ＳＨ55出土遺物実測図（１：４）

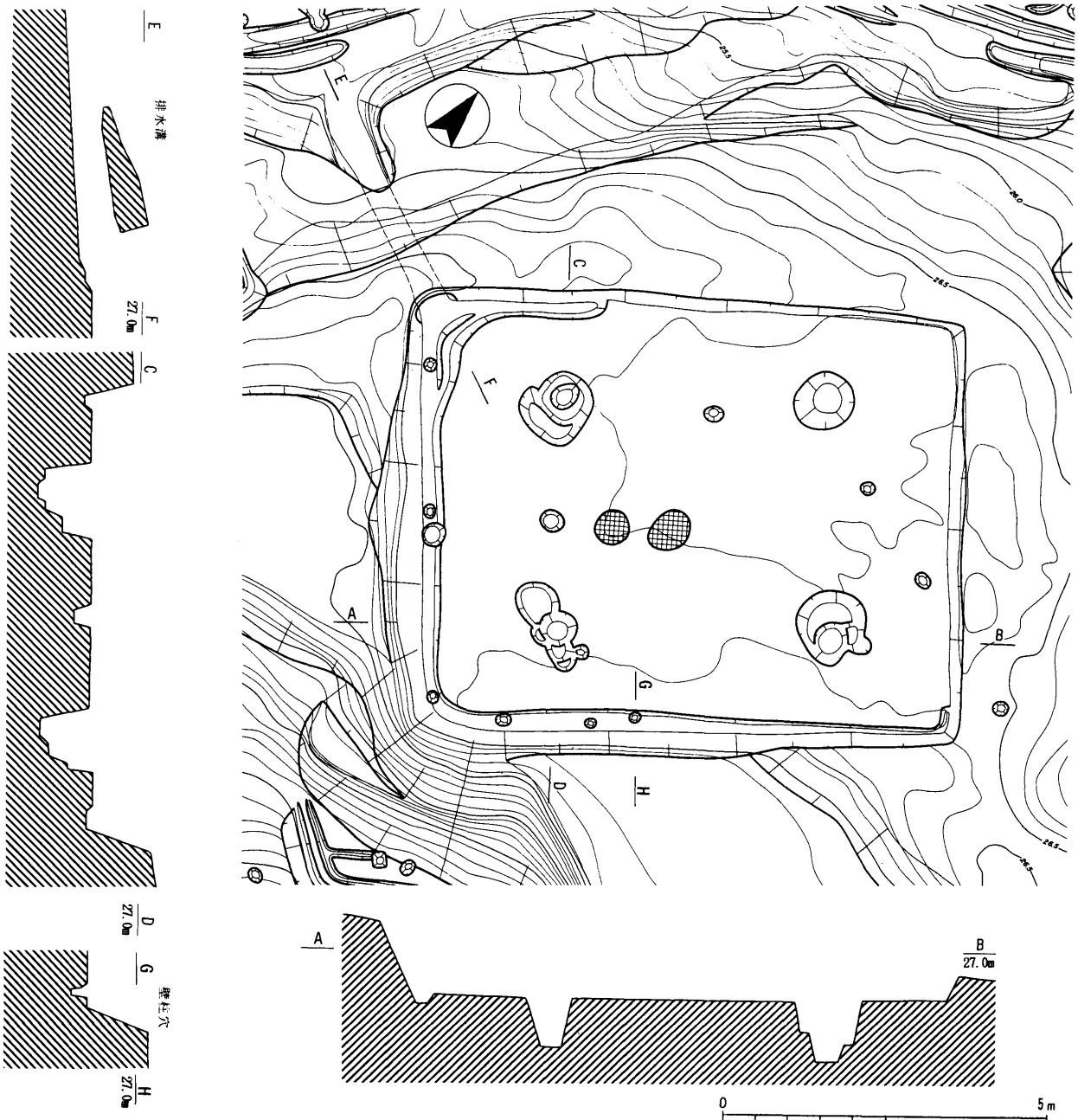
出土遺物　土器片が若干出土したのみである。壺底部Ａ３(96)が焼土面から出土している。

ＳＨ55　ＳＨ54を切る形で検出し、南北辺5.1ｍ×東西辺2.0ｍ以上の方形プランと推定される。西側が流失するが、周壁は最も残存状態のよい東辺で、壁高50cmを測る。周溝は幅18cm、深さ５～10cmを測り、消滅している南辺以外は現存部を全周する。東辺には内側にもう一つ周溝の痕跡が認められ、拡張に伴う残存のものと考えられる。北辺と南辺の内側に隣接して径30cm、深さ30～40cmの柱穴が２個ずつ計４個存在する。これがＳＨ55に伴う柱穴と考えられるが、南北間の距離が長すぎることから、Ｉ地区で検出したＳＢ66のようなテラスに建つ掘立柱建物の可能性もある。炉は不明である。

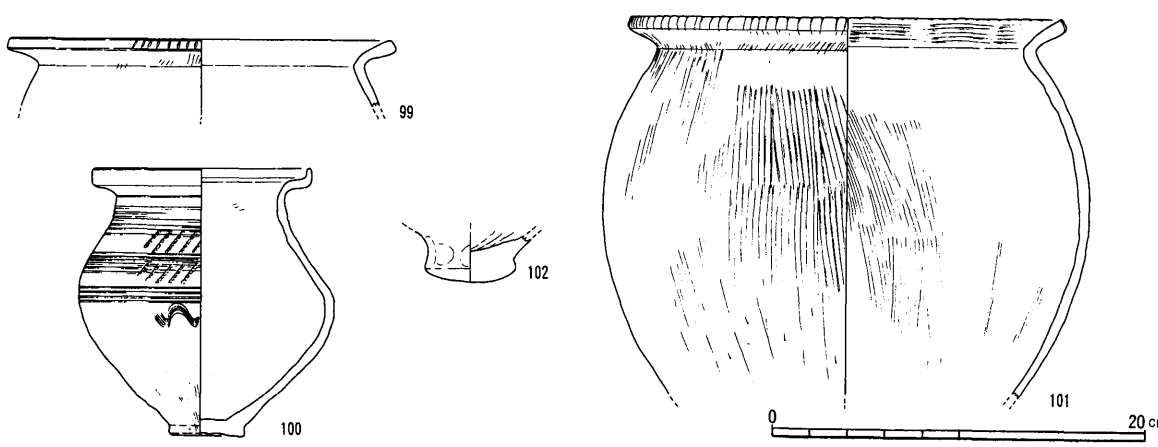
出土遺物　コンテナ箱1／3の量が出土した。甕Ｂ１－1(97)、甕Ｂ１－2(95)甕底部Ａ１(98)などがあるが、いずれも埋土掘削途中で出土したものである。



第89図　ＳＨ53～ＳＨ55・ＳＡ136実測図（１：100）



第90図　ＳＨ56実測図（１：100）



第91図　ＳＨ56出土遺物実測図（１：４）

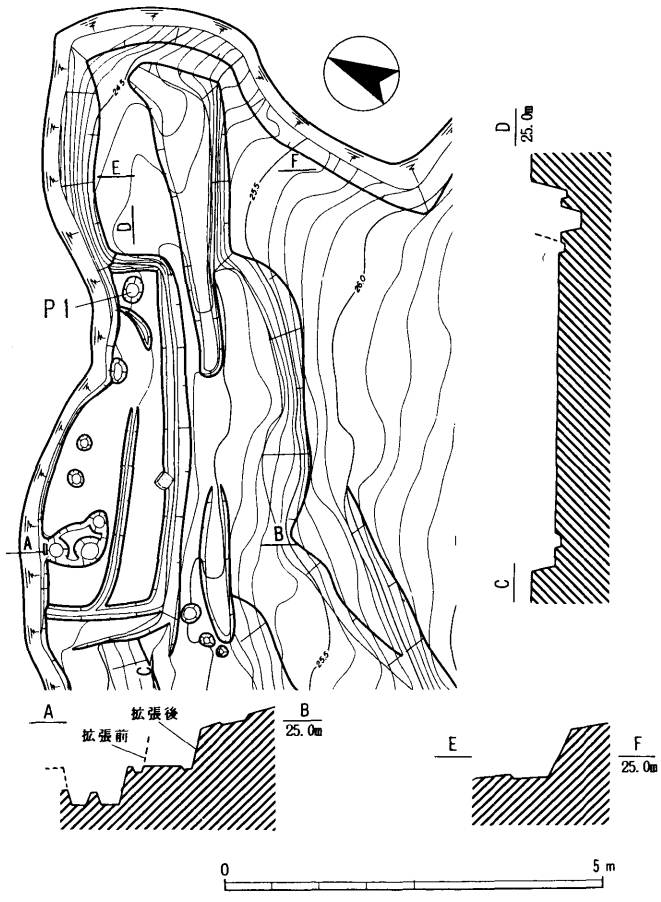
ＳＡ136　東西３間（1.5ｍ）の小規模な柱列で、柱間は0.5ｍの等間である。柱穴は径20㎝、深さ20～30㎝を測る。現状ではＳＨ54の北壁内側に位置し、壁柱穴の可能性もあるが、切り合い関係が不明なため、どの遺構に伴うものか断定し難い。

ＳＨ56　Ｋ地区のほぼ中央部に位置し、標高は26.6ｍである。ＳＨ40を切る形で検出したが、ＳＨ40の床面を2.7ｍも掘り下げて造られている。南北辺9.2ｍ×東西辺7.3ｍを測る長方形プランの竪穴住居で、今回検出した中で第三位の規模をもつ。周壁は四辺とも非常によく残存し、壁高は南東隅で2.7ｍ、南辺で1.1ｍ、東辺で1.0ｍを測る。周溝は南辺と東辺及び西辺の南側３分の１を逆コの字形に巡り、幅20～30㎝、深さ10～15㎝を測る。南西隅が最も低く、南西隅から長さ3.6ｍの排水溝が暗渠となって西に延びる。南辺と東辺の周溝では、それぞれ３～４個の柱穴が検出された。径20～30㎝、深さ20㎝を測り、壁柱穴と考えられるが、壁面には柱痕跡は認められない。主柱穴は４個検出し、それぞれ径0.7～1.1ｍ、深さ80～90㎝を測る。南東部の柱穴には３回の切り合いが認められた。また、主柱穴以外にもいくつかの小さなピットを検出したが規則性は認められない。また、床面中央部やや南寄りには径70㎝×55㎝と径50㎝の範囲で赤く焼けた部分が二か所認められ、炉の痕跡と考えられる。

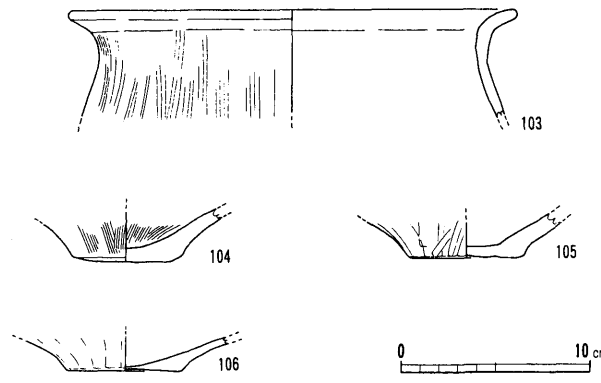
出土遺物　コンテナ箱半分の量が出土した。甕Ａ７(99•101)、甕Ｃ４(100)、甕底部Ｂ３(102)などがある。(100)は南東部主柱穴から、(101)は南辺周溝上から、(99)•(102)は埋土掘削途中に出土したものである。その他、埋土掘削途中で二段に刻み目を巡らせ、内面に粗いヨコハケ調整を施したＢ２類の甕の口縁部や壺・甕の体部破片などが出土している。

ＳＨ57　ＳＨ56の北側緩斜面に位置し、等高線に対して南辺を平行する形で配置されている。北側が流失し全体の規模は不明であるが、東西辺4.8ｍ×南北辺1.7ｍ以上で方形プランと推定される。周壁はよく残存し、南辺で壁高50㎝を測る。周溝は、幅15㎝、深さ５～10㎝を測り、現存部を全周する。南辺には内側にも周溝が巡り、切り合いから拡張に伴う残存のものと考えられる。主柱穴は南西隅の１個を検出した。径40㎝、深さ50㎝を測り、３回の切り合いが認められる。炉などは不明であるが、南斜面からの流水を東側に逃がすための排水溝と考えられる溝が、南辺に平行して設けられている。また、Ｐ１からは埋設された状態で壺体部破片が出土している。

出土遺物　コンテナ箱半分の量が出土した。甕Ｂ１－1(103)、壺底部Ａ３(104)・Ｂ２(105)・Ａ２(106)などがある。いずれも埋土掘削途中に出土したものである。土器以外の遺物として石皿(214)が床面から出土している。



第92図　ＳＨ57実測図（１：100）



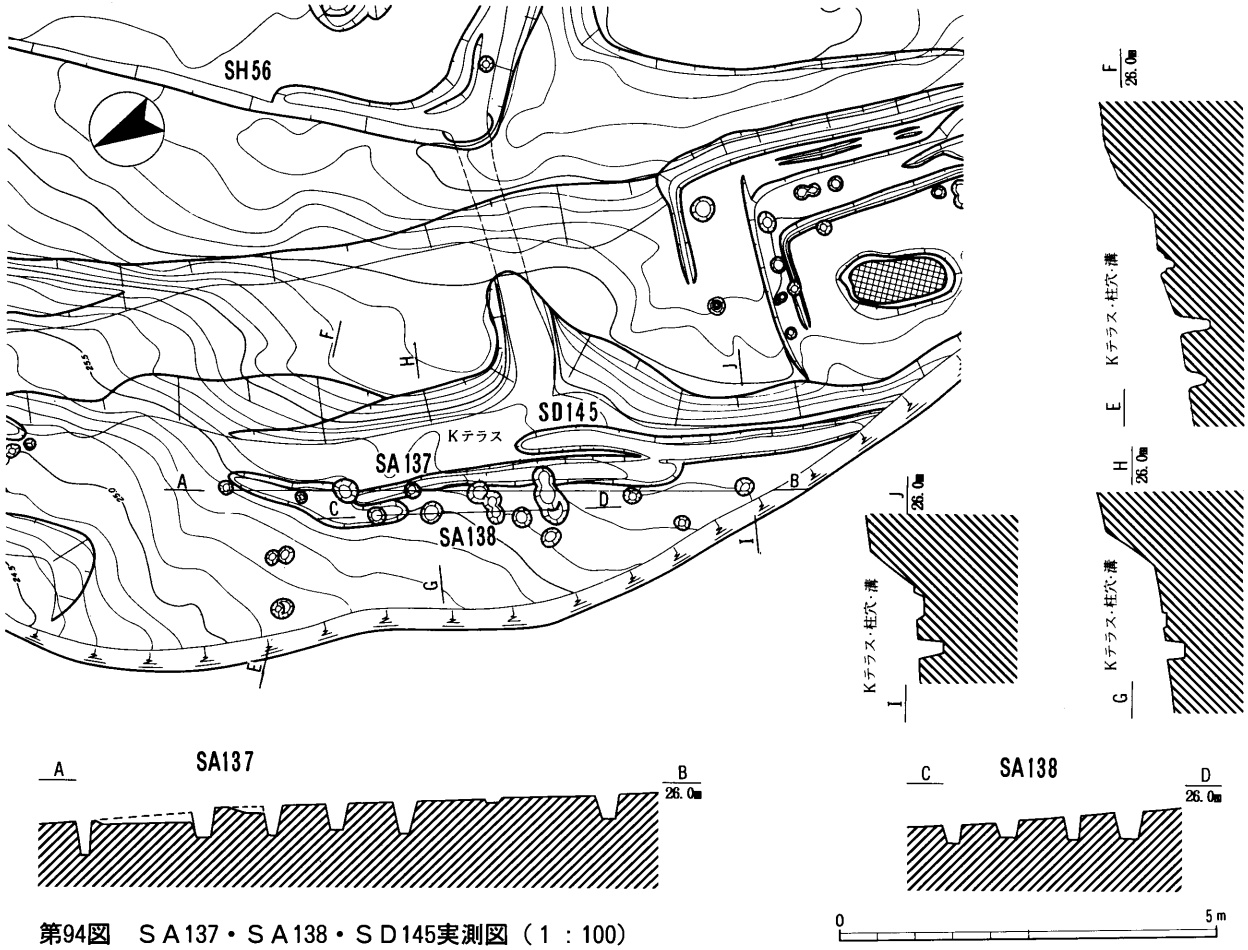
第93図　ＳＨ57出土遺物実測図（１：４）

Kテラス　西側と南側が削られ、全体の規模は不明であるが、現状では斜面を長さ14m以上、深さ0.7m切り込んで造られたテラスで、最大幅2.5mを測る。テラス壁面の中央部には、SH56の暗渠排水溝出口が開口し、その西側で溝や柱列2条（SA137・SA138）を検出した。前後関係は、溝が柱列に先行する。

SA137　テラス壁面に対して平行する柱列で、南北6間（7.2m）分を検出した。柱間は、両端が広く1.6mを測りその他は、ほぼ1mの等間である。柱穴は径25cm、深さ30cmを測る。

SA138　テラス壁面に対して平行する南北3間（2.4m）の小規模な柱列で、柱間は0.8mの等間である。柱穴は径25cm、深さ20～40cmを測る。

SD145　Kテラス壁際に位置し、3本の溝を接合する形で検出した。幅30cm、深さ10cmを測る。SH56の暗渠排水溝からの排水を、両側に逃がすための施設の可能性もある。



第94図　SA137・SA138・SD145実測図（1：100）

包含層出土土器

コンテナ箱95箱分の土器が出土した。包含層出土の土器は2点の須恵器(192)・(193)を除き、すべて弥生時代中期後葉に属するものである。主な器種として壺・甕・高杯・鉢などがある。壺は広口壺(107)～(114)と受口壺(115)～(124)、内湾口縁壺(126)に大別できる。広口壺のうち(107)～(109)は口縁端部がやや外傾するA2類に、(110)・(111)は口縁端部がほぼ垂直なA1類に、(112)は大きく折り返す口縁端部がやや外傾するA3類にそれぞれ分類でき、いずれも内面に櫛刺突文を巡らせる。頸部の施文として(107)に簾条文が、(109)には櫛描横線文と竹管文が認められるが、口縁端部外面の波状文については器表が荒れて不明なものが多い。(114)は算盤玉形の広口壺の体部でA7－2類に属する。頸部に3条の太い凹線が巡るが、器表が荒れて文様等は不明である。下半部に穿孔が見られる。(113)はA7－2類の体部破片で、櫛描横線文と波状文が交互に巡る。(125)は口縁部の広がりが小さい特徴的な形態を呈するが、一応A5類の変形版として広口壺に分類した。(115)～(124)は受口状口縁の壺である。(115)は口

縁部外面が無文のＢ１－１ａ類に、(116)～(121)は口縁外面に数条の凹線文が巡るＢ１－２類の中で最も基本的な形のＢ１－２ａ類に、(122)はＢ１－２類の中で頸部に対し口径の大きい少数派のＢ１－２ｃ類に、(123)は口径が22cmを超える大型の太頸壺Ｂ２－ａ類にそれぞれ分類される。(124)は口径に対して頸部が太く短い形態のものでＢ３類である。頸部に数条の凹線が巡り、口縁内面にヨコハケ調整を施す。(126)は内湾口縁壺Ｃ類で、実測に耐えた唯一のものである。

(127)～(138)は壺の底部である。(127)～(132)は底部から体部へ向かって緩やかに拡がるＡ類の底部で、(127)は底部がやや凸状を呈するＡ３類に、(128)・(129)・(132)は底部がやや凹状を呈するＡ２類に、(130)・(131)は底部が平坦なＡ１類にそれぞれ分類される。(133)～(136)は底部からほぼ垂直な立ち上がり部をもって緩やかに拡がるＢ類の底部である。(133)は底部が平坦なＢ１類に、(134)は底部がやや凹状を呈するＢ２類に、(135)は底部がやや凸状を呈するＢ３類にそれぞれ分類される。(136)は垂直な立ち上がり部をもつＢ類の底部で、底部が極端な凹状のＢ４類に似るが、円盤充填技法を用いた特徴的な底部である。(137)・(138)は台付き壺の脚台部で壺底部Ｃ類に属し、いずれも脚の端部に明瞭な面をもつＣ２類である。

甕は、口縁部がくの字形に短く屈曲するＡ類、口縁部が緩やかに外反するＢ類、口縁部が受口状のＣ類の３つに大別することができる。

(143)・(147)～(153)はＡ類に属する。(143)は口縁部が短く水平に近い形で屈曲する小型の甕でＡ３類に、(147)・(148)は口縁端部に明瞭な面をもつＡ１－１類に、(149)・(150)は口縁端部に１条の浅い凹線が巡るＡ１－２類に、(151)は口縁端部をつまみ上げるＡ５類に、(152)は口径が35cmをこえる大型のもので、口縁端部が立ち気味に短く屈曲するＡ２類に、(153)は口縁部がやや外反気味に短く屈曲し、口縁内面に粗いヨコハケ調整を施すＡ６類にそれぞれ分類される。(141)・(142)・(145)・(146)・(154)～(162)はＢ類に属する。(141)・(142)は器壁が薄く、端部の面が明瞭でないＢ１-３類に、(145)・(146)はゆるやかに外反し端部の面が明瞭でないＢ１－１類に、(154)～(159)は口縁端部に上下２段の刻み目が巡り、外面には粗いタテハケ調整を、口縁内面には粗いヨコハケ調整を施すＢ２－１類に、(160)～(162)は形態的にはＢ２－１類とほぼ同様で口径が30cmをこえる大型のＢ２－２類にそれぞれ分類される。

(139)・(140)・(144)はＣ類に属する。(139)・(140)は口縁部の立ち上がりがやや外傾し、内面に粗いヨコハケ調整を施すＣ２類で、(139)は口径25cmのＣ２－１類に、(140)は大型で口縁外面に上下２段に刻み目を施すＣ２－２類に分類される。(144)は口縁部の立ち上がりがやや内傾するＣ３類である。

(163)～(182)は甕の底部である。(163)～(173)は底部から体部に向かって大きな角度で立ち上がるＡ類で、(163)～(171)は底部が平坦なＡ１類に、(172)・(173)は底部がやや凹状を呈するＡ２類にそれぞれ分類できる。また、(174)～(181)は底部からほぼ垂直な立ち上がり部をもつＢ類で、(174)～(176)は底部が平坦なＢ１類に、(177)～(179)は底部がやや凹状を呈するＢ２類に、(180)は底部がやや凸状を呈するＢ３類に、(181)は底部が極端な凹状を呈するＢ４類にそれぞれ分類できる。(182)は台付き甕の脚台部で甕底部Ｃに分類される。

(184)は径10.4cmを測る小型のもので、Ａ１類の蓋である。

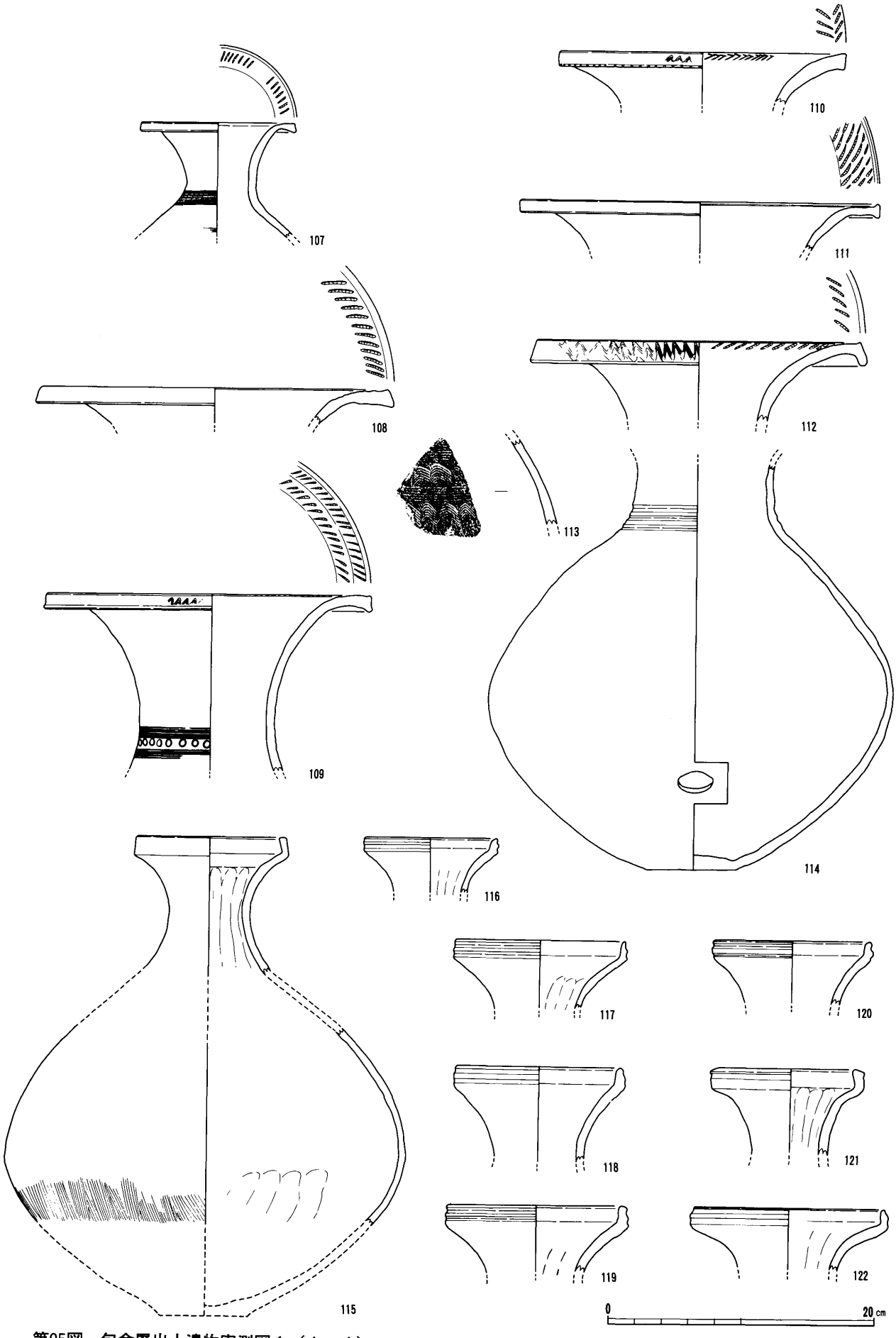
(188)・(189)は高杯である。(188)は口縁部が水平な杯部をもつＡ類に、(189)は内湾気味に開く杯部をもち、脚部は杯底部から裾が緩やかに開くＢ類にそれぞれ分類される。

(190)・(191)は胴部が屈曲し、扁平化の進んだ鉢である。(190)はくの字形に短く屈曲する口縁部をもち、端部に明瞭な面をもつＡ１類に、(191)は口縁端部に浅い１条の凹線を巡らすＡ２類にそれぞれ分類される。(183)は高台状を呈する底部で、鉢の底部と推定されるが、甕底部Ｂ４類の可能性もある。

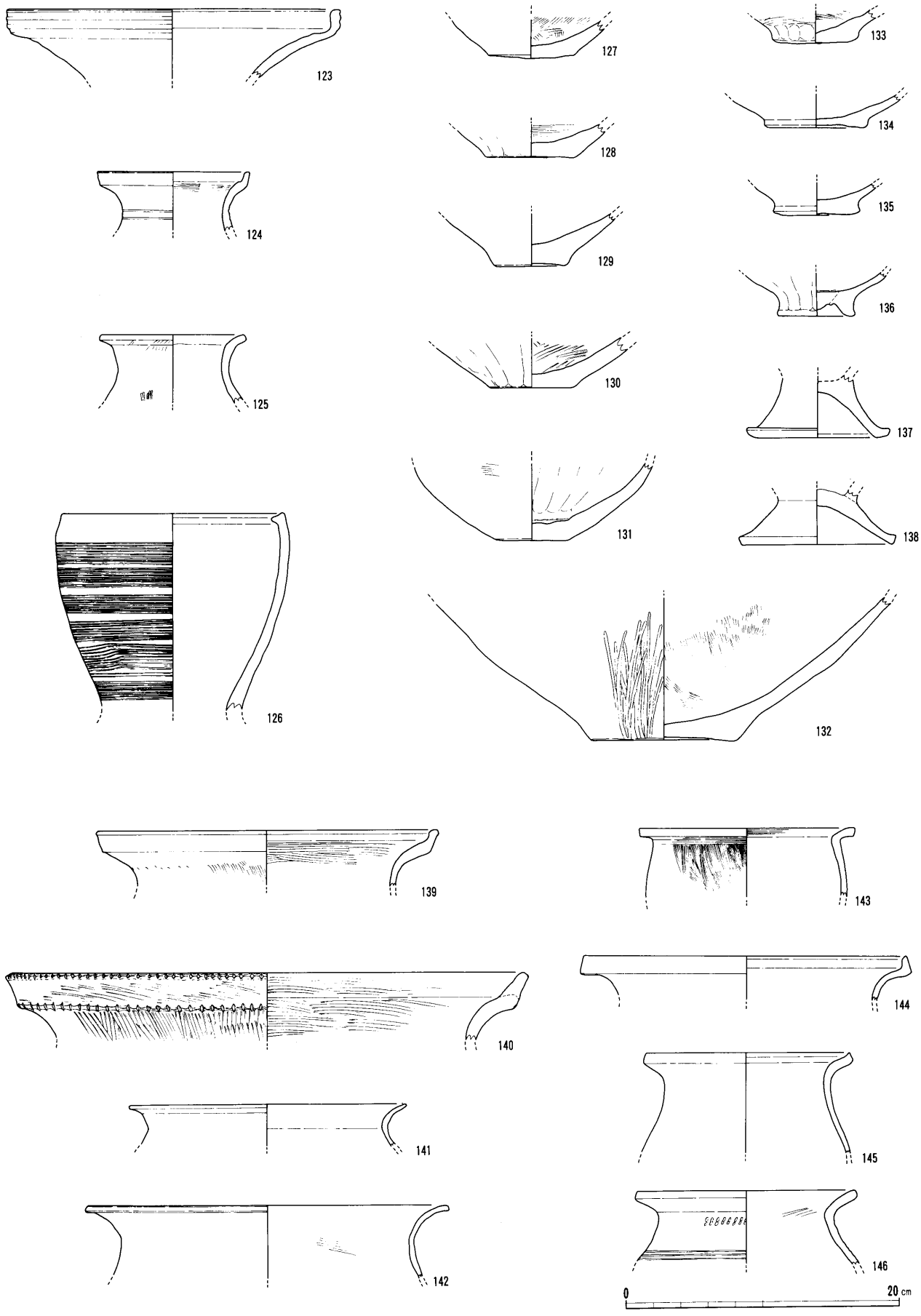
(185)はミニチュアの高杯で、杯部を欠くがＡ類を模倣したものである。

(186)・(187)は土錘である。焼成前に径６㎜ほどの穴が開けられている。

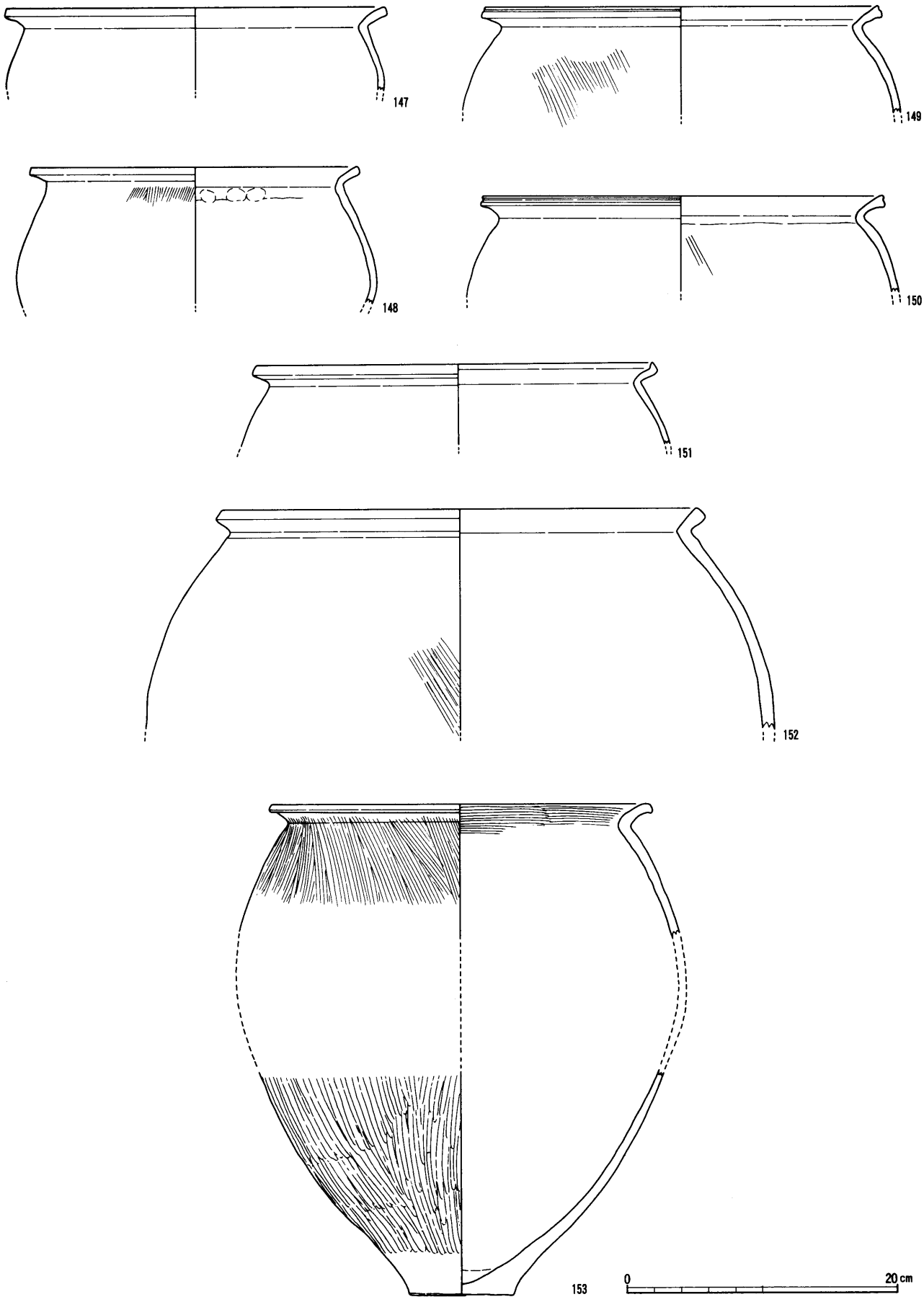
(192)・(193)は須恵器である。(192)は杯身の破片で、口径が大きく、立ち上がりの低い全体に浅く扁平な形態のものである。(193)は、ほぼ完形品の甕で、外面に格子状、内面に同心円状の叩き目が見られる。



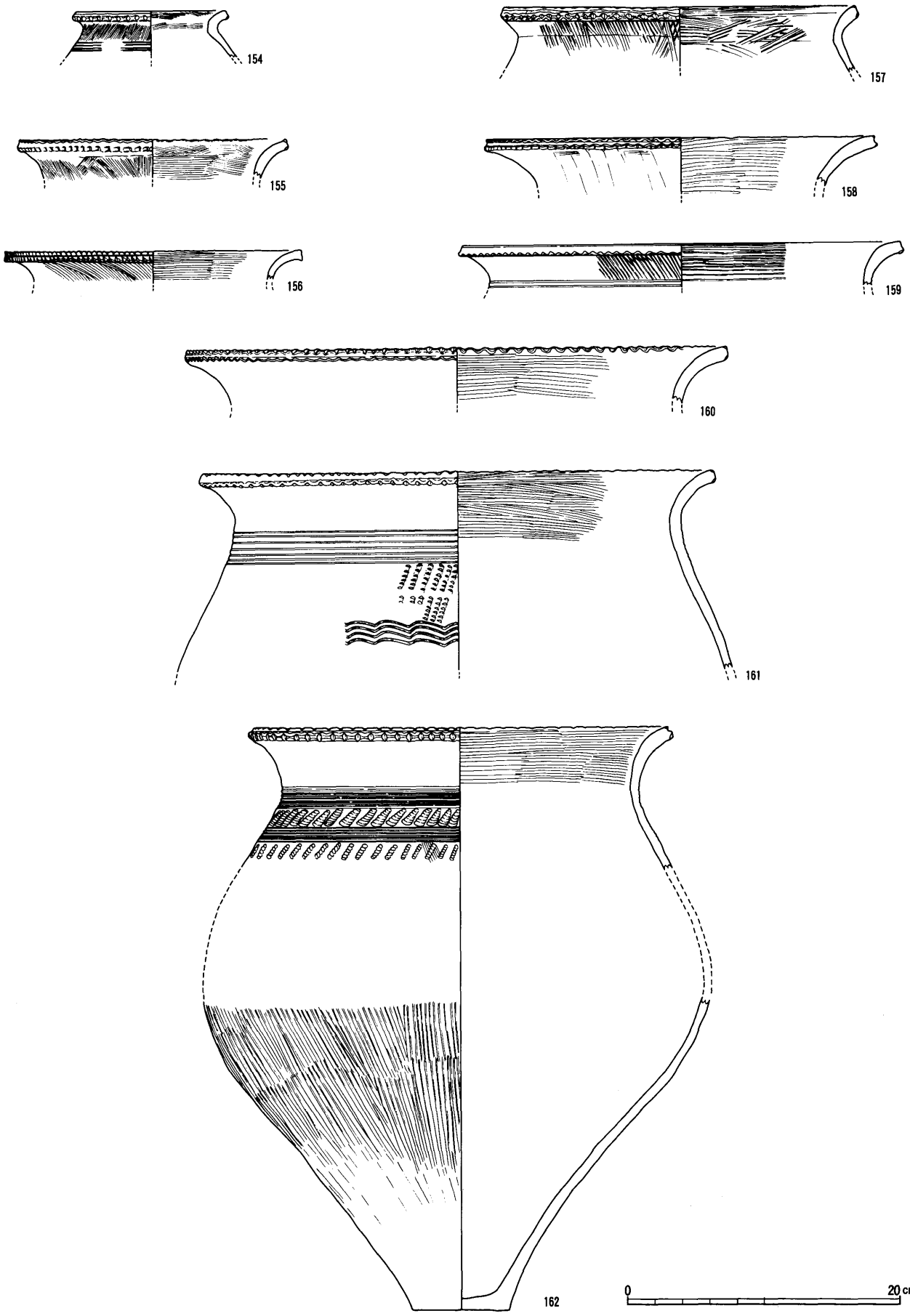
第95図　包含層出土遺物実測図１（１：４）



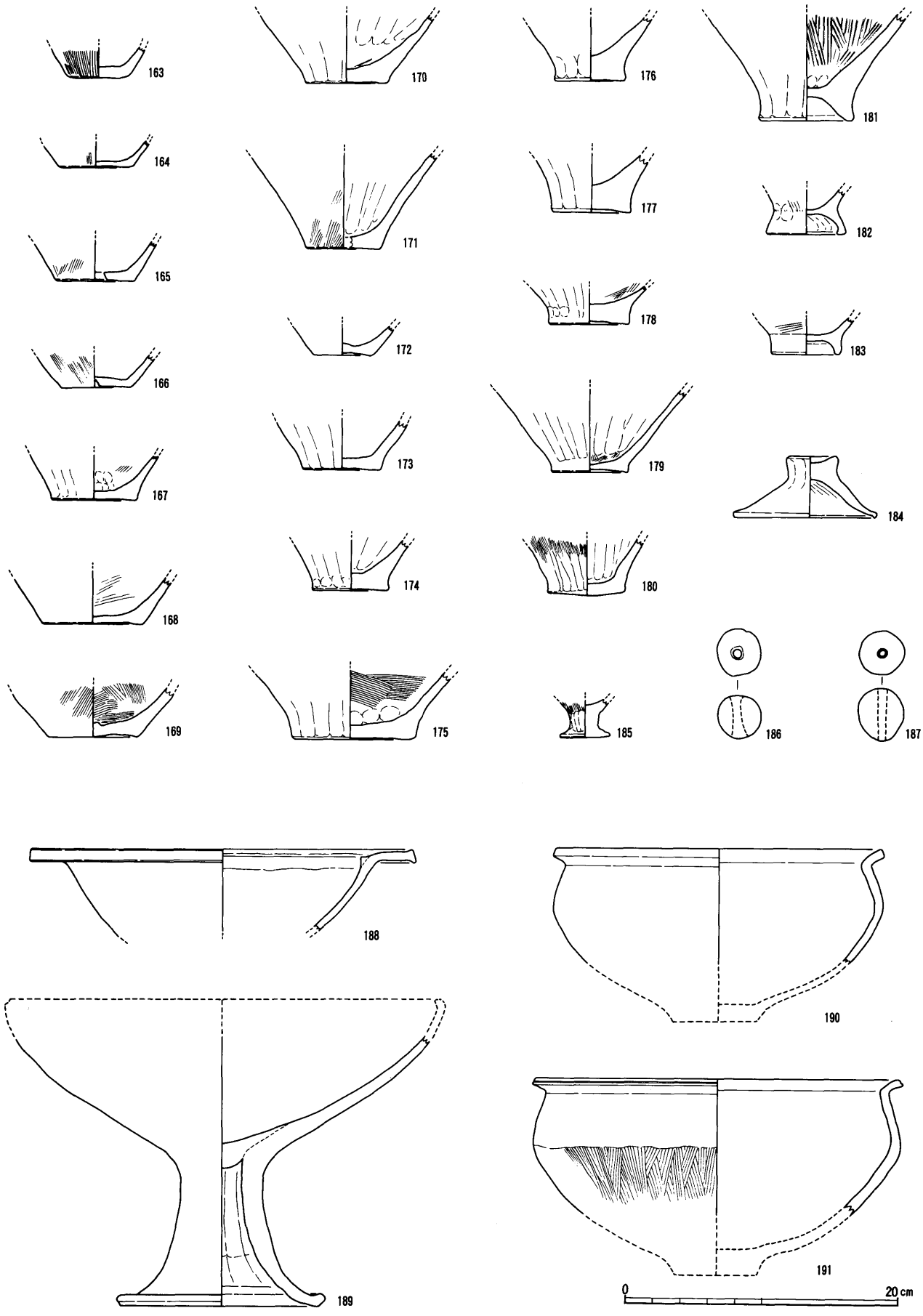
第96図　包含層出土遺物実測図２（１：４）



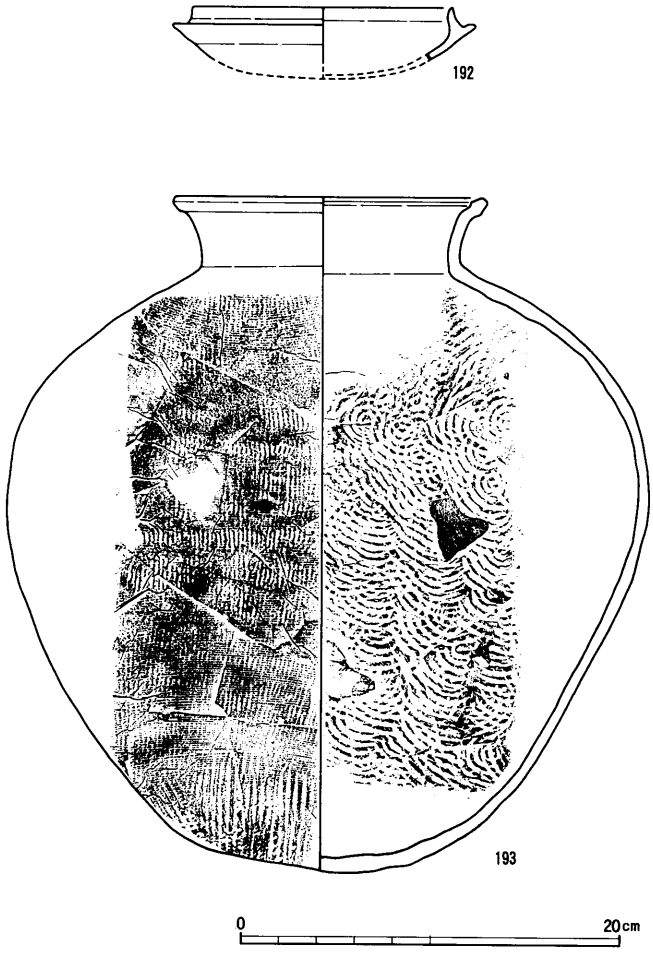
第97図　包含層出土遺物実測図３（１：４）



第98図　包含層出土遺物実測図４（１：４）



第99図　包含層出土遺物実測図５（１：４）



第100図　包含層出土須恵器実測図（1：4）

石　器

丘陵地区では、竪穴住居の埋土や包含層から若干量の石器が出土している。実測し得た石器は39点で、その内訳は石斧類12点・石鏃9点・石庖丁1点・磨石3点・石皿1点・砥石3点・不明3点・一括出土サヌカイト剥片16点中の7点である。製品の他、一括出土のサヌカイト剥片のように石器の素材と考えられるものも見られるが、明らかに未製品と考えられるものは認められなかった。ここでは、出土石器を遺構別に記述する。なお、法量については遺物観察表に詳細を明記した。

ＳＨ１出土石器

製品はなく、サヌカイト製のフレイクが1点存在するのみである。

ＳＨ３出土石器(194•195)

太型蛤刃石斧1点(194)と石鏃1点(195)、その他サヌカイト製のフレイク1点が存在する。太形蛤刃石斧は砂岩製で刃部を大きく欠損し、基部の先端もわずかに欠くため、全体の形状及び寸法は不明である。石鏃はサヌカイト製の平基有茎式で、今回出土した石鏃の中で最も小さい。いずれも埋土掘削途中に出土したものである。

ＳＨ４出土石器

製品はなく、サヌカイト製のフレイク4点が存在する。いずれも床面出土のものである。

ＳＨ７出土石器(196•197•198•199)

石鏃1点(196)・小型石斧2点(197•198)・太型蛤刃石斧1点(199)がある。石鏃はサヌカイト製の平基無茎式で、片側に自然面がわずかに残っている。(197•198)はノミ形を呈する小型の石斧で、(197)は粘板岩製で断面が台形状を呈する。刃部と基部を欠くため全体の形状及び寸法は不明である。(198)は凝灰質砂岩製で扁平な断面形状を呈する。刃部はかなり磨耗している。(199)は凝灰質砂岩製の太型蛤刃石斧で、基部を大きく欠損している。刃先はつぶれ、使用による磨耗が激しい。(198)•(199)は周溝内から、(196)•(197)は埋土掘削途中に出土したものである。

ＳＨ12出土石器(200)

石鏃1点(200)のみである。サヌカイト製の凸基有茎式で茎部先端を欠損している。埋土掘削途中に出土したものである。

ＳＨ14出土石器(201•202)

磨石2点(201•202)がある。(201)は凝灰質砂岩製の細長い形状のもので、使用のため先端部分に磨擦痕が認められる。(202)は砂岩製の丸い形状のもので、全体に磨擦痕が認められ、中央部にも使用痕と考えられる擦り減りが見られる。いずれも床面から出土したものである。

ＳＨ16出土石器

製品はなく、サヌカイト製のフレイク1点が存在するのみである。

ＳＨ17出土石器(203)

太型蛤刃石斧1点(203)とサヌカイト製のフレイク2点がある。太型蛤刃石斧は砂岩製で基部を欠損するが、折れた面の縁辺部を打ち欠いて補修をした様子が窺える。刃部は微少な刃こぼれが見られるものの状態は良好である。石斧もフレイクも床面から出土したものである。

ＳＨ26出土石器(204)

太型蛤刃石斧1点(204)と不明石器1点(205)があ

る。(204)は凝灰質砂岩製で、刃先は使用のためわずかに刃こぼれが見られるが、ほぼ完形のものである。(205)は用途不明の石器で、粒子の細かい砂岩製である。扁平な断面形状と研磨の様子から、磨製石鏃の未完成品の可能性がある。いずれも床面からの出土である。

ＳＨ29出土石器(206・207)

石鏃１点(206)と不明石器１点(207)がある。(206)はサヌカイト製の菱形鏃で、今回出土した石鏃の中で最も長寸のものである。(207)は用途不明の石器で、花崗岩製である。その形状から敲石の可能性がある。いずれも床面から出土したものである。

ＳＨ31出土石器(208)

太型蛤刃石斧１点(208)のみである。砂岩製で基部を大きく欠き、刃部付近のみ残存する。刃は研ぎ直しが認められ、刃先の状態は良好である。床面から出土した。

ＳＨ32出土石器(209)

石鏃１点(209)のみである。サヌカイト製の凸基有茎式で木の葉形を呈する。床面から出土した。

ＳＨ34出土石器(210)

砥石１点(210)のみである。キメの粗い砂岩製で荒磨きに利用したものである。使用により表面が湾曲している。また、もう一方の面は平らで、縦横３～４本の筋状の傷が見られる。床面から出土したものである。

ＳＨ38出土石器(211)

砥石１点(211)のみである。砂岩製で片面だけに研ぎ減りの使用痕が見られる。床面からの出土である。

ＳＨ46出土石器(212)

扁平片刃石斧１点(212)のみである。砂岩製で、刃の部分を大きく欠損したため、研ぎ直しを行い、新たに刃を作り出している。刃先は使用による刃こぼれがはげしい。埋土掘削途中に出土したものである。

ＳＨ49出土石器(213)

不明石器１点(213)のみである。チャート製で、表面はひじょうに滑らかである。その形状から敲石の可能性もある。埋土掘削途中に出土したものである。

ＳＨ57出土石器(214)

石皿１点(214)のみである。花崗岩製で、片面のみに使用による多数の凹みが認められる。使用した面を上にして周溝付近の床面から出土した。

包含層出土石器(215～232)

製品として、石鏃４点(215～218)・太型蛤刃石斧３点(219～221)・扁平片刃石斧１点(222)・石庖丁１点(224)・砥石１点(223)・磨石１点(225)があり、この他に、一括出土のサヌカイト製の剥片７点(226～232)がある。

石鏃は(216)のみ安山岩（下呂石）製で、他はいずれもサヌカイト製である。(215)は、先端部の縁辺を打ち欠いた様子がわずかに認められ、その形状から制作途中での失敗品と考えられる。(216)は凸基有茎式であるが、茎部先端を欠損している。(217・218)は、いずれも平基無茎式である。

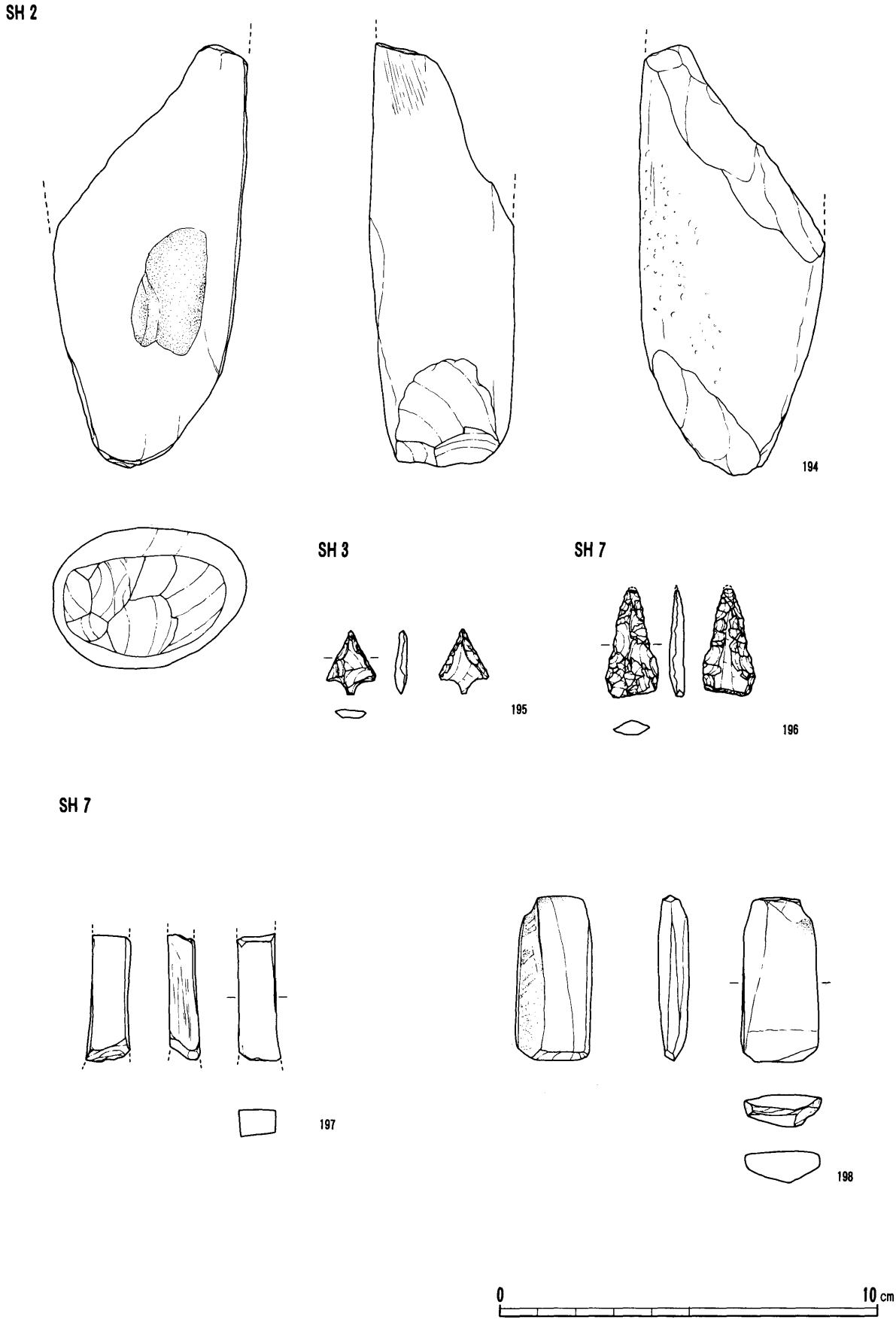
太型蛤刃石斧はいずれも砂岩製である。(219)は刃先と基部の先端を欠損し、基部には浅い抉りが認められる。(220・221)はいずれも基部のみで、刃部を大きく欠損するため全体の形状及び寸法は不明であるが、(221)は今回出土した石斧の中では最大級のものである。(222)は砂岩製でほぼ完存する。基部は厚めで断面形状はやや丸みを帯びるものの、刃の形状から、ここでは扁平片刃石斧に分類した。

石庖丁(224)は結晶片岩製である。現存刃長は約８㎝、厚さ0.8㎝で全体のほぼ半分程度と推定される。刃部は直線的で、背部には穿孔が認められる。全体として穿孔の部分が突出した凸状の平面形を呈する特異な形状のものと考えられる。

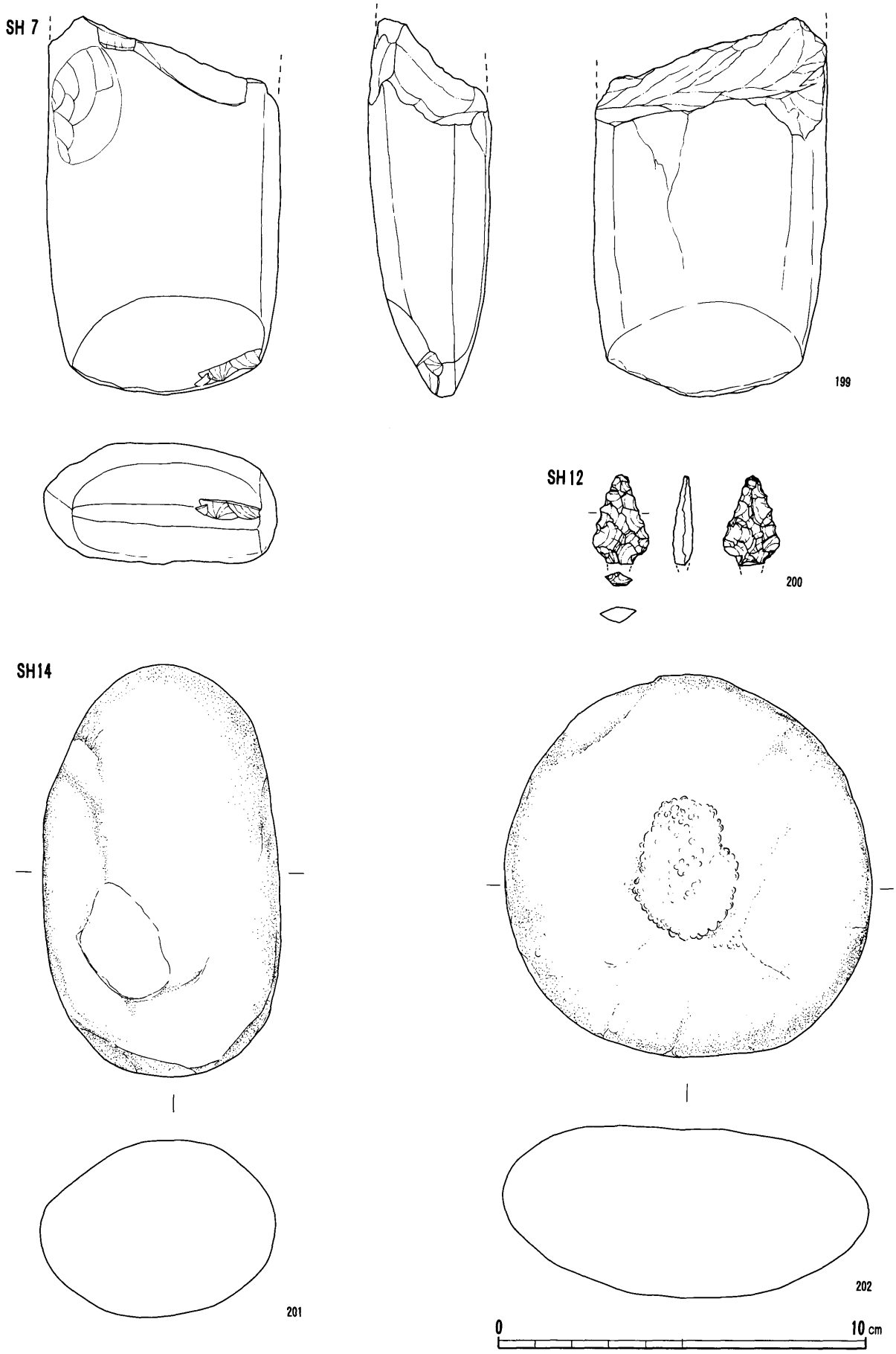
砥石(223)はキメの粗い砂岩製で、荒磨きに使用されたと考えられる。底部は平らで使用された痕跡が認められないが、表面は使用のため湾曲している。

磨石(225)は砂岩製で、平面・断面ともに楕円形状を呈する。全体に磨擦痕が認められるが、片側に打撃痕も見られ、敲石として利用された可能性もある。

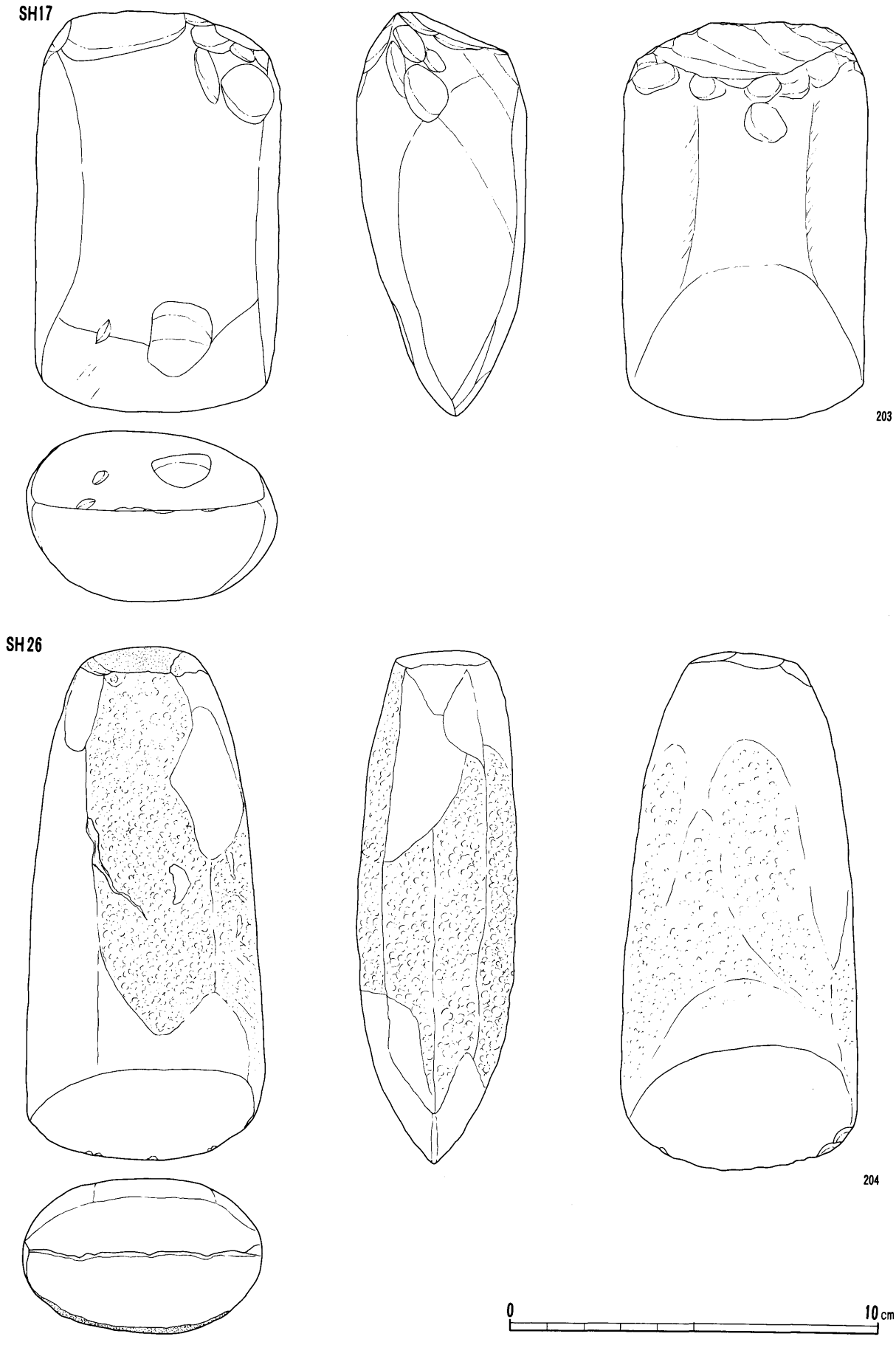
サヌカイト剥片(226～232)は、黄褐色の地山直上から出土したものである。一か所からまとまって16点が出土したが、ひとつとして接合できるものはなかった。このうち(228～231)には二次加工が認められ、(229)は楔の可能性もある。遺構埋土及び包含層から出土したサヌカイト剥片のほとんどが長さ４ｃｍ以下のフレイクで、製品の素材としての可能性が低いのに対して、この剥片集中区出土のものは長さが平均９㎝で厚く、石鏃や石錐などの小型石器の素材剥片として十分なものである。



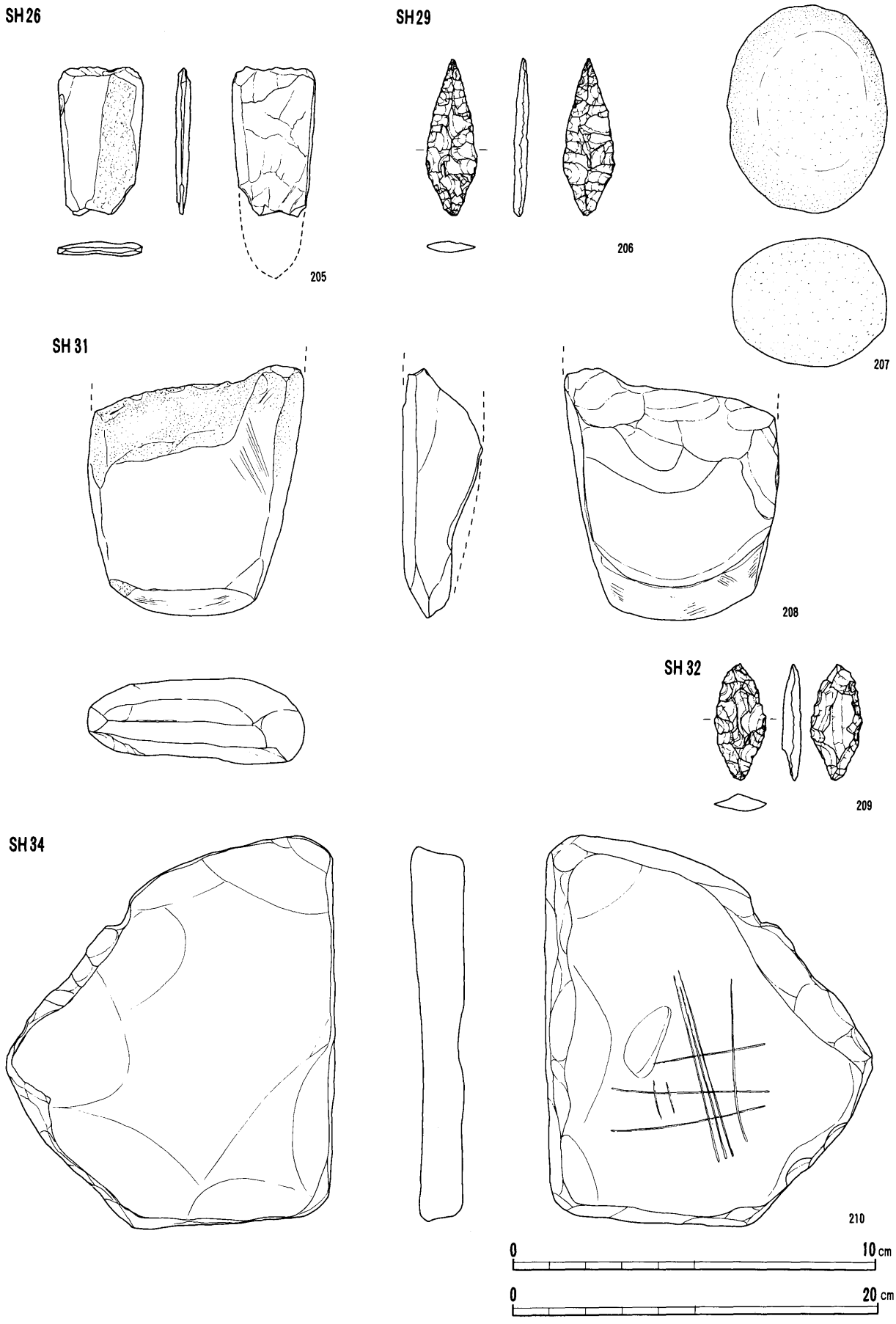
第101図　ＳＨ３・ＳＨ７出土石器実測図（２：３）



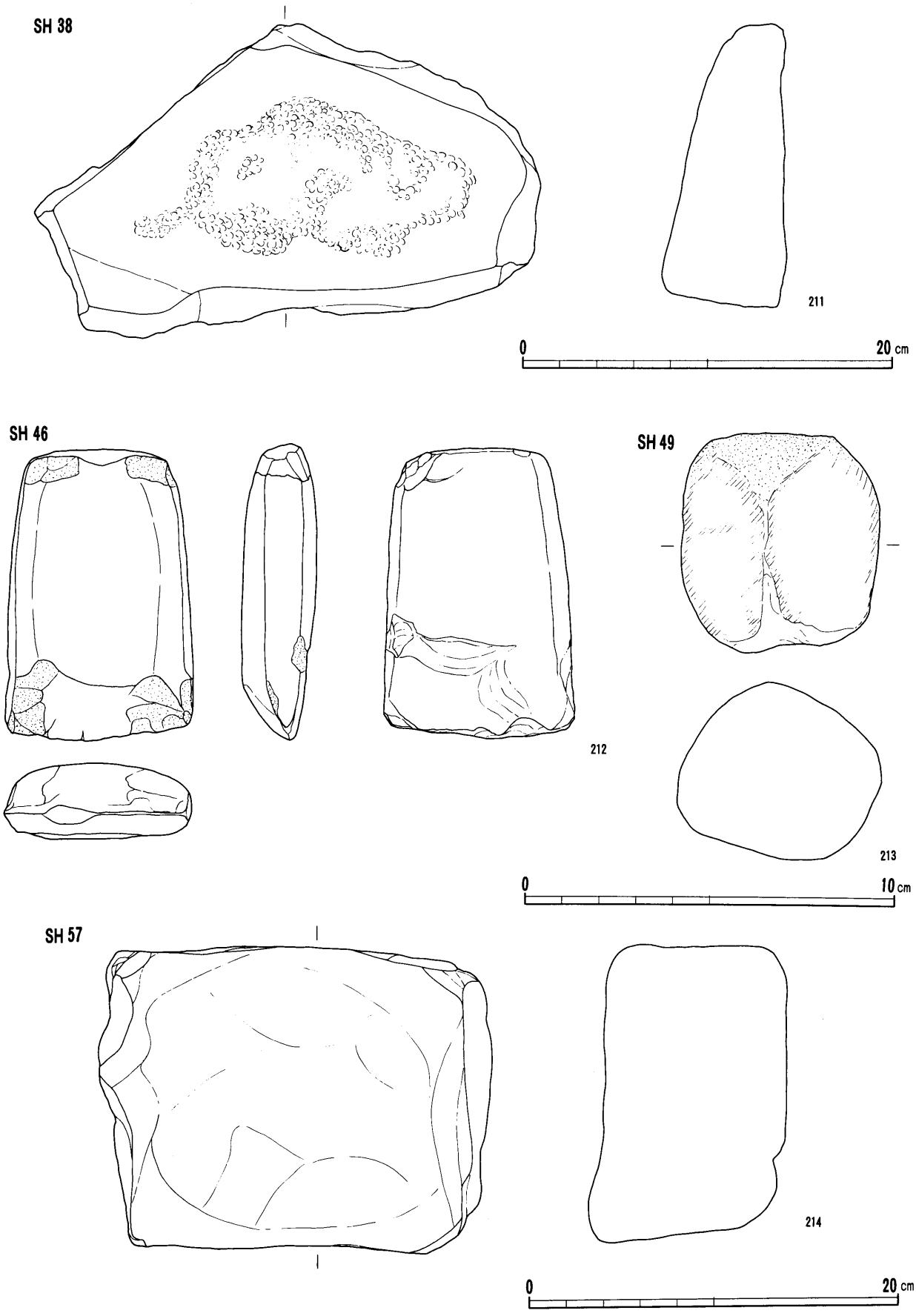
第102図　ＳＨ７・ＳＨ12・ＳＨ14出土石器実測図（２：３）



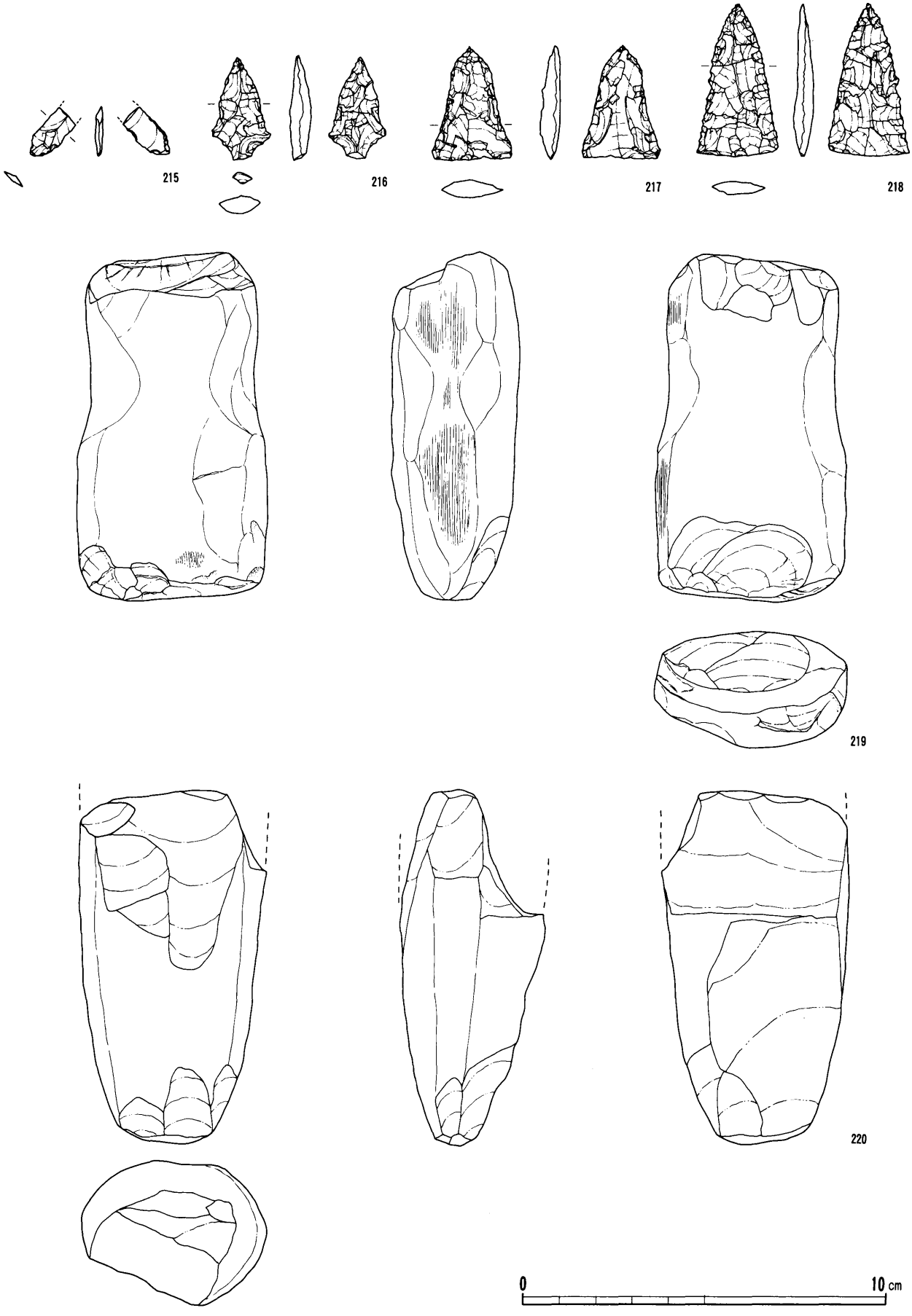
第103図　ＳＨ17・ＳＨ26出土石器実測図（２：３）



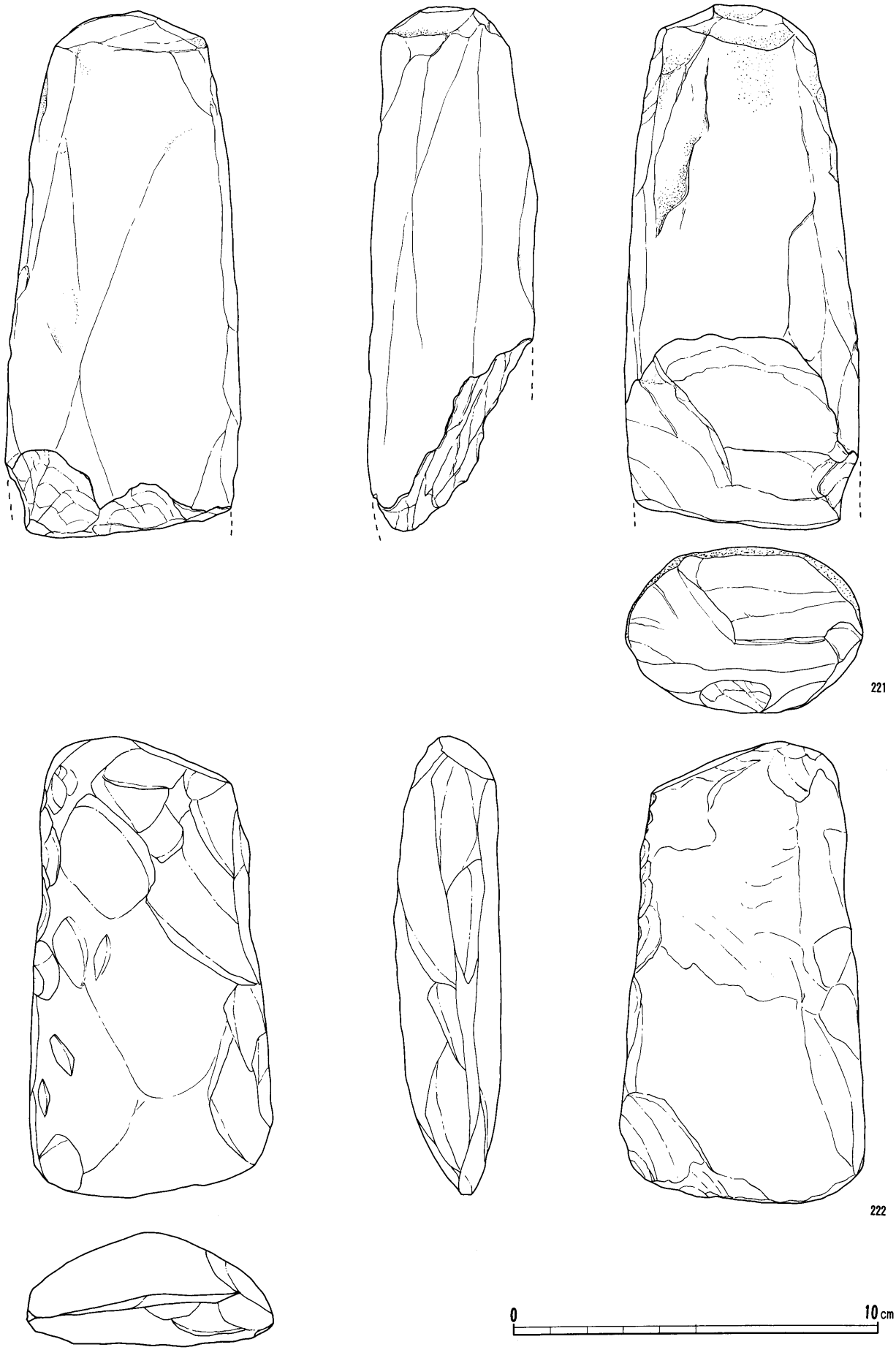
第104図　ＳＨ26・ＳＨ29・ＳＨ31・ＳＨ32・ＳＨ34出土石器実測図（２：３）210のみ（１：３）



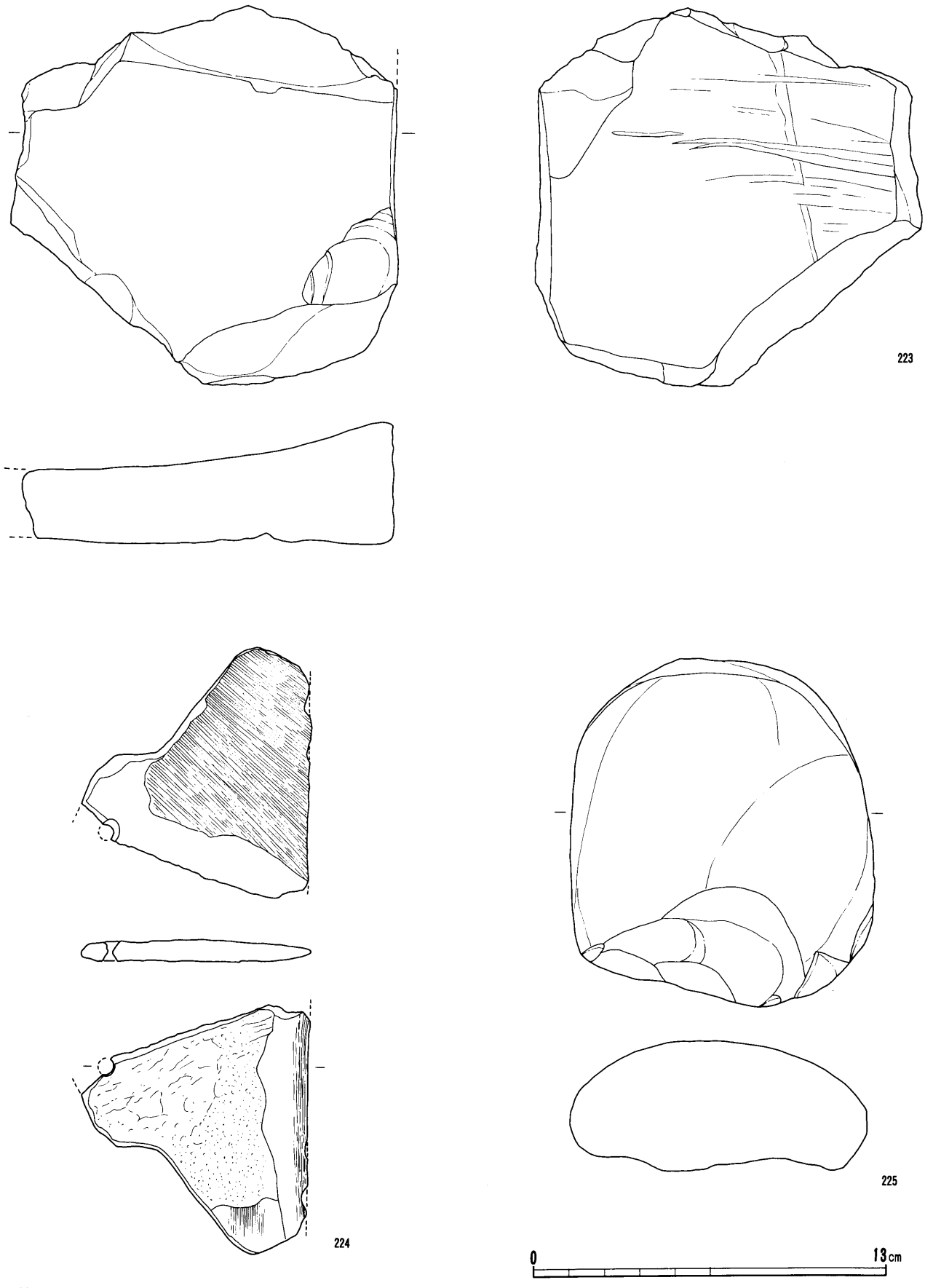
第105図　ＳＨ38・ＳＨ46・ＳＨ49・ＳＨ57出土石器実測図（２：３）211と214は（１：３）



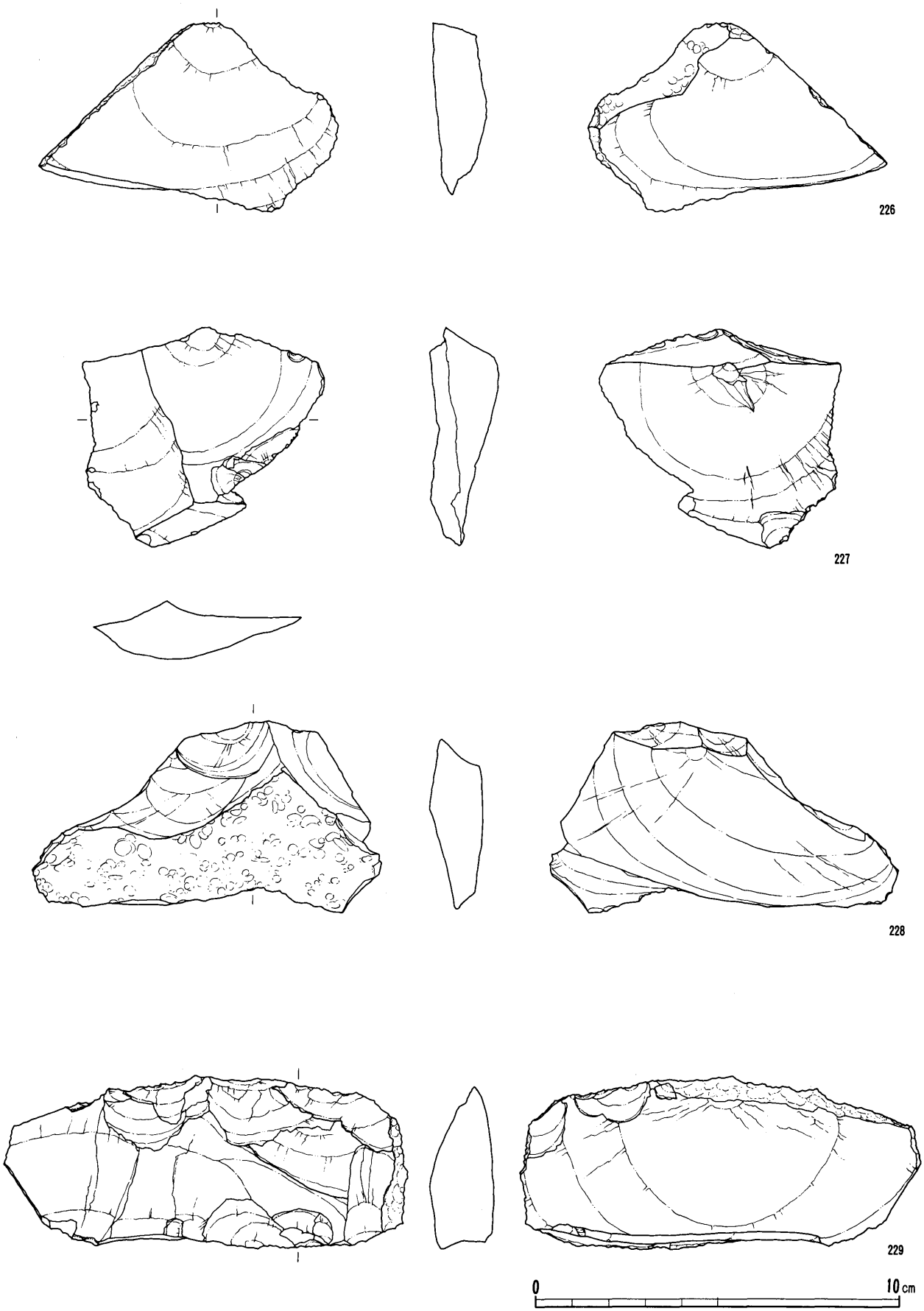
第106図　包含層出土石器実測図１（２：３）



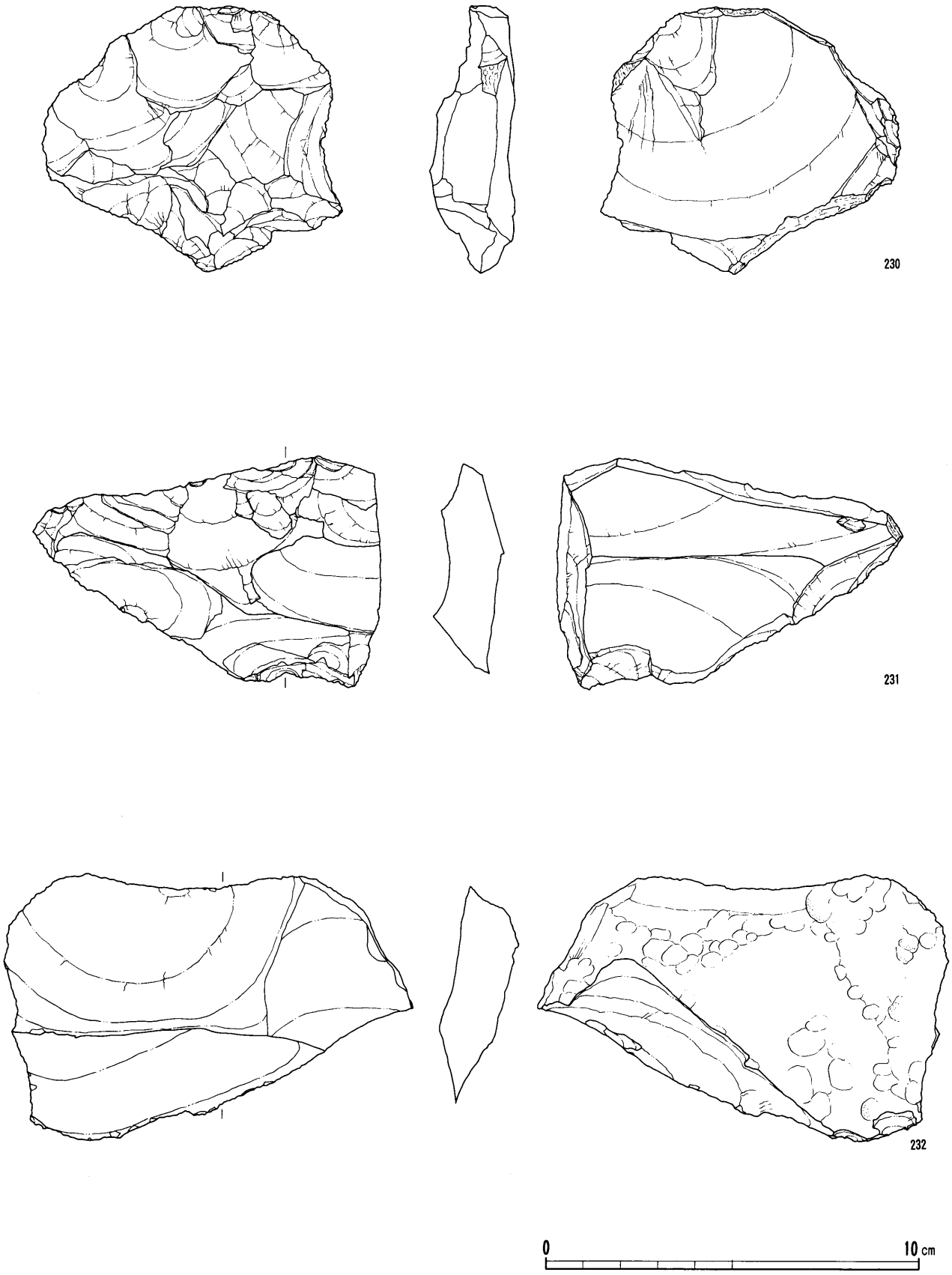
第107図　包含層出土石器実測図２（２：３）



第108図　包含層出土石器実測図３（１：２）



第109図　包含層一括出土サヌカイト剥片実測図１（２：３）



第110図　包含層一括出土サヌカイト剥片実測図２（２：３）

玉類・石製品

丘陵地区では、竪穴住居の埋土から４点の玉類と１点の石製品が出土している。内訳は管玉２点、勾玉１点、不明ガラス製品１点の計４点と紡錘車の破片１点である。玉類その他が遺物に占める割合はひじょうに小さいが、管玉と不明ガラス製品は竪穴住居の埋土水洗選別作業により発見されたものであり、水洗選別を行わなかった包含層の中にはさらに玉類が存在した可能性もある。

ＳＨ３出土の玉類(233･234)

２点の管玉(233･234)がある。灰白色を呈する硬玉製で、長さはいずれも0.6cm、直径は(233)が0.26cm、(234)が0.34cmの小さな管玉で、片側から穿孔がなされている。いずれも竪穴住居の床面付近の埋土から出土したものである。

ＳＨ４出土の玉類(235)

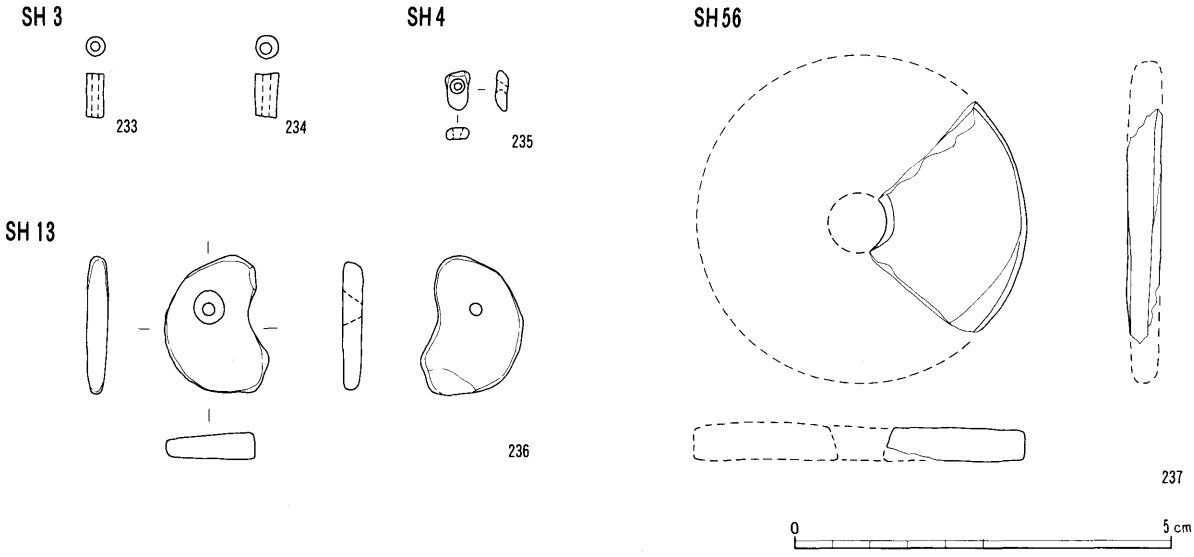
不明ガラス製品(235)１点のみである。淡い青色を呈し、内部には気泡が見られる。長さ0.55cm、幅0.3cm、厚さ0.14cmの小さなもので、中央に径0.8mmほどの穿孔が見られる。埋土中層からの出土で、竪穴住居が埋没する過程で混入した可能性もある。

ＳＨ13出土の玉類(236)

勾玉(236)１点のみである。乳白色の地に緑色が鮮やかな良質の硬玉製（ヒスイ製）で、長さ1.8cm、幅1.3cm、厚さ0.3cmの扁平な勾玉である。重さは1.2ｇで、中央からやや偏った位置に片側から穿孔がなされている。埋土の上層から出土したもので、竪穴住居が埋没する過程で混入した可能性がある。

ＳＨ56出土の石製品(237)

紡錘車(237)１点のみである。褐色を呈する結晶片岩製で、全体の1／4の破片であるが、復元径4.5cm、厚さ0.4cmの円盤型である。中央には復元径0.7cmの孔が片側から穿たれている。重量は3.5ｇであるが、復元すれば14ｇ程度と推定される。竪穴住居の床面から出土したものである。



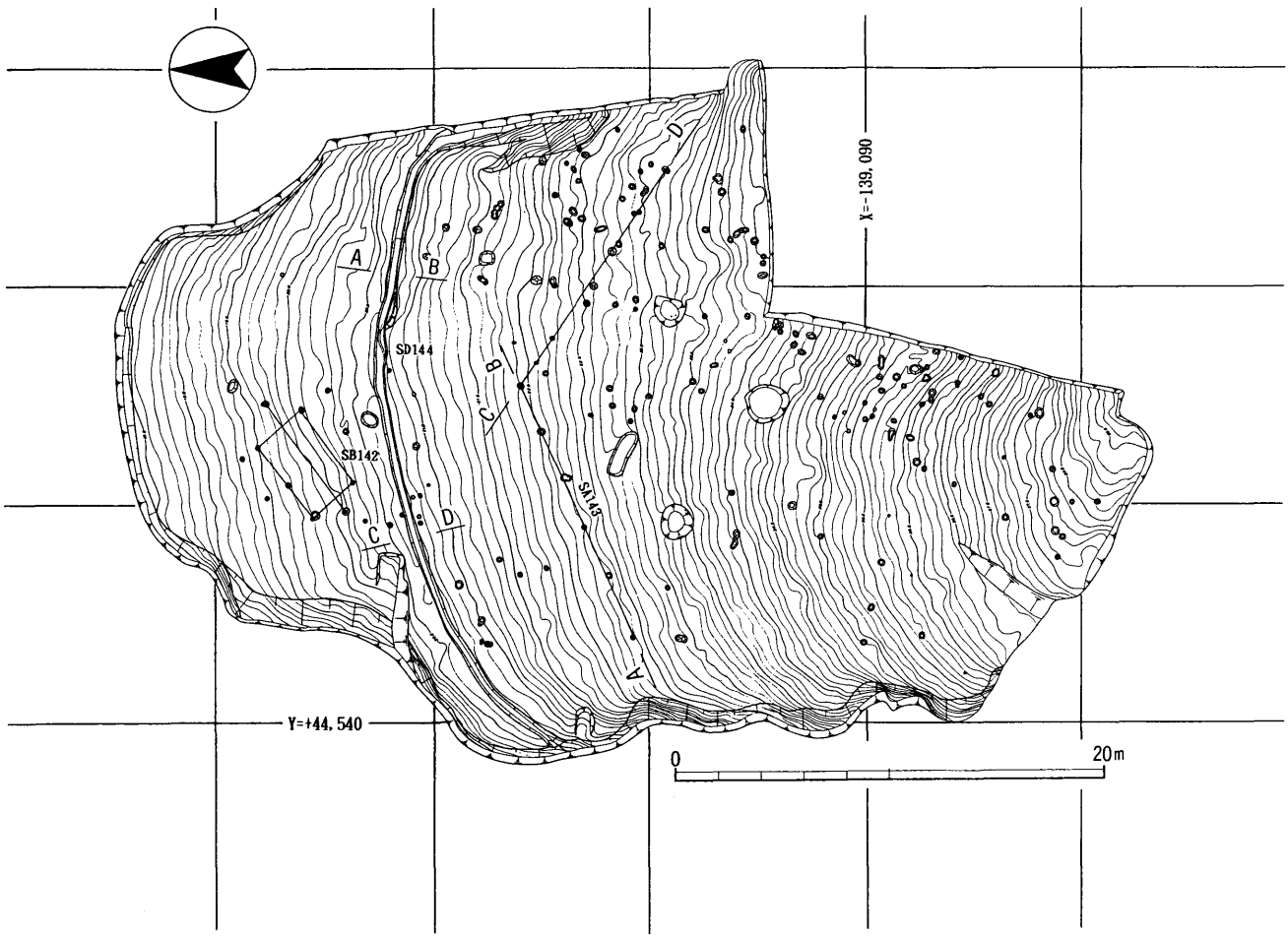
第111図　ＳＨ３・ＳＨ４・ＳＨ13・ＳＨ56出土玉類・石製品実測図（１：１）

（5）各説2 （北斜面地区）

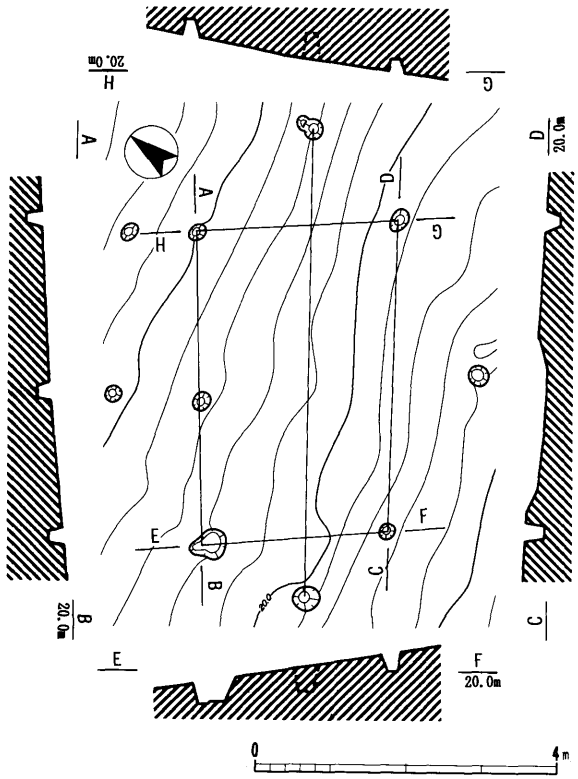
北斜面地区の概要　調査区の北側に位置する標高18m～29m、斜度およそ12度の比較的緩やかな傾斜面で、南側の丘陵地区とは谷地形によって分断されている。また、東側にも小さな谷が入り込み、北側は東西方向に入り込んだ標高14mの谷水田へと続いている。調査の結果、標高20mの地点で掘立柱建物1棟（ＳＢ142）、標高22mの地点で屈曲する柱列1条（ＳＡ143）、標高21mの地点で溝1条（ＳＤ144）、ＳＤ144から斜面上部にかけて多数のピットを検出した。ピットは斜面の東側に偏って分布する傾向が見られるが、規則性を見いだすのは困難な状況である。また、環濠の存在を想定し、谷水田のトレンチ調査を行ったが、自然の堆積層が見られたのみで濠などの遺構は検出されなかった。この地区の特徴として、傾斜が緩やかな割には竪穴住居などの居住施設が見られないこと。また、調査区をほぼ南北に2分割する柱列ＳＡ143の存在など、明らかに丘陵地区とは異なった様相が見られる。

ＳＢ142　調査区の北側、標高20m付近の谷水田に近い所に位置する。南側桁行き中央の柱穴は撹乱のため不明であるが、桁行き2間×梁行き1間（4m×2.6m）の規模をもち、棟方向を地形の等高線に対して北へ約45度振って建てられた掘立柱建物である。柱穴は径20cm、深さ20～30cmを測る。妻側中央には北側で1.2m、南側で0.8m離れた位置に柱穴が見られることから独立棟持ち柱をもつ建物であったと考えられる。棟持ち柱の柱穴は径30cm、深さ26～36cmを測り、側柱の柱穴よりやや大きめである。

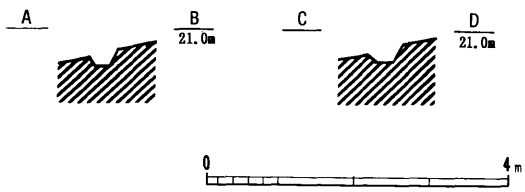
ＳＡ143　調査区の中央部、標高22～23m付近で検出した東西方向に延びる柱列である。中央部で屈曲する、くの字形を呈する柱列で総延長24.6mを測る。中央より西側は東西5間（12.6m）で、柱間は2.4mの等間であるが、最も西端の柱間のみ3mとやや広い。東側の柱列は東西5間（12m）で、柱間はわず



第112図　北斜面地区遺構図（1：350）



第113図　ＳＢ142実測図（１：100）



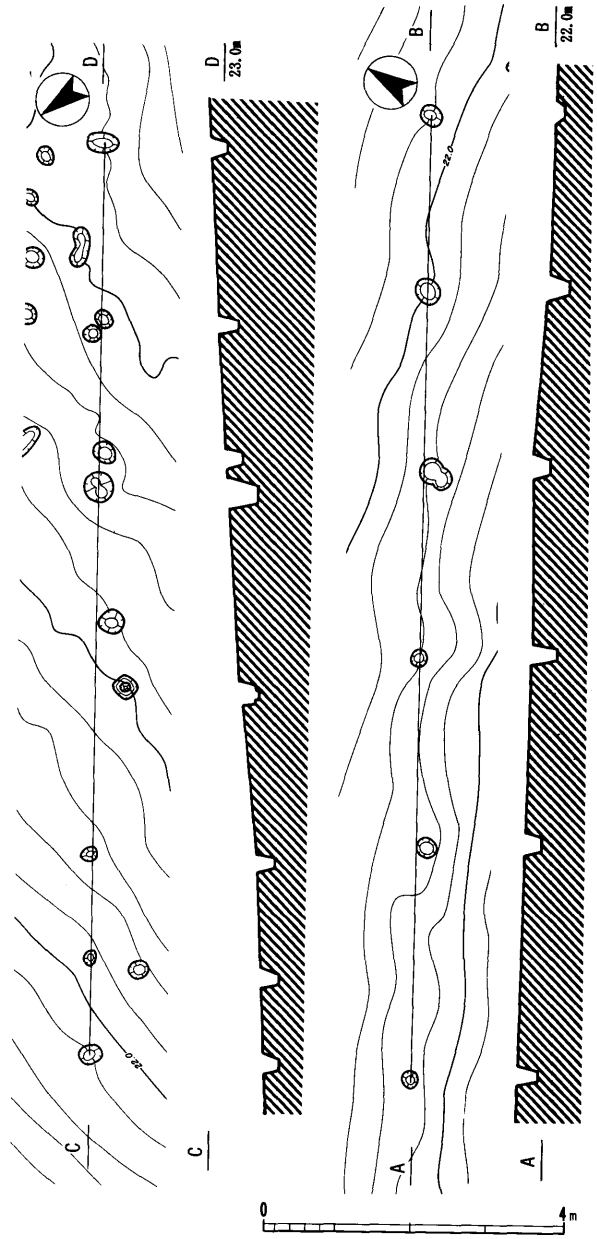
第114図　ＳＤ144断面実測図（１：100）

かにばらつきが見られるが、ほぼ2.3ｍ～2.5ｍの等間である。柱穴は径20～40cm、深さ22～30cmを測る。

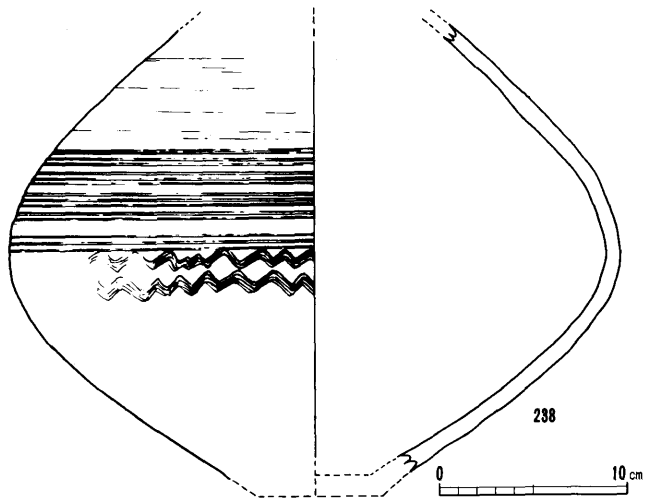
ＳＤ144　調査区の北寄り、ＳＢ142とＳＡ143の中間で検出した。調査区を等高線に沿って東西に横切る小規模な溝で、東西の両端は地形に沿って回り込んでいる。幅40～50cm、深さ14～22cmを測る。遺物は出土しなかった。

包含層出土土器

コンテナ箱１箱分の土器が出土した。大半が壺と甕の体部破片であり、Ａ１類の壺口縁部やＡ２類の壺底部などが見られる。(238)はＡ７－２類の広口壺体部で口頸部と底部を欠く。器表も剥離が激しいが、櫛状工具による数条の横線文とその下部に２条の波状文が認められる。遺物のほとんどは表面の剥離した細片であり、調整法や施文などを観察できるものは少ない。また、石器や玉類は出土していない。



第115図　ＳＡ143実測図（１：100）



第116図　包含層出土土器実測図（１：４）

Ⅳ. 結　　語

長遺跡は標高42.3mの丘陵に立地する弥生時代中期後半を盛期とする大集落遺跡であり、その立地状況から高地性集落の範疇に入るものである。今回の発掘調査では57棟にも及ぶ竪穴住居の他、掘立柱建物10棟・柱列73条・土坑1基・溝4条などを検出し、それらに伴うコンテナ箱換算で120箱ほどの土器・石器・玉類などが出土した。調査結果は丘陵上立地の集落構造や当地域における当該期の土器群について良好な資料を呈示している。ここでは集落の立地や構造、また、遺構や遺物について若干の考察と検討を加え結語としたい。

1．集落の立地状況

弥生時代の集落のうち生産基盤である水田面から程遠く、水の確保、風当たりの面などの日常生活を営む上で、不便ともいえる高地に立地する弥生時代の集落を一般的に高地性集落と称している[39]。周知のように高地性集落の機能については、軍事的防禦集落としての側面が強調されている。このような視点に立って、本遺跡の立地状況を概観してみたい。

津市内の中央部を流れる安濃川の流域には、当地域における弥生文化の発展を支えてきた肥沃な沖積平野が広がっている。この平野の北側には、よく開析されて谷密度の高い第三紀奄芸層群に属する標高30～40mの低丘陵が南東方向に延びている。本遺跡はこの丘陵のほぼ中央部に位置し、東西225m×南北150m、標高42.3mの主丘を中心として尾根支脈上の東部（標高40m）と北東部（標高35m）の丘陵にまで及んでいる。周囲には谷水田が入り込み、丘陵頂部と水田化可能な谷水田との最大比高は約30mである。丘陵からの眺望は、西側は比較的規模の大きな谷水田が入り込み、安濃川まで望むことができるが、西側以外は標高約40mの丘陵で囲まれ、ほとんど眺望はきかない。さらに、本遺跡は竪穴住居などの遺構が丘陵全体に高い密度で分布するが、丘陵頂部の比較的平坦な部分を除けば、地形的には平均斜度25度、最大斜度30度を超えるほどの急斜面で、常識的にはそこに集落が営まれたとは想像もつかないほどの地形である。以上のように本遺跡は、眺望視野が狭い上に水稲耕作を営むための居住地としても、建物等を構築する場所としても、また水の確保、風当たりの面などの日常生活を営む上でも適地とは言えない丘陵に立地している。都出比呂志氏は高地性集落を急峻な山頂または尾根上に立地し、水稲栽培に不便な場所に営まれる例（Aタイプ）と、標高60m前後、比高30m前後に立地し、平地との距離もさほど遠くない場所に立地する例（Bタイプ）に分けられた[40]。六甲山麓の会下山遺跡[41]、南河内東山遺跡[42]はAタイプ、和泉観音寺山遺跡[43]、田辺天神山遺跡[44]などはBタイプに該当する。この分類にしたがえば、標高42.3m、比高30mに立地する本遺跡は、標高が若干低めであるがBタイプの範疇と考えて差し支えないであろう。

2．集落構造について

本遺跡における最大の特徴は、丘陵全体を居住区として利用している点にある。丘陵頂部には比較的平坦な地形が存在するものの、居住区の大半は平均斜度25度、最大斜度30度を超える傾斜面に立地する。そのため、丘陵斜面を等高線方向に大きく掘り込み、地形の低い側に埋めだすことにより階段状のテラスを何段も造成して、居住に耐える平坦面を確保している。ただし、現時点では埋めだした部分はすべて流失しているため、当初のテラス幅や形状などは不明と言わざるを得ない。しかし、傾斜角度やその下に存在する遺構との関連性を考慮すれば、流失した部分は現存している幅の半分程度か、あるいはそれ以下と推定される。造成されたテラスは一定の標高で丘陵全体を巡るのではなく、同じ様な標高の独立したテラスがいくつか連続して巨視的なひとつのテラスを形成しており、それぞれのテラスの規模や形状は自然地形に強く規制されている。傾斜の急な調査区南部では幅の広いテラスを造成するのが困難なため、C・G・H・Jテラスのように帯状の細長い4段のテラスで構成されるが、傾斜の緩やかな北部ではB・D・E・K地区に見られるように、その地形を利用して幅の広いテラスが造成されている。このように地形に応じて造成されたテラスには、竪穴住居が配置されるが、各段ごとに竪穴住居2～4棟単位のまとまりをもった住居支群を構成し、それら

が合体して長の大集落を形成していると考えられる。今回の調査区では、こうした住居支群が８支群検出されているが、それらはおおむねＡ～Ｋ地区に対応すると考えられ、同時存在の棟数は重複や切り合いを考慮すれば25棟程度であったと推定される。

竪穴住居の分布を見ると、大型の竪穴住居は丘陵の頂部平坦地（Ａ地区）、あるいは傾斜が緩やかで広いテラスの存在する北部（Ｅ・Ｋ地区）に集中して見られる。Ａ地区には今回検出した中で最大規模の竪穴住居が含まれており、村おさを含むかなりの有力者の居住区と推定される。これに対して傾斜の急な南部では、幅の広いテラスを確保するのが困難であったため、小型の竪穴住居ばかりで構成されている。したがって、居住区の位置関係には、それぞれの支群単位の力関係が強く反映しているといえよう。これらの竪穴住居は、基本的には丘陵斜面の等高線の走る方向に沿って長辺をほぼ平行して建てられており、山籠遺跡でも指摘されたように斜面での住居造営にあたっての床面積の確保と長方形平面プランの関係は、極めて当然の結果といえよう。

また、斜面の遺跡といえども通路は存在したはずである。しかし、調査区南部の細長いテラスが段々畑のように連なる傾斜の急な地区では、階段状遺構など通路と考えられるような遺構は確認されていない。もし、当時存在したとしても、斜面の遺跡ゆえに流失はまぬがれなかったであろう。そのような通路は存在した可能性がある程度にとどめておきたい。また、ＳＡ105など斜面にピットが並んで検出された所も見られるが、これとても通路には容易には結びつけられそうもない。おそらくはＫ地区からＥ地区を経由してＤ地区・Ｂ地区という比較的傾斜の緩やかな場所が通路として利用されていたものと考えられる。そして、南部の急傾斜地区には、Ｂ・Ｄ・Ｉ地区を経由して各テラスに到達したと考えるのがもっとも合理的であろう。

また、雨水の処理についても疑問が残る。これだけの傾斜地ゆえに、ひとたび大雨に見舞われれば盛土の流失や竪穴住居内部への流入など被害は相当なものであったと考えられ、雨水のすみやかな排水は当時の人々にとっても重大な関心事であったにちがいない。これだけ大規模な宅地造成を実施した人々であってみれば、当然各段ごとに、しっかりとした排水施設を整備していたはずである。しかし、発掘調査の結果、テラスはおろか遺構全体を見渡しても竪穴住居に伴う周溝及び排水溝以外は、ほとんど検出されなかったのである。土累状に土手を築いて雨水の流入を防いだのか、または自然の成りゆきにまかせたのか、調査が終了してもいまだに釈然としない問題である。

また、この丘陵地区の北側には、谷地形を挟んで北斜面地区が存在する。ところがこの地区には竪穴住居が１棟も建てられていない。傾斜が調査区の中でもっとも緩やかな場所であることから、地形的な問題ではなく、おそらくは防禦面の問題から居住地として利用されなかったものと考えられる。なぜならこの地区の北側は、標高14ｍの谷水田へと続いているが、トレンチ調査の結果、この地区を守るべき環濠などは存在しないことが判明している。したがって、北斜面地区の東西ほぼ全体を横切るＳＡ143は丘陵地区を防禦するための防衛ラインと考えられ、なおかつ深く抉られた谷地形が自然の濠の役目を果たすことにより、丘陵地区を二重に防禦していたと考えられる。この自然の濠も、トレンチ調査を行ったところ、部分的にではあるが断面Ｖ字形を呈することから、ある程度は人為的に手を加えた可能性も否定はできない。また、最も重要な丘陵地区の防禦ラインについてであるが、標高27ｍの位置までの調査しか行われていないため、これより下の遺構についてはまったく知られておらず、したがって環濠などの有無もまた不明である。なお、本遺跡の周辺には当該期の墓と考えられる遺構や遺跡は知られていないが、北西１㎞の所に同時期の方形台状墓が検出された倉谷遺跡がある。しかし、距離や地形などを考慮すれば本遺跡との直接的な関連は薄いと考えられる。

３．遺構について

(1) 竪穴住居

今回の調査では、丘陵地区において57棟の竪穴住居を検出した。平面プランには円形・長方形・方形の３種類が存在するが、大半が長方形プランで占められている。平面プランが円形の住居はＳＨ５・ＳＨ43の２棟のみで、長方形または方形の住居に切ら

れ全形は不明であるが、いずれも復元径5.5m前後の規模である。これらは長遺跡における初期の住居と考えられ、長方形プランの住居によって多少消滅したものがあるにせよ、当初から少数しか存在せず、長方形プランや方形プランの住居と混在していたと考えられる。このような平面プランの混在は、納所遺跡や替田遺跡でも確認されており、弥生時代中期における当地域に顕著な住居プランといえよう。竪穴住居の大半を占める長方形および方形プランの竪穴住居の規模については、長辺の長さが4m以下の小型、4m～5m前後の中型、9mを超える大型の3つに大別できる。今回検出した最小のものは長辺の長さ2.7mのSH23、最大のものは長辺12mを測るSH11であるが、本遺跡の場合、長辺が4.0m～5.4mの規模のものがもっとも多くを占めている。

竪穴住居の内部施設としては、周溝・柱穴・炉などがある。周溝は、遺構の流失によって部分的に不明なものも見られるが、ほとんどの竪穴住居では床面を全周する。しかし、SH3・SH11・SH56のような大型の竪穴住居では全周せず、いずれも長辺の途中で途切れるという特徴をもつ。また、SH2・SH17・SH29・SH37・SH56では周溝から斜面側に延びる暗渠排水溝が見られ、SH2・SH7・SH45の周溝には壁柱穴が見られる。しかしSH45の壁柱はかなり密に配置され、形態的には切妻大壁住居の遺構に似た様相を呈する。

主柱穴については、大半の住居において4個を検出した。SH11のような大型の建物では、主柱穴の形状から断面長方形の柱も想定[45]される。しかし、SH29・SH33・SH50のように主柱穴をもたない小型のものも若干存在する。また、拡張に伴う主柱穴もSH7・SH30で検出されているが、長遺跡第一次調査で検出されたSB11のような6個の主柱穴をもつ竪穴住居[46]は確認されていない。

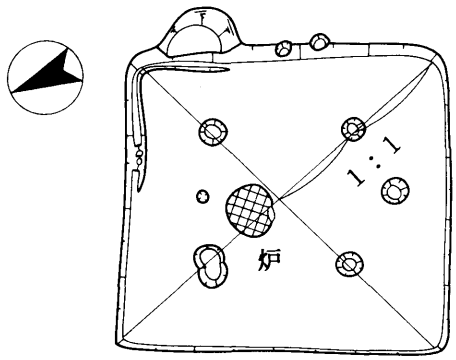
炉は、床面の中央部に焼土として確認された程度であるが、焼けた部分にはわずかな窪みが認められる。また、焼土の端に細長い石を1個据え付けた炉が6棟の竪穴住居で検出されており、その方向はSH17・SH19・SH26・SH38・SH45では長辺に直交する形で、SH7のみ長辺に平行する形で据えられている。このように細長い石を据え付けた炉をもつ竪穴住居は、雲出川左岸の四ツ野B遺跡や明和町北野遺跡[47]などに類例が見られるが、いずれも弥生後期以降のものである。しかし、その用途について詳細は不明である。

a．竪穴住居の設計について

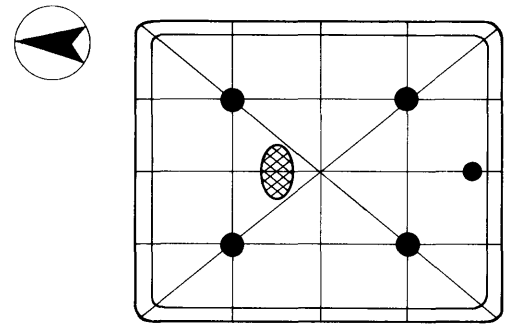
本遺跡の遺構は、第三紀奄芸層群の頑丈な地盤を掘り込んで造られているため、ひじょうに良好な状態で多くの竪穴住居が検出されている。それらの竪穴住居全体を眺めた場合、平面形は長方形プランで整然と並ぶ4個の主柱穴をもち、床面には周溝が全周するといったようなひじょうに画一的な様相が認められる。そこで、これらの竪穴住居がどのような設計に基づいて造られているのか、また、全体を貫く設計思想のようなものが存在するのかといった疑問を解くために、プラン全体がほぼ判明している29棟の竪穴住居について実測図の検討を行った。

その結果、顕著な長方形プランを示す平面プランについては短辺を1とした場合、長辺の比率は平均値が1.24となる。しかし、その比率は1.04から1.61まで広い範囲に分布（118図参照）し、ある特定の比率で設計されたものではないことがわかる。ただし、比率1.15～1.3の範囲に大半が集中することから、この付近の比率が一応の設計の目安となっていたということは言えるであろう。

次に主柱穴の位置関係について検討を行った結果、29棟のうち23棟について共通する設計法が使用されていることが判明した。すなわち整然と並ぶ主柱穴は第117図（a）のように床面の対角線上に正しくのっており、交点からの距離1：1の位置に正確に掘られていることがわかる。このような位置決めは第117図（b）のように各辺を4等分する方法でも可能ではあるが、対角線を使用する方が作業も容易で正確なことから、実際の作業では対角線を使って主柱穴の位置が決められたと考えられる。対角線の交点からの距離が1：1でない主柱穴でも対角線上にのっていることや、SH24のように平面形が平行四辺形の場合でも対角線上に主柱穴がのってくることから見ても、対角線方式が使用されたことは明らかである。なお、床面に対角線を張る作業は当然、周溝掘削以前に行われたと考えられる。以上のことから竪穴住居の竪穴部分の作業順序を想定すれば、



（a）長遺跡における竪穴住居設計法（ＳＨ26）



（b）長遺跡における基本設計パターン

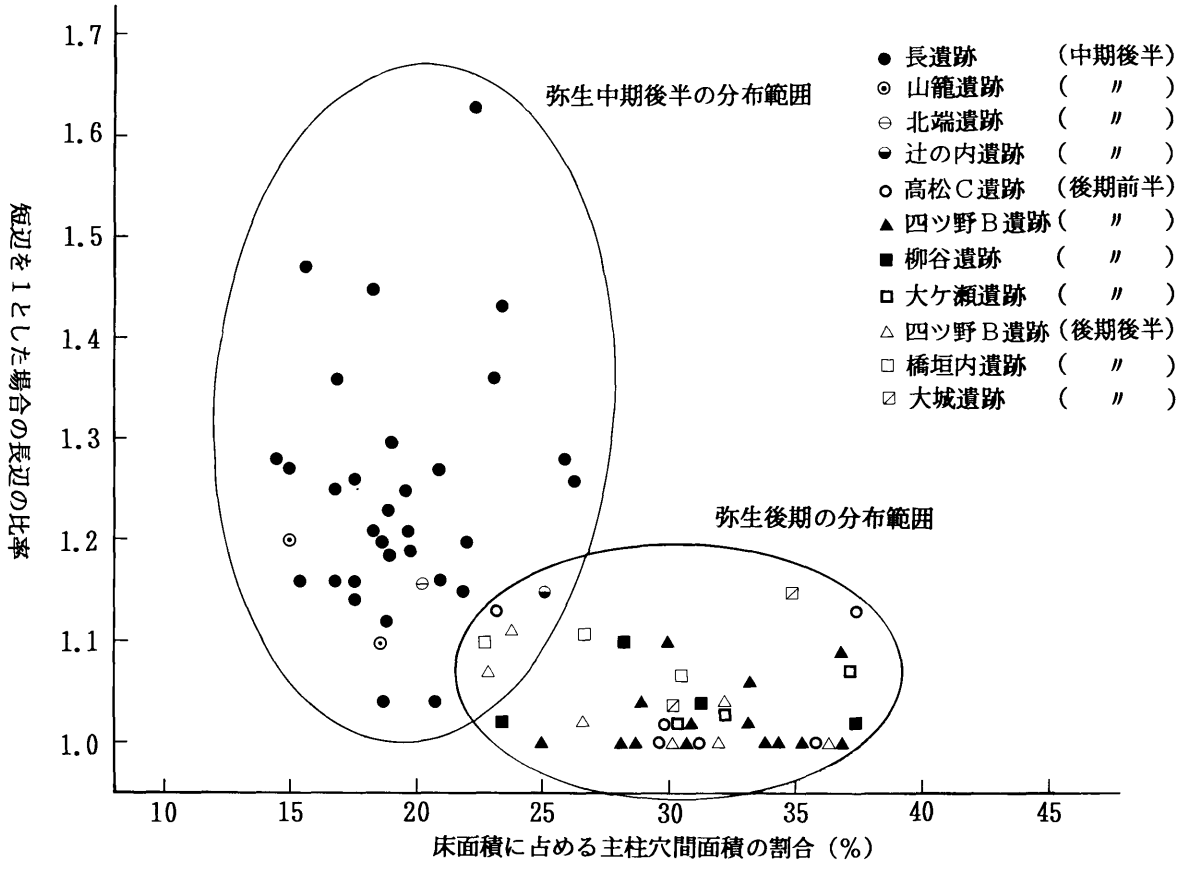
第117図　長遺跡における竪穴住居設計法と基本設計パターン

長辺の比率1.15～1.3の竪穴を掘る→床面に対角線の糸を張る→交点から１：１の位置に柱穴を掘る→周溝を巡らせる→完成となる。なお、主柱穴の配置が、本遺跡のように対角線の交点から１：１の比率をとるものは山籠遺跡のＳＨ１・ＳＨ５や四日市市上野遺跡のＳＢ10[48]などにも認められる。

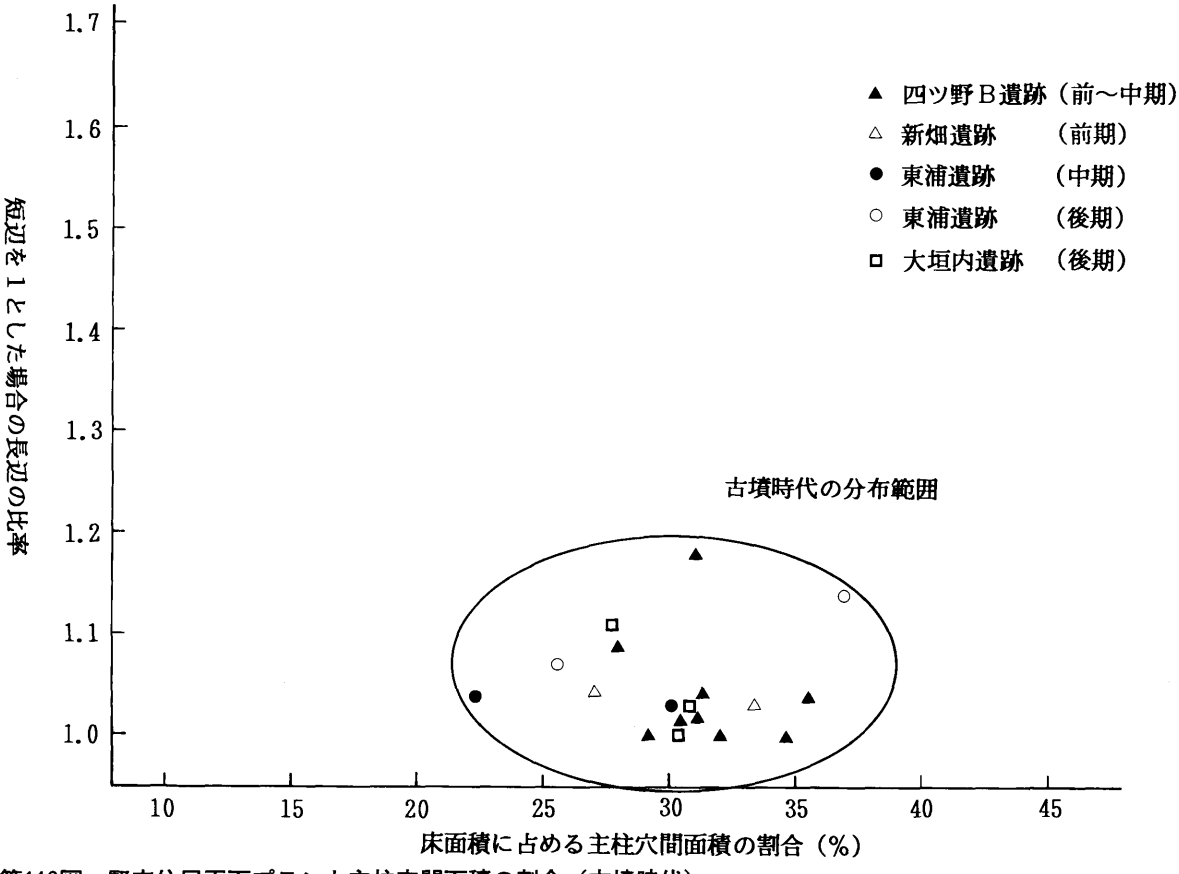
入口については、先にも述べたように本遺跡の竪穴住居は奄芸層群の頑丈な地盤に掘り込まれ、残存状態はひじょうに良好である。しかし、それぞれの竪穴住居について入口と考えられるような遺構は全く確認されなていない。ただし、これまでの他の遺跡の検出例では、入口のある側から地床炉を見た場合、中心よりやや奥まって位置する傾向が認められる。これを考慮すれば、本遺跡の竪穴住居は、その大半が長辺を南北方向にとり、床面中央やや北よりに地床炉が見られる。このことから、入口は南辺側に存在した可能性が高いと考えられる。また、本遺跡の竪穴住居では、南辺の中央部付近の床面に１個のピットをもつ（第117図参照）住居が多く認められることから、出入り口の施設に伴うものである可能性もあり、今後の類例が待たれる。

ｂ．平面プランと主柱穴位置の関係について

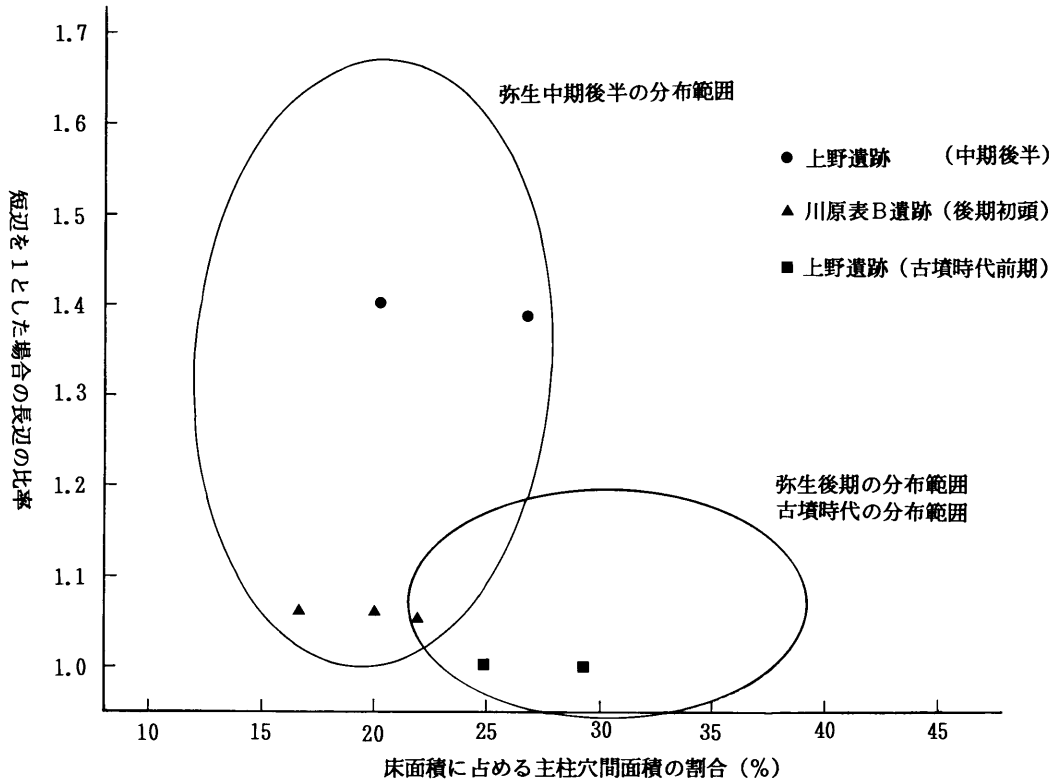
近年の調査例の増加により、安濃川流域における竪穴住居平面プランは、弥生時代中期前半の円形プランから中期後半には長方形プランへと変化し、弥生後期以後は正方形プランに統一されていくことが明らかとなってきた。また、弥生時代中期後半以後の方形プランの竪穴住居については、平面プランの変化に伴って、主柱穴が外側に移動（床面積に占める主柱穴間面積の増加）する傾向が認められる。そこで、時代によるこれらの変化を検証するため、長遺跡を中心として、比較的検出例の多い弥生時代中期後半から古墳時代後期の資料をもとに、安濃川流域における竪穴住居の平面プランと床面積に占める主柱穴間面積の割合の関係について検討を行った。その方法は、竪穴住居の短辺を１とした場合の長辺の比率を縦軸に、床面積（周溝を含む）に占める主柱穴間面積の割合を横軸にグラフを作り、その相関関係から、時代による竪穴住居平面プランおよび床面積に占める主柱穴間面積の割合の傾向を読み取ろうとするものである。なお、資料は発掘調査により確実に平面プランの判明している竪穴住居の中から平面形が長方形を含む方形プランで、４個の主柱穴をもつ定形的な竪穴住居に限定した。第118図は安濃川流域の遺跡で検出された弥生時代中期後半から弥生時代後期後半の竪穴住居のそれぞれの数値データをグラフ化したものである。このグラフから中期後半と後期の竪穴住居では、明らかに異なる分布域をもつことがわかる。中期後半では長辺の比率が1.04～1.61で平均1.24と高い数値を示し、この時期の竪穴住居に長方形プランの意識が強く働いていたことを示している。これに対し、ほぼ同じ分布域をもつ後期前半と後期後半では、比率は1.00～1.13で平均1.04と低い数値を示し、後期の竪穴住居には正方形プランの意識が働いていることを示している。また、床面積に占める主柱穴間面積の割合では、弥生時代中期後半は14.5～26.2％で平均19.1％に対して後期では22.6～37.4％で平均31.5％と大幅に増加している。第119図は安濃川流域の遺跡で検出された古墳時代の竪穴住居について、同様にグラフ化したものである。資料は古墳時代前期から後期にまでおよぶが、時期や遺跡による特徴的な傾向はあまり見られない。長辺の比率1.00～1.18、床面積に占める主柱穴間面積の割合22.3％～37.0％で、古墳時代の分布域は弥



第118図　竪穴住居平面プランと主柱穴間面積の割合（弥生時代中期後半～後期）



第119図　竪穴住居平面プランと主柱穴間面積の割合（古墳時代）



第120図　竪穴住居平面プランと主柱穴間面積の割合（弥生時代中期後半～古墳時代）

生時代後期の分布域と完全に一致し、平面プランや主柱穴の位置など、竪穴住居における基本的な設計プランがほとんど変化していないことを示している。以上の検討結果に考察を加えると、安濃川流域における弥生時代中期後半の竪穴住居の特徴は、長方形プランが顕著であり、長辺の比率が1.13をこえるものは中期後半の可能性が高いと言える。また、弥生時代後期に比較して、床面積に占める主柱穴間面積の割合が小さいことなどがあげられる。弥生時代中期後半の竪穴住居においても、正方形に近いプランをもつものがわずかに認められるが、主柱穴間面積の割合を考慮すれば、弥生後期では22.6%以下は見られず、これにより時期を区別することができる。弥生時代後期になると長辺の比率が1.13以上のものは見られず、正方形プランが顕著となる。後期後半の資料に、若干中期後半と分布域の重複するものが見られるが、この分布域には中期後半の資料が1点しか存在していないことから、長辺の比率が1.13以下で、床面積に占める主柱穴間面積の割合が22.6%以上のものは弥生後期の可能性が高いと言える。また、後期前半の竪穴住居の平均面積は30.4㎡であり、中期後半の平均面積30.3㎡と比較すると、規模的にはほとんど変化していないのに対して、平均主柱穴間面積は中期後半が4.96㎡、後期前半になると8.40㎡に増加し、中期後半の1.7倍にも達する大きな変化が見られる。この大きな変化は何に起因するのであろうか。おそらく、この時期を境に竪穴住居内における生活様式が変化し、それに伴って、主柱穴で囲まれた部分とその外側の部分の利用法や役割にも変化が生じたと考えられる。また、この時期から南辺中央部の床面に、貯蔵穴と呼ばれる土坑をもつ竪穴住居が多く見られるようになるのも、生活様式の変化と無関係ではないと考えられる。後期後半になると、竪穴住居の平均面積は26.8㎡となり、規模的には縮小傾向が見られる。平均主柱穴間面積も、減少して7.08㎡となるが、竪穴住居の平均面積に占める平均主柱穴間面積の割合は後期の前半・後半いずれも約27%であり、設計プラン自体は変化していない。古墳時代に入っても前代に引き続き、正方形プランが主流をなす。グラフにおける分布域は、弥生時代後期と完全に一致しており、長辺の比率および主柱穴間面積の割合のみのデータでは弥生時代後期と古墳時代の竪穴住居を区別するのは困難である。しかし、規模的に見ると、古墳時代前～中期の竪穴住居の平均面積は28.7㎡、後期の平均面積は25.0㎡で縮小傾向が見られる。平均主柱穴間面積も古墳時

代前～中期が8.1㎡、後期は縮小して6.9㎡となるが、竪穴住居の平均面積に占める平均主柱穴間面積の割合はいずれも28%であり、設計プランに変わりはない。　弥生時代後期前半以後の竪穴住居は、規模的には次第に縮小傾向をたどりながらも、古墳時代まで基本的な設計プランをほとんど変化させることなく連綿と造り続けられてきたのである。

以上、安濃川流域における竪穴住居の平面プランと主柱穴間面積の関係について考察を加えてきたが、他地域の竪穴住居についても、その実態と傾向を把握するため、長遺跡とほぼ同時期と考えられる弥生時代中期後半の四日市市上野遺跡、弥生時代後期初頭の松坂市川原表Ｂ遺跡[49]、古墳時代前期の四日市市上野遺跡の資料を用いて検討を行った。第120図はそれぞれの竪穴住居の数値データを、これまでと同様にグラフ化したものである。弥生時代中期後半の四日市市上野遺跡の竪穴住居は、長辺の比率が1.37～1.40と高い数値を示し、長方形プランが顕著に見られる。また、床面積に占める主柱穴間面積の割合は20.8～26.9%で安濃川流域の中期後半の分布域と一致する。弥生時代後期初頭に位置付けられる松坂市川原表Ｂ遺跡の竪穴住居は、床面積に占める主柱穴間面積の割合が16.8～22%と低く、弥生時代中期後半の分布域に属する。しかし、長辺の比率は1.05～1.06と低い数値を示し、正方形に近いプランへの意識が感じられ、中期後半から後期前半に至る過渡期の形態として捉えることができる。また、古墳時代前期の四日市市上野遺跡の竪穴住居は、長辺の比率1.00の正方形プランをもち、床面積に占める主柱穴間面積の割合は25.0～29.5%で、安濃川流域の古墳時代前期の分布域と一致する。

以上のように、松坂市や四日市市など他の地域の竪穴住居についても、弥生時代中期後半から古墳時代前期にかけて安濃川流域とほぼ同じ様な傾向が見られることが判明した。資料の数が不足しているため断言はできないが、三重県北中部地域という広い範囲においても、定形的な竪穴住居については安濃川流域で今回検証された内容とほぼ同様の傾向が見られる可能性があることを指摘しておきたい。

(2)柱　列

今回の調査でＣ・Ｇ・Ｈ・Ｊなどの各地区において等高線の走る方向に沿って、ほぼ平行に配置された柱列が多数検出された。この遺構が集落内においていかなる機能を担っていたかが問題となるが、岡山県用木山遺跡[50]ではこれに近い遺構を長方形住居と考えている。本遺跡でも、埋め出した部分の流失を考慮すれば掘立柱建物の可能性がない訳ではないが、その柱間の狭さと桁行きの長さを考えれば建物とするには疑問が残る。流失土をせきとめるための施設なのか詳細は不明であるが、やはり柵としたほうがより妥当と思われる。ただし、最も傾斜の急な場所に存在することや、全体を取り囲まないことから防禦的な施設でないということはいえよう。

(3)段状遺構

高地性集落のうち丘陵斜面に立地する遺跡に見られるもので、小規模なテラス状遺構を意味する。独立施設の場合と住居の付属施設になる場合の両様が見られる。前者の例は、兵庫県三田市奈カリ与遺跡[51]で検出されている。また、後者の典型例は、兵庫県神戸市頭高山遺跡[52]などに見られる。本遺跡においては前者の例がＡ地区Ａ－４テラスやＩ地区Ｉ－３テラスで、後者の例がＢ地区ＳＨ19に付属するものである。これらは、あくまでも傾斜地に平坦地を得ることを目的とした施設と考えられる。

４．遺物について

今回の調査では、コンテナ箱換算で約120箱分の遺物が出土した。遺物には土器・石器・玉類・石製品などがある。遺存状態の悪いものが多かったが、極力実測図示を試みた。実測し得た遺物は総数238点で、比率的には土器82%・石器16%・玉類と石製品２%で、その大半を土器が占める。

(1)土器および遺跡の年代

土器はコンテナ箱で116箱分の量が出土した。しかし、調査区の大部分が丘陵の傾斜面に立地しているため、これらの土器の大半が、自然流失による流土の堆積土層内から二次移動した状態で発見されたものである。そのため、ほとんどの土器は断片的な破砕片となり、調整技法や文様等の不明なものが多い。また、遺構からはコンテナ箱で20箱分程度の土器が出土しているが、遺構との直接的な共伴関係が明らかなものはＳＨ７やＳＨ47などごく一部であり、大半は竪穴住居の埋土掘削途中に出土したものである。

このような状況ではあるが、出土した土器を総合的に見た場合、丘陵地区西斜面表土層直下から出土した古墳時代後期の須恵器甕・杯身の2点を除いては、ほとんどが弥生第Ⅳ様式（弥生時代中期後葉）に属するものである。したがって本遺跡で検出された遺構はすべてこの時期のものと考えて差し支えない。器種としては壺・甕・高杯・鉢・蓋・ミニチュア土器などがあるが、全体に占める割合を見ると壺40%・甕45%・高杯5%・鉢2%・蓋5%・ミニチュア土器3%となり、甕が最も多く、甕と壺でその大半を占める。ただし、百分率を出すには資料の絶対量が不足しているが、おおよその傾向は知ることができる。壺には広口壺・受口壺・内湾口縁壺の3種類が存在する。これらは、伊勢湾西岸地域における当該時期の壺の基本形式といえるものであり、比率的には受口壺が全体の54%を占めもっとも多く、広口壺44%がこれに次ぎ、内湾口縁壺にいたっては2%しか存在していない。受口壺は口縁部を受口状に屈曲させて、その外面に第Ⅳ様式の指標となる凹線文を施したもので、口径の小さい受口細頸壺（B1類）と口径の大きい受口太頸壺（B2類）がある。これらは体部は基本的にハケ調整のままであり、文様も見られない。これらの土器は県下では納所遺跡・上村遺跡・亀井遺跡・永井遺跡・上箕田遺跡などで見られ、北勢・中勢地域では比較的よく見られる器種である。広口壺は、口縁部が大きく開き、端部外面には櫛描波状文、内面には櫛刺突文を施したものや、体部上半を櫛描き文で飾ったものが多く見られる。ほとんどが第Ⅳ様式に収まるものであるが、口縁部内面に瘤状突起を密にもつ第Ⅲ様式末の特徴をもつものもわずかに見られる。これらの土器も納所遺跡をはじめ受口壺とほぼ同様の分布を示す。内湾口縁壺は、本遺跡のみならず、当地域においては納所遺跡や橋垣内遺跡など一部の遺跡でわずかに出土しているのみで、ほとんど見られない形態のものである。口縁外面に数段の櫛描き横線文が巡る大型の口縁部破片1点のみが唯一の出土資料である。

甕も大別して、口縁部がくの字形に短く屈曲し体部に文様の無いA類、口縁部が緩やかに外反するB類、口縁部が受口状のC類の3種類が存在する。これらの土器は従来より、B類は当地域の在地型のもの、A類は畿内からの、C類は近江地方からの流れを汲むものとされている。しかし、畿内からの流れを汲むA類の中には、体部下半にミガキを施した東海地方に特徴的な調整法をもつものも見られ[53]興味深い。比率的にはA類が全体の44%を占めもっとも多く、B類41%がこれに次ぎ、C類が15%でもっとも少ない。A類の土器は橋垣内遺跡や四日市市上野遺跡などで見られる。とくに上野遺跡ではこのA類が高い比率を占める反面、B類の土器がまったく出土していないのが特徴的である。

また、上野遺跡では台付き甕の比率がひじょうに高いのに対し、本遺跡では台付き甕はほとんど見られない。当地域の在地的な土器といえるB類は、薄手のつくりと櫛状工具を使用した施文を特徴とする。C類には近江地方の流れを汲むC3・C4類と第Ⅲ様式中頃の特徴をもつC2類がある。C3・C4類は当地域で比較的よく見かける土器であるが、C2類は当地域ではほとんど見られず、わずかに四日市永井遺跡で類例が見られる程度である。

高杯はA類とB類がある。A類は水平な口縁部をもつ高杯で納所遺跡・亀井遺跡・四日市上野遺跡など北勢・中勢地域で比較的よく見かける土器である。B類は内湾気味に開く杯部をもつ高杯で、四日市上野遺跡に類例がみられるが、当地域ではあまり見られない土器である。

鉢は胴部が屈曲し、扁平化の進んだ形態のもので、納所遺跡・橋垣内B遺跡など当地域で見られる土器であるが、量的にはわずかである。

(2)石器について

本遺跡から出土した石器は総数32点である。これは調査面積3,700㎡、竪穴住居検出数57棟という遺構密度と対比した場合、余りにも少ない数量と言わねばならない。それでも、器種的に見た場合、石斧類12点・石鏃10点・石庖丁1点・磨石3点・石皿1点・砥石3点・敲打石2点と、少数ながらも工具・収穫具・狩猟具など一応一通りの器種は揃っている。これらの石器の所属時期については、同時に出土した土器の時期幅を考慮すれば、包含層出土のものも含め、中期後葉の極めて限定された時期と考えて差し支えない。したがって、時期の特定できる石器資料の集積がまだまだ乏しい中勢地域にあっては、本

遺跡の南200mに所在する山籠遺跡の資料と共に、竪穴住居単位で石器の器種組成を知ることのできる極めて貴重な資料ということができる。量的には少ない資料であるが、ここでは事実確認を中心に若干の考察を加えてみたい。

a．石器器種と使用石材

打製系の石器としては石鏃のみであり、石材は安山岩（下呂石）製の１点を除き、他はすべてサヌカイト製である。サヌカイトの産出地については、奈良県二上山産に似たものも含れているという指摘がある程度にとどめておきたい。

これに対し、磨製系の石器石材は砂岩・凝灰質砂岩・粘板岩・結晶片岩など比較的豊富である。このことは、それぞれの用途にあった石材を選択していることに起因するのであろう。薄い造りの石庖丁には片岩系の結晶片岩を使用している。また、磨製石斧類のうち、小型のノミ形石斧には凝灰質砂岩と粘板岩が、太型蛤刃石斧と扁平片刃石斧には重量感があり、衝撃に強い硬質の砂岩が使用されている。

その他の石器類には磨石・石皿・砥石・敲打石などが存在する。堅果類や穀粒を磨りつぶすのに使用されたと考えられる磨石には、重量感のある硬質の砂岩や凝灰質砂岩などの砂岩系の石材を使用し、石皿には花崗岩、砥石には砂岩、敲打石には花崗岩とチャートが使用されている。

磨製石器の石材については、主体を成す砂岩が一志群一志町を中心とする一志層群中に見られ、同一層準の地層が、他の地域でも伊勢平野沿いの山地や丘陵地の各所で認められるのをはじめ、結晶片岩についても紀伊半島に広く分布しているものである。また、磨石・石皿・砥石・敲打石などの石材である花崗岩・凝灰質砂岩・チャートなどについても基本的には県内で産出する石材である。

したがって、打製石器の主たる石材が地元では産出しないサヌカイトであるのに対して、磨製石器など、打製石器以外の石材については、比較的地元でも入手しやすい石材であったと考えられる。

b．石器器種による製作地の想定

長遺跡では、打製・磨製を問わず確実な未製品は確認されていない。磨製石鏃の未製品と考えられる石器が一点出土しているのみである。しかし、打製石器については、竪穴住居の床面から、サヌカイトのフレークやチップ（屑砕片）が検出されていることや、丘陵頂部平坦地の遺構面からサヌカイト原石を小割りにした大型剥片16片がまとまって出土していることなどから、本遺跡では集落内に原石を持ち込み、石鏃や石錐などの製作が行われていた可能性が高いといえる。同様の例は、長遺跡の一次調査をはじめとして、納所遺跡や山籠遺跡などでも認められ、当地域においては、早くからサヌカイトを使用した集落内での打製石器製作の想定がなされている。しかし、太型蛤刃石斧や扁平片刃石斧などの磨製石斧については、本遺跡をはじめとして周辺の遺跡からも、原石はおろか製作工程を示す資料さえ出土していないことから、これらの製品については、あるルートを通じて他の集落で生産された既製品を入手していたと考えるのが妥当であろう。

c．当地域における石器の様相

本遺跡における石器の様相についてはすでに述べたとおりであるが、ここではまとまった器種組成をもつ納所遺跡と山籠遺跡の石器資料に、本遺跡の資料を加えて、地域的な様相について考えてみたい。

納所遺跡は本遺跡の南２㎞に位置し、当地域における拠点的集落として著名な遺跡である。弥生時代中期にその盛期を迎える遺跡で、石器も未製品を含め、膨大な数が出土している。また、南200ｍの所には、本遺跡とほぼ同時期に営まれた山籠遺跡が存在する。これらの遺跡からは、石鏃や石槍などの狩猟具、石斧類・石錐・石皿・砥石・敲打石などの工具、石庖丁などの収穫具などが出土している。納所遺跡の石器組成の比率は、弥生中期に限れば石斧30.7％・石鏃26.4％・砥石14.3％・敲打石及び凹石10.9％・石鏃と打製石斧以外の打製石器9.6％・石庖丁5.9％となる。これに対して本遺跡では、石斧37.5％・石鏃31.2％・磨石、石皿12.5％・砥石9.4％・敲打石6.3％・石庖丁3.1％という比率となる。ただし、本遺跡の場合、百分率を出すには資料の絶対量が不足しているが、おおよその傾向は知ることができよう。

この２遺跡を比較すると、いずれも石鏃と石斧で全体の60～70％を占めている。山籠遺跡においてもこの割合は同様である。また、本遺跡では石斧の割合が高いことと、磨石や石皿といった調理用石器の

占める割合が高いことが注目される。納所遺跡では石鏃や石斧の割合が若干低いものの、砥石や敲打石・凹石といった石器製作に関わる遺物の割合の高いことが注目される。このことは、納所遺跡における石器製作活動が活発に行われていたことを示すものであろう。

石材について見ると、いずれの遺跡でも石鏃や石槍など、打製石器のほとんどすべてがサヌカイトで占められているのに対して、磨製石器の場合は、太型蛤刃石斧や扁平片刃石斧など大型の石斧は砂岩質、石庖丁は片岩系といったように、器形によって石材は、ほぼ統一されている。ただし、山籠遺跡出土の磨製石斧については、砂岩質のものより輝緑岩系の石材が目立つという特徴が見られるものの、それぞれの遺跡においてサヌカイトや砂岩、片岩系といった同じ石材の製品の分布が認められることから、これらの集落の間には、石材・製品の入手・獲得においてなんらかの形で関連があったと考えるのが妥当であろう。また、山籠遺跡において磨製石斧の石材に、砂岩より輝緑岩系の石材が目立った点については、この集落が他とは異なる独自のルートを通じて既製品を入手していた可能性を示すものであろう。

d．石鏃について

最後に石鏃について若干考察を行ってみたい。本遺跡では10点の石鏃が出土しているが、砂岩製の磨製石鏃未製品を除いてはすべてサヌカイト製打製石鏃である。形態的には、平基有茎石鏃1点・平基無茎石鏃3点・凸基有茎石鏃3点・菱形鏃1点などである。有茎石鏃が、いずれも長さ3㎝未満、重さ2ｇ未満であるのに対して、平基無茎石鏃は3.0～4.1㎝、重さ2.6～3.2ｇであり、佐原真氏の唱える戦闘用石鏃の長さ3㎝以上、重さ2ｇ以上の占める割合が比較的高いことが指摘されよう。このような傾向は、同時期の周辺の遺跡においてもうかがうことができる。当地域の拠点的集落である納所遺跡では弥生時代中期前半から後半にかけて、集落の東側に防禦的な環濠が集中的に形成されるが、それに伴って石鏃の大型化が認められる。長さ4㎝以上のものが多く作られ、重さも最高6ｇに達するものが出現するなど大型化の様相が顕著である。また、山籠遺跡においても、長さ5.1㎝、重さ3.8ｇに達するものが出現するなど、同様の傾向がうかがわれる。

弥生時代中期におけるこれらの動向は、当地域における当時の社会情勢の反映と見ることができ、防禦的な環濠や戦闘用石鏃の存在からも、集落間、あるいは地域間に緊張した状態があったことがうかがわれよう。

(3) 玉類・石製品

本遺跡からは勾玉1点・管玉2点・不明ガラス製品1点・紡錘車1点が出土している。

弥生時代中期の勾玉は、愛知県朝日遺跡・大阪府池上曽根遺跡・鬼虎川遺跡・兵庫県田能遺跡・舞鶴市志高遺跡などで出土しており、丹後地方では拠点的な集落に1個という出土状況を示している[54]。また、池上曽根遺跡では大型掘立柱建物の掘方に埋め込まれ、最古の地鎮を示す可能性が指摘されている[55]。この時期の勾玉の特徴は、小型で半抉状と呼ばれる定形化する以前の形態をもち、ほとんどが翡翠で作られている。本遺跡出土のものは、朝日遺跡の玉造り工房から出土した勾玉に酷似しているが、ひじょうに薄い作りが特徴的である。また、半透明で鮮やかな緑色を呈し、原石の産地は糸魚川流域にもとめられる。当該期の勾玉が、土器の地域差を越えて九州から東北地方にかけて分布することから、その価値観は凡日本的なものであり、社会的な権威や権力を象徴するものと認識されていたことがうかがえよう。

管玉は2点出土しているがいずれも硬玉製で長さ0.6㎝の小さいものである。本遺跡の北西約400ｍに位置する安濃町倉谷弥生墳丘墓の主体部から同様のものが出土している[56]。また、津山市西吉田遺跡[57]の土坑墓3の主体部からは、材質は異なるがほぼ同じ大きさの管玉が出土している。

不明ガラス製品は淡い青色を呈し、長さ0.55㎝の小さなものである。破損した片側を修理した様子が見られ、完全な製品ではない。また、津山市西吉田遺跡の土坑墓3の主体部からも同じ様な大きさのガラス製小玉が出土しているが、この時期のガラス製品はひじょうに貴重なものであったらしく、こちらでも破損品が再利用されている。

石製品としては紡錘車の破片が1点見られるのみである。無文で復元すれば14ｇ程度になり、当時の平均的な大きさと重量のものである。

5．まとめ

弥生時代中期頃には関東地方以西において、環濠集落や高地性集落など「戦争」に備えたとされるムラが数多く出現している。主な遺跡として大阪府東山遺跡・和泉観音寺山遺跡・兵庫県会下山遺跡・池上口ノ池遺跡・岡山県用木山遺跡・福岡県下稗田遺跡・佐賀県千塔山遺跡[58]などがあり、とくに中部瀬戸内や西摂六甲山系などに営まれた高地性集落については、中国史書に見える「倭国大乱」の考古学的反映を示すものではないかと主張されているところである。三重県下においても弥生時代後期には、四日市市金塚遺跡[59]や鈴鹿市南谷遺跡[60]のように環濠や堀をもった防禦的な丘陵上の集落が出現している。これらの遺跡と本遺跡を比較した場合、立地面について見れば、標高100～200mに立地するAタイプの東山遺跡・会下山遺跡も含めてほとんどの遺跡が台地上か丘陵頂の比較的平坦な面のみを居住区としており、居住区の大半が急斜面に立地する本遺跡とは、きわだった違いを見せている。もっともこの違いは、本遺跡の集落規模が格段に大きいことと、それを受け入れるだけの広い平坦面をもつ台地や丘陵などの地形に、当地域が恵まれていなかったことにもよるのであろう。また、付属施設の面においても、これらの遺跡には貯蔵穴や土坑などが伴うのに対して、本遺跡では、そのような遺構がほとんど認められないのも特徴的である。これらの点で、本遺跡と似た様相を呈するのが岡山県用木山遺跡で、斜面をテラス状に造成する集落構造のみならず、集落の廃絶についても同じ様な状況を示している点が興味深い。

また、このような防禦的な集落は、千塔山遺跡がⅡ期に、下稗田遺跡や東山遺跡がⅢ期に、その他の遺跡もⅣ期には営みが開始されている。本遺跡においてもⅢ期末～Ⅳ期にその成立が認められるが、当地域では中期前半のⅢ期初め頃には、拠点集落である納所遺跡に防禦的な環濠が掘削されたり、替田遺跡や弐ノ坪遺跡で焼失住居が検出されるなど、社会的緊張状態にあったことが推察される。また、北部九州や畿内などでは被葬者が石鏃により死亡したと推定される墓が多数検出されて[61]いるが、当地域においても、替田遺跡や弐ノ坪遺跡で石鏃を出土する土坑墓がいくつか検出され、戦いによる死亡者が想定されるところである。なお、替田遺跡・弐ノ坪遺跡・蔵田遺跡など沖積平野の遺跡からはⅣ期の遺構や遺物がほとんど検出されていないことから、すでにこの頃には、集落の人々はより安全な場所に移り住んでいた可能性が高いと考えられる。このことから、替田遺跡・弐ノ坪遺跡・蔵田遺跡といった沖積平野に営まれていたいくつかの集落が、社会の緊張状態に伴って集団で丘陵に移動したことによって長の大集落が成立したと考えられる。しかも、それは山籠遺跡をも内包する大規模な集落であった可能性が高いのである。以上のように、当地域においてもⅢ期の初めの頃には、すでに社会的緊張状態に入っていたと考えられ、それが本遺跡を成立させる要因になったと推察される。ただ、その緊張状態が水稲耕作に伴う水争い、土地争いといった程度の限定した地域のものなのか、もっと大規模なものなのかは不明であるが、当地域にあってはこのような防禦的な集落はⅤ期になるとほとんど見られなくなる。本遺跡においてもⅣ期をもって完全にその役目を終えている。とはいえ、集落全体が焼き討ちに遭って壊滅したというのではない。集落内には石鏃などを除いては、完形を保つ遺物類はほとんど検出されず、継続的な日常生活の様子を留めているものは認められなかった。むしろ、第二次調査では谷地形の場所に破損土器類を投棄した状況すら示している。以上のことから推察して、長遺跡は弥生時代中期末のある時期に、身の回りの品々を意識的に取り片づけて、集落全体が他の場所に移動した感が強く、用木山遺跡の場合とほとんど同じ状況を示している。ただし、用木山遺跡では眼下の丘陵裾部に大規模な集落跡である岩田大池遺跡が、用木山遺跡を引き継ぐように弥生時代後期初頭から始まるのに対して、当地域では、沖積平野に近い丘陵裾部に小規模な遺跡が点在して見られるようになる。このことは、いくつかの集落の合体により形成されていた本遺跡が、社会的緊張状態の緩和と共に本来の単位集落に分解して丘陵裾部へと移動していったことを示すものと考えられよう。そして、このことは用木山遺跡でも指摘されたように「本集落は発展的に廃絶し、より便利な丘陵裾部へと集落をあげて移行したものと考えられる。」という状況であったと推察されるのである。

［註］

（1） 長岡丘陵は通称であり、他に見当山丘陵などの呼び名があるが、ここでは津市教育委員会が昭和58年に行った第1次調査の報告書に従い 長岡丘陵の名称を用いる。

（2） 田中秀和「西相野遺跡発掘調査報告書」（『西相野遺跡発掘調査報告書・ツヅミ遺跡発掘調査報告書』安濃町教育委員会 1999年8月）。

（3） 伊藤徳也「大石遺跡」（『平成3年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター1992年3月）。

（4） 伊藤裕偉「大里西沖遺跡」（『平成3年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター 1992年3月）。

（5） 宮田勝功ほか「蔵田遺跡第1次」（『一般国道23号 中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報Ⅶ』三重県埋蔵文化財センター 1995年）。

（6） 早川裕己『多倉田遺跡発掘調査報告』三重県教育委員会 1981年

（7） 伊藤克幸・下村登良男『安芸郡安濃村・辻の内遺跡』安濃町遺跡調査会 1975年

（8） 竹内英昭「松ノ木遺跡」（『一般国道23号中勢道路（9工区）道路建設事業に伴う松ノ木遺跡・森山東遺跡・太田遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター 1993年）。

（9） 伊藤久嗣ほか「納所遺跡発掘調査報告」三重県教育委員会 1980年

（10） 穂積裕昌ほか『一般国道23号中勢道路（9工区）道路建設事業に伴う橋垣内遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター 1997年

（11） 平成2年、津市教育委員会が発掘調査。

（12） 吉村利男『上村遺跡発掘調査報告』津市教育委員会 1972年

（13） 倉田直純・増田安生ほか「森山東遺跡」（『一般国道23号中勢道路（9工区）道路建設事業に伴う松ノ木遺跡・森山東遺跡・太田遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター 1993年）。

（14） 平成3年、津市教育委員会が発掘調査。

（15） 平成5年、津市教育委員会が発掘調査。

（16） 池端清行ほか「替田遺跡第1次」（『一般国道23号 中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報Ⅸ』三重県埋蔵文化財センター 1997年）。

（17） 池端清行ほか「弐ノ坪遺跡」（『一般国道23号 中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報Ⅹ』三重県埋蔵文化財センター 1998年）。

（18） 竹内英昭『平田古墳群』安濃町遺跡調査会 1987年

（19） 中村光司・穂積裕昌「山籠遺跡」（『一般国道23号 中勢道路建設事業に伴う大古曽遺跡・山籠遺跡・宮ノ前遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター 1995年）。

（20） 田中秀和『大城遺跡発掘調査報告書』安濃町教育委員会1998年

（21） 下村登良男「桐山遺跡」（『県営安東地区圃場整備事業地域養老・森山B・桐山遺跡発掘調査報告ー付・竹川遺跡ー』三重県文化財連盟 1972年

（22） 文献(21)に同じ

（23） 本堂弘之・倉田直純ほか「宮ノ前遺跡」（文献(19)に同じ）

（24） 文献(21)に同じ

（25） 津市教育委員会『高松C遺跡発掘調査報告』（『津市埋蔵文化財センター年報 』 1998年）。

（26） 浅生悦生ほか「大ケ瀬地区」（『野田遺跡群発掘調査報告』津市教育委員会 1974年）。

（27） 浅生悦生ほか「柳谷地区」（『野田遺跡群発掘調査報告』津市教育委員会 1974年）。

（28） 伊藤久嗣「平栄遺跡」（『近畿自動車道埋蔵文化財調査報告Ⅰ山口遺跡・大ケ瀬遺跡・平栄遺跡』三重県教育委員会 1973年）。

（29） 萱室康光『尺目遺跡発掘調査報告』津市教育委員会 1975年

（30） 高茶屋出土銅鐸『津市の文化財』津市教育委員会 1989年

（31） 浅生悦生・倉田直純ほか「太田遺跡」（『一般国道23号中勢道路（9工区）道路建設事業に伴う松ノ木遺跡・森山東遺跡・太田遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター 1993年）。

（32） 「倉谷方形台状墓」（『三重県埋蔵文化財年報7』三重県埋蔵文化財センター 1996年3月）。

（33） 谷本鋭次『津市河辺町・亀井遺跡』三重県教育委員会 1973年

（34） 山田猛「前田遺跡」（『昭和57年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会 1983年3月）。

（35） 谷本鋭次「大ケ瀬遺跡」（『近畿自動車道埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ』三重県埋蔵文化財連盟 1973年）。

（36） 谷本鋭次『高松弥生墳墓発掘調査報告』津市教育委員会 1970年

（37） 昭和59年度 津市教育委員会が発掘調査

（38） 小玉道明ほか『坂本山古墳群・坂本山中世墓群』津市教育委員会1970年

（39） 今尾文昭ほか『三世紀の九州と近畿』橿原考古学研究所 1983年

（40） 都出比呂志「古墳出現前夜の集団関係ー淀川水系を中心にー」『考古学研究』第20巻4号 1974年

（41） 村川行弘・石野博信『会下山遺跡』芦屋市文化財調査報告第3集 1964年

（42） 菅原正明『東山遺跡』大阪府文化財調査報告書 1979年

（43） 森浩一・鈴木博司『観音寺山弥生集落調査概報』観音寺山遺跡調査団 1968年

（44） 森浩一・辰巳和弘ほか『田辺天神山弥生遺跡』同志社大学文学部考古学調査記録5 1976年

（45） 宮本長二郎氏の御教示による。

（46） 萱室康光ほか『長遺跡発掘調査報告』津市教育委員会 1989年

（47） 北野遺跡第2次調査 上村安生氏の御教示による。

（48） 春日井恒ほか『上野遺跡』四日市市遺跡調査会 1991年

（49） 西田尚史「川原表B遺跡」（『中部平成台団地埋蔵文化財発掘調査報告書』松阪市教育委員会 1990年）。

（50） 神原英朗『用木山遺跡発掘調査報告』岡山県山陽町教育委員会 1977年

（51） 井守徳男ほか「奈カリ与遺跡」（『北摂ニュータウン内遺跡調査報告書Ⅱ』兵庫県教育委員会 1983年）。

（52） 「頭高山遺跡」神戸市教育委員会 1983年

（53） 松本洋明氏の御教示による。

（54） 『丹後発掘』京都府立丹後郷土資料館 1999年10月

（55） 乾哲也 編『よみがえる弥生の都市と神殿』摂河泉地域史研究会 1999年

（56） 田中秀和氏の御教示による。

（57） 行田裕美『西吉田遺跡』津山市教育委員会 1985年

（58） 中牟田賢治『千塔山遺跡』基山町遺跡発掘調査団 1978年

（59） 服部芳人ほか「金塚遺跡」（『近畿自動車道名古屋線（第二名神）埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ』三重県埋蔵文化財センター 1999年）。

（60） 小菅文裕「南谷遺跡」（『一般国道23号中勢道路（6工区）建設事業に伴う南谷遺跡・稲生遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター 1995年）。

（61） 佐藤良二『弥生戦争とサヌカイトー石材の原産地と消費地ー』香芝市二上山博物館 1998年

遺構名	平面形（プラン）	規模（m） 東西	規模（m） 南北	辺の比率 短辺：長辺	面積（㎡）	主柱穴	地床炉 焼土範囲（cm）	周溝	備考
SH 1	長方形	4.6	4.1	1：1.12	18.9	4	中央西寄り　70×50	全周	西辺を拡張
SH 2	長方形	4.7	6.4	1：1.36	30.1	4	中央北寄り 長径80cmの浅い楕円土坑	全周	四辺を拡張 拡張後排水溝をもつ
		5.5	7.5	1：1.36	41.3				
SH 3	長方形	8.0	9.6	1：1.20	76.8	4	不明	南側半分	今回検出中第２位の規模
SH 4	長方形	4.5	5.2	1：1.16	23.4	4	中央北寄り 炭・灰充満土坑	全周	西辺を拡張
SH 5	円形	－	－	－	－	不明	不明	（全周）	復元径5.5m前後
SH 6	（方形）	－	－	－	－	不明	不明	（全周）	
SH 7	長方形	3.8	4.8	1：1.26	18.2	4	北寄り　40×40	（全周）	拡張後の炉の東端に細長い石を据える
		3.8	6.1	1：1.61	23.2	4	南寄り　40×40		
SH 8	長方形	(8.0)	(2.8)	－	－	不明	北寄り　60×40	（全周）	約10cmの貼り床
SH 9	隅丸長方形（平行四辺形）	(1.0)	－	－	－	4	不明	無	
SH10	長方形	(2.8)	4.2	－	－	(3)	中央付近に３ヵ所 径30	逆L字状	北西隅の柱穴は不明
SH11	長方形	8.4	12.0	1：1.43	100.8	4	不明	L字状	今回検出中最大の規模
SH12	長方形	6.7	8.1	1：1.21	54.3	4	中央北寄り　80×60	北東隅と南辺の一部	
SH13	長方形	5.2	4.3	1：1.21	22.4	4	中央東寄り　径60	北辺と南西隅の一部	
SH14	（長方形）	4.4	(1.5)	－	－	(4)	不明	（全周）	柱穴が重複し確定が困難
SH15	長方形	5.1	4.3	1：1.19	21.9	4	中央東寄り　径50	全周	炉の西端に細長い石の抜き取り痕
SH16	方形	5.1	5.3	1：1.04	27.0	4	中央北寄り　50×40	全周	
SH17	長方形	5.5	6.3	1：1.15	34.7	4	中央北寄り　80×70	全周	炉は深さ６cmを測り、南端に細長い石を据える
SH18	長方形	(1.4)	3.5	－	－	無	北寄り　40×25	逆L字状	
SH19	長方形（平行四辺形）	(3.9)	4.8	－	－	4	中央北寄り　60×40	（全周）	炉は深さ７cmを測り、南端に細長い石を据える
SH20	長方形	(2.0)	3.8	－	－	4	不明	（全周）	
SH21	長方形	4.3	3.7	1：1.16	15.9	4	中央　径40	全周	
SH22	（方形）	(3.5)	(3.3)	－	－	(2)	不明	無	北側の主柱穴２個は不明
SH23	方形	2.7	(2.5)	－	－	不明	中央　径35	（全周）	
SH24	長方形（平行四辺形）	4.0	5.0	1：1.25	20.0	4	中央北寄り　径45	全周	炉は浅く凹み、深さ６cmを測る
SH25	長方形	3.9	5.0	1：1.28	19.5	4	中央　50×35	全周	炉は浅く凹み、深さ６cmを測る
SH26	方形	4.6	4.8	1：1.04	22.1	4	中央北寄り　80×70	北東隅のみ	炉は深さ14cmを測り、南端に細長い石を据える
SH27	（方形）	(0.9)	(4.3)	－	－	不明	不明	無	
SH28	長方形	3.7	4.3	1：1.16	15.9	4	中央北寄り 径30の浅い凹み	（全周）	炉には焼けた様子が見られない

第２表　竪穴住居一覧表１　　（　）は現存の数値

遺構名	平面形（プラン）	規模（m）		辺の比率 短辺：長辺	面積(㎡)	主柱穴	地床炉焼土範囲（cm）	周　溝	備考
		東西	南北						
SH29	方形	4.2	3.9	1：1.08	16.4	無	中央北寄り　径60	全周	炉は浅く凹み、深さ8㎝を測る
SH30	隅丸長方形	(3.4)	5.0	－	－	4	中央北寄り　50×80	(全周)	拡張が認められる　炉は浅く凹み深さ6㎝を測る
		(3.4)	6.1	－	－	4			
SH31	長方形	(3.5)	4.5	－	－	4	中央北寄り　径30	(全周)	炉は浅く凹み、深さ3㎝を測る
SH32	長方形	(3.5)	4.4	－	－	4	中央北寄り　径30	(全周)	炉は浅く凹み、深さ4㎝を測る
SH33	方形	(2.5)	3.1	－	－	無	不明	(全周)	東辺の周溝壁に焼土
SH34	長方形（平行四辺形）	(3.5)	4.2	－	－	4	中央南寄り 径40の土坑	(全周)	炉は焼土壁をもち、深さ30㎝の土坑状
SH35	長方形	(2.8)	4.5	－	－	4	中央　径40の土坑	(全周)	炉は埋土に灰を含む深さ10㎝の浅い土坑状
SH36	長方形	5.0	3.4	1：1.47	17.0	4	中央東寄り　径40	全周	炉は浅く凹み、深さ6㎝を測る
SH37	長方形（平行四辺形）	5.3	6.8	1：1.28	36.0	4	不明	全周	
SH38	長方形	4.4	5.6	1：1.27	24.6	4	中央北寄り　径40	西辺と南辺のみ	炉の東端に細長い石を据える
SH39	長方形	4.5	5.2	1：1.16	23.4	4	中央北寄り　60×40	(全周)	炉は浅く凹み、深さ4㎝を測る
SH40	(方形)（平行四辺形）	(4.0)	(2.5)	－	－	不明	不明	(全周)	拡張が認められる
SH41	(方形)	(2.7)	－	－	－	不明	不明	(全周)	
SH42	(方形)	(2.0)	(2.0)	－	－	不明	不明	(全周)	
SH43	円形	－	－	－	－	不明	不明	(全周)	復元径5.5m前後
SH44	(方形)（平行四辺形）	(2.5)	(1.7)	－	－	不明	(中央)　40×20	(全周)	
SH45	隅丸長方形	(2.1)	(3.1)	－	－	(3)	中央北寄り　80×60	北辺と東辺のみ	北西隅の柱穴は不明 炉の中央に細長い石を据える
SH46	長方形	(4.0)	3.3	－	－	不明	中央北寄り　径50	(全周)	
SH47	方形	(4.0)	4.1	－	－	4	中央北寄り　径50	(全周)	
SH48	(方形)	(0.7)	(3.2)	－	－	不明	不明	(全周)	南東隅床面に60×30の範囲で焼土
SH49	(方形)	(3.7)	4.8	－	－	(2)	60×30	(全周)	
SH50	(方形)	(3.5)	4.3	－	－	無	不明	(全周)	
SH51	(方形)	(1.7)	4.8	－	－	不明	不明	(全周)	
SH52	(方形)	(3.1)	4.1	－	－	不明	中央西寄り　径40	(全周)	
SH53	(方形)	(2.2)	3.2	－	－	不明	不明	(全周)	
SH54	長方形	(2.9)	4.1	－	－	(3)	中央　150×80	南東隅のみ	北西隅の主柱穴は不明　炉は灰や焼土が充満　深さは10㎝を測る
SH55	(方形)	(2.0)	5.1	－	－	(4)	不明	(全周)	拡張が認められる
SH56	長方形	7.3	9.2	1：1.26	67.2	4	中央南寄りに2ヵ所 70×50　径50	北辺を除くコの字状	今回検出中第3位の規模
SH57	(方形)	4.8	(1.7)	－	－	(1)	不明	(全周)	拡張が認められる主柱穴は3度の切り合いをもつ

第3表　竪穴住居一覧表2　　（　）は現存の数値

遺構名	規模				柱間寸法		柱掘形		備考
	間数	桁行(m)	梁行(m)	面積(㎡)	桁行(m)	梁行(m)	径(cm)	形	
SB58	3×1	2.1	1.8	3.78	0.7	1.8	25	円	桁行北側に独立 南側に近接の棟持ち柱をもつ
SB59	3×1	3.4	1.8	6.12	1.0～1.2	1.8	25	円	近接棟持ち柱をもつ
SB60	3×1	3.6	2.4	8.64	1.0～1.4	2.4	25	円	独立棟持ち柱をもつ
SB61	2×1	2.6	1.8	4.68	1.3	1.8	25	円	独立棟持ち柱をもつ可能性あり
SB62	2×1	4.5	2.5	11.25	2.25	2.5	30	円	独立棟持ち柱をもつ可能性あり プランは平行四辺形に近い
SB63	2×1	2.5	1.7	4.25	1.25	1.7	30	円	プランは平行四辺形に近い
SB64	2×1	1.9	1.9	3.61	8.5	1.9	40	円	棟持ち柱をもつ可能性あり
SB65	2×1	2.0	1.9	3.80	2.0	1.9	30	円	SB64とほぼ同じ規模をもつ 棟持ち柱をもつ可能性あり
SB66	3×1	4.5	1.7	7.65	1.5	1.7	30	円	近接棟持ち柱をもつ
SB142	2×1	4.0	2.6	10.4	2.0	2.6	20	円	北斜面地区 独立棟持ち柱を持つ

第4表　掘立柱建物一覧表

遺構名	規模		柱間	備考
	間数	全長(m)		
SA67	3	2.1	0.7×3	SB58の桁行にほぼ平行する
SA68	4	4.4	1.1×4	A－1テラス・SA68～SA71はほぼ同方向に近接して位置する
SA69	3	4.6	西から　1.2+2.2+1.2	
SA70	5	5.5	1.1×5	
SA71	3	3.7	西から　1.3+1.1+1.3	
SA72	4	7.5	北から 1.5+1.5+3.0+1.5	A－3テラス
SA73	3	6.2	北から 1.6+1.6+3.0	SA72とほぼ平行する
SA74	4	5.6	1.4×4	Bテラス上で壁面に対してほぼ平行する
SA75	4	4.4	1.1×4	Bテラス上で壁面に対して斜めの方位をとる
SA76	3	3.9	1.3×3	Bテラス上で壁面に対してほぼ平行する
SA77	5	5.5	1.1×5	C－3テラス壁面に平行しSA78・SH25に先行する
SA78	2	3.0	1.5×2	
SA79	5	6.5	1.3×5	C－2テラスでSA80に先行する

第5表　柱列一覧表1

遺構名	規模		柱間	備考
	間数	全長(m)		
SA80	6	7.0	1.0+1.0+1.5+1.5+1.0+1.0	C−2テラスで壁面に沿って湾曲する
SA81	5	7.5	1.5×5	C−3テラス壁面に平行する
SA82	4	3.6	0.9×4	C−3テラス壁面に斜めの方位をとる
SA83	5	8.0	1.6×5	C−3テラス西側の斜面で壁面にほぼ平行する
SA84	3	2.4	0.8×3	Dテラス壁面に直行する方位をとる
SA85	6	5.4	0.6〜1.2	Dテラス壁面に平行しSA84に直行する
SA86	4	6.8	1.7×4	SA85南端から一段下のGテラスに斜めに取り付く
SA87	3	2.4	0.8×3	EテラスSA87〜SA90は竪穴によって切られ全体は不明
SA88	3	3.6	1.2×3	
SA89	4	4.8	1.2×4	
SA90	4	4.8	北から 1.1+1.1+1.3+1.3	
SA91	4	1.2	0.3×4	柱穴が隣接して並ぶ小規模な柱列
SA92	3	2.1	0.7×3	SH36の床面で検出したが竪穴との前後関係は不明
SA93	4	1.6	0.4×4	SA93〜SA96はSH39の西側で検出した小規模な柱列群
SA94	2	2.0	1.0×2	
SA95	2	3.0	1.5×2	
SA96	2	3.0	1.5×2	
SA97	2	2.6	1.3×2	SA97〜SA105はGテラスに位置する
SA98	3	3.3	1.1×3	SA97と柱筋を揃える 壁面にほぼ平行する
SA99	3	2.7	0.9×3	
SA100	6	6.6	1.1×6	
SA101	2	2.2	1.1×2	壁面に対してやや斜め方向をとる
SA102	3	3.0	1.0×3	SA101と柱筋を揃える
SA103	6	6.0	1.0×6	壁面に対してやや斜め方向をとる
SA104	2	2.6	北から 1.1+1.5	柱間は不揃いである
SA105	3	4.5	1.5×3	Gテラス北側の斜面に位置する 壁面に対して斜め方向をとる
SA106	4	2.8	0.7×4	SA106〜SA110はH−1テラスに位置する
SA107	4	2.8	0.7×4	
SA108	2	3.0	1.5×2	
SA109	2	4.0	2.0×2	テラス縁辺部に位置する 柱穴の規模は小さい

第6表　柱列一覧表2

遺構名	規模		柱間	備考
	間数	全長(m)		
SA110	3	6.0	2.0×3	テラス西側斜面に位置する 壁面に対して斜め方向をとる
SA111	11	10.5	ほぼ1m等間	SA111～SA121はH－2テラスに位置する
SA112	7	8.1	0.7～1.7	壁面に対してほぼ平行する
SA113	5	5.5	1.1×5	壁面に対してやや斜め方向をとる
SA114	5	5.0	1.0×5	
SA115	3	3.2	北から　1.3+1.3+0.6	壁面に対してやや斜め方向をとる
SA116	3	3.3	1.1×3	壁面に対して斜め方向をとる
SA117	4	3.6	北から　1.2+0.8+0.8+0.8	
SA118	3	6.3	2.1×3	
SA119	2	3.5	北から　2.0+1.5	
SA120	2	2.2	1.1×2	壁面に対してほぼ垂直方向とる
SA121	2	2.8	1.4×2	壁面に対してやや斜め方向をとる
SA122	3	5.4	1.8×3	I－1テラスで壁面にほぼ平行する 全体は不明
SA123	4	3.6	0.9×4	SA122とほぼ同じ方向をとる 全体は不明
SA124	3	4.9	1.1～2.3	柱穴の規模は小さく柱間は不揃いである
SA125	4	4.3	0.7～1.8	SA124と同じ様相を呈する
SA126	1	1.0	1.0	I－2テラスで壁面にほぼ平行する 全体は不明
SA127	2	1.8	0.9×2	SA126にほぼ平行する 全体は不明
SA128	10	12.5	北から7間目が1m その他は1.2mの等間	SA128～SA132はJテラスに位置する SA128は壁面に平行し柱穴は方形である
SA129	10	11.8	ほぼ1.2m等間	壁面に対してやや斜め方位をとる
SA130	5	6.0	1.2×5	撹乱のため全体は不明
SA131	4	4.8	0.9～1.6	壁面に対してほぼ平行する小規模な柱列
SA132	2	3.0	1.5×2	壁面に対してわずかに斜め方位をとる小規模な柱列
SA133	2	4.0	2.0×2	SH51に先行する 南端で直角に曲がり逆L字状を呈する
SA134	3	3.9	1.3×3	SH51・SA135に先行する SA133と同じ方位をとる
SA135	3	4.8	1.6×3	SA133・SA134と方向がわずかに異なる
SA136	3	1.5	0.5×3	SH54北壁内側に位置する 竪穴との前後関係不明
SA137	6	7.2	両端が1.6m　他は1mの等間	Kテラス壁面に対してほぼ平行する
SA138	3	2.4	0.8×4	SA137にほぼ平行する小規模な柱列である
SA143	10	24.6	西側ほぼ2.4mの等間 東側2.3～2.5m	北斜面地区 中央部で屈曲し、くの字状を呈する

第7表　柱列一覧表3

図版番号	登録番号（R No.）	遺構出土位置	器種	法量（cm）［推定値］	調整技法の特徴		色調	胎土	残存度	備考
					口縁部（杯部）	体部（脚部・底部）				
1	005−03	SH1	壺 A4	口径［16.4］	外：端部に刻目 内：2段の連続櫛刺突文		明黄褐 10YR6/6	密（〜1㎜の長石を含む）	口縁部1/5	内外面剥離
2	005−02	SH1	壺 A2	口径［27.6］	内：2段の連続櫛刺突文		明黄褐 10YR7/6	密	口縁部1/4	
3	005−04	SH1	甕底部B1	底径 4.6		内外：ナデ	淡黄 2.5Y8/4	密	底部完存	
4	005−01	SH1	甕底部 C	底径 4.0	内外：ナデ		浅黄 2.5Y7/3	密（〜1㎜の長石を含む）	底部完存	
5	004−01	SH3	甕 A5	口径［18.6］ 器高 27.1		外：タテ方向ハケ・下半ケズリ 内：ナデ	橙 7.5YR 7/4	密	口縁部1/10体部2/3	
6	002−02	SH3	壺 A2	口径［16.7］			浅黄橙 7.5YR 8/3	密	口縁部1/3	内外面剥離激しい
7	002−08	SH3	壺 A7−1	体部最大径［15.8］		外：タテ方向ハケのちヘラミガキ 内：粗いヨコ方向ハケ	淡黄 2.5Y8/3	密	底部完存 体部1/2	
8	002−05	SH3	甕 A7	口径［27.8］	外：端部に刻目 内：粗いヨコ方向ハケ	内：粗いヨコ方向ハケ	浅黄橙 10YR8/4	並（〜3㎜の長石を含む）	口縁部1/5	内外面剥離
9	002−03	SH3	甕底部B2	底径 5.7		焼成前に穿孔	橙 7.5YR 7/6	並	底部完存	内外面剥離激しい
10	002−06	SH3	壺底部A1	底径 5.0			にぶい黄橙 10YR7/4	密（〜1㎜の石英長石を含む）	底部ほぼ完存	内外面剥離激しい
11	003−01	SH3	蓋 A2	径 17.7		内：ヨコ方向ハケ	橙 7.5YR 6/8	密	完存	内外面剥離
12	002−01	SH3	蓋 A2			外：タテ方向ハケのちヘラミガキ 内：ヨコ方向ナデ	橙 2.5YR 7/8	密	全体の1/3 端部を欠く	
13	002−07	SH3	甕底部	底径 4.8		内外：ナデ	黄灰 2.5Y5/1	密	脚部完存	ミニチュア土器
14	002−04	SH3	高杯脚 A	底径 8.6		外：ヘラミガキ 内：ヨコ方向ナデ	にぶい黄橙 10YR6/4	密	脚部ほぼ完存	
15	001−06	SH4	壺 A2	口径［25.0］	外：端部に波状文 内：矢羽状の連続櫛刺突文		にぶい黄橙 10YR6/3	並（〜3㎜の石英長石を含む）	口縁部1/3	
16	001−05	SH4	蓋 A1	径 12.2			にぶい橙 7.5YR 6/4	並（〜6㎜の石英長石を含む）	ほぼ完存	内外面剥離激しい
17	001−04	SH4	高杯脚 A	底径［16.0］	内外：ナデ		黄橙 10YR8/6	密	脚部ほぼ完存	内外面剥離
18	008−05	SH7	壺 A5	口径 12.2	内：連続櫛刺突文		橙 7.5YR 7/6	密	口縁部完存	内外面剥離激しい
19	008−04	SH7	壺 B2−a	口径［21.8］	外：3条の太い凹線 内：ヨコ方向ナデ		浅黄橙 7.5YR 8/4	密（〜2㎜の石英長石を含む）	口縁部1/5	
20	008−02	SH7	甕 B2−1	口径［15.7］	外：端部に2段の刻目 内：粗いヨコ方向ハケ	外：頸部に連続櫛刺突文	淡黄 2.5Y8/4	密（〜4㎜の石英長石を含む）	口縁部1/3	
21	009−01	SH7	甕 B2−1	口径 20.5	外：端部に2段の刻目 内：粗いヨコ方向ハケ	外：肩部に11本の横線文と櫛描波状文 内：ナデ	浅黄橙 7.5YR 8/3	密	ほぼ完存 底部を欠く	
22	008−01	SH7	壺底部B3	底径 7.5		外：タテハケ・ヨコハケ・ナデ 内：ヨコ方向ハケのちナデ	灰 5Y4/1	並	底部完存	
23	008−03	SH7	甕底部B2	底径 5.2			にぶい黄橙 10YR7/3	並（〜3㎜の石英長石を含む）	底部2/3	内外面剥離激しい
24	015−01	SH10	壺 A4	口径 21.8	外：端部に刻目 内：ナデ	外：頸部に横線文内：ナデ	にぶい黄橙 10YR7/4	並（〜4㎜の石英長石多く含む）	口縁部完存	
25	014−01	SH10	壺 A6			外：頸部に9本単位の櫛描横線文3単位以上	浅黄橙 7.5YR 8/4	並（〜3㎜の石英長石多く含む）	頸部完存	内外面剥離激しい
26	014−02	SH10	甕 B1−1	口径 17.6	外：タテ方向ハケのち肩部ハケ状工具による横線文 内：粗いヨコ方向ハケ		にぶい黄橙 10YR7/3	密	口縁部完存	
27	006−02	SH11	壺 B2−a	口径［24.0］	外：4条の太い凹線 内：ヨコ方向ナデ		明黄褐 10YR7/6	並（〜3㎜の石英長石を含む）	口縁部1/5	
28	006−04	SH11	壺底部A1	底径 6.8		内：ナデ	明黄褐 10YR7/6	密（〜3㎜の石英長石を含む）	底部完存	外面剥離激しい
29	006−03	SH11	甕底部B2	底径 7.4		内外：ナデ	明黄褐 10YR6/6	並（〜6㎜の石英長石多く含む）	底部1/2	内外面剥離
30	006−01	SH13	甕底部A1	底径 5.4		内外：ナデ	橙 7.5YR 7/6	並（〜2㎜の長石を含む）	底部完存	
31	007−01	SH16	甕底部B1	底径［7.8］			にぶい橙 5YR 6/4	並（〜5㎜の石英長石多く含む）	底部1/2	内外面剥離激しい
32	025−01	SH17	壺B1−2a	口径 10.2 底径 8.0	外：2条の太い凹線 内：ナデ		にぶい黄橙 10YR7/3	並	口縁部完存 底部2/3	内面剥離
33	020−11	SH17	壺B1−2a	口径［12.0］	外：2条の太い凹線 内：ナデ		にぶい黄橙 10YR6/4	密（〜2㎜の石英長石を含む）	口縁部1/3	

第8表　土器観察表1

図版番号	登録番号（R No.）	遺構出土位置	器種	法量（cm）［推定値］	調整技法の特徴		色調	胎土	残存度	備考
					口縁部（杯部）	体部（脚部・底部）				
34	020−10	SH17	壺底部B2	底径 [5.0]			黄橙 7.5YR 8/8	密	底部 1/2	内外面剥離
35	020−01	SH17	甕底部A1	底径 6.0		外：タテ方向ハケ 内：ナデ	にぶい黄橙 10YR7/4	密（～2㎜の石英長石を含む）	底部完存	
36	022−01	SH17	壺底部A2	底径 [6.0]		内外：ナデ	にぶい黄橙 10YR6/4	密（～3㎜の石英長石を含む）	底部 2/3	
37	022−02	SH17	壺底部A1	底径 [9.1]		内外：ナデ	橙 7.5YR 6/8	並（～3㎜の石英長石多く含む）	底部 1/3	
38	023−02	SH17	甕 C3	口径 30.0	外：端部に刺突文・粗いタテ方向ハケ 内：粗いヨコ方向ハケ	外：頸部に刺突文・横線文・波状文	にぶい黄橙 10YR7/4	密（～3㎜の石英長石多く含む）	口縁部ほぼ完存	内面剥離激しい
39	023−01	SH17	甕 A1−1	口径 [27.7]		内外：頸部からナナメ方向ハケ	黄褐色 10YR5/6	並（～3㎜の石英長石多く含む）	口縁部 1/3 体部上半	内外面剥離
40	021−01	SH17	甕 A2	口径 [38.0]	内：粗いナナメ方向ハケ		橙 7.5YR 7/6	密（～2㎜の石英長石を含む）	口縁部 1/5	外面剥離激しい
41	020−06	SH17	甕底部B2	底径 4.1		内外：ナデ	にぶい黄橙 10YR7/4	並（～1㎜の石英長石を含む）	底部完存	内外面剥離激しい
42	020−03	SH17	甕底部B2	底径 6.2			明黄褐 10YR6/6	並（～1㎜の石英長石を含む）	底部完存	内外面剥離激しい
43	020−02	SH17	甕底部A2	底径 6.6			にぶい褐 7.5YR 3/5	密（～7㎜の石英長石多く含む）	底部完存	内外面剥離激しい
44	020−08	SH17	甕底部B2	底径 8.4			浅黄橙 7.5YR 8/4	密	底部完存	内外面剥離激しい
45	020−09	SH17	甕底部B2	底径 [10.0]			橙 7.5YR 6/8	並（～7㎜の石英長石多く含む）	底部 1/3	内外面剥離激しい
46	041−03	SH17	甕底部B4	底径 5.7			淡黄 2.5Y8/3	密	底部完存	内外面剥離激しい
47	020−05	SH17	甕底部 C	底径 5.4		外：タテ方向ハケ 内：ナデ	明赤褐 2.5YR 5/6	並（～2㎜の石英長石を含む）	脚部完存	
48	020−04	SH17	甕底部 C	底径 6.6		外：タテ方向ハケ 内：ナデ	赤橙 10R 6/8	密（～3㎜の石英長石を含む）	脚部 2/3	
49	025−02	SH17	壺	体部最大径 6.5		内外：ナデ	橙 7.5YR 7/6	並（～2㎜の石英長石を含む）	体部完存	ミニチュア土器
50	024−01	SH17	甕 B2−2	口径 [34.9]	外：端部に2段の刻目 内：粗いヨコ方向ハケ	外：上半に刺突文・横線文・波状文下半にナナメ方向ハケ 内：ナデ	橙 7.5YR 6/6	並（～3㎜の石英長石を含む）	口縁部 1/3	
51	020−07	SH17	高杯				浅黄 2.5Y7/4	並（～1㎜の石英長石を含む）	円盤充填部破片	内外面剥離激しい
52	022−03	SH17	高杯 A	底径 13.0		外：ヘラミガキ 内：ナデ	橙 7.5YR 7/6	並（～5㎜の石英長石多く含む）	脚部ほぼ完存	
53	021−02	SH17	土錘	直径 3.2 重量 22.2g			褐灰 10YR5/1	密（～1㎜の石英長石を含む）	完存	
54	021−03	SH17	土錘	直径 2.9 重量 17.2g			褐灰 10YR5/1	密	完存	
55	021−04	SH17	土錘	直径 3.0 重量 19.6g			褐灰 10YR4/1	密	完存	
56	021−05	SH17	土錘	直径 2.6 重量 16.4g			灰黄褐 10YR5/2	密	完存	
57	021−06	SH17	土錘	直径 3.0 重量 18.4g			褐灰 10YR6/1	密	完存	
58	021−07	SH17	土錘	直径 2.7 重量 15.6g			褐灰 10YR5/1	密	完存	
59	021−08	SH17	土錘	直径 2.9 重量 16.6g			褐灰 10YR4/1	密	完存	
60	021−09	SH17	土錘	直径 2.7 重量 13.0g			褐灰 10YR4/1	密	完存	
61	027−01	SH18	甕 C1	口径 [27.0]			浅黄橙 10YR8/4	密（～1㎜の長石を含む）	口縁部 1/3	内外面剥離激しい
62	032−01	SH21	壺 A2	口径 15.0			橙 2.5YR 6/6	密	口縁部 1/2	内外面剥離激しい
63	028−01	SH24	壺 B2−b	口径 [23.4]	外：4条の太い凹線 内：ナデ		にぶい橙 7.5YR 7/4	並	口縁部 1/5	
64	028−02	SH24	壺底部A1	底径 7.8		外：ナナメ方向ミガキ 内：ナデ	暗灰黄 2.5Y4/2	並（～3㎜の石英長石を含む）	底部 1/2	
65	028−03	SH24	甕 A4	口径 [19.6]			明黄褐 10YR7/6	並	口縁部 1/3	内外面剥離激しい
66	016−04	SH25	壺 B2−a	口径 [25.0]	外：3条の太い凹線		にぶい橙 7.5YR 7/4	並（～1㎜の石英長石を含む）	口縁部 1/10	内外面剥離激しい

第9表　土器観察表2

図版番号	登録番号（R No.）	遺構出土位置	器種	法量（cm）［推定値］	調整技法の特徴		色調	胎土	残存度	備考
					口縁部（杯部）	体部（脚部・底部）				
67	016−02	SH25	壺底部B2	底径 5.2		内外：ナデ	浅黄橙 7.5YR 8/4	並（〜1㎜の長石を含む）	底部完存	
68	016−01	SH25	壺底部A2	底径 5.6		外：タテ方向ハケ 内：ナデ	橙 5YR 6/8	密	底部完存	
69	016−03	SH25	甕底部B3	底径 4.8		外：ナデ	浅黄橙 10YR8/3	並	底部完存	内面剥離
70	032−03	SH26	甕底部B1	底径 5.2		内外：ナデ	にぶい黄橙 10YR6/4	密	底部完存	
71	032−04	SH26	甕底部B1	底径 5.7		外：ナデ 内：ナデ・ユビオサエ	にぶい黄橙 10YR7/3	密（〜3㎜の石英長石を含む）	底部完存	
72	032−02	SH26	甕底部B2	底径 7.2			にぶい黄橙 10YR6/3	密（〜4㎜の石英長石を含む）	底部完存	内外面剥離激しい
73	029−03	SH28	壺B1−1C	口径 [8.5]			にぶい橙 7.5YR 7/4	並（〜2㎜の石英長石を含む）	口縁部 1/5	内外面剥離激しい
74	029−01	SH28	甕 A7	口径 21.6	外：端部に刻目 内：粗いヨコ方向ハケ	外：肩部ナナメ方向ハケ	にぶい黄橙 10YR6/4	並（〜1㎜の石英長石を多く含む）	口縁部完存	
75	029−02	SH28	蓋 A1	径 9.2			淡黄 2.5Y8/3	密	ほぼ完存	内外面剥離激しい
76	030−01	SH29	壺体部 A7-1	体部最大径 16.8		外：上半に簾状文・波状文 内：ナデ	浅黄橙 10YR8/4	並	体部ほぼ完存	
77	030−04	SH29	甕 A1−1	口径 [23.6]	内外：ナデ	外：ナナメ方向ハケ	にぶい橙 5YR 6/4	密（〜1㎜の石英長石を含む）	口縁部 1/8	
78	030−02	SH29	甕底部A2	底径 6.4		外：タテ方向ハケ内：ナデ	にぶい黄橙 10YR5/4	並（〜4㎜の石英長石を含む）	底部完存	
79	030−03	SH29	台付壺C1	底径 7.8			浅黄橙 10YR8/4	並（〜3㎜の石英長石を含む）	脚部完存	内外面剥離激しい
80	030−05	SH29	土錘	直径 3.6 重量 34.4g			灰 5Y4/1		完存	
81	032−07	SH30	壺B1−1b	口径 9.0			にぶい黄橙 10YR6/4	並（〜1㎜の長石を多く含む）	口縁部 1/2	内外面剥離激しい
82	032−08	SH30	壺B1−2b	口径 10.0	外：1条の太い凹線		にぶい黄橙 10YR6/3	密（〜1㎜の長石を含む）	口縁部 1/2	内外面剥離激しい
83	042−01	SH30	壺B1−2a	口径 13.5	外：3条の凹線 内：ヨコ方向ナデ		浅黄橙 7.5YR 8/4	並（〜1㎜の石英長石を含む）	口縁部 2/3	
84	042−02	SH30	甕 A1−1	体部最大径 13.5		外：タテ方向ハケ 内：タテ方向ナデ	にぶい橙 7.5YR 6/4	並	体部ほぼ完存	
85	032−09	SH30	高杯 A	底径 [11.8]	内外：ナデ		にぶい黄橙 10YR7/4	密（〜1㎜の石英長石を含む）	脚部 1/3	
86	011−05	SH30	甕底部A2	底径 7.6			にぶい黄橙 10YR6/4	並（〜4㎜の石英長石を多く含む）	底部完存	内外面剥離激しい
87	034−03	SH36	壺体部 A7-1	体部最大径 15.8		外：体部下半ヨコ方向ミガキ	にぶい橙 7.5YR 7/4	密（〜2㎜の石英長石を含む）	体部 1/2	
88	034−01	SH38	壺B1−1a	口径 12.0			浅黄橙 7.5YR 8/4	密	口縁部 1/2	内外面剥離激しい
89	034−02	SH38	甕底部B4	底径 4.8		焼成後に底部穿孔	にぶい橙 7.5YR 7/4	並	底部完存	内外面剥離
90	035−01	SH39	壺 A2	口径 [16.0]		外：頸部に横線文	にぶい黄橙 10YR7/4	並（〜3㎜の石英長石を多く含む）	口縁部 1/5 体部 1/3	外面に黒斑有
91	017−01	SH43	甕底部 C	底径 5.6			黄橙 10YR8/6	並	底部 2/3	内外面剥離激しい
92	036−01	SH47	壺体部B2	体部最大径 [42.0]		外：タテ方向ハケ後ミガキ 頸部に貼付突帯	橙 5YR 6/8	密（〜8㎜の石英長石を多く含む）	体部ほぼ完存	内面剥離激しい
93	037−01	SH46	甕底部A1	底径 7.4		外：板状工具によるナデ 内：タテ方向ナデ	橙 7.5YR 6/6	並	底部 1/2	
94	031−01	SH49	壺底部B2	底径 7.0		内外：ナデ	浅黄橙 10YR8/4	密	底部 2/3	
95	038−02	SH55	甕 B1−2	口径 [14.0]		内：ヨコ方向ハケ	明黄褐 10YR7/6	並	体部 1/2 底部を欠く	外面剥離激しい
96	039−04	SH54	壺底部A3	底径 6.2		外：タテ方向ハケ 内：粗いヨコ方向ハケ	明黄褐 10YR7/6	並（〜2㎜の石英長石を含む）	底部完存	
97	039−03	SH55	甕 B1−1	口径 [29.5]	外：タテ方向ハケ・ナデ 内：ヨコ方向ハケ	外：ナナメ方向ハケ 内：ナデ	にぶい黄橙 10YR7/4	密	口縁部 1/5	
98	039−02	SH55	甕底部A1	底径 5.0		内：ナデ	浅黄橙 10YR8/4	密（〜1㎜の長石を含む）	底部 2/3	
99	037−05	SH56	甕 A7	口径 [20.4]	外：端部に刻目 内：ナデ	外：頸部にナナメ方向ハケ 内：ナデ	にぶい黄橙 10YR7/4	並	口縁部 1/5	

第10表　土器観察表 3

図版番号	登録番号（R No.）	遺構出土位置	器種	法量（cm）［推定値］	調整技法の特徴		色調	胎土	残存度	備考
					口縁部（杯部）	体部（脚部・底部）				
100	039−01	SH56	甕 C4	器高 14.1	内外：ナデ	内：ナデ	7.5YR 8/3	密	体部ほぼ完存	
101	038−01	SH56	甕 A7	口径 23.2	外：端部に刻目 内：粗いヨコ方向ハケ	外：タテ方向ハケ 内：タテ方向ハケ・ナデ	にぶい橙 7.5YR 6/4	並（〜3㎜の石英長石を含む）	口縁部 1/2	
102	037−04	SH56	甕底部B3	底径 4.8			明黄褐 10YR6/6	並（〜1㎜の石英長石を含む）	底部完存	内外面剥離激しい
103	037−06	SH57	甕 B1−1	口径［23.7］	外：タテ方向ハケ	外：タテ方向ハケ	橙 7.5YR 6/6	密	口縁部 1/3	内外面剥離激しい
104	037−08	SH57	壺底部A3	底径 6.0		外：タテ方向ハケ 内：ハケ・ナデ	にぶい黄橙 10YR7/4	密（〜1㎜の長石を含む）	底部完存	
105	037−07	SH57	壺底部B2	底径 6.0		外：タテ方向ハケ・ミガキ 内：ナデ	浅黄橙 10YR8/3	並	底部完存	
106	041−01	SH57	壺底部A2	底径 6.0			浅黄橙 7.5YR 8/6	密（〜7㎜の長石を含む）	底部完存	内外面剥離激しい
107	053−05	包含層	壺 A2	口径 11.4	内：1段の櫛刺突文	外：頸部に簾条文	浅黄橙 10YR8/4	密	口縁部 1/3	内外面剥離激しい
108	053−03	包含層	壺 A2	口径［26.5］	内：1段の櫛刺突文		黄橙 7.5YR 8/8	並（〜1㎜の石英長石を含む）	口縁部 1/	内外面剥離激しい
109	049−06	包含層	壺 A2	口径［24.5］	内：2段の櫛刺突文	外：頸部に櫛描横線文・竹管文	にぶい橙 7.5YR 6/4	並（〜2㎜の石英長石を含む）	口縁部 1/5	内外面剥離
110	001−03	包含層	壺 A1	口径［21.4］	外：端部に波状文・下端に刻目 内：矢羽状の櫛刺突文		にぶい黄橙 10YR7/3	並（〜2㎜の石英長石を含む）	口縁部 1/5	内外面剥離
111	056−04	包含層	壺 A1	口径［27.0］	内：3段の櫛刺突文		浅黄橙 10YR8/4	密（〜3㎜の石英長石を含む）	口縁部 1/5	内外面剥離激しい
112	057−01	包含層	壺 A3	口径 25.0	外：端部に波状文 内：1段の櫛刺突文		橙 5YR 7/6	並	口縁部ほぼ完存	
113	051−02	包含層	壺 A7−2			外：櫛状工具による横線文・波状文 内：ナデ	橙 5YR 7/6	並（〜1㎜の石英長石を含む）	体部破片	
114	063−01	包含層	壺 A7−2	体部最大径 30.4		外：頸部に3条の沈線 胴体下部に焼成後の穿孔	にぶい橙 5YR 6/4	並（〜5㎜の石英長石を多く含む）	体部完存	内外面剥離激しい
115	052−01	包含層	壺B1−1a	口径 10.6 最大径［30.0］	内外：ヨコ方向ナデ		にぶい橙 5YR 7/4	並	口縁部 1/2 体部 1/4	
116	049−02	包含層	壺B1−2a	口径［10.0］	外：2条の太い凹線		浅黄橙 10YR8/4	密	口縁部 1/3	内外面剥離激しい
117	056−02	包含層	壺B1−2a	口径［13.0］	外：2条の太い凹線		にぶい橙 7.5YR 6/4	並（〜1㎜の長石を含む）	口縁部 1/4	
118	018−01	包含層	壺B1−2a	口径［12.2］	外：2条の太い凹線 内：ナデ		橙 7.5YR 7/6	並（〜2㎜の石英長石を含む）	口縁部 1/4	内外面剥離
119	056−01	包含層	壺B1−2a	口径［14.5］	外：2条の太い凹線 内：ナデ		にぶい橙 7.5YR 6/4	並（〜1㎜の石英長石を含む）	口縁部 1/4	
120	051−01	包含層	壺B1−2a	口径［12.0］	外：2条の太い凹線		橙 7.5YR 7/6	並（〜1㎜の長石を含む）	口縁部 1/5	内外面剥離激しい
121	046−04	包含層	壺B1−2a	口径［11.5］	内外：ヨコ方向ナデ		橙 5YR 6/6	密	口縁部 1/4	
122	058−02	包含層	壺B1−2c	口径［14.8］	外：2条の太い凹線 内：ヨコ方向ナデ		にぶい橙 7.5YR 6/4	並（〜1㎜の石英長石を含む）	口縁部 1/5	
123	047−03	包含層	壺B2−a	口径［24.2］	外：3条の太い凹線 内：ヨコ方向ナデ		にぶい黄橙 10YR 6/4	密（〜3㎜の石英長石を含む）	口縁部 1/6	
124	047−02	包含層	壺 B3	口径［11.0］			褐灰 10YR 4/1	並（〜2㎜の石英長石を含む）	口縁部 1/2	内外面剥離激しい
125	053−01	包含層	壺 A5	口径［10.2］	内外：ヨコ方向ナデ		橙 5YR 7/6	密	口縁部 1/2	
126	047−05	包含層	壺 C	口径［16.2］	外：櫛描横線文		浅黄橙 10YR 8/3	密	口縁部 1/6	内面剥離激しい
127	017−03	包含層	壺底部A3	底径 6.2		内：ハケ	橙 5YR 7/8	並	底部完存	外面剥離激しい
128	043−04	包含層	壺底部A2	底径 6.4		外：タテ方向ハケ 内：ヨコ方向ハケ	にぶい黄橙 10YR 7/4	並	底部完存	
129	043−05	包含層	壺底部A2	底径 4.8			橙 7.5YR 6/6	並（〜2㎜の石英長石を含む）	底部 2/3	内外面剥離激しい
130	056−03	包含層	壺底部A1	底径 6.0		内：粗いハケ	浅黄橙 7.5YR 8/6	並	底部 1/2	
131	047−01	包含層	壺底部A1	底径 5.2		外：細いタテ方向ハケ後ナデ 内：ナデ	にぶい黄橙 10YR 7/3	並（〜1㎜の石英長石を含む）	底部 2/3	
132	059−02	包含層	壺底部A2	底径 10.4		外：タテ方向ミガキ 内：ヨコ方向ハケ	橙 5YR 7/6	並	底部 1/2	外面に黒斑有

第11表　土器観察表 4

図版番号	登録番号（R No.）	遺構出土位置	器種	法量（cm）［推定値］	調整技法の特徴		色調	胎土	残存度	備考
					口縁部（杯部）	体部（脚部・底部）				
133	048−04	包含層	壺底部B1	底径 6.2		外：粗いヨコ方向ハケ	灰白 7.5Y7/1	並	底部完存	底部木葉痕有
134	050−05	包含層	壺底部B2	底径 7.2			浅黄橙 10YR8/3	密（～1㎜の長石を含む）	底部2/3	内外面剥離激しい
135	048−05	包含層	壺底部B3	底径 6.3			赤橙 10R 6/6	密	底部完存	内外面剥離激しい
136	049−05	包含層	壺底部B4	底径 5.8		外：タテ方向ハケ	浅黄橙 10YR8/3	並	底部完存	内面剥離
137	050−09	包含層	台付壺C2	底径 [8.6]			にぶい橙 7.5YR 7/4	並（～3㎜の長石を含む）	脚部1/3	内外面剥離激しい
138	017−02	包含層	台付壺C2	底径 11.0			橙 7.5YR 6/8	並（～2㎜の長石を含む）	脚部1/2	内外面剥離激しい
139	047−04	包含層	甕 C2−1	口径 [25.0]	内外：ヨコ方向ナデ	外：ナナメ方向ハケ 内：ヨコ方向ハケ	橙 7.5YR 6/6	並（～1㎜の石英長石多く含む）	口縁部1/5	
140	045−01	包含層	甕 C2−2	口径 [38.0]	外：口縁部下端に刻目 粗いナナメ方向ハケ 内：粗いナナメ方向ハケ	外：粗いタテ方向ハケ 内：粗いヨコ方向ハケ	にぶい黄橙 10YR7/4	密（～1㎜の長石を含む）	口縁部1/10	
141	017−07	包含層	甕 B1−3	口径 [20.0]			黒褐 2.5Y3/2	密（～1㎜の石英長石を含む）	口縁部1/3	内外面剥離激しい
142	011−01	包含層	甕 B1−3	口径 [26.0]			明黄褐 10YR7/6	密	口縁部1/4	内外面剥離激しい
143	050−07	包含層	甕 A3	口径 [15.6]	外：ヨコ方向ナデ 内：ヨコ方向ハケ	外：ナナメ方向ハケ 内：ナナメ方向ハケ後ナデ	明黄褐 10YR7/6	密	口縁部1/5	
144	017−06	包含層	甕 C3	口径 [24.0]			褐灰 10YR4/1	並（～1㎜の石英長石多く含む）	口縁部1/5	内外面剥離激しい
145	041−02	包含層	甕 B1−1	口径 [15.3]			橙 7.5YR 7/6	密（～2㎜の長石を多く含む）	口縁部1/4	内外面剥離激しい
146	058−01	包含層	甕 B1−1	口径 [15.8]	外：櫛刺突文・横線文		淡黄 2.5Y8/4	並（～2㎜の石英長石を含む）	口縁部1/5	内外面剥離激しい
147	053−02	包含層	甕 A1−1	口径 [28.0]			明黄褐 10YR7/6	並	口縁部1/8	内外面剥離激しい
148	057−03	包含層	甕 A1−1	口径 24.0			にぶい黄橙 10YR6/4	並（～2㎜の石英長石を含む）	口縁部1/10	内外面剥離激しい
149	044−04	包含層	甕 A1−2	口径 [29.4]	外：端部に1条の凹線 内：ヨコ方向ナデ	内外：ヨコ方向ナデ	にぶい橙 7.5YR 7/4	並（～1㎜の長石を含む）	口縁部1/4	
150	043−01	包含層	甕 A1−2	口径 [29.5]			にぶい黄橙 10YR6/4	並（～4㎜の石英長石を多く含む）	口縁部1/2	内外面剥離激しい
151	058−04	包含層	甕 A5	口径 [29.5]	内外：ヨコ方向ナデ		黄橙 10YR8/6	並	口縁部1/6	
152	048−03	包含層	甕 A2	口径 [36.0]	内外：ヨコ方向ナデ		にぶい黄橙 10YR6/4	密（～1㎜の石英長石を含む）	口縁部1/8	内外面剥離
153	054−01 055−01	包含層	甕 A6	口径 [28.0]	内：粗いヨコ方向ハケ	外：ナナメ方向ハケ 内：タテ方向ナデ	にぶい黄橙 10YR7/4	並（～5㎜の石英長石を含む）	口縁部1/3 体部1/2	
154	048−02	包含層	甕 B2−1	口径 11.2	外：端部に刻目 内：ヨコ方向ハケ	外：細かいタテ方向ハケ後 ヨコ方向ハケ	にぶい褐 7.5YR 5/4	並（～3㎜の石英長石を含む）	口縁部1/2	
155	044−03	包含層	甕 B2−1	口径 [19.4]	外：端部に2段の刻目 内：細かいヨコ方向ハケ	外：頸部ナナメ方向ハケ	浅黄橙 10YR8/3	密	口縁部1/5	
156	046−03	包含層	甕 B2−1	口径 [21.4]	外：端部に2段の刻目 内：粗いヨコ方向ハケ	外：頸部ナナメ方向ハケ	灰黄褐 10YR4/2	並（～4㎜の石英長石を含む）	口縁部1/5	
157	046−02	包含層	甕 B2−1	口径 [26.0]	外：端部に2段の刻目 内：粗いヨコ方向ハケ	外：ナナメ方向ハケ 内：ヨコ方向ハケ	にぶい黄橙 10YR7/3	並（～2㎜の石英長石を含む）	口縁部1/4	
158	045−02	包含層	甕 B2−1	口径 [28.5]	外：端部に2段の刻目 内：2枚貝によるヨコ方向条痕		橙 5YR 6/6	並（～1㎜の長石を含む）	口縁部1/5	
159	001−02	包含層	甕 B2−1	口径 [32.4]	外：粗いタテハケ口縁下端に刻目 内：粗いヨコ方向ハケ	外：頸部に横線文	浅黄橙 10YR8/4	密	口縁部1/8	
160	046−01	包含層	甕 B2−2	口径 [39.0]	外：端部に2段の刻目 内：粗いヨコ方向ハケ		にぶい黄橙 10YR7/4	密（～3㎜の石英長石を含む）	口縁部1/8	
161	051−03	包含層	甕 B2−2	口径 [36.4]	外：端部に2段の刻目 内：粗いヨコ方向ハケ	外：櫛描横線文・刺突文 波状文	淡黄 2.5Y8/3	並（～4㎜の石英長石を含む）	口縁部1/4	内外面剥離激しい
162	060−01 061−01	包含層	甕 B2−2	口径 [31.0]	外：端部に2段の刻目 内：粗いヨコ方向ハケ	外：櫛描横線文・刺突文	橙 5YR 6/8	並	口縁部1/2 体部1/2	
163	044−02	包含層	甕底部A1	底径 [5.6]		焼成後に底部穿孔	浅黄橙 10YR8/3	密	底部2/3	
164	017−04	包含層	甕底部A1	底径 7.4			浅黄橙 10YR8/3	並（～5㎜の石英長石を多く含む）	底部2/3	内外面剥離激しい
165	058−03	包含層	甕底部A1	底径 6.4		外：タテ方向ナデ	浅黄灰 10YR8/3	並（～1㎜の長石を多く含む）	底部完存	

第12表　土器観察表5

図版番号	登録番号（R No.）	遺構出土位置	器種	法量（cm）［推定値］	調整技法の特徴		色調	胎土	残存度	備考
					口縁部（杯部）	体部（脚部・底部）				
166	011−04	包含層	甕底部A1	底径 5.4		内外：ナデ	明黄褐 10YR 7/6	並（～2㎜の長石を含む）	底部完存	外面剥離
167	017−05	包含層	甕底部A1	底径 9.0		内：ヨコ方向ハケ	明黄褐 10YR 7/6	並（～3㎜の石英長石を多く含む）	底部完存	外面剥離激しい
168	050−06	包含層	甕底部A1	底径 4.4		外：タテ方向ハケ 内：ナデ	黄橙 10YR 8/6	並（～1㎜の長石を含む）	底部完存	
169	050−03	包含層	甕底部A1	底径 6.4		外：ナナメ方向ハケ 内：ヨコ・ナナメ方向ナデ	橙 5YR 7/6	密	底部 2/3	
170	056−06	包含層	甕底部A1	底径 4.2			橙 5YR 7/6	並（～1㎜の長石を含む）	底部完存	内外面剥離激しい
171	050−01	包含層	甕底部A1	底径 5.4		外：タテ方向ハケ後タテ方向ナデ 内：タテ方向ナデ	浅黄橙 10YR 8/4	密	底部完存	
172	050−08	包含層	甕底部A2	底径 5.2		外：ナナメ方向ハケ後ナデ 内：タテ方向ナデ	黄橙 10YR 8/6	並	底部 1/2	
173	057−04	包含層	甕底部A2	底径 5.4		外：タテ方向ナデ	黒褐 2.5Y 3/2	並	底部完存	
174	042−04	包含層	甕底部B1	底径 6.2		内外：タテ方向ナデ	にぶい黄橙 7.5YR 7/3	密（～2㎜の長石雲母を含む）	底部完存	
175	057−05	包含層	甕底部B1	底径 5.6			浅黄橙 7.5YR 8/4	密	底部完存	内外面剥離激しい
176	011−02	包含層	甕底部B1	底径 5.8			明黄褐 10YR 7/6	並（～1㎜の長石を含む）	底部完存	内外面剥離激しい
177	044−01	包含層	甕底部B2	底径 5.4		内外：タテ方向ナデ	にぶい黄橙 10YR 7/4	密	底部完存	
178	049−03	包含層	甕底部B2	底径 5.0		内外：タテ方向ナデ	橙 7.5YR 7/6	並	底部完存	
179	043−03	包含層	甕底部B2	底径 5.8			にぶい橙 7.5YR 6/4	密（～2㎜の石英長石を含む）	底部 2/3	内外面剥離激しい
180	050−02	包含層	甕底部B3	底径 6.0			浅黄橙 10YR 8/4	並	底部完存	内外面剥離激しい
181	048−01	包含層	甕底部B4	底径 6.8		外：タテ方向ナデ・ユビオサエ 内：粗いタテ方向ハケ	にぶい橙 5YR 6/4	密	底部 2/3	
182	053−04	包含層	甕底部 C	底径 5.8			橙 7.5YR 7/6	密	脚部完存	内外面剥離激しい
183	050−04	包含層	鉢底部	底径 4.8		内外：ヨコ方向ナデ	黄橙 10YR 8/6	密	底部完存	
184	056−05	包含層	蓋 A1	径 10.4			にぶい黄橙 10YR 7/4	密	ほぼ完存	内外面剥離激しい
185	011−03	包含層	高杯	底径 3.6		外：タテ方向ハケ後ナデ 内：ナデ	褐灰 10YR 4/1	並	脚部ほぼ完存	ミニチュア土器
186	049−04	包含層	土錘	直径 3.2 重量 25.0g			にぶい黄橙 10YR 6/4	密	完存	
187	056−07	包含層	土錘	直径 3.5 重量 35.6g			黒褐 2.5Y 3/1	密	完存	
188	043−02	包含層	高杯 A	口径 ［28.0］	内外：ヨコ方向ナデ		灰白 2.5Y8/2	並（～1㎜の石英長石を多く含む）	杯部 1/4	
189	062−01	包含層	高杯 B	底径 15.0			にぶい橙 7.5YR 7/4	並（～3㎜の長石を含む）	脚部完存	内外面剥離激しい
190	059−01	包含層	鉢 A1	口径 ［23.2］	内外：ヨコ方向ナデ		にぶい橙 7.5YR 6/4	並（～1㎜の長石を含む）	1/8	内外面剥離激しい
191	042−03	包含層	鉢 A2	口径 ［26.4］	内外：ヨコ方向ナデ	外：体部下半タテ方向ハケ 内：ヨコ方向ナデ	にぶい黄橙 10YR 7/4	密（～3㎜の石英長石を含む）	1/4 底部欠	
192	057−02	包含層	杯身	口径 ［13.6］	内外：ヨコ方向ナデ	内外：ヨコ方向ナデ	灰白 5Y7/1	緻密	口縁部 1/5	焼成堅緻
193	064−01	包含層	甕	口径 16.7	内外：ヨコ方向ナデ	外：叩き板による平行叩き目文 内：あて板による同心円文	灰白 N 7/0	緻密	ほぼ完形	焼成堅緻
238	065−01	北斜面包含層	壺体部 A7-2	体部最大径 32.5		外：櫛横線文・波状文	黄橙 7.5YR 7/8	密	体部 1/2	内外面剥離激しい

第13表　土器観察表 6

図版番号	登録番号	遺構出土位置	種類	石材	法量（残存値）				備考
					長 cm	幅 cm	厚 cm	重量 g	
194	004－03	SH3	太型蛤刃石斧	砂岩	(10.8)	(4.8)	3.8	263.0	刃部欠損
195	071－01	SH3	石鏃	サヌカイト	1.7	1.3	0.3	0.4	平基有茎
196	070－01	SH7	石鏃	サヌカイト	2.8	1.4	0.4	1.4	平基無茎
197	010－03	SH7	ノミ形石斧	粘板岩	(3.9)	1.1	0.8	4.9	刃部欠損
198	010－02	SH7	ノミ形石斧	凝灰質砂岩	4.3	1.9	0.7	9.8	刃部磨耗
199	010－01	SH7	太型蛤刃石斧	凝灰質砂岩	(10.3)	6.2	3.1	311.9	刃部のみ残存
200	071－03	SH12	石鏃	サヌカイト	(2.3)	1.4	0.5	1.4	凸基有茎
201	007－03	SH14	磨石	凝灰質砂岩	11.0	6.3	4.6	518.2	摩擦痕有
202	007－02	SH14	磨石	砂岩	11.2	9.7	4.4	643.5	摩擦痕有
203	026－01	SH17	太型蛤刃石斧	砂岩	(10.7)	6.5	4.5	532.5	基部欠損後加工痕有
204	032－05	SH26	太型蛤刃石斧	凝灰質砂岩	13.8	6.4	4.2	617.4	完存、使用痕有
205	032－06	SH26	不明	砂岩	4.0	2.3	0.3	4.6	磨製石鏃未製品か
206	072－02	SH29	石鏃	サヌカイト	4.2	1.4	0.3	1.6	菱形鏃
207	030－06	SH29	不明	花崗岩	5.6	4.3	3.6	119.6	敲石の可能性有
208	013－01	SH31	太型蛤刃石斧	砂岩	(7.1)	(5.6)	(2.0)	103.4	刃部のみ残存
209	070－02	SH32	石鏃	サヌカイト	3.1	1.4	0.5	1.8	凸基有茎（木の葉形）
210	012－01	SH34	砥石	砂岩	20.9	17.5	2.8	1.28kg	有溝砥石
211	033－01	SH38	砥石	砂岩	26.0	14.8	6.1	2.1kg	使用痕有
212	037－02	SH46	扁平片刃石斧	砂岩	(7.8)	4.9	2.2	153.5	刃部欠損して研ぎ直しか
213	031－02	SH49	不明	チャート	5.8	5.4	4.8	229.5	敲石の可能性有
214	040－01	SH57	石皿	花崗岩	20.6	16.2	10.5	6.8kg	多数の凹有
215	073－01	包含層	石鏃	サヌカイト	1.5	0.7	0.2	0.2	失敗品？
216	071－02	包含層	石鏃	安山岩（下呂石）	2.8	1.6	0.5	1.5	凸基有茎
217	072－01	包含層	石鏃	サヌカイト	3.0	2.2	0.5	2.6	平基無茎
218	071－04	包含層	石鏃	サヌカイト	4.1	2.2	0.45	3.2	平基無茎
219	019－02	包含層	太型蛤刃石斧	砂岩	9.2	5.0	3.3	286.9	刃先磨耗
220	068－01	包含層	太型蛤刃石斧	砂岩	(9.6)	(5.1)	(3.9)	218.2	刃部欠損
221	019－01	包含層	太型蛤刃石斧	砂岩	(14.0)	6.3	(4.3)	555.6	刃部欠損
222	058－05	包含層	扁平片刃石斧	砂岩	12.5	6.6	3.0	372.6	完存
223	069－01	包含層	砥石	砂岩	14.0	13.8	5.1	921.8	使用痕は湾曲面を呈す
224	049－01	包含層	石庖丁	結晶片岩	(8.9)	(8.6)	0.8	71.0	磨製石庖丁
225	067－01	包含層	磨石	砂岩	(12.6)	11.0	4.9	896.3	摩擦痕有
226	075－01	剥片集中区	剥片	サヌカイト	6.3	5.5	1.5	53.6	
227	076－01	剥片集中区	剥片	サヌカイト	6.9	5.2	1.4	43.1	
228	077－01	剥片集中区	剥片	サヌカイト	8.8	6.0	1.4	65.4	
229	078－01	剥片集中区	剥片	サヌカイト	10.8	4.6	1.6	100.3	楔の可能性有
230	079－01	剥片集中区	剥片	サヌカイト	8.1	7.0	1.7	95.6	石核の可能性有
231	080－01	剥片集中区	剥片	サヌカイト	9.3	6.2	1.8	99.2	二次加工有
232	081－01	剥片集中区	剥片	サヌカイト	10.5	7.1	1.9	131.6	二次加工有
233	004－02	SH3	管玉	硬玉	0.6	直径 0.26		0.1	
234	003－02	SH3	管玉	硬玉	0.6	直径 0.34		0.1	
235	001－07	SH4	不明	ガラス	0.55	0.3	0.14	0.1	穿孔有
236	074－01	SH13	勾玉	硬玉	1.8	1.3	0.3	1.2	
237	037－03	SH56	紡錘車	結晶片岩	復元径（4.5）		0.4	3.5	1/4 残存

第14表　石器・玉類・石製品観察表

写　真　図　版

調査区遠景・全景

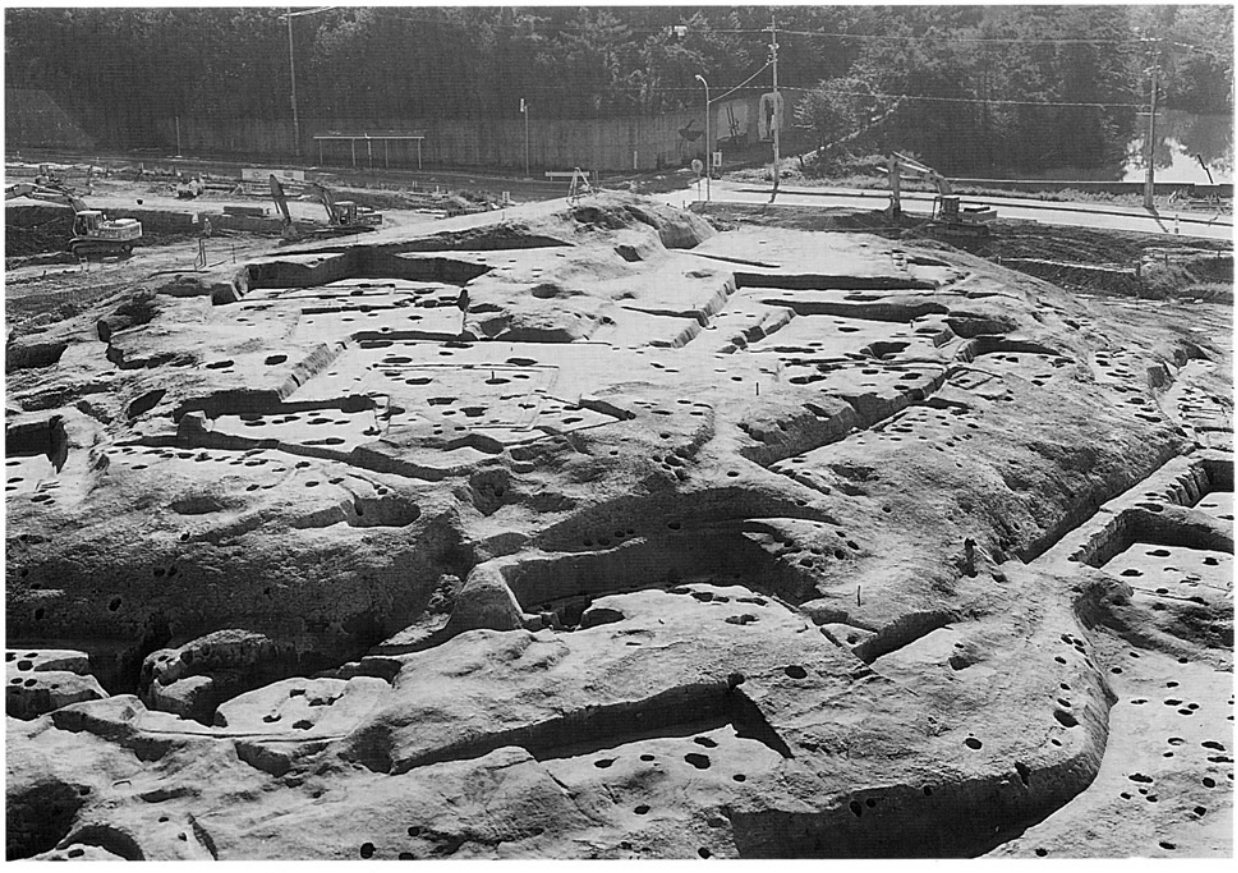
PL 1

調査前遠景（南から・写真中央部の丘陵が調査区）

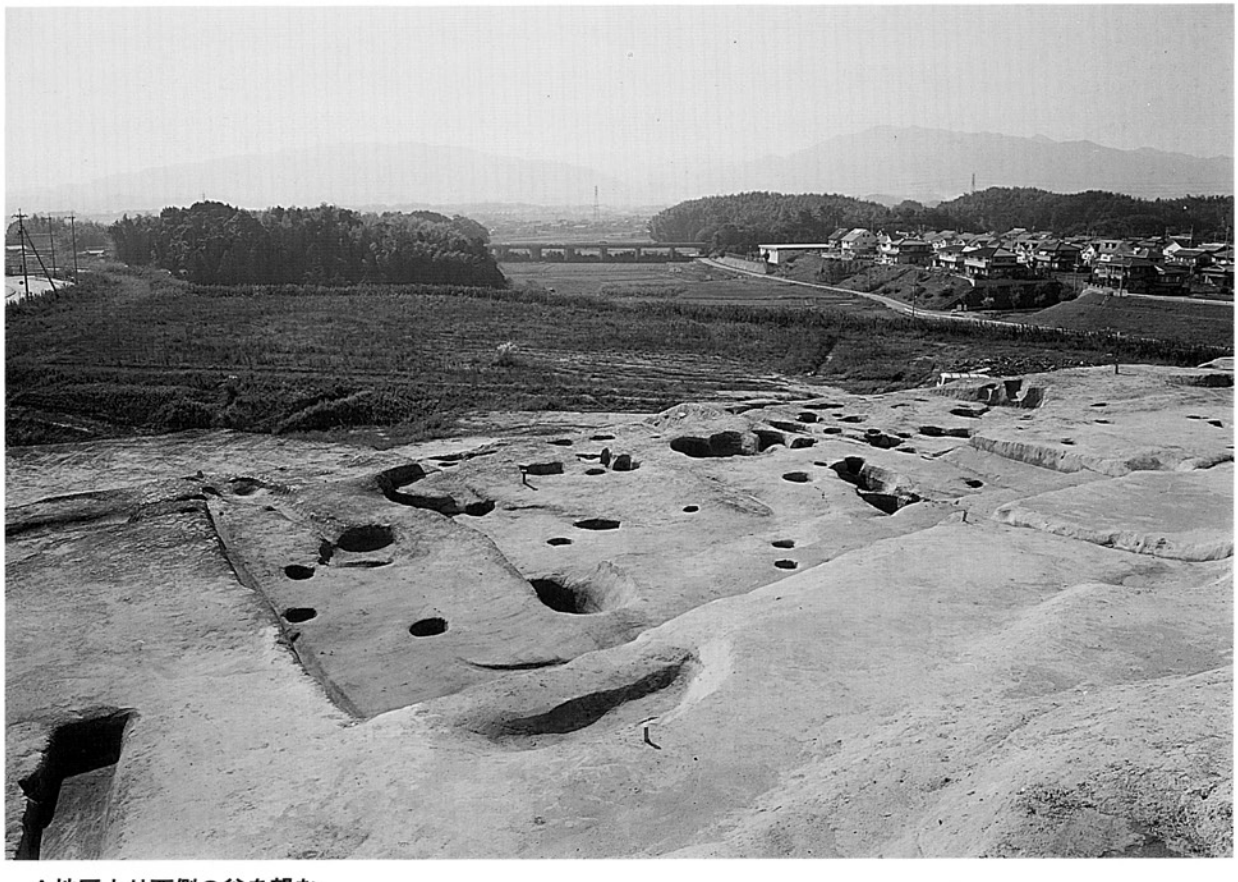
丘陵地区調査後全景（西から）

丘陵地区（A～K地区）

A地区－1　　PL 2

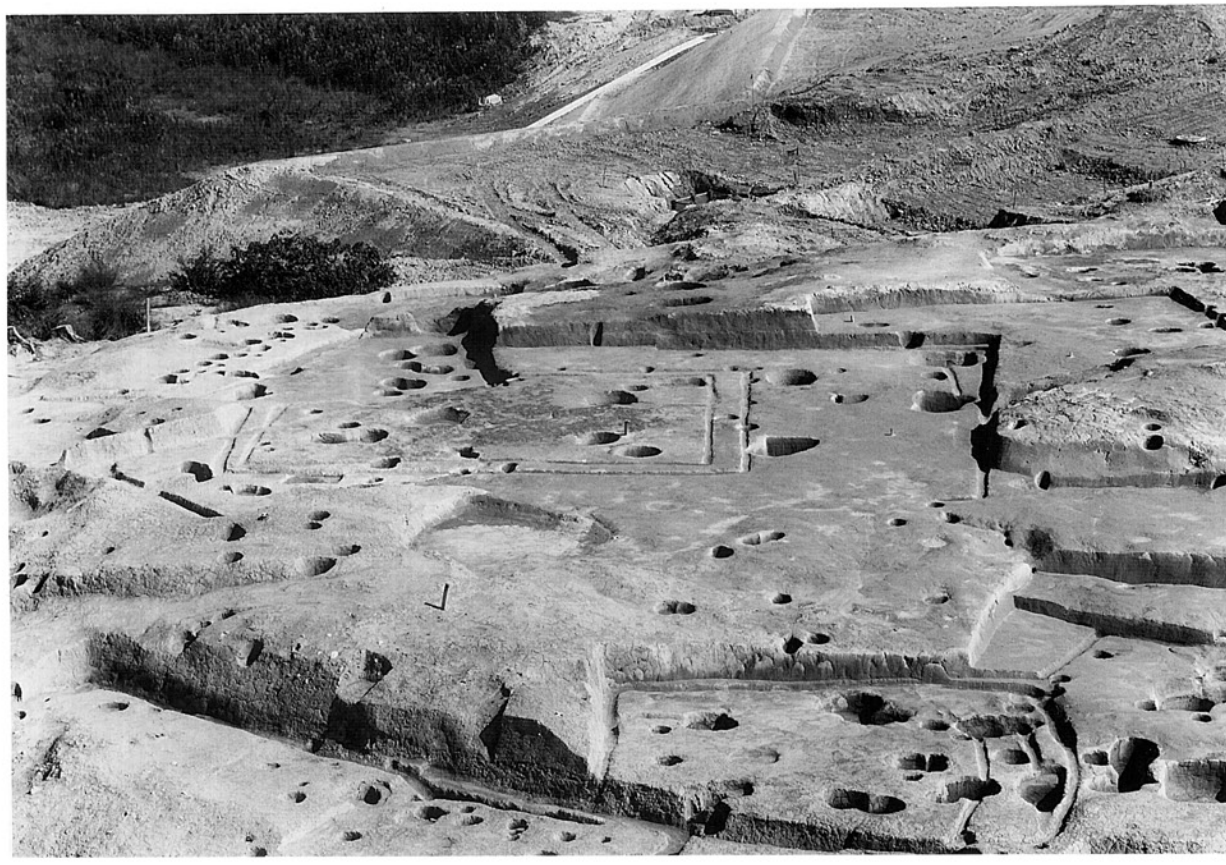


丘陵頂部A地区全景（北西から）

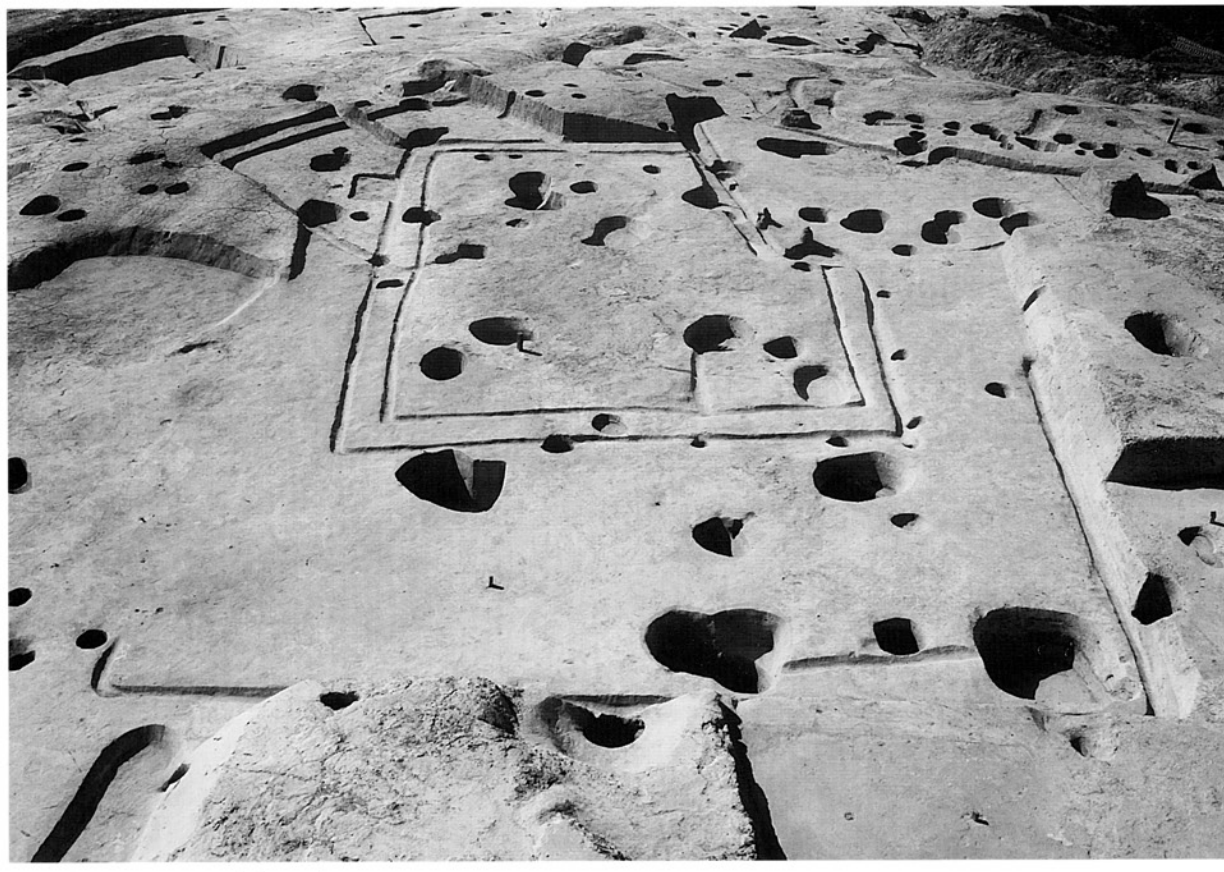


A地区より西側の谷を望む

ＰＬ３　　Ａ地区－２



Ａ地区北部　ＳＨ１～ＳＨ４（南西から）



ＳＨ１～ＳＨ４（南東から）

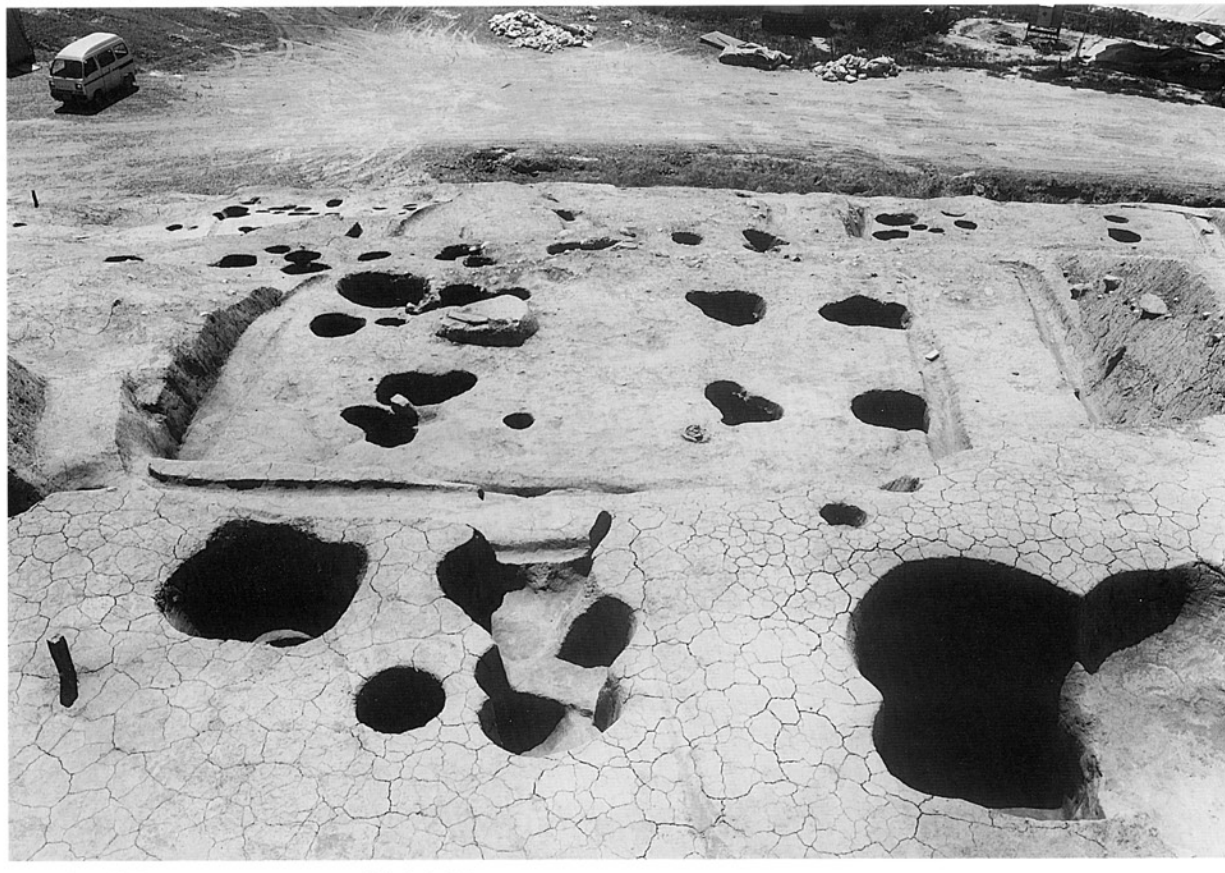
SH1・SH2（東から）

SH1・SH2　排水溝（西から）

ＰＬ５　　Ａ地区－４

ＳＨ４（西から）

ＳＨ４　遺物出土状況（南から）



Ａ地区南部　ＳＨ５～ＳＨ７（北東から）

ＳＨ５～ＳＨ７（北西から）

ＰＬ７　　Ａ地区－６

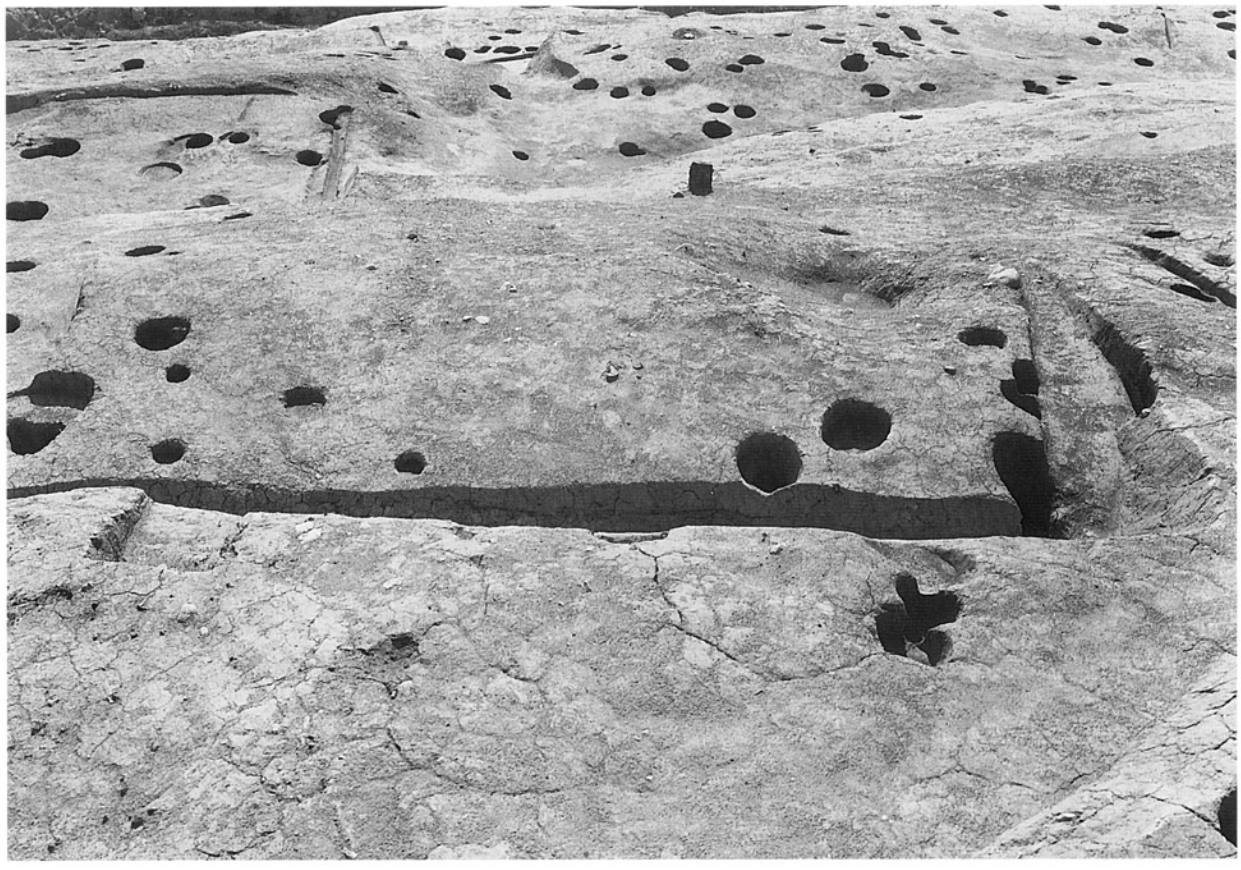
ＳＨ７　土器（甕）出土状況（西から）

ＳＨ７　周溝内石斧出土状況（南から）

SH7　壁柱穴（西から）

A地区中央部　SH8～SH10（北から）

ＰＬ９　　Ａ地区－８



ＳＨ８（東から）

ＳＨ10・ＳＢ58・ＳＡ67（東から）

SH10　土器出土状況（北西から）

A地区南部　SH11～SH13（南西から）

ＰＬ11　　Ａ地区－10

ＳＨ11～ＳＨ16（北東から、ＳＨ11は調査区内で最大の竪穴住居　12×8.4ｍ）

ＳＨ11～ＳＨ16（南東から）

SH15・SH16（北西から）

SH15・SH16（北東から）

ＰＬ13　　Ａ地区－12

Ａ地区北部　Ａ－１テラス　ＳＡ68～ＳＡ71（南西から）

Ａ－１テラス　ＳＡ68～ＳＡ71・ＳＤ140（北東から）

SH17（東から）

SH17（北から）

ＰＬ15　　Ｂ地区－２

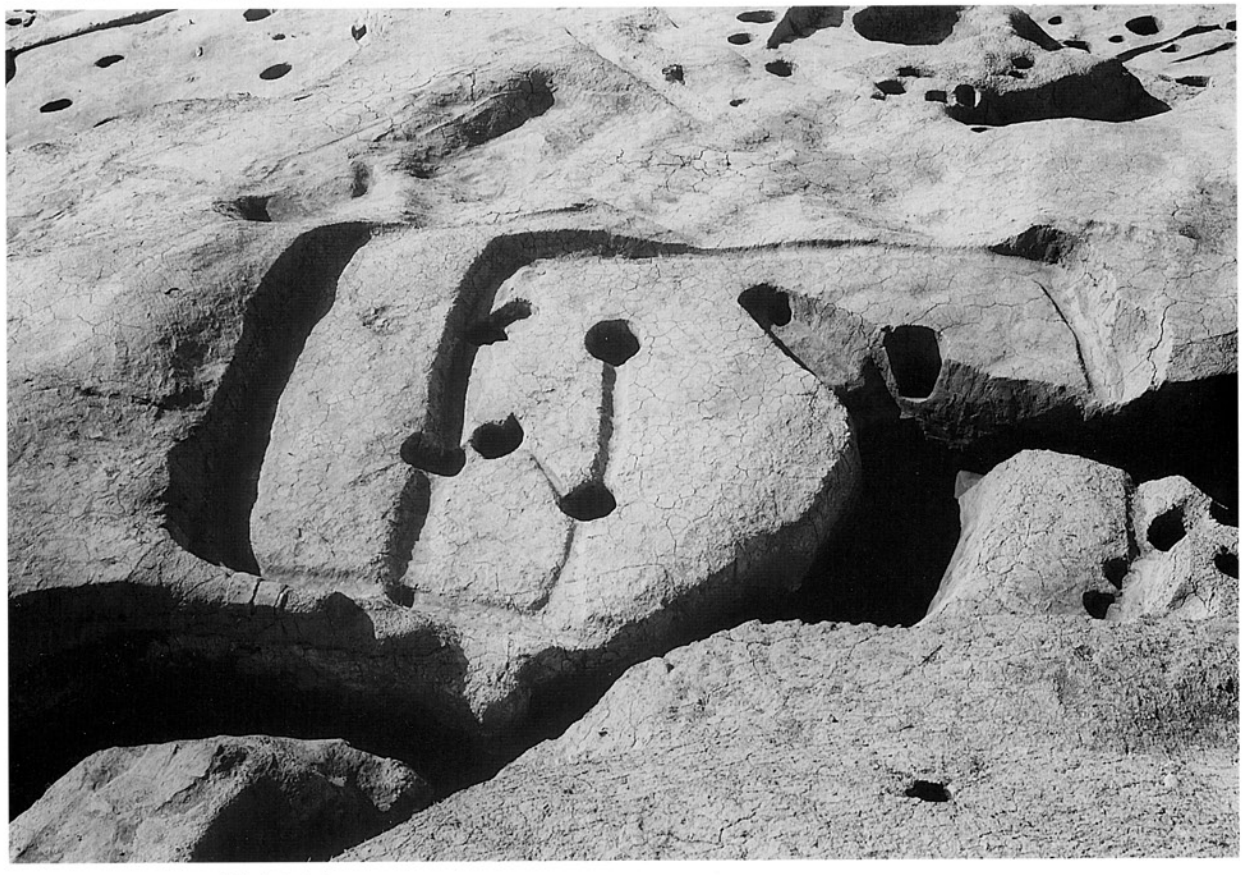
ＳＨ17　石斧出土状況（南から、北壁西端部付近）

ＳＨ18（北から）

SH19（東から）

SH19（北から）

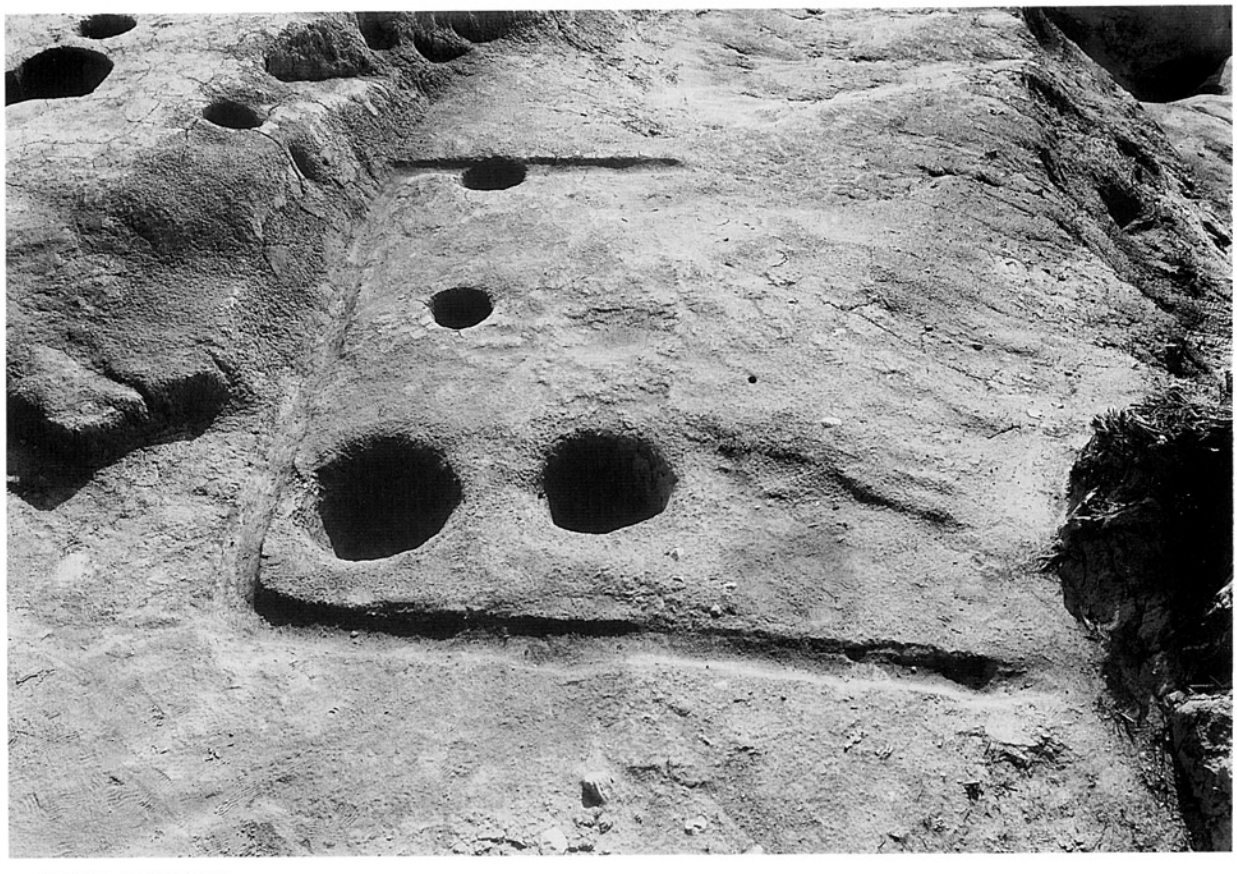
ＰＬ17　　Ｂ地区－４



ＳＨ20・ＳＨ21（南東から）

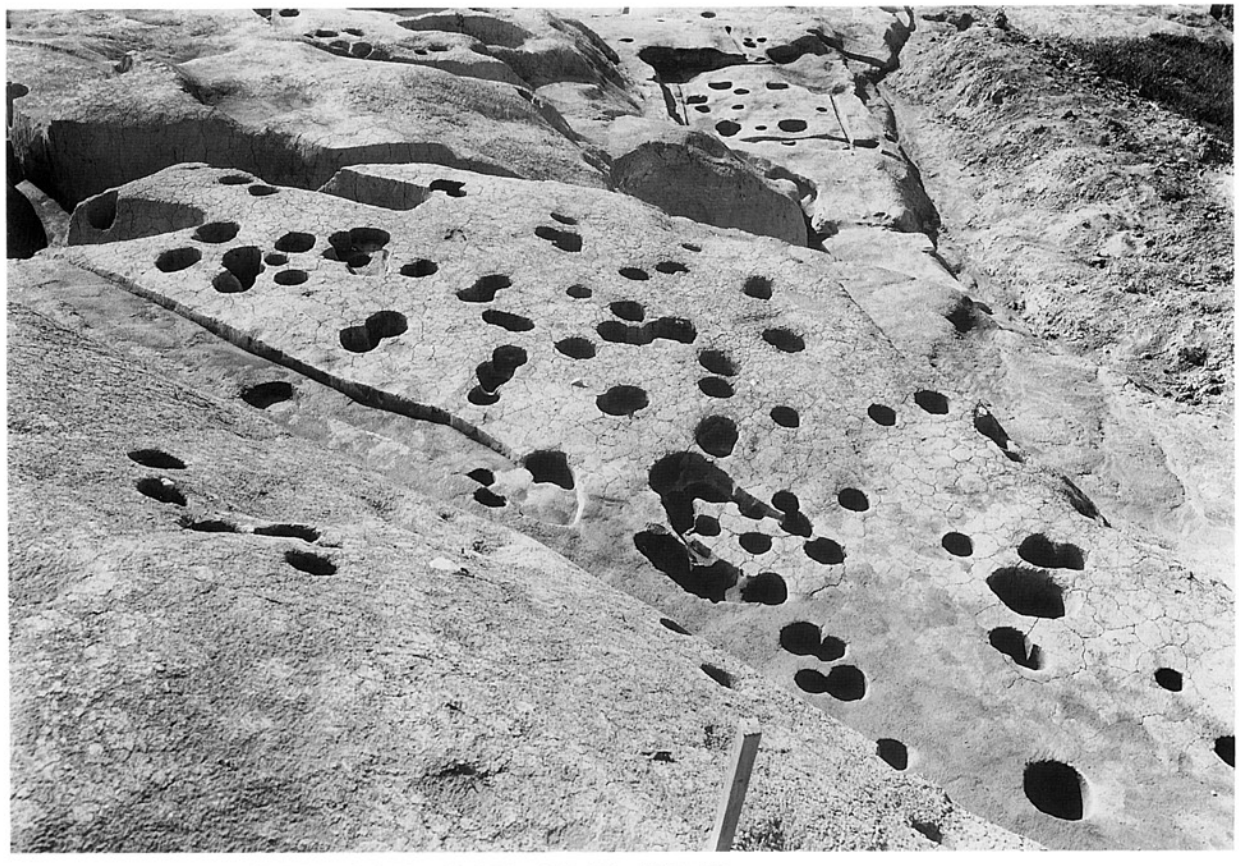
ＳＨ20・ＳＨ21（北東から）

SH22（西から）



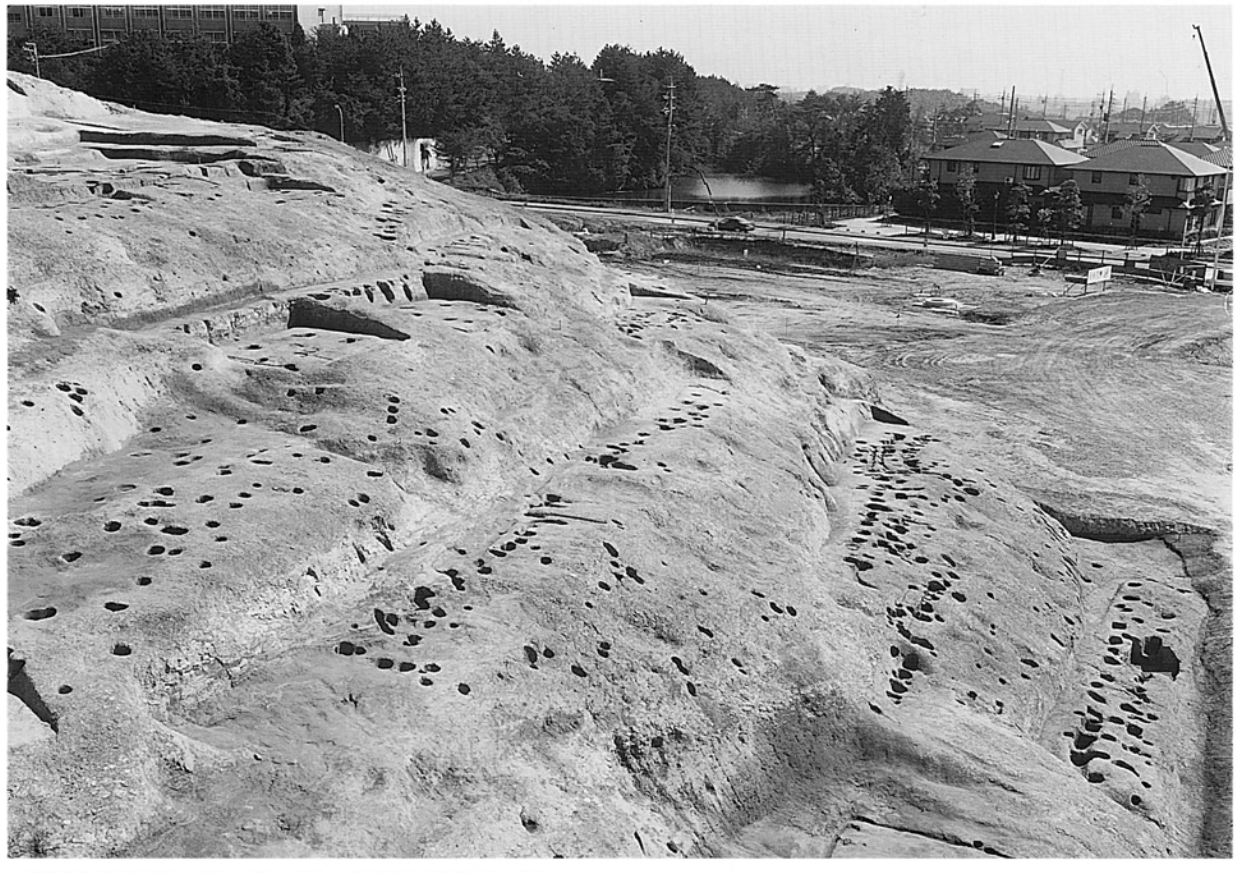
SH23（北東から）

ＰＬ19　　Ｂ地区－６



Ｂテラス　ＳＢ59～ＳＢ61・ＳＡ74～ＳＡ76・ＳＤ141（東から）

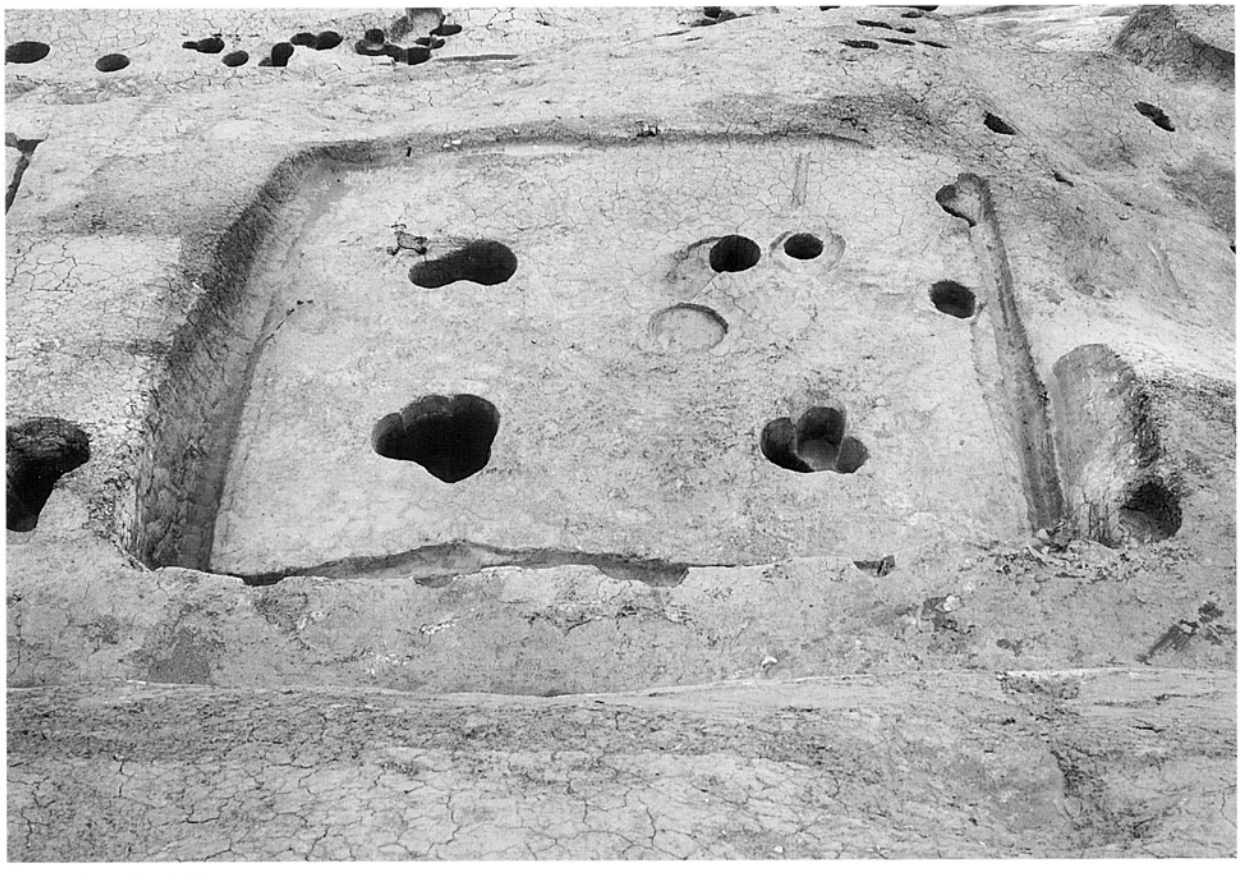
Ｂテラス（北東から）



調査区南側Ｃ・Ｅ・Ｇ・Ｈ・Ｊ地区（北西から）

調査区北側Ｄ・Ｆ・Ｉ地区（西から）

ＰＬ21　　Ｃ地区－１



ＳＨ24（東から）

ＳＨ24（北西から）

SH25（東から）

SH25・SA77・SA78（北西から）

ＰＬ23　　Ｃ地区－３

Ｃ－２テラス（上段）・Ｃ－３テラス（下段）・ＳＡ79～ＳＡ83（南西から）

Ｃ－２テラス（上段）・Ｃ－３テラス（下段）・ＳＡ79～ＳＡ83（北西から）

SH26（東から）

SH26（北から）

ＰＬ25　　Ｄ地区－２

ＳＨ26　石を据えた炉（南から）

ＳＨ27～ＳＨ29（西から）

SH27・SH28（北から）

SH29（北から）

ＰＬ27　　Ｄ地区－４

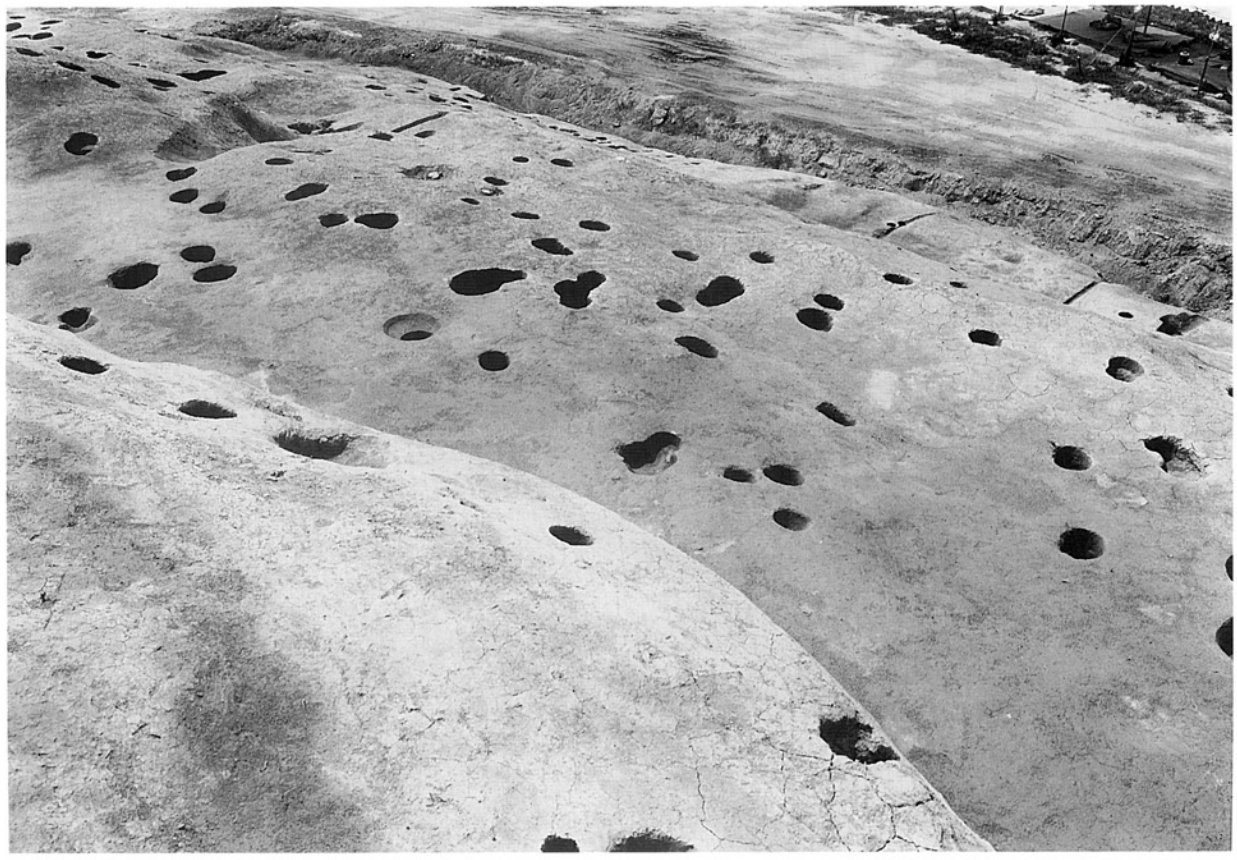
ＳＨ29　暗渠排水溝入口（東から）

ＳＨ29　暗渠排水溝出口（西から）

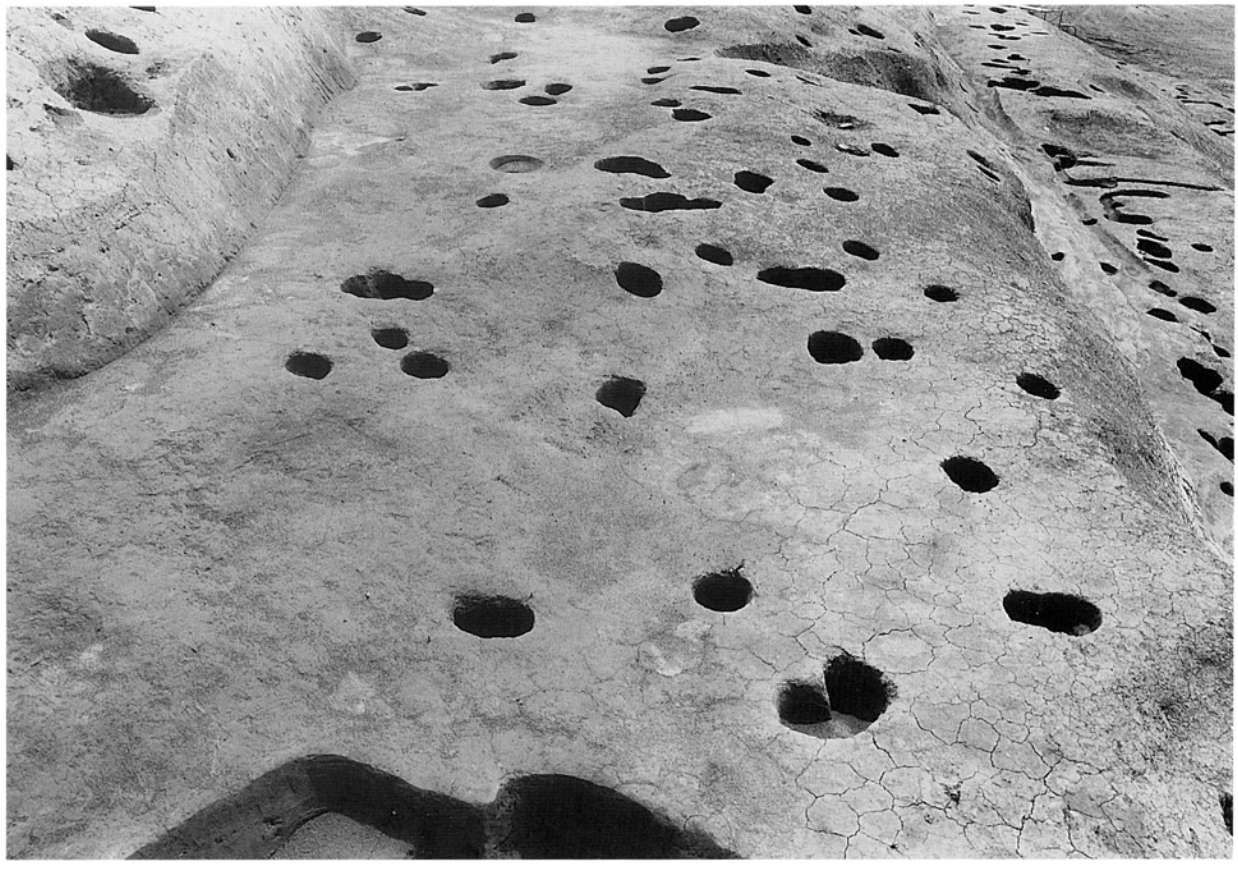
SH30（東から）

SH30（北から）

ＰＬ29　　Ｄ地区－６



Ｄテラス　ＳＢ63・ＳＡ84～ＳＡ86（北東から）



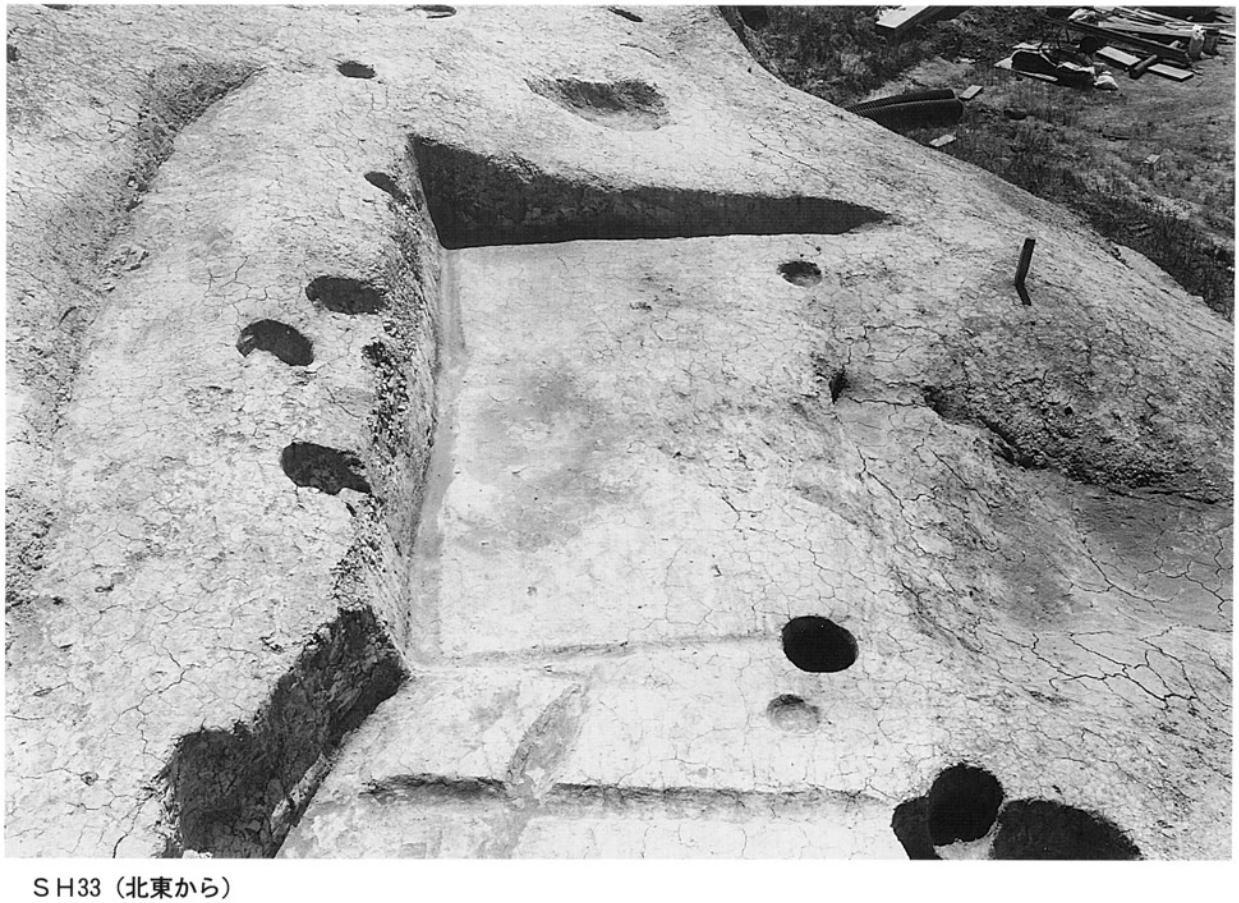
Ｄテラス（北西から）

ＳＨ31～ＳＨ33（南西から）

ＳＨ31～ＳＨ33（南東から）

ＰＬ31　　Ｅ地区－２

ＳＨ31・ＳＨ32・ＳＡ87～ＳＡ91（南西から）



ＳＨ33（北東から）

SH34・SH35（南西から）

SH34・SH35（南東から）

ＰＬ33　　Ｆ地区－１

ＳＨ36（西から）

ＳＨ36（北から）

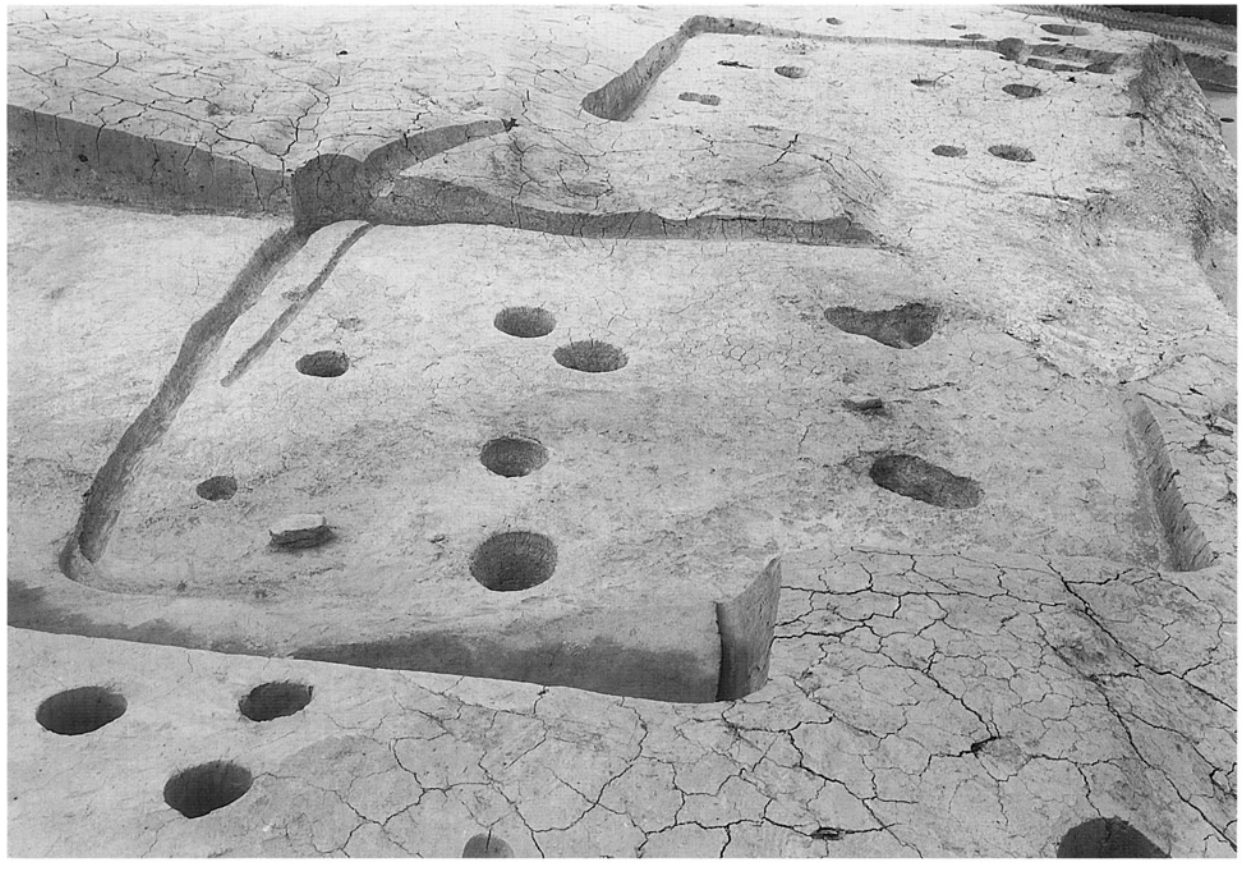
SH37・SH38（東から）

SH37・SH38（北から）

ＰＬ35　　Ｆ地区－３

ＳＨ37　暗渠排水溝入口（南西から）

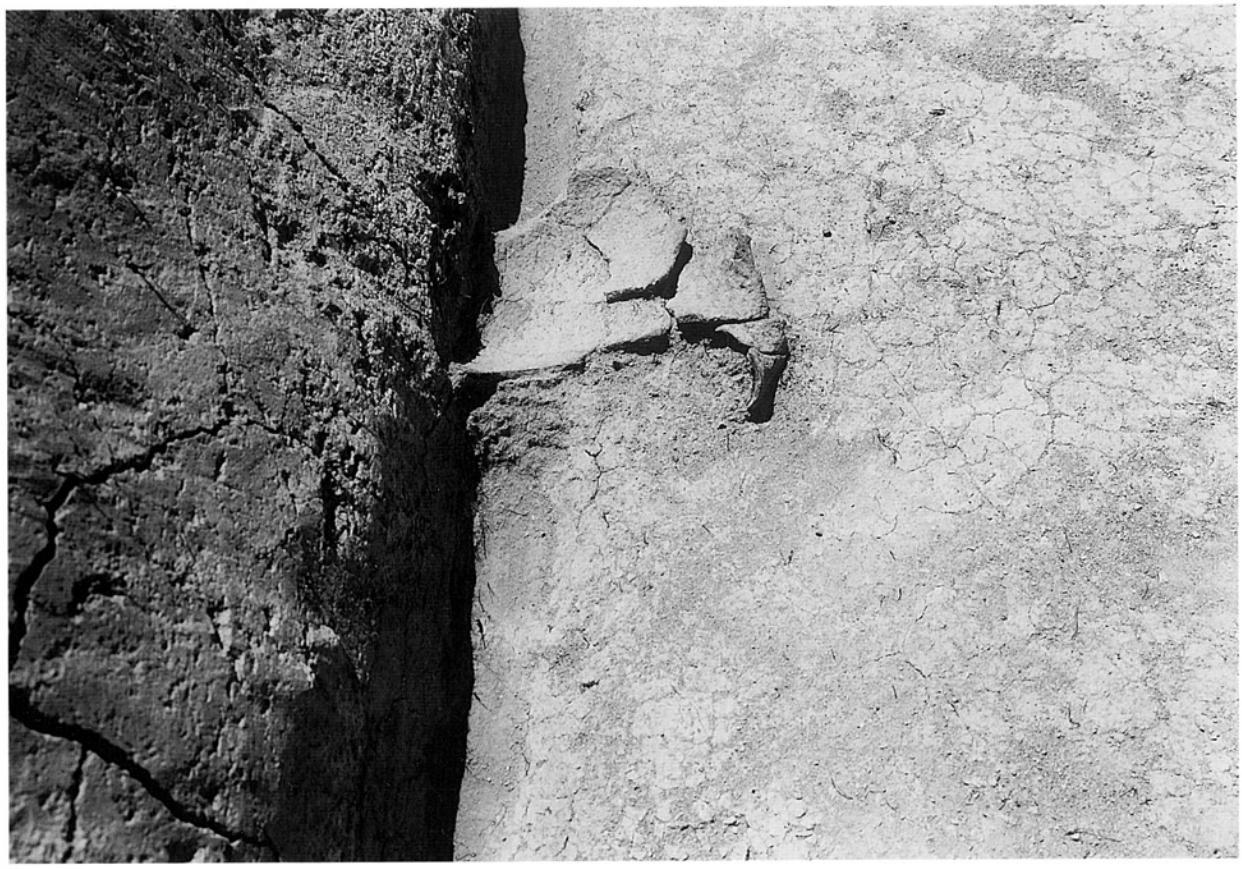
ＳＨ37　暗渠排水溝出口（北東から）



SH38（東から）

SH39（西から）

ＰＬ37　　Ｆ地区－５



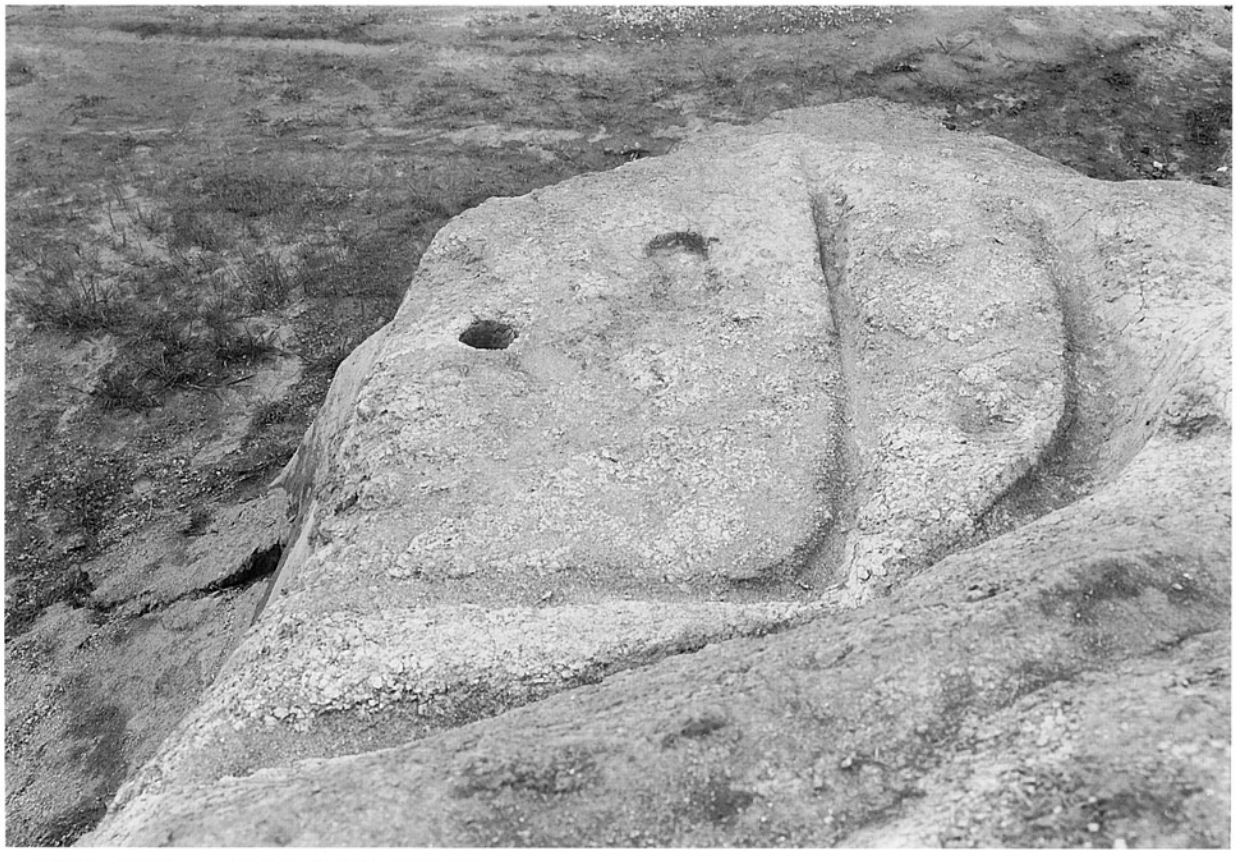
ＳＨ39　土器（壺）出土状況（北から）

ＳＨ40（南西から）

ＳＨ41・ＳＨ42・ＳＡ93～ＳＡ96（東から）

ＳＨ41・ＳＨ42・ＳＡ93（北西から）

ＰＬ39　　Ｇ地区－１



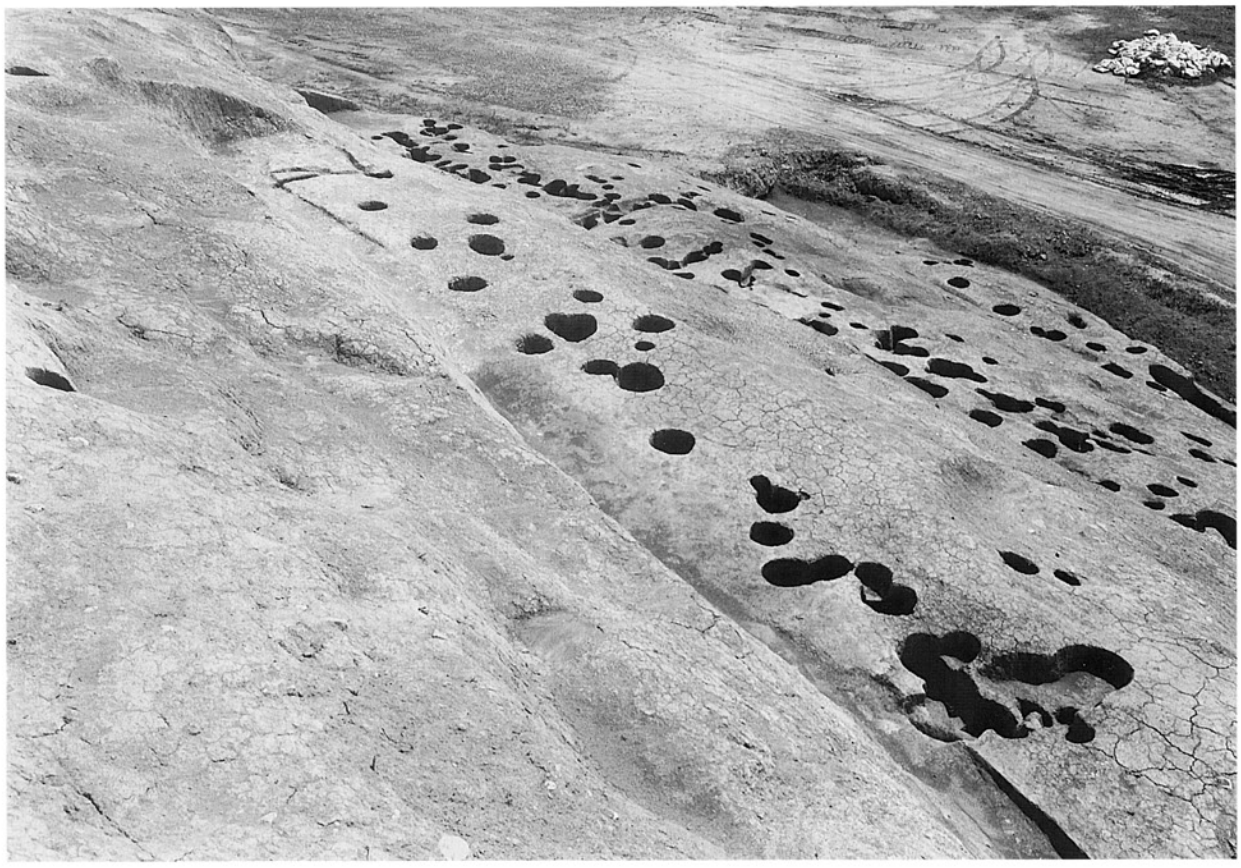
ＳＨ43（円形）・ＳＨ44（方形）（東から）

ＳＨ43（円形）・ＳＨ44（方形）（北から）

Gテラス全景　ＳＡ97～ＳＡ105（南東から）

Gテラス全景　ＳＡ97～ＳＡ105（北西から）

ＰＬ41　　Ｇ地区－３



Ｇテラス南側　ＳＡ97～ＳＡ99・ＳＡ101・ＳＡ102・ＳＡ104（北から）

Ｇテラス北側　ＳＡ100・ＳＡ103・ＳＡ105（北から）

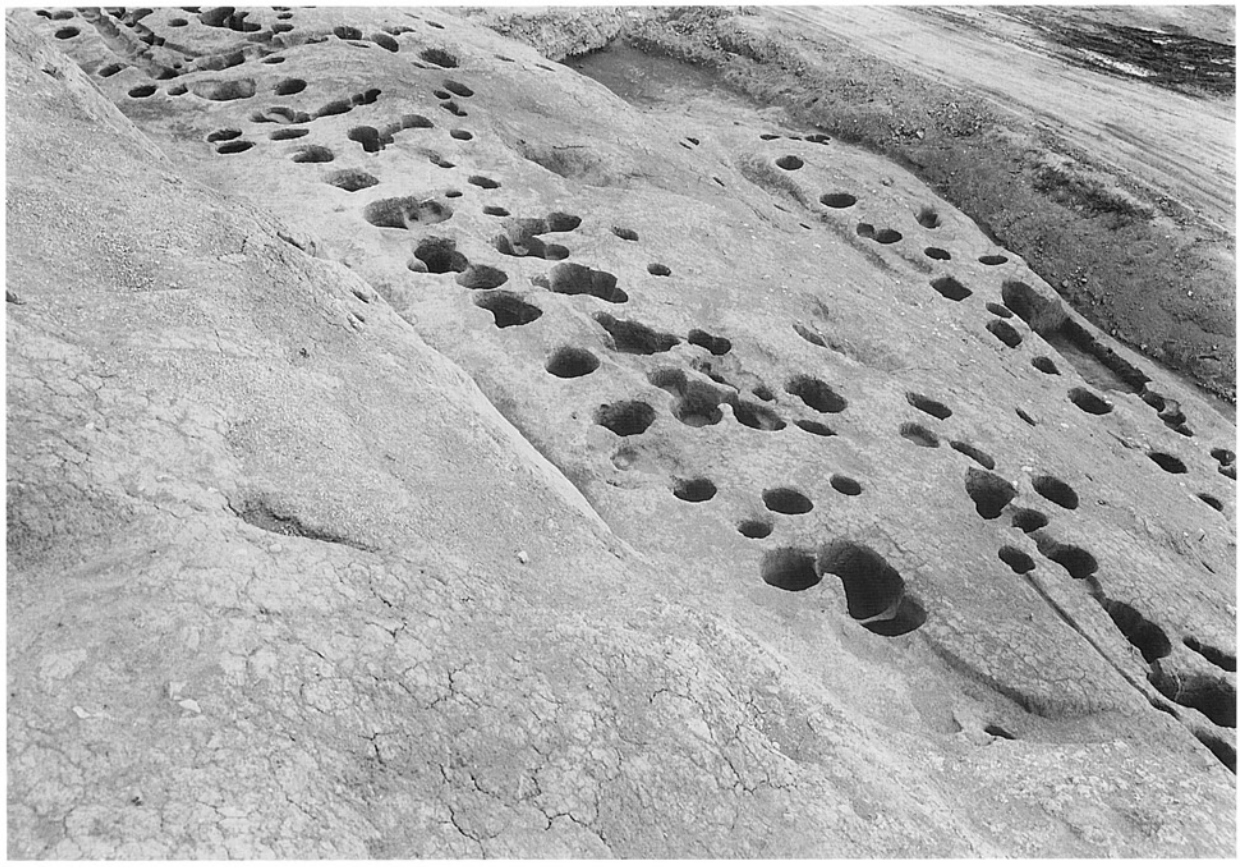
Ｈ地区（上段）・Ｊ地区（下段）（南西から）

Ｈ－２テラス・ＳＨ45・ＳＢ64・ＳＢ65・ＳＡ106～ＳＡ121（西から）

ＰＬ43　　Ｈ地区－２

Ｈ－２テラス（南西から）

Ｈ－２テラス南側　ＳＨ45・ＳＢ64・ＳＢ65・ＳＡ119・ＳＡ121（北東から）



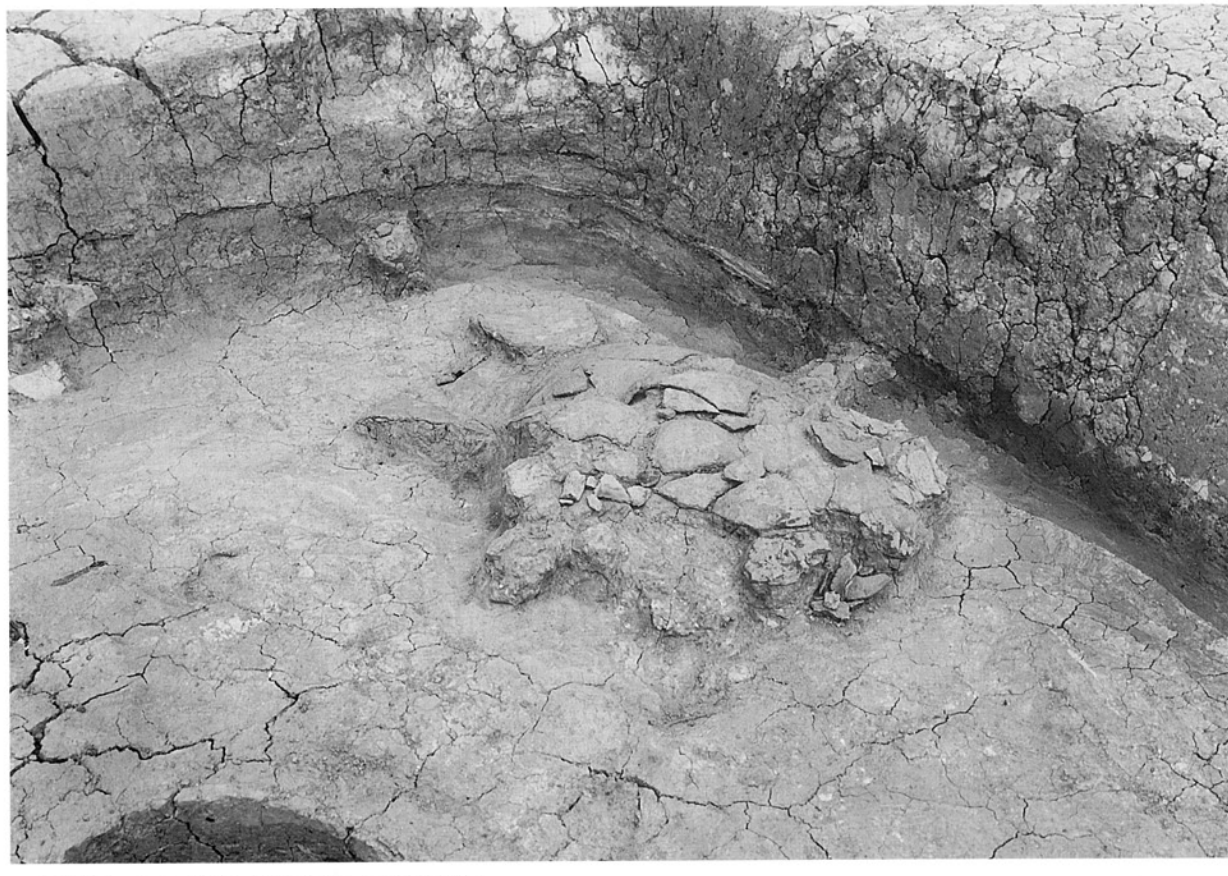
Ｈ－２テラス（北側）ＳＡ111～ＳＡ116（北から）

Ｈ－１テラス　ＳＡ106～ＳＡ110（北西から）

ＰＬ45　　Ｉ地区－１

ＳＨ46・ＳＨ47（西から）

ＳＨ46・ＳＨ47・Ｉ－１テラス（南から）



ＳＨ47　土器（壺）出土状況（南西から）

Ⅰ－１テラス　ＳＡ122・ＳＡ123（北から）

ＳＢ66　近接棟持柱建物（南東から）

ＳＢ66（北から）

SH48・SH49（東から）

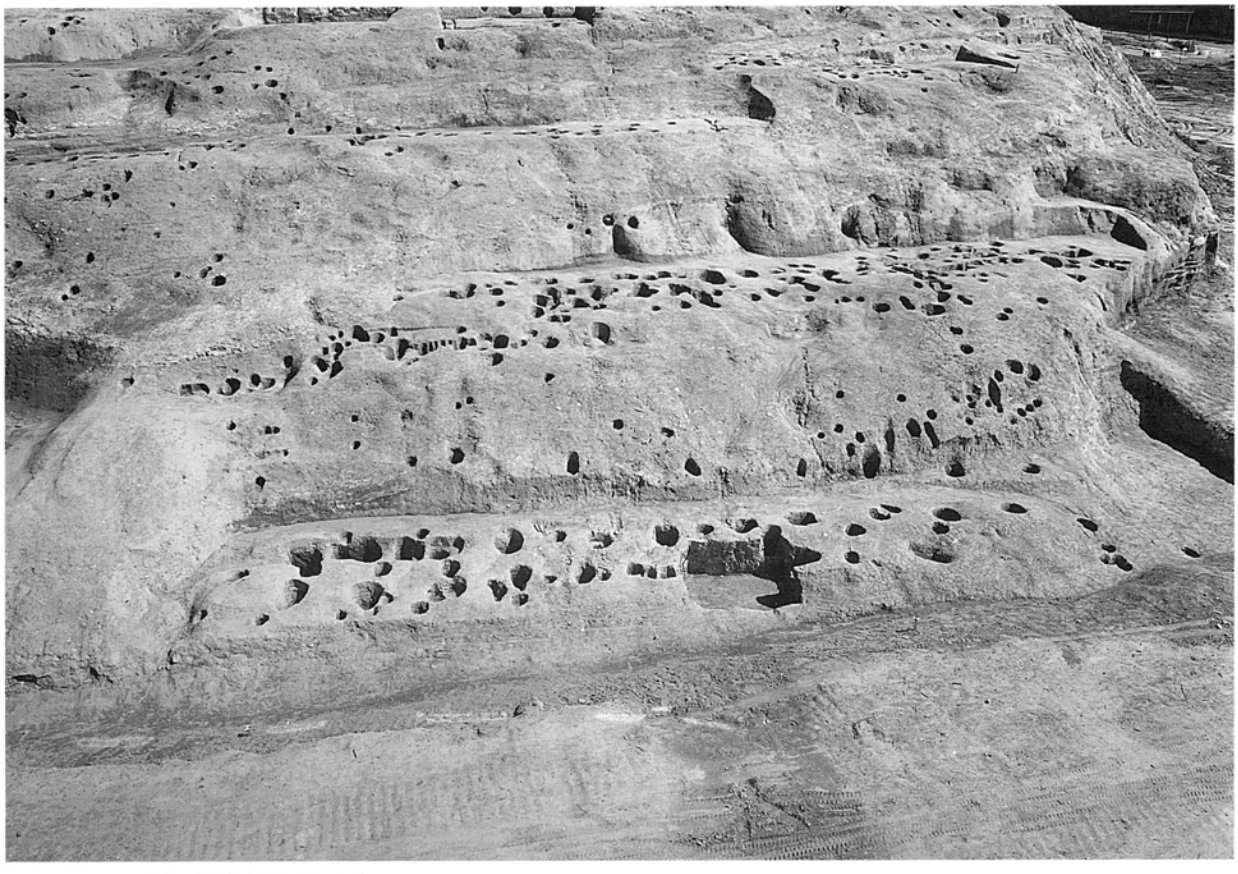
SH48・SH49（北から）

ＰＬ49　　Ｉ地区－５

Ｉ－２テラス　ＳＡ126・ＳＡ127（東から）

ＳＨ50（北西から）

Ⅰ－3テラス（南から）

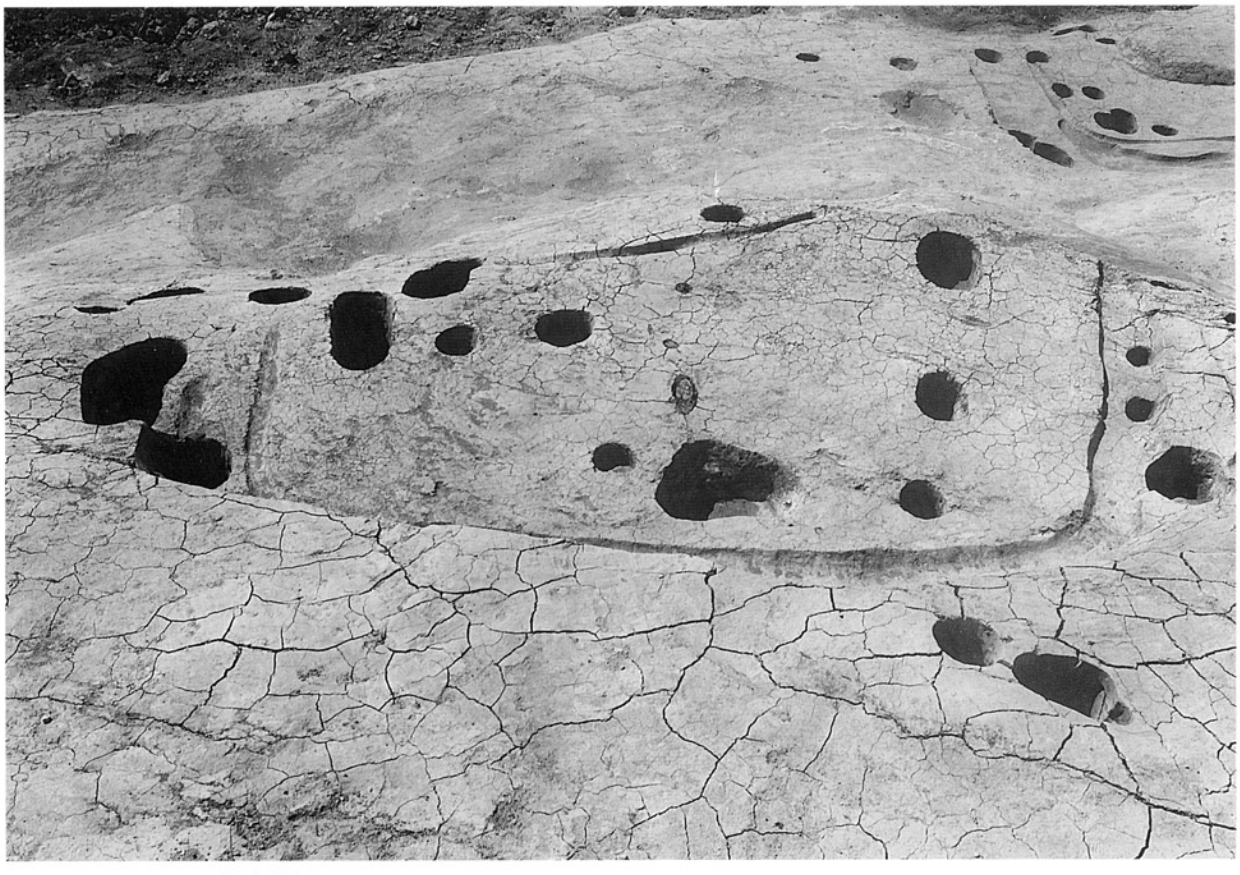


Ｊテラス（最下段）（南西から）

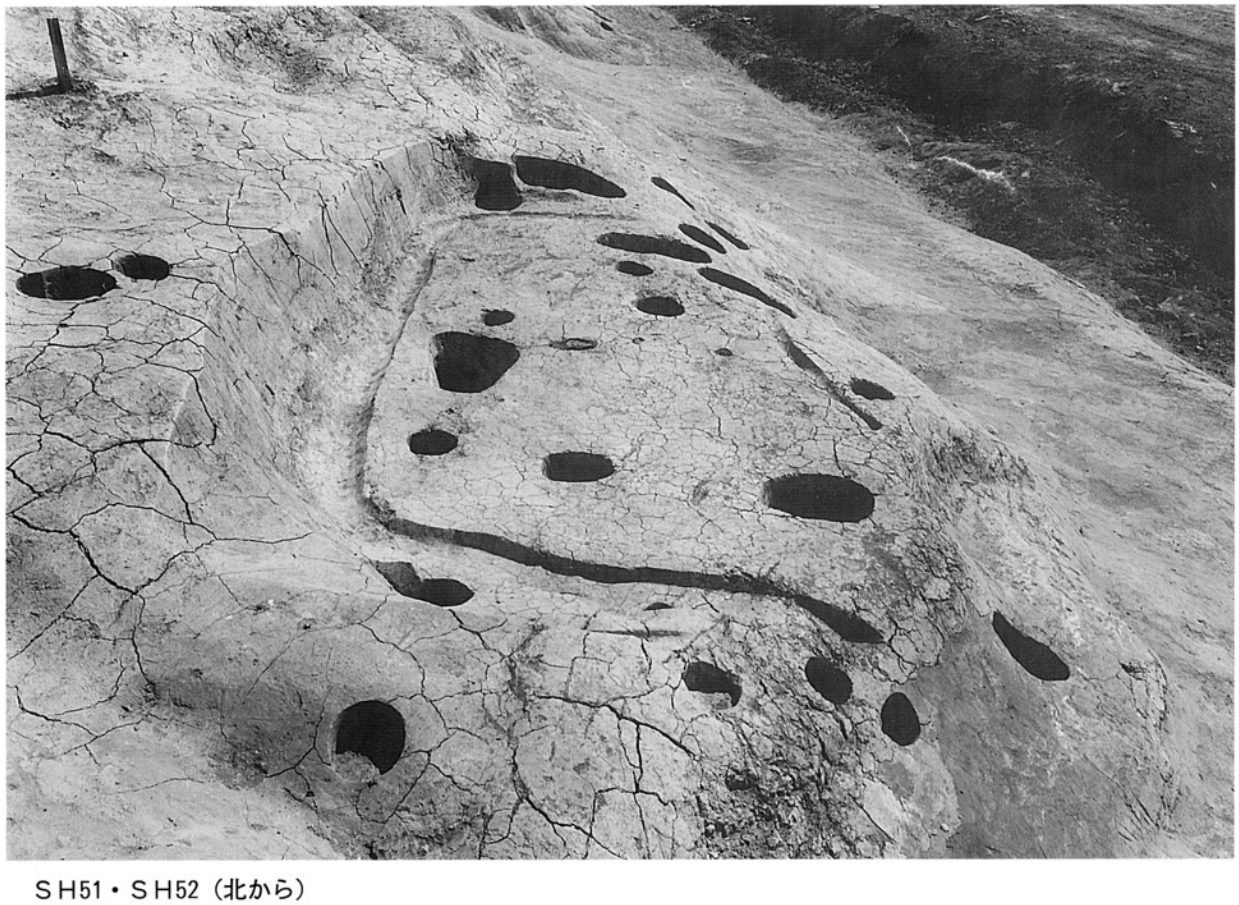
ＰＬ51　　Ｊ地区－２・Ｋ地区－１

Ｊテラス・ＳＡ128～ＳＡ132（北西から）

Ｋ地区全景　ＳＨ51～ＳＨ57（南西から）



SH51・SH52（東から）



SH51・SH52（北から）

ＰＬ53　　Ｋ地区－３

ＳＨ53～ＳＨ55（西から）

ＳＨ53～ＳＨ55（北から）

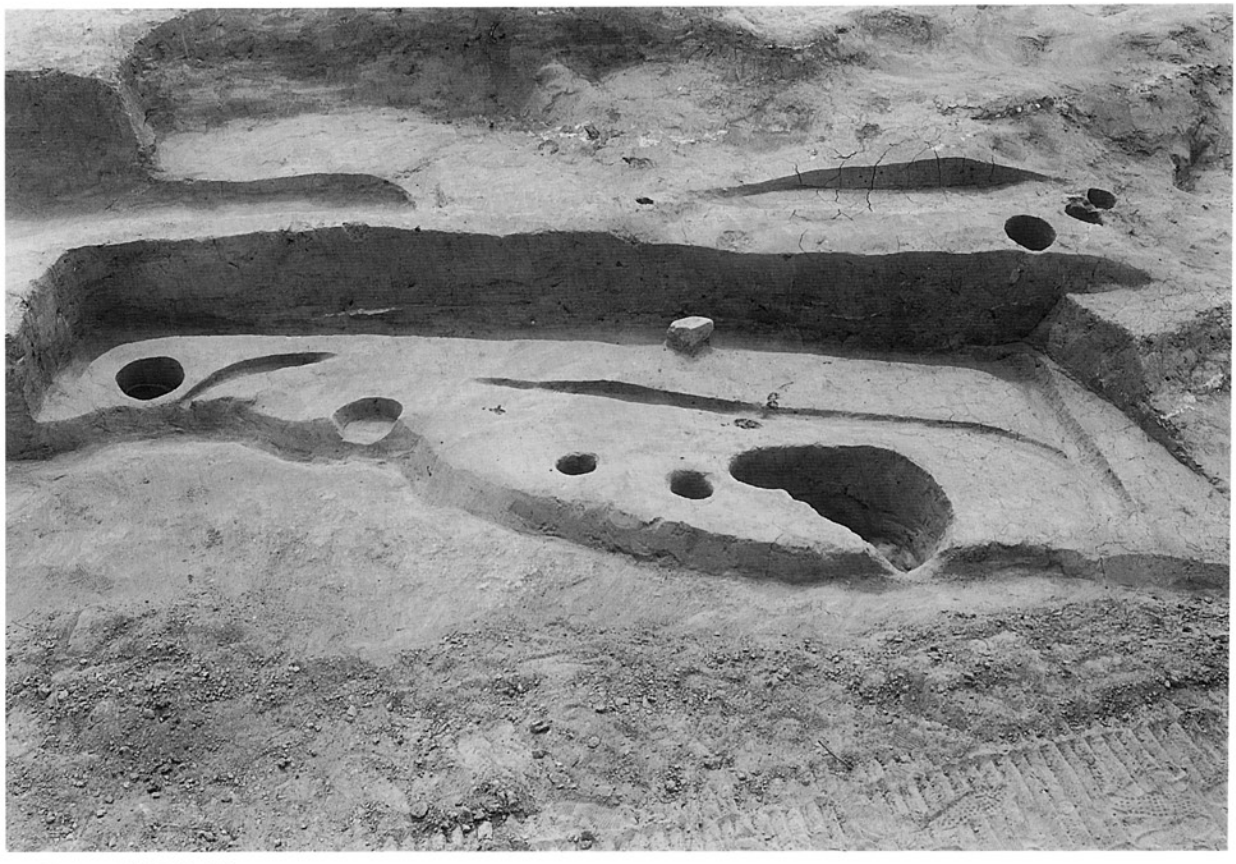
SH56　作業風景（東から）

SH56　9.2m×7.3m（東から）

ＰＬ55　　Ｋ地区－５

ＳＨ56（南から）

ＳＨ56　南西隅暗渠排水溝入口（東から）

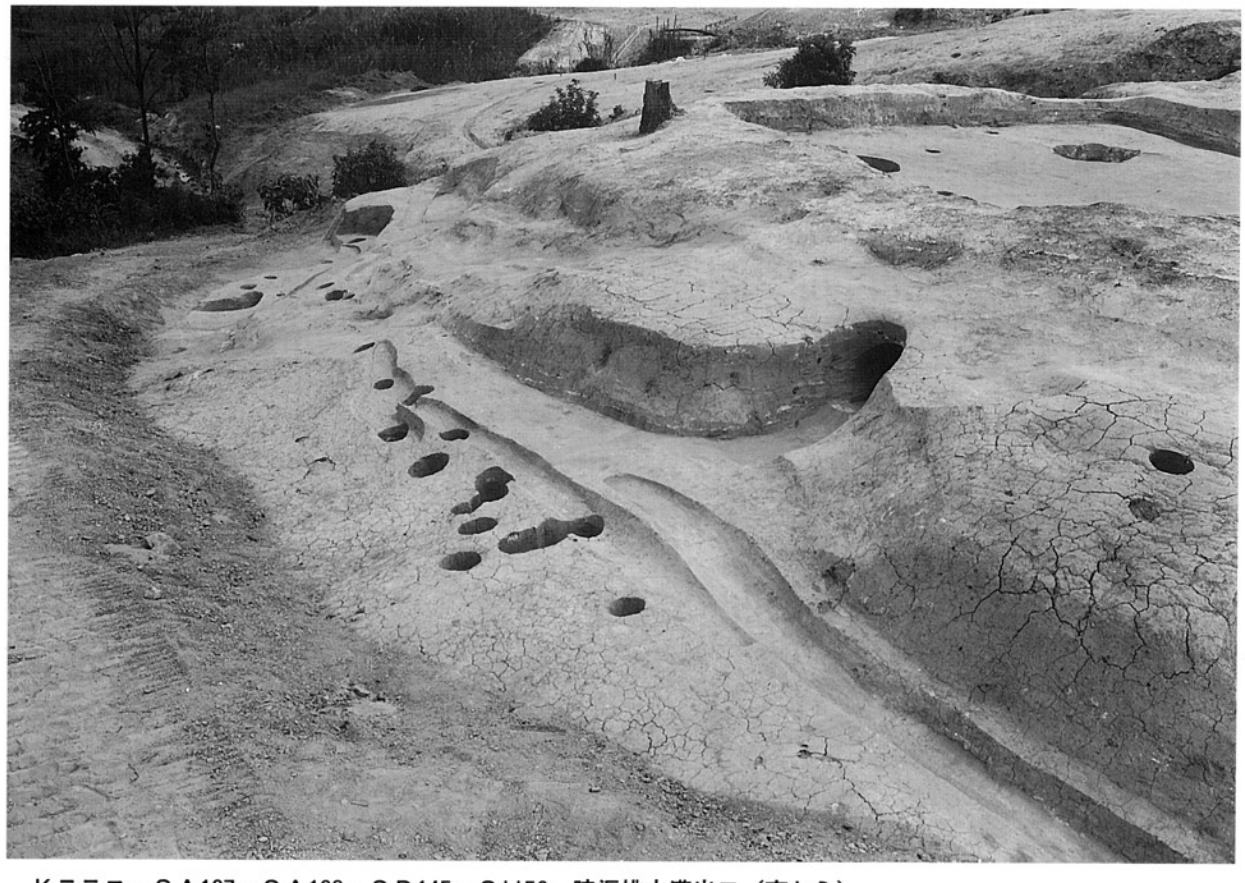


SH57（北西から）

SH57（南西から）

ＰＬ57　　Ｋ地区－７

ＳＨ57Ｐ１土器埋設状況（南西から）

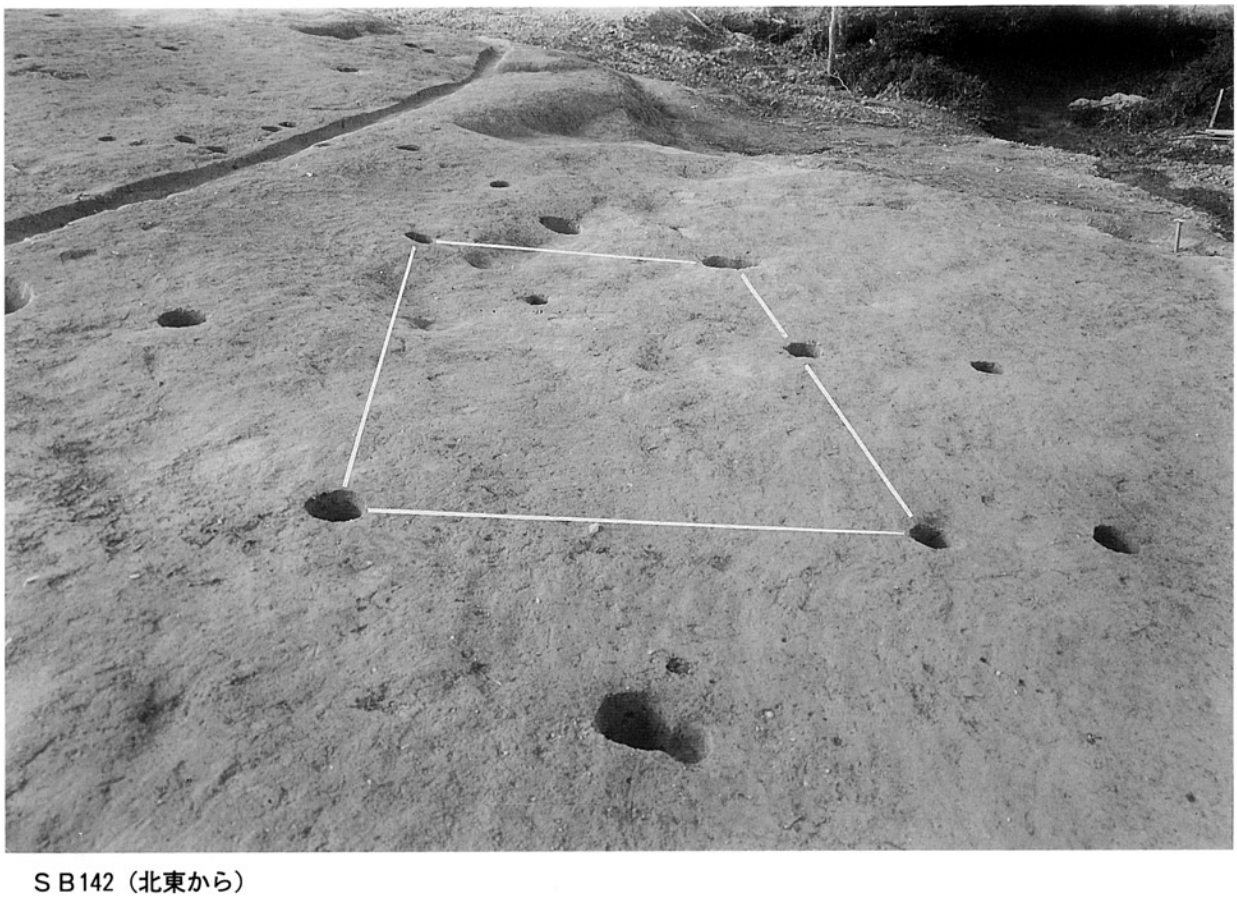


Ｋテラス・ＳＡ137・ＳＡ138・ＳＤ145・ＳＨ56　暗渠排水溝出口（南から）

北斜面地区

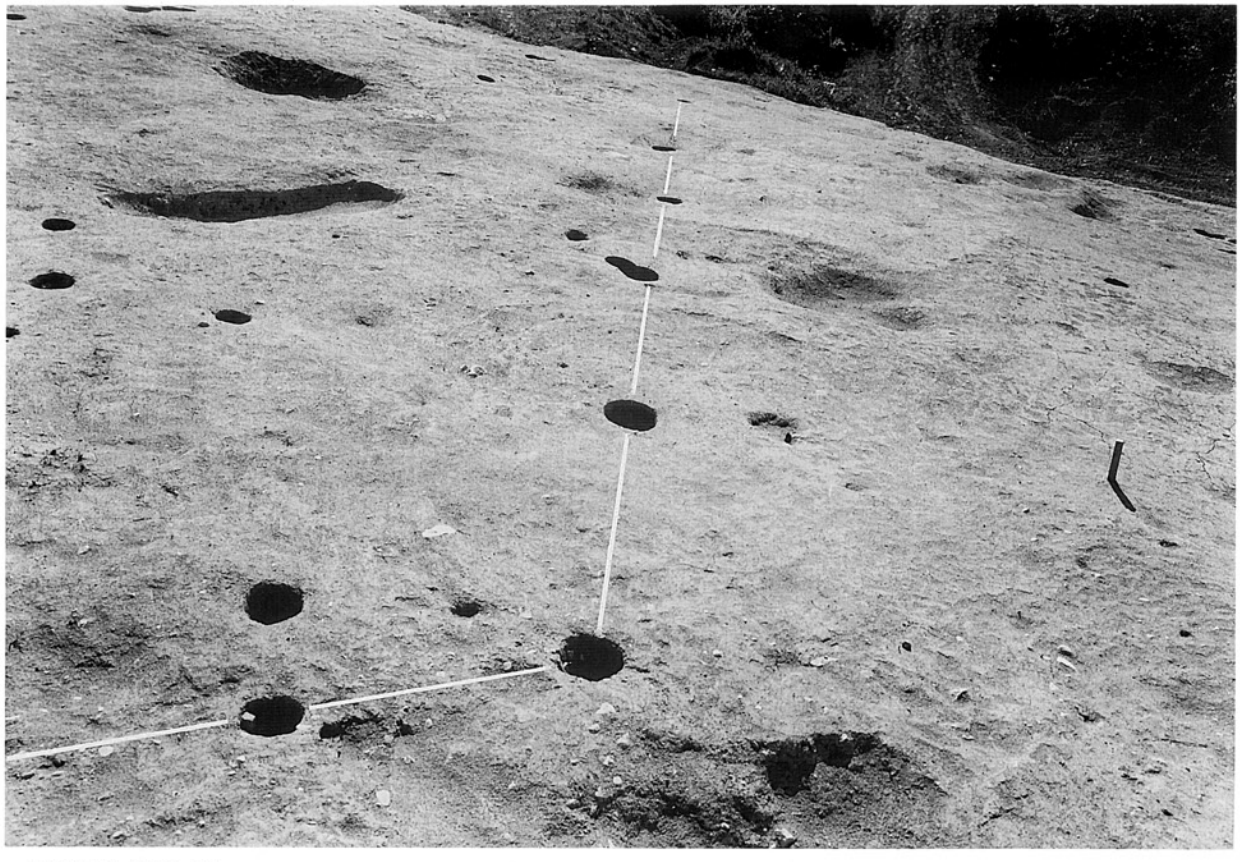
北斜面地区－1

北斜面地区全景（北から）



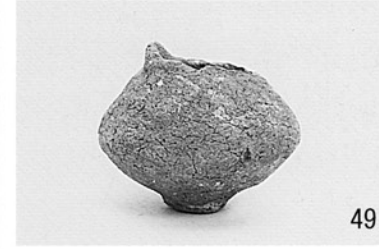
ＳＢ142（北東から）

ＰＬ59　北斜面地区－２



ＳＡ143（東から）

ＳＤ144（東から）



出土遺物１（土器）

・遺物番号は実測図番号に同じ

PL61

50

101

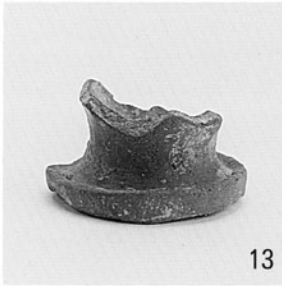
100

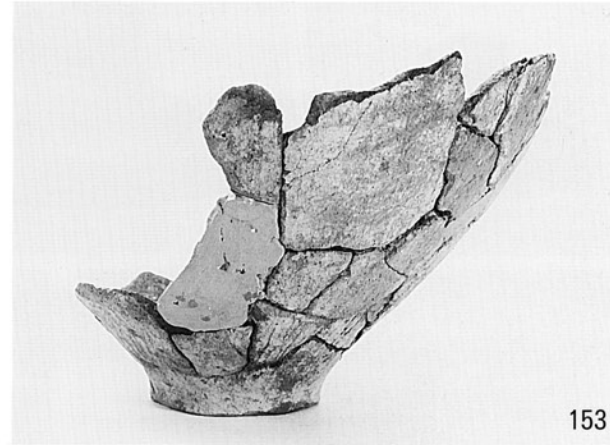
26

5

21

出土遺物 2（土器）





出土遺物３（土器）

PL63

185

75

16

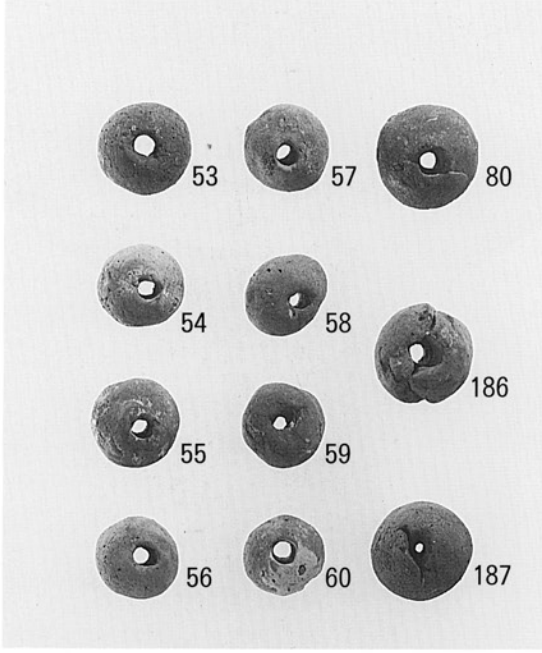
14

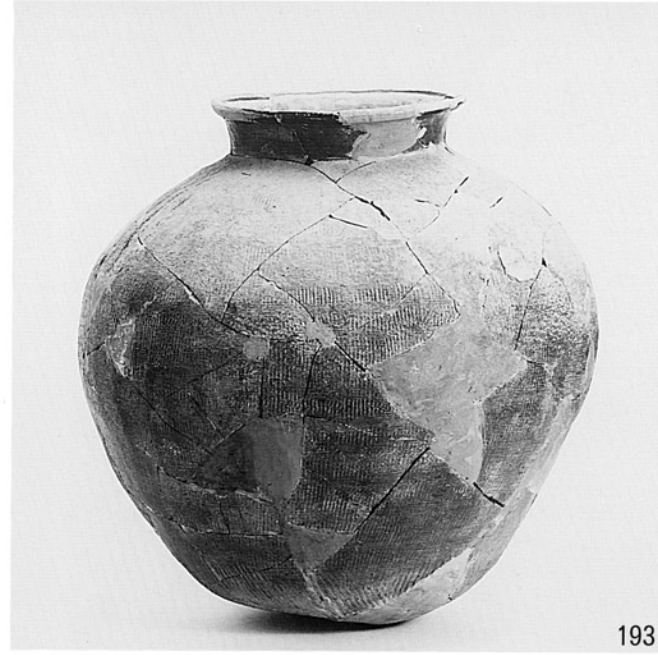
184

11

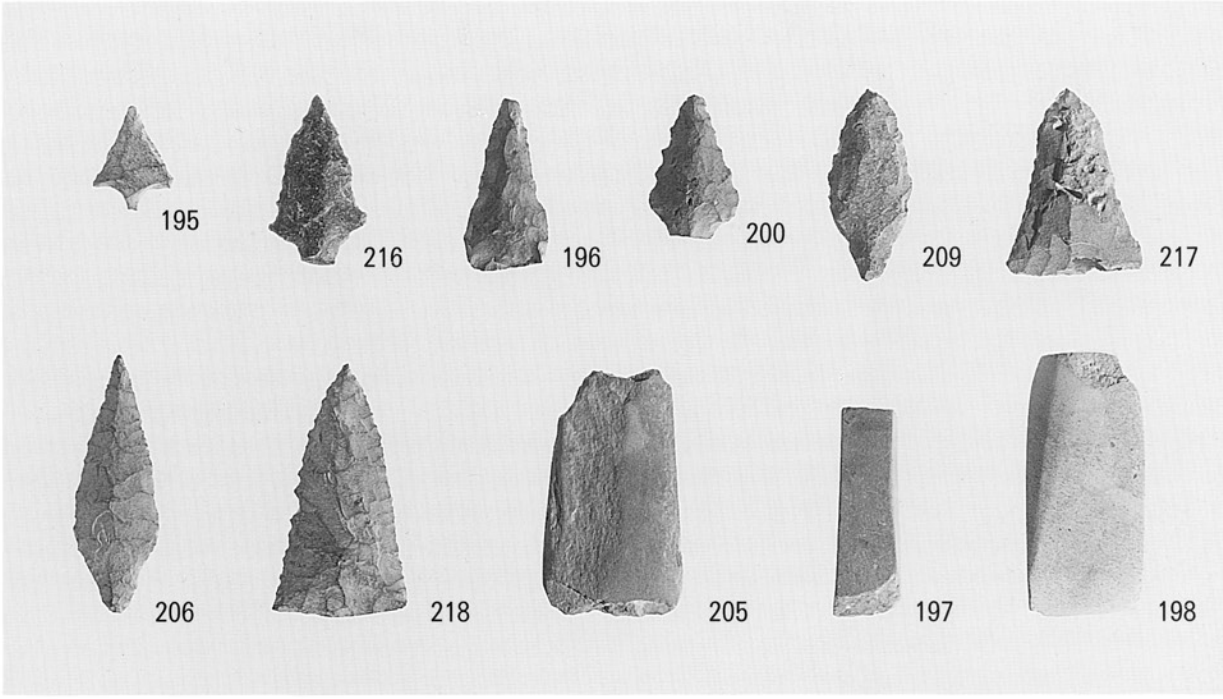
52

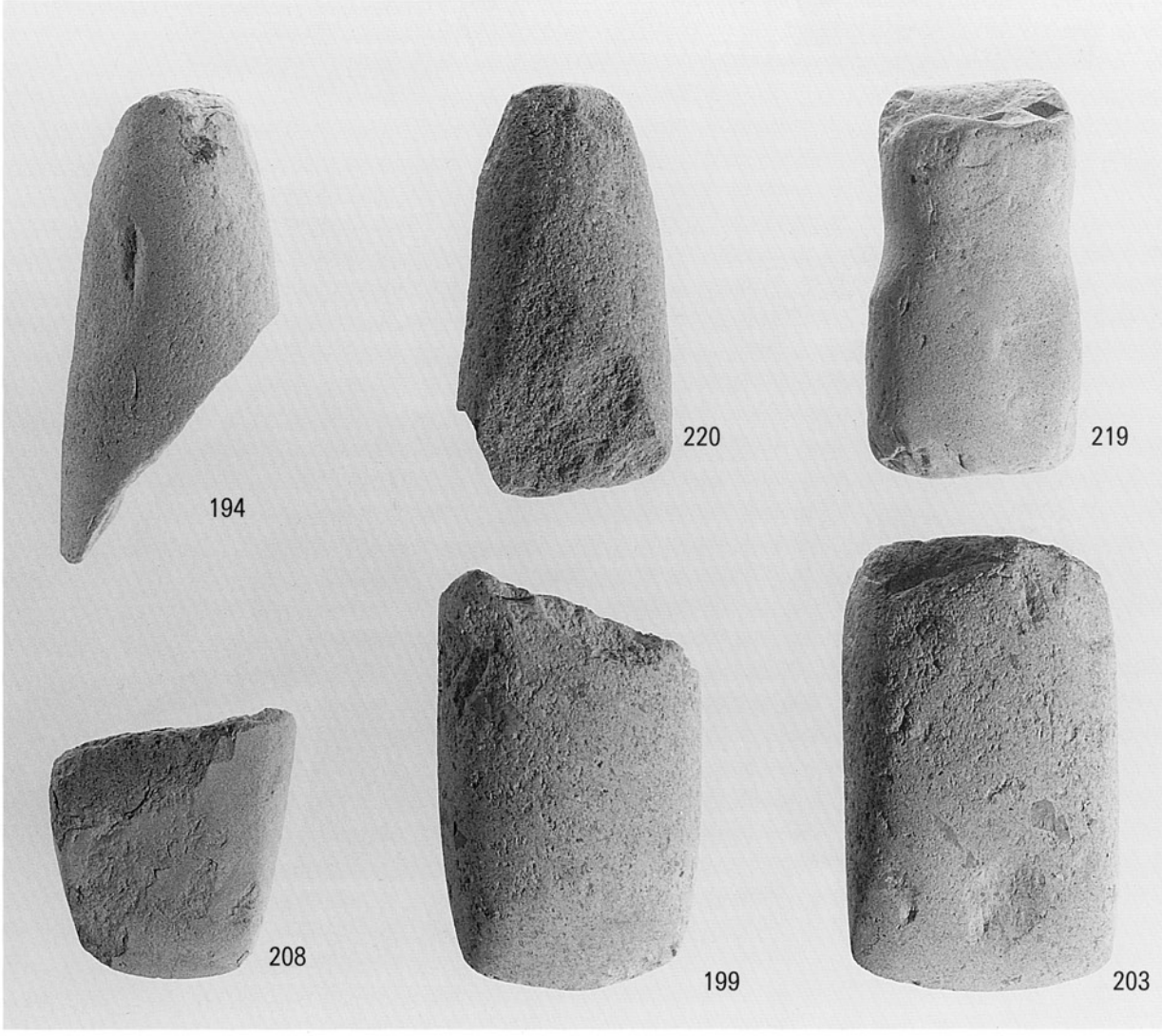
191



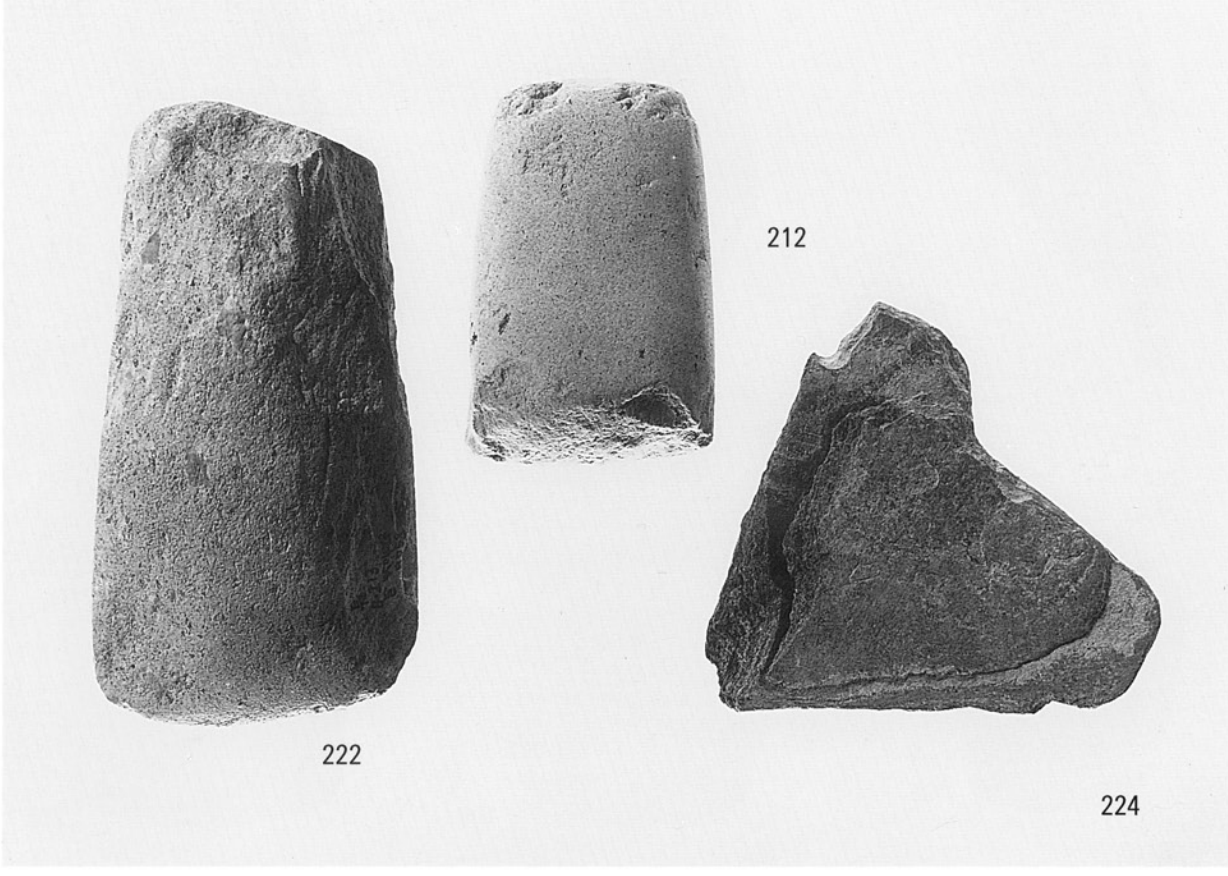

193

出土遺物４（土器・土製品）

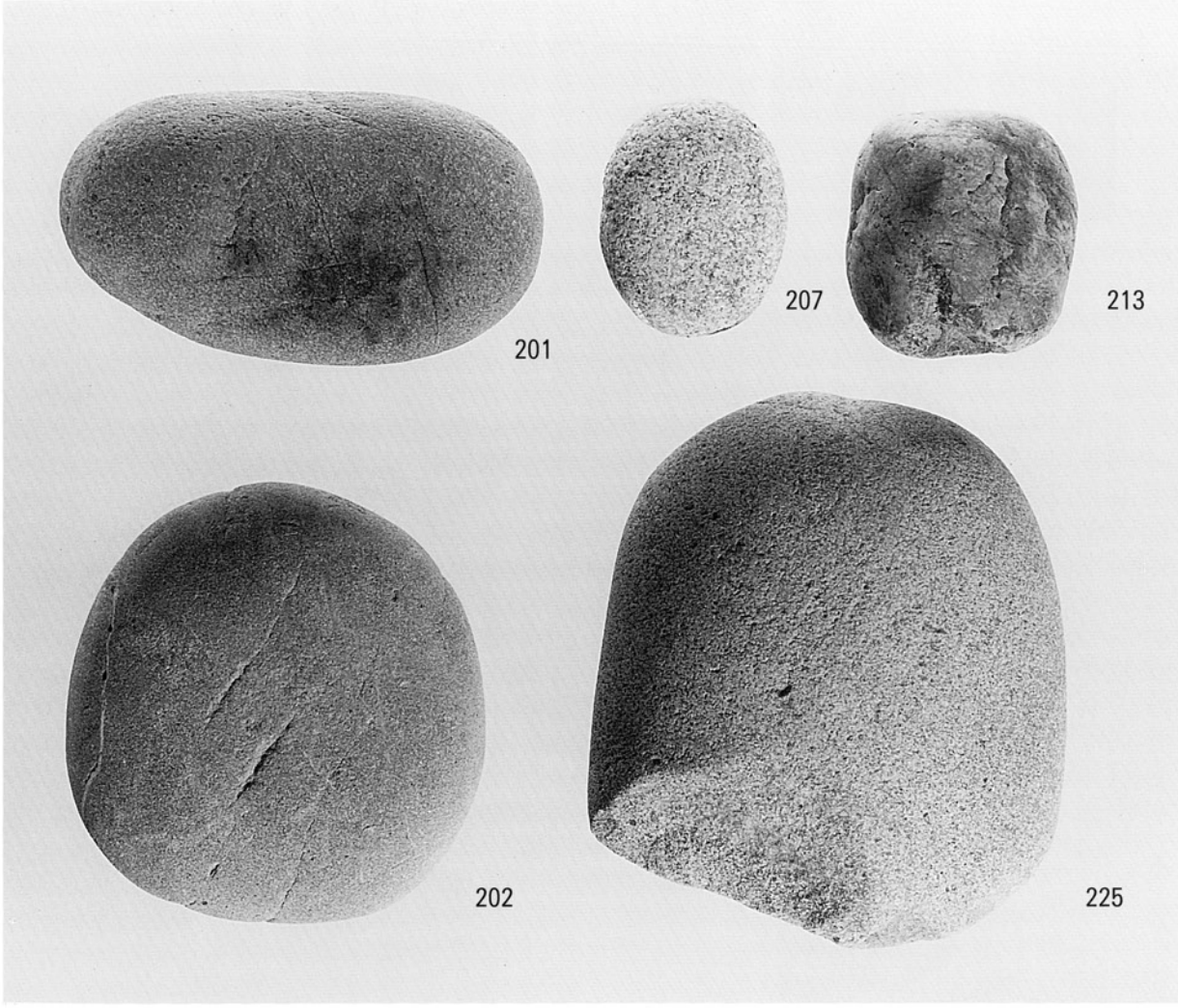

195
216
196
200
209
217
206
218
205
197
198


194
220
219
208
199
203

出土遺物 5 （石器）



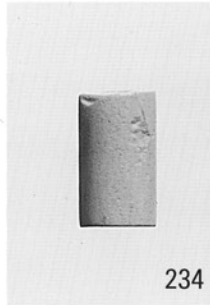
出土遺物６（石器）



出土遺物７（石器）

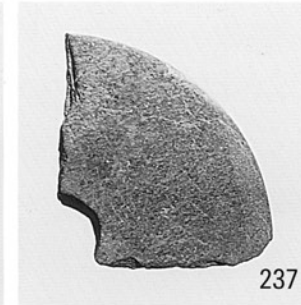
PL67

233

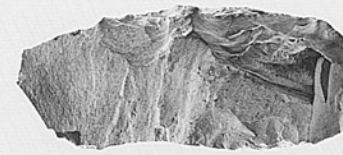

234

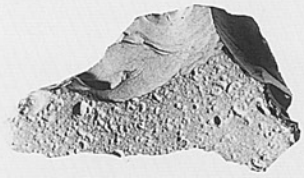
235

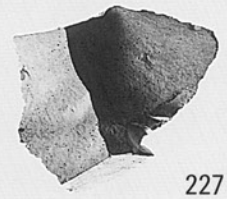
236


237

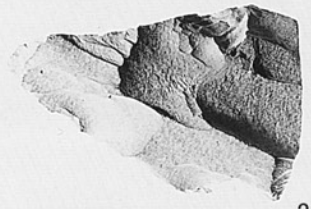
226

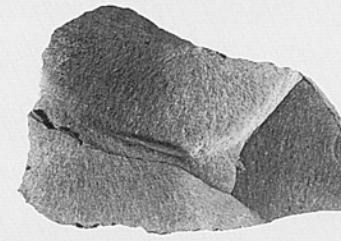

229

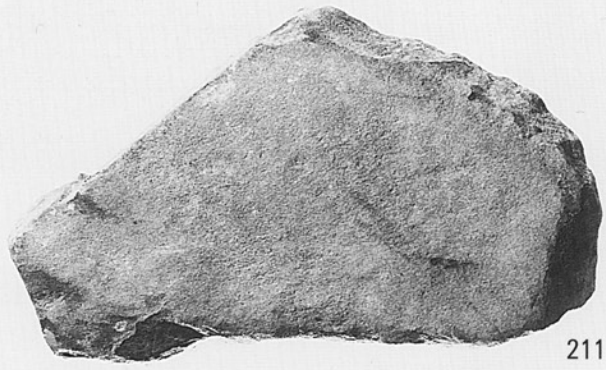

228


227

230


231


232


211

210

出土遺物８（石器・玉類・石製品）

（付）範囲確認調査

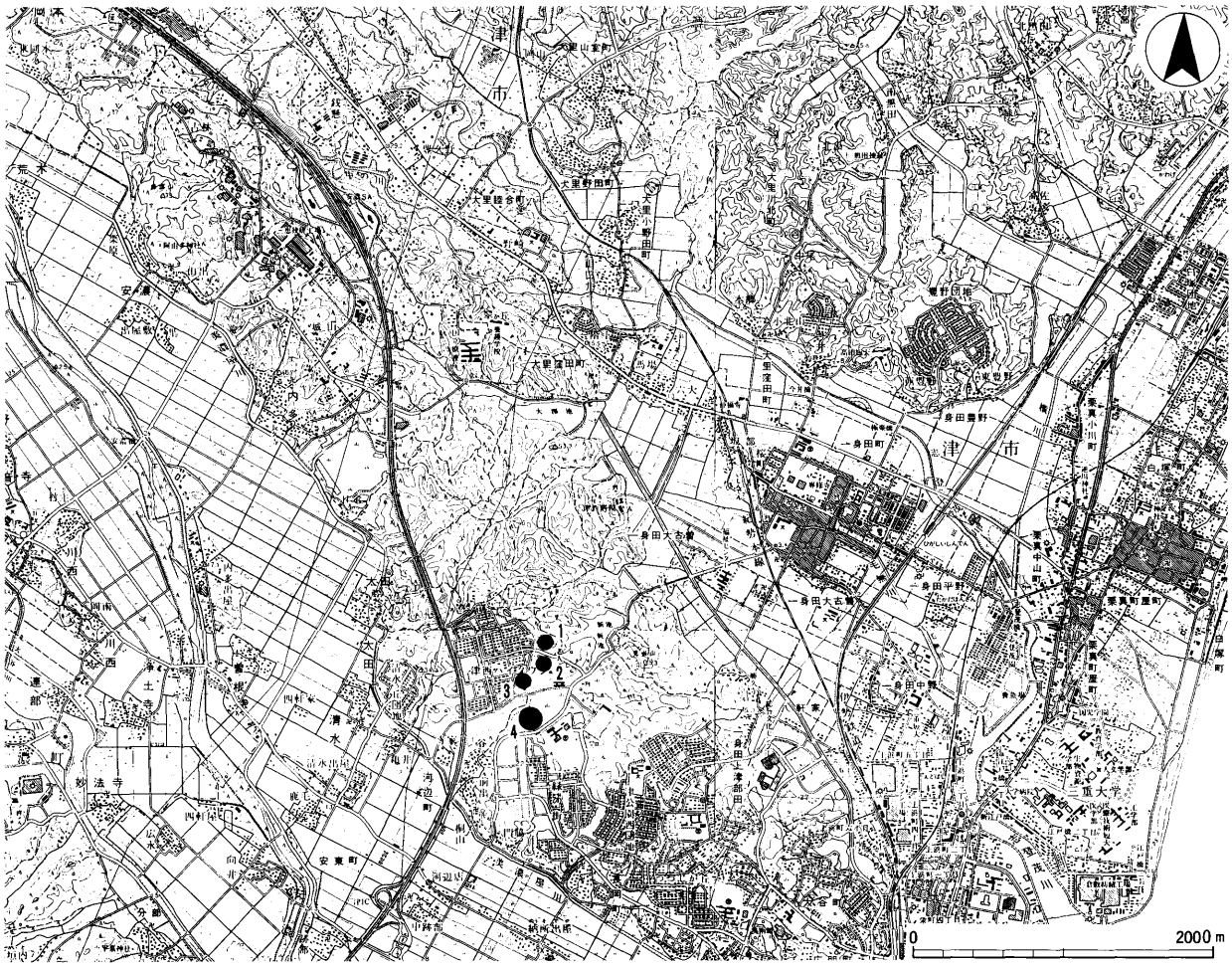
1．新池１号墳

西岡古墳の所在する丘陵から浅い谷を経て北に張り出した小丘陵上にあり、津市一身田上津部田字小廣に所在する周知の遺跡であった。平成元年８月28日～30日に範囲確認調査を実施した。東西方向の尾根上にある高まりに対し、尾根方向とそれに直交する方向にトレンチを設定し、必要に応じてサブトレンチを入れた。その結果、丘陵尾根の高まり及び、サブトレンチを入れた平坦部や微高地からも古墳、その他遺構と考えられる状況は見つからず、自然地形であった。

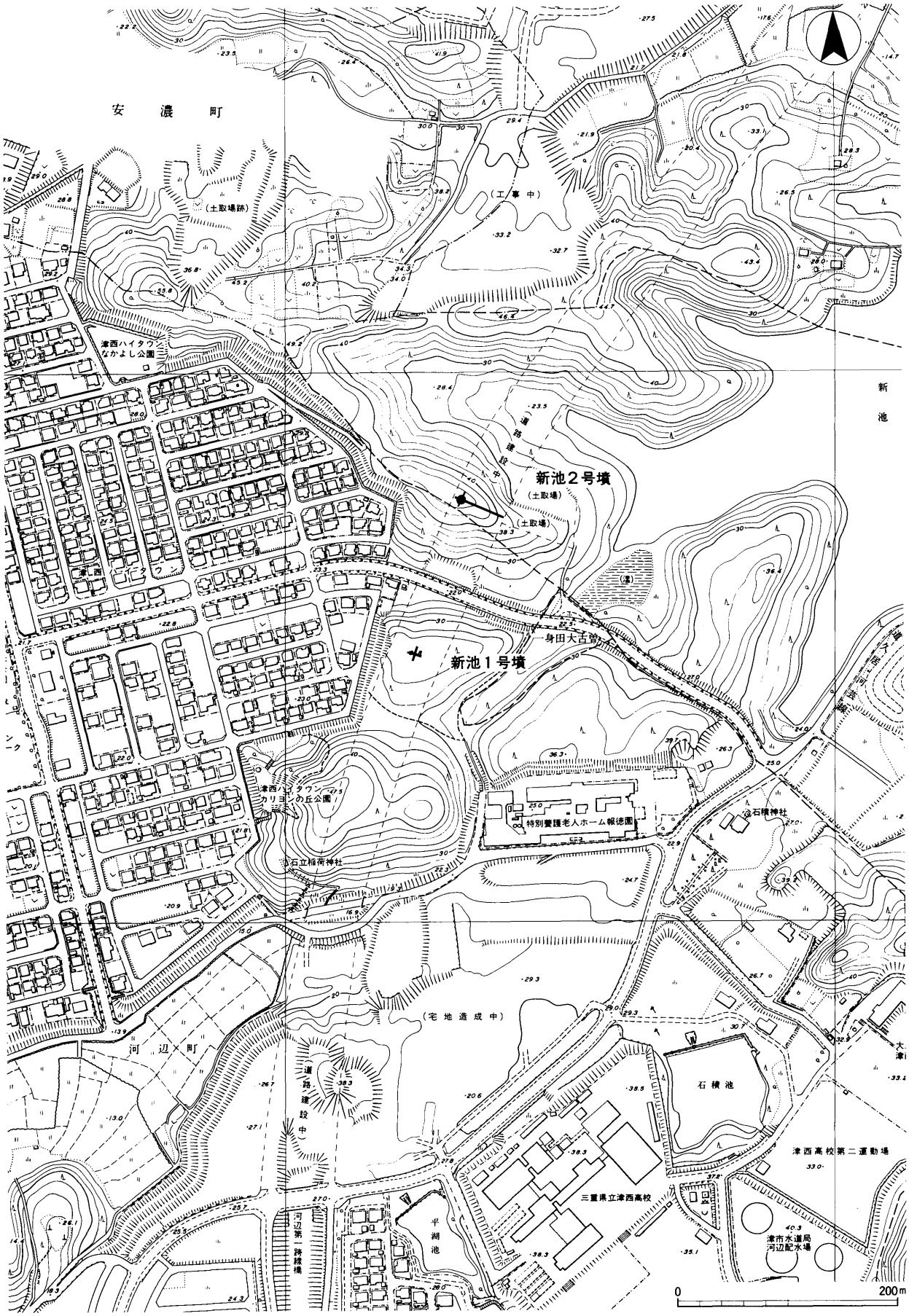
2．新池２号墳

新池に向かって東に延びる舌状丘陵の尾根にあり、津市一身田上津部田字ノノ坪に所在する周知の遺跡であった。新池１号墳との間には西から東に向かって深い谷が入り込む。平成８年４月４日～24日に範囲確認調査を実施した。墳丘と考えられる尾根上の高まりに対し0.5m×16m　0.5m×14m の２本のトレンチを設定した。またこの高まりの東にも墳丘状の高まりが見られたため尾根の主軸線に沿って0.5m×43m のトレンチを設定した。

調査の結果、どのトレンチも腐食土直下地山で、遺構・遺物ともなく自然地形であった。しかし、当初墳丘と考えていた高まりの周辺が平坦になっていることから、自然地形を人工的に整形した可能性がある。



第121図　遺跡位置図（１：50,000）　（国土地理院１：25,000　津西部・津東部・椋本・白子）
〔１　新池２号墳、２　新池１号墳、３　西岡古墳、４　長遺跡〕



第122図　調査区位置図（1：5,000）

報 告 書 抄 録

ふりがな	いっぱんこくどうにじゅうさんごうちゅうせいどうろ(きゅうこうく)けんせつじぎょうにともなう ながいせきはっくつちょうさほうこく
書名	一般国道23号中勢道路(9工区) 建設事業に伴う長遺跡発掘調査報告
副書名	
巻次	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	１１５－９
編著者名	池端清行
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所在地	〒５１５－０３２５　三重県多気郡明和町竹川５０３番地　☎ 0596-52-1732
発行年月日	西暦　２０００年　３月　２４日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
長遺跡（ながいせき）	三重県津市河辺町字石立・池尻（みえけんつしこうべちょうあざいしだて・いけじり）	24201	17	34° 44′ 45″	136° 29′ 15″	19950417 ～ 19951031	3,700	一般国道23号中勢道路建設事業に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
長遺跡	集落跡	弥生時代	竪穴住居・掘立柱建物	弥生土器・土錘・勾玉 石斧・石鏃・砥石	丘陵上に弥生時代中期後半の竪穴住居が集中する。

平成12(2000)年3月に刊行されたものをもとに
平成19(2007)年5月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告　115－9

一般国道23号中勢道路（9工区）建設事業に伴う

長遺跡発掘調査報告

2000.3

編集・発行　三重県埋蔵文化財センター

印　　刷　共立印刷株式会社